
ウラバン！～SF好色一代男～

万墨人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウラバン～SF好色一代男～

【Zコード】

Z0919S

【作者名】

万墨人

【あらすじ】

井原西鶴の『好色一代男』に描かれた、但馬世之介七十七代目の世之介は、父親に「十八才の誕生日までに、童貞を卒業しないと、廢嫡勘当を申し渡す！」と言い渡される。何とか童貞を卒業するため、女だけの惑星「尼孫星」^{アマゾン}を日指すため、宇宙船に乗り込むが、到着したのはツッパリ・ヤンキーがうじやうじや棲んでいる「番長星」だった！

世之介は、何とか地球へ戻るため、この「番長星」で思いもかけない、冒険を経験するのだったが……。

この小説の世界観に疑問が出たら、『温故知新～ウラバン前史～』をお読み下さい。世界設定を説明するための章ですが、人によっては煩く感じるのではないかと、別の短編としてアップしています。

卒業式

「但馬世之介……！ 前へ出ませーー！」

物憂げな校長の声が講堂に響き、世之介はさつと立ち上がり、慎重な足取りで前へ進み出た。

世之介、という珍しい名前に、講堂の背後の庭先に、ぞろりと控えている卒業生の親たちの物珍しげな視線が背中に集中するのを感じ、それでも真っ直ぐ前を見て世之介は校長の前へ進み出た。

但馬世之介、十七歳。今年、高等学問所を卒業である。手足が長く、色白で、どこまでも育ちの良さ故の頼りなげな印象を与える。髪は短めにさつぱりと刈り上げ、きちんと櫛が入れられている。

高等学問所は、かつて高等学校と呼ばれていて、内容は変わらない。筒袖の上着に袴が制服で、講堂は百畳敷きほどの和風建築だ。男は筒袖袴だが、女子は振袖に袴穿きである。学制改革で、小学校は「初等手習い所」となり、中学になつて「高等学問所」と変わつたが、中身は旧制と同じである。

講堂は一面畳敷きで、全員正座をしてくる。

作法通り、世之介は足を滑らせるように前へ進み出ると、校長の前に一礼して着座した。

校長は卒業証書の替わりに羽織を着せ掛ける。これで世之介は卒業を認められたのだ。高等学問所で男は羽織が、女子は懐刀が卒業証書となつてている。

東京が江戸となり、国会が幕府となつて、世の中のあらゆる仕組みは江戸時代を規範に再現された。

だが、それまでの旧制を抵抗なく新たな仕組みに組み込むため、色々と奇妙な習俗が出現した。今の卒業式もそうだ。江戸時代には様々な学問所があつたが、卒業式なるものは存在しなかつた。幕末、一部の私塾でそのような儀式があつたらしいが、一般的ではなかつたといつ。

しかし、卒業式がないのは、どうにも落ち着かない。結局、こんな形になつて残つている。

進路

羽織姿になつた世之介は、再び自分の席に戻り、次々と卒業生の名前が呼び出されて式が滞りなく進行して行くのを、待ち受ける。

講堂の高い場所から開けられた連枝窓からは、暖かな春の日差しが差し込み、じつと身動きもせず待つていると、ついうとつと睡魔が襲つてくる。

但馬世之介は同じ名前で七十七代目で、初代世之介は本物の江戸時代に生を受け、初代の活躍は井原西鶴によつて「好色一代男」となつて有名になつた。

あれのせいで世之介はさんざんからかいの対象になつた。親爺もいい加減、世之介なんて名前付けるのを止めにすれば良いのに……。

卒業式の最中、ほんやりと世之介はそんなことを考えていた。

これから進路について世之介は五里霧中であつた。

本来なら卒業式の数ヶ月前から進路を決め、今頃は上の学問所に進むか、他の専門学校に進むか、それとも社会に出るか決めなければならぬのだが、世之介は何をするでもなく、ついウカウカと卒業式を迎えてしまつたというわけである。

なにしろ世之介はお坊ちやまだ。但馬家は幕府出入の御用商人で、世之介は何不自由なく育つてきた。御用商人というのは、幕府主導の国家計画に資材や、人員を提供するお役目である。当然、利潤も大きく、代々商売を手広くして、今に至つている。

遂に卒業式は終つた。居並んでいた卒業生たちから安堵の吐息が

漏れた。校長以下、師範たちが退席すると、一気に解放感が横溢し、会場はざわめいた。

大番頭

講堂の縁側に腰を下ろし、自分の履き物を探していると、目の前の地面に影が差した。

顔を上げると、一人の中年男と視線が合った。

着流しに深茶色の羽織。商人らしく前掛けをしていて、前掛けには【但馬屋】の屋号が染め抜かれている。男は世之介に向け、深々と頭を下げた。

「『卒業、おめでとう御座います。世之介坊っちゃん』

きちんと両手を膝に当て挨拶をすると顔を挙げ、にっこりと笑みを浮かべる。四角い、がつしりとした顎に、苦労人らしく柔和な目付きである。世之介は頷き、返事した。

「ああ、有難う。省吾さん。出迎えに来てくれたんですね」

省吾、と呼ばれた中年男は「はい」と深々と頷くと、小腰を屈め先にたつた。

木村省吾。但馬家の大番頭である。昔なら、筆頭重役とか、専務とか言われる役職だ。

省吾は、すたすたと先を歩いていく。後を従つ世之介と省吾の足下は、商人らしく軽い雪駄履きだ。

世之介が通学していた学問所の建物を左手に見て、二人は卒業生とその両親でこつたがえしている校庭を、正門へ向かって歩いてい

く。校庭には桜が植えられ、今を盛りと、咲き誇っている。

世之介の両親は出席していない。母親はどこかの辺境星域に慈善事業のため家を空けているし、父親もまた今頃は幕府のお役人と新たな契約で飛び回っている。出迎えたのは、大番頭の省吾だけだ。

イッパチ

正門を通り抜け、学問所付属の駐機場に踏み込むと、ずらりと重力制御装置を利用した個人浮揚機^{フライヤー}が並んでいる。

但馬屋の家紋が浮き彫りされている浮揚機^{フライヤー}の前に近づくと、ぱくんと外翼扉^{ガル・ウイング}が開いて、中から小柄な杏萄紹偉童^{アンブロイド}が、零れんばかりの笑顔で飛び出してきた。

「若旦那！ お勤め！」苦勞様で御座います」

杏萄紹偉童は大きな碁盤のよつな顔に、太いハの字眉、垂れ下がった目尻に、にたにた笑いを浮かべた大きな口をしている。見ているだけで、笑いが浮かんでくる奇妙な表情をしている。

省吾は顔を顰めた。

「イッパチ！ お勤め！」苦勞様とは何といつ言い草だね。まるで世之介坊っちゃんが、寄せ場^{よせば}帰りのように聞こえるじゃないか」

イッパチと呼ばれた杏萄紹偉童は、手元の扇子を額にぱちんと音を立てて当て、ひょとと首を竦めた。

「へへっ！ 申し訳ねえこつて！ イッパチ、一生の不覚……」

「いいから、浮揚機に乗せておくれ。今頃は大旦那様が、お店に帰りになつておられるころだ。大旦那様はお坊ちゃんとお会いになられるため、商談を急いで終わらせるおつもりだから」

省吾の言葉に世之介は驚いた。

「親爺が帰つてくるつてのかい？ 珍しいこともあるもんだ」

省吾は眞面目な顔で頷いた。

「はい。大旦那様は、お坊ちゃんの「卒業後について、何かお心積もりがあると推察されます。大事なお話があると思いますので、お坊ちゃんもその御つもりで」

ちょっと世之介は身構えた。省吾の言葉には、何か引っ掛かるものを感じたのである。

世之介の父親は大旦那と呼ばれている。幕府のお役人との打ち合わせで、家にはほとんど席を暖める暇もなく、実際に顔を合わせるのも年に数度くらいだ。それが、わざわざ世之介の卒業式に合わせて帰つてくるというのは、何か魂胆がある。

省吾と肩を並べ、世之介は浮揚機に乗り組んだ。

イッパチは操縦席に座ると、手早く操舵装置を操作して、浮揚機を浮かび上がらせる。

もともとイッパチは寄席で働く^{たいてい}杏葡萄紹偉童であったが、何か寄席で失敗をやらかしていられなくなり、そこを世之介の父親に拾われたとか聞いている。杏葡萄紹偉童らしく、器用で、浮揚機の操縦でも何でもやってしまう。

微かな音を立て、浮揚機が斥力装置を働かせると、上向きの重力場がまわりの細かな埃を吹き上げる。すっと機体が上昇し、見る見る学問所の建物が小さくなつた。替わりに窓外に、首都・大江戸の雄大な景観が広がる。

東京が江戸と変わつて、範囲は急速に拡大した。かつての東京湾、今は江戸湾を埋め立て、人工島を作つて、そこを征夷大將軍府としている。中央には將軍府の建物が聳え、江戸町民には「お城」とのみ呼ばれていた。

まさにお城と呼ぶに相応しい建物で、どうしりとした外観の、百層に及ぶ大屋根が連なる巨城である。

お城の周囲には、但馬屋のよつな出入の商人たちの本店が密集するように立ち並んでいる。総て地上百丈以上はありそうな、巨大な店構えをしている。しかし但馬屋以上の建物は、ほとんど見当たらぬ。

イッパチの操縦する浮揚機が但馬屋本店の大屋根に近づくと、浮

揚機から送信された無線信号に応じ、屋根の一部が静々と開き、離着陸場が現れた。

床に発光信号が表示され、着地場所を示している。

浮揚機が着陸態勢になると、奥から但馬屋の手代、小間使いの娘、小僧たちが大慌てで飛び出し、出迎える。

浮揚機が着陸し、世之介が顔を出すと、使用人たち一斉に頭を下げ、声を揃えた。

「（）卒業、おめでとう御座います！」

「ああ、有難（）」

鷹揚に答える世之介だが、ちょっと照れ臭く、顔が火照るのを感じる。うずうずと照れ笑いが浮かぶのを、必死に我慢する。これは若旦那として毅然としていなければ！

省吾は手早く先に立ち、離着陸場の専用映話装置で何か打ち合わせをしていた。打ち合わせが済むと、急ぎ足で戻ってきて、顔を寄せて囁いた。

「坊っちゃん。大旦那様がお待ちになつておられます。すぐ、お出でになられるよう、大旦那様がお命じになられてあります」

命令

世之介は無言で頷いた。省吾の態度は普通ではない。緊張感が、表情に表れている。

離着陸場から^{ハレベータ}鋭励部威咤に乗り込み、父親の部屋がある階へと下つていく。部屋は十階ほど下の階にある。

鋭励部威咤の扉が開くと、目の前に玄関があり、上がり框で一同は履物を脱いで廊下に上がつた。
しんと静まり返つた廊下を、三人は歩いていく。
内庭を眺めながら、長い廊下を歩く。

内庭の天井には、空を模した立体映像が投射され、様々な樹木が植えられ、一見すると、ここが巨大な但馬屋本店の内部であることがなど忘れさせる。

父親の部屋の障子前に省吾が膝をつき、声を掛けた。

「大旦那様。世之介坊っちゃんがお出でになられました」
「ああ」と障子の向こうから父親の太い声が聞こえてきた。ついで「入つておいで!」と返事がある。

省吾は頷き、両手を伸ばして、するすると障子を開く。世之介とイッパチは、桟の手前で膝を揃え、正座した。

十畳ほどの座敷に、父親である七十六代目^{セイロクジヤ}の世之介が座っている。息子に似ず、河馬のように太っていて、色黒である。膝元には煙草盆が置かれ、父親は難しい顔つきで煙管を咥え、むつりと煙を口から漂させていた。

かん、と雁首を煙草盆に叩き付け、灰を落とすと、父親はぐいと首を捻じ向け、じつくりと世之介の顔を眺めた。

「世之介、お前、今年で幾つになつたえ？」

「へい、数えで十七で御座います」

「ふむ」

怖ろしく機嫌が悪い。自分が何か、仕出かしたのだろうかと、世之介は怪しがだ。

次に口を開いた父親の言葉に、世之介は仰天した。

父親は「お前の尻を見せなさい！」と命令したのである。

世之介の尻

がつしりと両肩を怖ろしいほどの力で押さえつけられ、世之介は身動きできなくなってしまった。気がつくと、背後からイッパチが世之介を羽交い絞めにしている。イッパチは、奇妙な無表情で、世之介に話し掛けた。

「若旦那！ 堪忍しておくんなせえ。あつしには、大旦那様に助けて頂いた恩儀が御座います。大旦那様の命令は、絶対なんで」

イッパチが何で従いてくるのかと不思議だったが、これで得心した！ 世之介を押さえつけ、拘束するためだったのだ。見かけによらず、杏萄紹偉童は人間を凌駕する馬鹿力の持ち主である。

すつと立ち上がった省吾は、世之介に一礼して背後に回った。省吾さえ裏切った！ いや、初めから父親に命じられていたのだろう。下穿きを取らして頂きます」

「おい！ よしとくれ！ そんな無体な……！」

抗議の声を上げたが、無駄であった。背後から省吾は無言で世之介の袴を引き抜き、尻を捲り上げる。世之介の越中褲を剥がし、裸の尻を剥き出しにした。

ゆつくつと父親は立ち上がり、廊下に回り、上から厳しい顔つきで世之介の尻を睨みつけた。

世之介は泣き声を上げる。

「お父っつあん！ 何で、こんな真似をなさるんで？ もさか、お父っつあんにそんな趣味があつたとは……？」

じつと睨みつけていた父親は、ふと視線を逸らすと再び元の席へ戻つていぐ。はあーっ、と溜息を漏らし、首をゆつくつと、左右に振つた。

「もういい」と父親が手を振ると、わざと押さえつけていたイッパチの手が緩んだ。やそくさとせりは身支度を整え、息を荒げた。

「お父っつあん！ 説明して貰いましょう。なんで、こんな無体な真似を？」

父親は腕組みをして目を閉じて いる。薄目が開き、世之介を流し目で見る。

「お前、初代の世之介様のことは、知つて いるかえ？」

「へえ、江戸時代の戯作者、井原西鶴つてお人が『好色一代男』つてえ本にお書きになつたそ�ですね」

「わたくしたち但馬屋のご先祖だ。初代様は題名の通り、大変な好色で、なんと九つの頃に初体験を済ませられたと、あの本には書かれている。それで、代々の世之介もまた、女好きで続いている」

上田遣いになつて世之介は父親に尋ねた。

「お父つつあんも、そなんんで？」

父親は、ふつと苦い笑いを浮かべた。

「わたしは、そんな好色ではないよ。なにしろ、こんなご時世だ。初代様の真似をすれば、たちまち世の非難を浴びる。しかし、お前は記念すべき七十七代目だ。少しほ違うと思ったが、やはり、世の習いらしいな。お前、まだ初体験は済ませていないんだろう？」

まともに尋ねられ、世之介の頬がかつと熱くなる。

「それが何ですか？ あつしの初体験が、そんなに大事なことなんですか！ 第一、どうして、そのことが判るんです？」

「判る」

父親は短く答え、じろりと世之介を睨む。

「さつき、お前の尻を見せると言つたのは、そのためだ。我が但馬家の男子には代々、ある特異体质が受け継がれている。

普通、赤ん坊の尻は青い。蒙古斑というやつだな。成長するに従い、自然に消えていくが、どういうものか、但馬家の男子の蒙古斑は成長しても絶対に消えない。消すには、女性と？そのこと？をしなければならない。だから判るんだ。お前、童貞だろ？」

ポカソんと、世之介は田を丸くして、がっくりと顎を下げ、情けない息を吐き出す。袴の上から自分の尻を押される。

自分の尻など、見たことあるものか！

「そ、そ、そ、それが、な、な、何だつてんです！ 童貞で悪ひござんすか！」

父親は眉間に皺を寄せた。

「わたしは、お前が世之介の名前に相応しい男かどうか、学問所に通うお前を密かに調べていたのだ。学問所の師範、級友などに、お前の評判を調べさせた。そうしたところ、皆、異口同音に言つことには、真面目そのもの。女遊びなんか、これっぽっちも考えられないと、口を揃えて答えたそうだ」

世之介は激昂して抗議した。

「真面目でよ！」ぞんしょ「う？ 家は、代々の商人で御座います。商人が真面目でなくて、どうして務まりましょうか？」

父親は頷いて、言葉を続けた。

「世間では、そうだ。だが、この但馬家では違つ。お前は世之介の名前の面汚しだ！」

ぐつと指を突きつける父親に、世之介はゆるゆると首を振つた。

どうすればいいのだ！

「初代様、それに、代々のご先祖に、これでは申し訳がたたない。世之介の名前を汚さぬよう、お前、十八になるまで、何が何でも初体験を済ませるんだ。とにかく、お前の尻の青さを消しておしまい！ それでなければ、但馬家の長男ではない！」

世之介は驚きに仰け反った。

「そんな、無茶な！」

「無茶でも何でも、童貞を捨てるんだ。そうでなければ、お前は廢嫡、勘当だ！」

「はつ、廢嫡！ か、か、か、勘当つー！」

世之介は叫んでいた。

膝をにじりさせ、省吾が世之介と父親の中間に位置を変え、口を開いた。

「大旦那様……。世之介坊っちゃんも、初めて聞くお話で、大層な混乱をなさつておいでです。ここは一つ、この木村省吾めにお預けになすつては、如何で御座いましょう」

父親は意外そうに省吾を見た。

「お前が？ 何か腹案があるのかえ？」

「はい」と省吾は自信ありげに頷いた。父親は顎を引き、何か考え込む視線で、大番頭を眺めた。

やがて重々しく「よかろう」と頷く。

「お前に任せよつ」

省吾は深々と頭を下げ、「有難う御座います」と礼を言った。

いつの間に自分の部屋に戻ってきたのか、世之介は自覚がない。がっくりと項垂れ、イッパチが淹れてくれた熱い番茶をふつふつ吹きながら啜つている自分に、ようやく気が付いた。

目の前には、省吾が膝を揃え、腕組みをしながら、端然と座っている。やや首を傾げ、省吾の視線には、何か試すかのような光が込められていた。

ようやく世之介の人心地がついたのを見透かしたのか、省吾は口を開いた。

「坊っちゃん。さわかし、驚かれたこつてしじうな

世之介は省吾を見上げて返事をする。声に、恨みがましい調子が混じるのを、どうしても抑えることはできない。

「お前、あたしの下穿きを無理矢理あそこで脱がしたね。あんな騒ぎになると、知っていたんだろう?」

こともあつさり「知つておりました」というのが、返事であった。

世之介は両膝を立て、伸び上がる。

「だつたら、どうして……!」

「教えてくれなかつた、と仰るのでしよう? 知つていたら、はい、そうですかと、素直に大旦那様にお尻を見せたでしょうか?」

ぺたん、と世之介は座りなおした。首を振る。

「いや、そんなことできない……やつぱり、無理矢理お前たちに脱がされていたかも」

省吾は腕組みを解いた。

「でしうから、わたしも敢えて、お教えるのは止めたので御座いますよ。一、三日前から大旦那様の様子を窺つて、こういう次第になるのでは、と密かに考えておりました。それで、わたくし八方に手を回して、あるものを手に入れて御座います」

「なんだい？」

省吾は懐に手を入れ、一通の封書を取り出すと、畳を滑らせるよつて世之介の膝元に送った。封書を取り上げ、世之介は開いた。

通行手形

中から出てきたのは、一枚の通行手形であった。將軍府の割り印が押捺され、細かな字で、びつしりと何か書かれている。

「それは、尼孫星アマゾンへの通行手形で御座います。尼孫星のことはござ存知で？」

世之介は、再び首を振った。

「いいや、知らない。尼孫星でのは、どんな星なんだね」

省吾の片頬に、とも得意そうな笑みがこぼれる。

「女だけの星で御座います。別名？女護が星？などと言われておりますな。どういう訳か、この星では、唯の一人も男の赤ん坊が産まれないそつで。生まれるのは全部、女の赤ん坊と決まっております」

世之介は思わず、目を瞬かせた。

「そんな馬鹿な！ 女しか産まれないんじや、どうやって子孫を増やせるんだい？ 赤ん坊が産まれるには、男と女が必要だつて、あたしだつて知つているよ」

省吾は身を乗り出した。

「さあ、そこで御座います。

何でも、この殖民星の最初の計画に、何か重大な間違いがあつたらしく、産まれて来るのは総て女の赤ん坊となつてしましました。

女たちの遺伝子に何か間違いがあつたのかどうかは、今でも議論されておりますが、このままでは子孫が絶えるとなつて、幕府は救済策を施しました。

それが、冷凍精子を運ぶ特別便で御座います。男がいなくとも、精子があれば何とかなります。あそこでは男は、どんなヨボヨボの爺さまだろうが、目も当てられない醜男びおとこだろうが、モテモテになるそうで御座いますな」

世之介の顔がか一つ、と火照つてくる。多分、耳まで真つ赤なのだらうと自覚する。

「それで、その星へあたしを行かせよつといつのだね？ 尼孫星とやらへ行けば、こんなあたしでもモテモテで、すぐに童貞を捨てられるつて算段だらう？」

省吾は鼻を擦つた。可笑しそうに肩を揺する。

「若旦那なら、おもてになりますともー。こつ言つては何ですが、若旦那は、男のわたしが見ても、良い見映えの殿方で御座います。足りないのは自信で御座いますよ。いきなり一年で童貞を捨てろなど、大旦那様は仰いますが、今の若旦那には少し、自信というのが足りないようで。ですから尼孫星へお出でになつて、自分は女性におもてになる、といつ自信をお持ちになつて頂きたいのです」

側で聞いていたイッパチが、にまーっと開けつ広げな笑顔になつた。

「尼孫星！ よじやんすなあ！ その星へ行けば、当たるを幸い、女どもを若旦那は撫で斬りになすつて、たつた一年で千人斬り、なんて素晴らしいことに……。いや、楽しみでじやんす！」

省吾はイッパチを叱り付けた。

「イッパチ！ 遊びじゃないよつ！ 若旦那が廃嫡勘当になるかどうか、という瀬戸際なんだ。浮かれているんじやない！」

イッパチは空気が抜ける風船のようにな、ショボンとなつた。

省吾は世之介に顔を向け、話を続ける。

「尼孫星の立ち入りは、幕府によつて厳しく制限されています。特に尼孫星からの出星は監視されておりますので。

もし、尼孫星の女が一人でも外部に出たら、その子孫がどんどん女の赤ん坊を産んで、銀河系の男女の均衡が崩れるのではないかと、危惧されております。

俗に？入り鉄砲に出女？などと称されています。この場合、入り鉄砲とは運び込まれる冷凍精子のことと御座いますな。出女とは、言つまでもなく、尼孫星からの女のことで御座います。で御座いますから、入星手形の取得には、色々苦労が御座いました

省吾はそれ以上、口を開かなかつたが、世之介はあれこれと想像した。多分、袖の下か何かを役人に掘ませたんじやないか、と思つた。

省吾は、じつと世之介を見詰める。

世之介は頷いた。

「お前の言つとおり、尼孫星とやらへ出かけよつ……。とにかく、お父つつあんに、あたしの尻が普通になつたといふを見せてやる

一本締め

父親の七十六代目は、大いに喜んだ。

「初代様は？女護が島？とやらへ女道修行の旅に出たそうな。尼孫星が別名？女護が星？と言われていることは、あたしも知っているよ。ああ、『先祖と同じ旅に、お前が出てくれる』ことになつて、嬉しいよ！」

河馬のような丸顔に満面の笑みを浮かべ、二コ二コしている。脇に控えていた省吾の肩を、思い切りどんどんと叩いた。

「省吾！ さすが、大番頭のお前だ。あたしは、つぐづく感心したよー。それで、じつ手筈をするつもりなんだえ？」

省吾は微かに頷き、説明を始めた。

「へい、尼孫星には定期便がなく、年に何度か近くを立ち寄る船に冷凍精子を積み込み、尼孫星の衛星軌道で向こうの連絡船に受け取らせる規約になつております。とはいへ、特別の学術調査の例外が御座いまして、それには尼孫星への立ち入り調査隊が入星することになつております。坊っちゃんは、その調査隊の特別隊員という名目で加わる手筈になつております」

「成る程、成る程」と父親は納得している。

省吾はイツパチを振り返った。

坊っちゃんのお供には、このイッパチをと、考えております。イッパチは杏萄紹偉童で御座いますから、忠実そのもので御座います。何か危険があつても、イッパチなら上手く処理してくれるのではな

いか、と期待しておりますが……」

省吾の指名に、イッパチは目を丸くした。
が、すぐ首を縦にする。

「よござんす……」のイッパチ、一命を持ちまして、若旦那のため
に働く覚悟で御座いますぞ！　若旦那！
世之介に向かい合い、どんと自分の胸を叩いた。
「何があるつと、このイッパチを頼りにしておくんなせえ！　さあ、
若旦那！　若旦那の女道修行の門出だ。ここは目出度く、一本締め
で……」

「およしよ」と世之介は首を振った。

「そんなに浮かれていいや、また省吾に叱られるよ」
イッパチは恐る恐る省吾を見上げる。省吾は苦く笑つている。
「良いでしょ。若旦那の門出に、一本締めでも何でも致しましょ
う……」

イッパチは愁眉を開いた。

さつと両手を伸ばし、叫ぶ。

「それでは、若旦那の門出を祝して、一本締めを執り行います！」
父親と省吾は、笑いながら構えた。

イッパチは気合を入れる。

「よーい……お手を拝借！」

しゃんり、と一回の一本縫い。

【滄海】

近づいてくる宇宙貨客船【滄海】は、葡萄の房のような形をした宇宙船だった。真ん中に通路用の中央柱^{シャフト}が一本貫き、中央柱の周りを無数の客室^{シヤツルーム}が取り巻いている。客室は球状で、幾つもの客室が鈴なりになっているのは、まるで葡萄の房そっくりである。

世之介とイッパチは、連絡船の窓に顔を押し付けるようにして、近づいてくる【滄海】を眺めている。地球の衛星軌道上に浮かぶ宇宙船は、真空のくつきりとした光と影のせいで、距離感が判らない。すぐ近くに浮かんでいるように見えるが、全長一尋はあらうかと思われる宇宙船は、中々近づいては来なかつた。

二人の乗り組む連絡船は、百人乗りという大きさで、真ん中の中央通路を挟み、両側に五十人がずらりと席を埋めている。服装は、宇宙旅行用に特別に仕立てられた作務衣である。光沢のある生地で、縫い目がどこにも存在しない。ぴっちりとした筒袖で、袂がなく、動きやすい。

「いよいよでげすな、若田那。あれで若田那は尼孫星^{アマゾン}へとお出ましになられるという算段でげすよ…」

イッパチに話しかけられ、世之介は「うん」と生返事を返す。イッパチは不思議そうな顔つきになつて、世之介を見上げる。

「どうなすつたんで？ 若田那、なんだか浮かない顔つきでござるすね？」

世之介は答えなかつた。実を言つと、不安で胸が押しつぶされそ

うな気分だったのだ。

世之介が宇宙に出るのは、これが三度目。最初は中等学問所での修学旅行で、その時は月への旅である。

一度目は高等学問所の修学旅行で、火星へと旅をしている。どちらも、太陽系内で、恒星間旅行に必要な、超空間歪曲转移^{ワープ}は経験していない。歪曲转移については、色々と聞いてはいるが、これが初めての体験であった。

連絡船の内部は無重力状態のままだ。そのせいか、イッパチは普段よりウキウキしているようだ見える。いや、これが普通か？

無重力

よつやく【滄海】の船体が近々と見え始め、向こうの接続腔函が見分けられる状況になってきた。

その時、世之介は、【滄海】の陰から、もう一隻の連絡船が近づいてくるのを認めていた。

ひとつよりかなり小型で、数人しか乗れない快速連絡船である。だが、こちらの連絡船の接続装置が【滄海】に合体すると、見えなくなつた。

接続装置が合体すると、乗客係が宙に浮かびながら、乗客に対し注意を呼びかける。

「乗客の皆様、手荷物は片手にお持ちになり、片手は空けてもらいます。係員の指示に従い、ゆっくりとで宜しいので、確実な動作をお願いいたします。急がないで！」

慌てて立ち上がろうとする一人の乗客に鋭く声を掛ける。立ち上がろうとした乗客は、無重力であることを忘れ、勢いをつけて立ち上がつたため、天井にごつんと激しく頭を打ち付けてしまった。

乗客係は連絡船の中央通路を飛び回り、慣れない無重力場で右往左往している乗客を手早く誘導していく。

世之介は高等学問所での修学旅行がつい最近であったため、うろたえずには済んだ。イッパチも杏萄紹偉童アンドロイドらしく、無重力状態に適応している。

身体を真っ直ぐにし、乗客が腰の帶を持って押してくれるので素

直に従えば、そのまま接続腔函をすーー、と遊泳して回りつつに辿り着く。向こうでも【滄海】の乗客係が待ちつけてくれるから、本当に自分で何もする必要はないのだ。じたばたするのが、良くない。

【滄海】に乗り込むと、じかじかでせりやんと重力制御が働き、真っ直ぐ床に立つていられる。世之介の、無重力体験は、あつといつ間に終了した。

老人

「こんにちわ！」「乗船、有難う御座います！」

鈴を転がすような美声に、世之介は顔を赤らめた。出迎えたのは西洋小間使いの格好をした杏萄紹偉童であつた。【滄海】は客船でもあり、乗客のために高級な女性型杏萄紹偉童を用意していたのである。

西洋小間使いの杏萄紹偉童は、素早く世之介とイッパチの手荷物を受け取ると、軽々と両手で持つて、二人を船室へと案内する。イッパチは世之介の脇腹を、肘でツンツンして、小声で囁く。

「若旦那！ なに赤くなつてんでげす？ 相手は杏萄紹偉童でげすよ

「煩いなあ

憮然として世之介は答える。どうにも、女の子は、それもどきつとするような、可愛い女の子は苦手だ。出迎えた女性型の杏萄紹偉童は、まさにそれだったのである。

小間使い杏萄紹偉童は、二人の客室の前で立ち止まる。「こちらで御座います」と片手を上げた。しゅつ、と溜息のような音が漏れ、扉が開き、一人は内部に足を踏み込んだ。

「おや」と、部屋の中で顔を上げた人物がいる。白い髪の、小柄な老人である。老人の周りには、一人の別の人物が控えていた。賽博格らしく、艶のない顔色をして、がつしりとした身体つきである。

世之介は小間使いを見た。小間使いは顔色を変え、手で口を覆つ

た。

「まあ！ 確かにこのお部屋は、但馬世之介様のお部屋のはずなのに……」

「ああ、それで間違いないんですよ。確かに、但馬世之介さんのお部屋で」

老人が手を挙げ、柔らかな態度で声を掛ける。

「わしが飛び込みで船に乗り組んで、それで特別に相席をお願いしたわけで……」

喋りながら立ち上ると、軽い足取りで世之介に近づく。

相当な年寄りだらうが、足取りはしつかりとしていて、腰は真つ直ぐであった。ここにこと柔軟な笑みを浮かべ、世之介の顔を見上げる。

「まことに相すみませぬ。わしは越後の呉服問屋『越後屋』の隠居で、光右衛門と申します。【滄海】の船頭さんとは顔馴染みで、無理を言って席を取つてもらうことになったのですよ。こんな爺いで御座いますが、我慢して一緒に頂けませぬか？」

「 いじらじや 」と世之介は挨拶を返した。

旅慣れた光右衛門と名乗る老人の様子に、内心ほっとしていた。宇宙旅行が手軽になり、眼前の、光衛門のよつた老人の宇宙漫遊旅行が、流行つていると聞いている。

第一、イッパチと一人だけで顔をつき合わせていると、こっちがおかしくなりそうな気分だったので、この相席は救いであった。

「 そうそう、こちらの一人の紹介が、まだ御座いましたな」

老人はくるりと振り帰ると、一人の賽博格に顔を向けた。
「 こちらの一人は、わしの供の者で、助さん、格さんと呼んでおります。まあ、わしの身の回りの世話と、護衛係で御座いますな」

「 助三郎で御座います」

「 格乃進と申します」と一人は短く挨拶をする。助三郎と名乗る賽博格はやや小柄で、瘦せているが、格乃進と名乗った賽博格は、がつしりとした巨体の持ち主であった。

「 ちょっとお待ちを……」

小間使い杏萄紹偉童は呟くと、身を硬直させ、目を虚ろにさせた。
船の主電腦に記録を照会しているのだ。やがて杏萄紹偉童の顔に安堵の表情が浮かんだ。

「 確かに相席の指示が出ております！ お密さま、それで宜しいので御座いますか？」

世之介は頷いた。むしろ歓迎する気分が強い。老人に向かい、丁寧に頭を下げた。

「旅慣れぬ若輩者で御座いますが、どうぞよろしく……」

「おお、おお、これは懇懃なご挨拶、痛み入ります」

光右衛門は莞爾と笑みを浮かべた。

「但馬世之介様と言えど、あの但馬屋さんの……？」

客室に落ち着くと、早速光右衛門は世之介に話し掛けってきた。客室は直径十尺ほどの球体で、三分の一程の部分が平たい床になつてゐる。重力制御が効いてるので普通に正座ができる。重力制御はあらゆるところに使われ、大きな窓は一種の重力薄膜となつていて、硝子などの物質では不可能なほど大きな窓が実現できている。

老人の問い掛けに、世之介は頷いた。

「はい、わたくしは息子で御座います」

「ははあ！ 幕府御用達の、但馬屋さんといえば、商人仲間には有名なお店で御座いますな。それでは、あなたは気楽な漫遊旅と相成りましたのですな。行き先はどちらで？」

「尼孫星で御座います」と世之介が答えると、助さん格さんという賛博格は顔を見合わせた。

ふつと光右衛門は笑いを浮かべた。

「これは驚いた！ あなたのよつな若い、それも水も滴る一枚目の若旦那が、ところもあろうに、尼孫星へ向かうとは！」

老人の指摘に、世之介はもじもじと身動きをした。いかにも自分が、女に食えているようで、決まりが悪い。

「はつはつはつはつ……」と、光右衛門は顔を仰向け、高笑いをした。

「まあ、宜しい、宜しい。お若い「うちから何でも経験すること」で御座いますな。この爺いなど、やつとこの年で、諸国漫遊に出かけようかと思い立つた次第で……」

一瞬の緊張感が、光右衛門の高笑いでほぐれた。イッパチは身を乗り出し、口を開く。

「若旦那はこう見えて、ひどく晩生なんじゃござんす。お父つあんの大旦那様は、これではいけないと、女道修行の旅に送り出したつて次第で」

世之介の頬が熱くなる。

「おー、何てこと言うんだ。他人の前で」

光右衛門は膝をパンパン叩いて笑った。

「宜しい、宜しい！ 若いうちに何でも経験しておくれ」とです！
女道修行、結構ではありますか！」

イッパチは益々調子に乗った。

「若旦那って、色男でげしょ？」「いや、尼孫星に行つたら、もてて、もてて大変だあ！ 一步でも星に降り立つたら、あーら様子が良いわン……そこのお兄さん、ちょっと寄つていらつしゃいよ……なんて引く手あまたで、上がりこむつてえど、何もないけど湯漬けでもどうぞ、なんてことになる。差し向かいに湯漬けを搔き込みますな。箸が茶碗に当たつてチンチロリン！ 湯漬けをザーグザクと搔き込みますつてえと、見詰め合ひつ田と田！ つぶつ！ チンチロリンのザーグザク！ 湯漬けの皿せに舌鼓がタツトンと合ひの手が入ります……」

踊り出す。

呆れて世之介は窓の外を見た。
ふわふわとした感触に立ち上がると、見る見る窓外に奇妙な霧の

ようなものが掛かっていく。

驚いて光右衛門を見ると、頷く。

「超空間歪曲場で」「やれこますな。宇宙船が出発したのでしょうか？」

「これが……」

世之介は、ぼうつと窓外を見詰めた。

田をギュッと閉じたときに見える斑模様のような景色が一面に広がっている。見詰めていると、奇妙な感覚に捉えられる。斑模様の形が何か別のものに見えてくる。これが超空間で体験する未来予知なのだろうか？

超空間歪曲場に入ると、人間は未来を覗き込むことがあるそうだ。

女の子の顔が一瞬、見えた。髪の毛をポニー・テールにした、目つきの鋭い女の子の顔である。

イッパチは調子に乗って、なおも踊り狂っている。

「チンチロリンのザーグザク！ ザーグザクでタツトン！ あ、それぞ！ 若旦那の女道修行ばんざーい！」

飛び上がり、イッパチは客室の一方に倒れ掛かった。どたん、ばたんと大袈裟な音がして、イッパチは客室の操作卓に身体ごとぶつかつしていく。

がくん、と客室が揺れた。

わっ、と世之介は床に腹這いになる。顔を上げて窓を見ると【滄海】の船体が急速に遠ざかっていくのが見えた。

「何があった！ 助さん、格さん！」

光右衛門が真顔になつて叫んでいる。さつと二人の賽博格が立ち上がり、倒れこんだイッパチの側に近寄つた。

客室の操作卓に近寄り、表示を覗き込む。

助三郎が顔を上げ、叫んだ。

「『隠居様！』この杏萄紹偉童が、客室の非常脱出鉗を押してしまつたようです！ 客室は超空間に漂流しております！」

「何ですつてえ……」

呆然と、光右衛門と世之介は咳き、顔を見合わせた。

虚ろな目付きで、イッパチは睨みつけている世之介たちを見上げ、ぶるぶるっと顔を何度も左右に振った。

「信じておくんなせえ！ わざとじゃねえんで……偶然、あつしの手が鉗に触れただけなんですよ！」

「偶然だと？」

格乃進は唸つた。

「馬鹿なことを申すな。偶然で、客室の非常脱出鉗を押せるわけがない。客室を本体から切り離す非常脱出の手続きは、ただ鉗を押しただけじゃ発動しない。何段階にも分けて、ちゃんとした操作をしなければ、動くはずがないんだ！ 貴様、誰に雇われた？」

賽博格の顔が怖ろしげなものになつた。問い合わせる格乃進の勢いに、イッパチは真っ青になつている。

もう一人の助三郎という賽博格は、さつと世之介に向き直つた。

「あんた、この杏萄組偉童の主人だそうだな。本当に但馬屋の一人息子なのか？ 今のうちに正体を明かしたほうが、身のためだぞ」世之介は驚きに口をパクパクさせるだけだった。

「し、し、し、正体つて……何を仰います？ あつしは本当に、但馬世之介ってえ、ただの男でして……」

「まあまあ

光右衛門は仲裁に入った。

「問い合わせるのは、そのへりにしても、これから先どうあれば良いか、考えねばな」

やつだ、客室は超空間を漂流しているんだつた！

世之介は懶にしがみついた。しかし【滄海】の姿は、どいにも見えない。客室が切り離され、あつといつ間に遠ざかってしまったのだ。

田の前の奇妙な霧が、急速に晴れしていく。

【滄海】の空間歪曲場から離れたので、通常空間に転移したのだ。窓外を、見慣れた宇宙空間の眺めが回復していく。真っ黒な空間に、星々が無数に点在してこる眺めである。

「うわ、どうなんだろ？……」

世之介の言葉に、格乃進は客室の操作卓を覗き込んでいる。格乃進の指先が、操作卓の表面で素早く動いた。それを見て、世之介はびっくりした。

「あんた！ イッパチを責めたその口で、自分でやつてるじゃないか！ そんな真似をして、また何が起きるか、判らなーよー。」

「心配ない」

格乃進は顔を上げた。

「客船の客室は、それ 자체が宇宙船として機能する。今、船室の操縦装置を起動させた」

「へ？」

世之介はポカンと口を開け、ただただ格乃進の指先を眺めていた。さつきのイッパチの問い合わせ方といい、今の自信ありげな様子といい、この賽博格は何者だろう?

「助さんと格さんは、わしの供になる前、宇宙軍の戦闘機乗組員だつたので御座いますよ。除隊になつた一人を、わしが声を掛け、旅のお供になつて貰つたという訳でして」

光右衛門の説明に、世之介は納得した。宇宙軍にいたのなら、説明がつく。

操作卓を覗き込む格乃進の顔が、不意に難しいものに変化した。

「まざいな……思ったより、状況は悪い。超空間から飛び出したとき、航路が思つたより大きく逸れたようだ」

「今いるとこり、判りますかな？」

光右衛門の問い掛けに、格乃進は頷いた。

「はい、地球から五十光年ほど離れた星系にいるようです」

光右衛門は「ほう」と感心した声を上げ、質問を続けた。

「それで、地球へ戻れるのですか？ 格さんは、密室はそれ自体で宇宙船の機能をすると仰いましたが」

格乃進は、ゆっくりと首を振った。

「いいえ、ご隠居様。宇宙船の機能を果たすと言いましても、ごく短距離のもので、非常用の動力があるだけです。一度でも航行すれば動力は切れますから、機会は一度しかありません」

「ただ一度だけ……」と世之介は格乃進の言葉を繰り返した。

光右衛門は腕組みをして首を捻つた。

「それは、困りましたな。それでは、この密室で行けるところまで移動して、適当な殖民星に着陸して、地球に連絡を取る。それが一番の手立て、ということですね？」

「はい、わたくしも左様に思います」

格乃進と助三郎は、光右衛門の言葉に同意した。世之介は、こんな緊急事態に遭遇しても、なお光右衛門が冷静沈着に的確な判断を下すのに驚いていた。

問題

光右衛門は、せりりと手を光らせる。

「では、この客室で辿り着ける距離に、殖民星がありますかな？」

「御座います。さりさりでは御座いますが、到達範囲に、一つ古い殖民星があるようです。なにしろ超空間航法が発明される前の殖民星ですから、記録がほとんどなく、名前だけが記載されております」

「なんという星ですか？」

「番長星、とあります」

「番長星……」

世之介は呟いた。殖民星の名称としては奇妙な名称である。

イッパチは早々と立ち直り、ちよこちよこと世之介に近づいて見上げ、口を開いた。

「なんだか、剣呑そうな名前でげすな。そもそも、番長って何のことでげしょ？」

「ああ、判りないよ」

世之介は首を振った。光右衛門は肩を竦めた。

「番長だろうが、番屋だろうが、それとも番所か判りませんが、ともかく行けるところがそれだけなら、仕方ありませんな。格さん、参りましょ」

「はい、『隠居様』

格乃進は一つ頷くと、操作卓に向かい合つた。素早く両手が動き、航路を決定すると、格乃進は再び光右衛門に顔を向けた。

表情が真剣である。

「「J隱居様、一つ問題があります」

光右衛門は伸びやかに返事をする。

「何が問題ですか？」

「時間です。この密室には超空間歪曲場発生装置が搭載されておりません。ですから、通常空間を光速度以下の速度で移動しなければなりません。目的の星系は半光年ほど離れておりますから、どんなに早く移動しても、向こうに到着する頃には、六ヶ月が経過してしまうことに相なります。つまり地球に戻るにしても、半年後、あるいは、もつと時間が掛かってしまうかもしません」

「成る程」

光右衛門は髭をしゃき、世之介を見た。

「困りましたな。地球に戻つても、半年も経つていては、その間あなたが行方不明となつていることになるのでしょうか? 『両親の心配を思えば、ここにじつとしていて、救助を待つ、とこう選択もあらうので? そうですね、格さん』

「はい」と格乃進は頷いた。

助三郎、光右衛門、イッパチの視線が世之介に集中する。

「あ、あの……どうしてわたしを、そんなに見るので?」

世之介は、たじたじとなつて口を開いた。

光右衛門は、じつと世之介の目を覗き込むようにして、説明した。

「わしは、これ、この通りの隠居の身。半年くらい行方不明になつても、漫遊の旅の途中といふことで、騒ぐ人もおりません。供の助さん、格さんも同じです。そこにあられる、あなたのお供のイッパチも杏萄組偉童ですから、そうでしょう? しかるに、あなたは違う。

聞けば、高等学問所を卒業したばかりと仰るではありませんか。しかも、但馬屋の跡取りという大事な身体です。ですから、これらの選択はあなたに懸かっている、という訳です。お判りかな?」

世之介の額に、じつと汗が噴き出した。

「つまり、あたしに選べと仰るので?」

格乃進は頷いた。

「はい。このまま番長星へ行く、というのが一つの選択です。

客室の動力源は唯一度の航行で尽きてしまいます。番長星が救助を待つのに相応しくないと判つても、次はありません。

もう一つが、じつとこのまま漂流を続け、世之介様が行方知れずになつたと気付いた地球や【滄海】側が探索の手を伸ばし、救助を待つ、という選択肢です。客室に備えられている生命維持装置は、私ども総てを百年だらうが、千年だらうが、楽々と生かしてくれます。

ですが、救助がいつになるかは、判りません。

しかし一度どっちを選ぶか決めたら、他はありません。

じつとすることを選ぶにせよ、生命維持装置を完璧に動作させることは、航行用の動力を犠牲にしなければなりませんから。一度でも漂流を始めたら、番長星へ行く機会は永遠に失われます」

格乃進の説明に、世之介は足下がぐらぐらと崩れていくような感覚に襲われた。

総ては、世之介の選択に懸かっている！ しかも選択の機会は唯一度のみ！

格乃進は操作卓を覗き込み、表示をじつと見詰めて呟いた。

「あと一時間のうちに決めなければなりません。現在は客室の酸素は、通常循環によつて再生されていますが、一時間も経てば、非常用の動力に継続されます。その時、どちらかに決めないと……」

世之介の口は、からからに渴いていた。必死に唾を呑みこみ、拳

を握りしめる。

全員の視線が集中している。

遂に世之介は、顫える口を開いた。
「番長星へ、参りましょう……」

「それでは、唯今より客室の非常用動力を入れ、移動を開始します」

格乃進が宣告した。操作卓に向かい、ごつい指先で、幾つもの釦を同時に押す。

動いていく感覚はなかった。客室の航行装置は、重力制御技術を使って、空間それ自体に重力的な傾斜を作り出すものである。従つて、客室全体に均等に加速が加わるため、一切の反動などはないのだ。

しかし、客室の窓に見える宇宙空間には、劇的な変化が表れていた。

窓の前方が進行方向で、一瞬にして星々は光行差現象によつて青方偏移を起こし、赤い星は黄色に、白い星は青に、赤外線でしか見えない星は可視光線になつて見え始める。もともと青白く光る星の光は、紫外線領域にずれこみ、見えなくなつていく。

星々は進行方向に集まつていき、目映い光を放つてゐる。一瞬、集まつた星々は強烈な光を放ち、世之介は星虹スター・ボウを目の当たりにしていた。

客室の窓が不意に真つ暗になつた。紫外線領域の光が青方偏移でX線レベルまで高まつたため、乗客を保護するための自動遮蔽が働いたのである。

自動遮蔽が働いたのは、世之介が瞬きする一瞬のことであつた。真つ暗になつたと思つたら、すぐに窓の眺めは普通の、宇宙空間の

ものに変化した。

「到着しました」
格乃進が口を開いた。

亜光速

『さよつとなつて、世之介は格乃進の四角い顔を見詰めた。

「もう？ だつて半年も先だつて、言つたぢやないか？ 数を数える間もなかつたくらいだよ」

格乃進は、にやつと笑つた。

「亜光速で移動したのです。密室は、光速の九十九分率パーセントといつ速度で移動したので、時間の遅れといつやつで、我々にとつては、あつという間の出来事なのです。実際には、六ヶ月が外の世界では経つているのです」

格乃進の隣で、助三郎が操作卓の表示を覗き込んで感嘆の声を上げた。

「成る程！ 客室に備えられている非常用動力の、ほとんどが消費されている。宇宙軍にいたこりは、通常空間を亜光速で移動するなど、考えられなかつたな。いや、良い経験をした！」

世之介は助三郎の呑氣さに呆れた。『せりぎりの選択だといつのこと、良い経験だとは、能天氣な台詞である。

格乃進は、窓外に一際ぐんと大きく見える黄色い星を指差した。

「あれが、番長星の主星だ。もつ番長星は田と鼻の先といつていい

またまた問題発生！

光右衛門が立ち上がりつた。

「それでは、番長星とやらに、連絡を取りませんとな。」
「こいつに我らがいる、といふことを報せないと」

助三郎が首を振つた。

「「」隠居様。それが、さつきから番長星と思われる惑星に向け、こちから緊急信号を発信しているのですが、いつかな返答が御座いません。」こちからの信号は充分に強力で、向こうが普通の受信設備を持つていれば、聞こえるはずなのですが、うんでもなければ、すんでもありません」

光右衛門は眉を顰めた。

「それは、おかしい！ ちゃんと宇宙図に記録されている殖民星なら、幕府の奉行所か、あるいは代官所があるはず。なのに、返答がないとは、面妖としか言い様がありません」

世之介は、じつじつと焦つてきた。

「それじゃ、こちから出掛けよう。」
「こじで立ち往生している時間は、もうないんだろ？」

宇宙の動力は亞光速の航行で、ほとんどが消費されている。つまり、生命維持装置を働かせる時間が、残り少なくなつてきているということだ。

格乃進は渋面を作り、首を振った。

「それが、そうはいかんのだ」

助三郎も同意した。

「問題がある」

また問題である！ よくも次から次へと、立て続けに問題が持ち上るものだ……。

危険な方法

それでも世之介は焦燥を押し殺し、格乃進に丁寧に尋ねた。

「何が問題なんですか？」

格乃進は世之介と、光右衛門の中間を見るようにして口を開いた。

「着陸装置がない、ということなのです」

世之介は虚を衝かれ、一瞬「えつ？」と仰け反った。格乃進の言葉を取り違えたのかと思った。

「着陸装置つて？」

助三郎が説明する。

「客室は、宇宙航行をするための設計になつていません。非常事態が起きたら、救助の手を待ち、向こうの協力で曳航されるなり、接続されるなり、という方法を前提にしています。従つて惑星に直接、着陸する状況など、考えられてはいりません」

格乃進は腕組みをした。躊躇いがちに口を開く。

「残る手段は、一つのみ！　しかし、相當に危険ではありますな」
光右衛門が静かに尋ねる。

「どのような方法なのですか、格さん」
格乃進は光右衛門に顔を向けた。

「墜落するのです、ご隠居様」

惑星

客室の窓一杯に、惑星が浮かんでいる。番長星である。窓から番長星を眺め、光右衛門は感嘆の声を上げた。

「不思議な色の惑星ですなあ！ なぜ、あのよつた色合いなのでしょう？」

番長星は全体に董色がかつた色をしていて、霞のよつたとした量を纏っていた。時々、惑星の表面に奇妙な光が走る。助三郎が目を光らせ、光右衛門の質問に返答する。

「スペクトル分光観測により、大気の主成分は窒素と酸素で、地球とほぼ同じです。但し、微量物質が大きく違い、ネオン、アルゴン、ヘリウムなどの稀瓦斯が含まれております。主星の光も地球と違つて御座いまして、それがあのよつた色合いを見せているのでしょう。さらに表面重力がやや小さく、そのせいで成層圏が地球より広がつております。それで霞のよつた光を纏つているように見えるので御座います」

光右衛門が指を挙げ、さらに質問する。

「それでは、あの光はなんでしょう？ 時々、虹色の光が走りますが」

「オーロラ極光で御座います。先ほども申し上げた通り、番長星の成層圏は大きく広がり、地球で申せば電離層の外側まで達しております。大気圏に含まれる微量物質が太陽からの高速粒子と衝突し、励起して電子を放出させます。それで光つて見えるのです。地球では、極地

方でなければ見られない極光が、ここでは赤道付近でも見物できます」

助三郎が窓際に陣取り、目を光らせながら、滔々と捲し立てる。

世之介が疑問の表情を浮かべたのを見てとり、格乃進は笑いながら説明した。

「我らは賽博格サイボーグだという事実を忘れては困るな。助三郎の人工眼球は、様々な波長の電磁波を感知できるのだ。分光観測など、お手の物なのだ」

側で聞いていたイッパチが、ちょっと拗ねたような表情になつて呟いた。

「そんなことくらい、杏萄紹偉童アンドロイドのあつしだって、できまあ！ ただ幫間たじこというお役目柄、しゃしゃり出ることを控えているだけですぐよ」

イッパチの口数が多い。不安に駆られている証拠である。もちろん、世之介も同じだ。これから、格乃進の説明した最後の手段を探らなければならないのだ。

さすがに光右衛門は最長老だけあって、表情には何の不安も、一欠片だつて表れていない。しつかりと床に立ち、片手に旅の杖を軽く握りしめている。

「それでは格さん、助さん。そろそろ参りましょうか

光右衛門の皺枯れた声が、意外とはつきりと、世之介の耳に届いた。

はつ、となつて世之介は光右衛門を見た。いつの間にか、ボケツ

ヒ番長星眺めていの自分に気付く。

格乃進は「では」と、軽く頷いた。格乃進の指先が操作卓の上で踊った。

待つて！ と言いかけた世之介の口がきつぱりで止まつた。もつ、遅い。

ぐーつ、ヒ番長星が近づいてくる。いや、こちから近づいているのだ。

窓が真っ赤に燃え上がつた。大気圏に突入したのである。もちろん客室の温度調節は完璧で、熱さなど全く感じじことはない。

窓の外の大気が白く輝いた。高温で、空気中の原子から電子が遊離している。もう、惑星の表面は見分けることができない。

さひこ

不時着

「ぐじ、と不意に床が傾斜し、世之介は立つていられなくなつて壁に叩きつけられるように転げ落ちた。「ぐぎやつ」と、世之介の身体の下でイッパチが悲鳴を上げた。

真っ白な光が、窓から差し込んでくる。窓は天井になつていてつまり客室が傾いているのだ。床が傾斜しているのは、客室の重力場発生装置が働きを停止しているのだ。非常用の動力を使い果たしたのだ。

客室は、最後の役目を果たした。

「皆、無事ですか！」

しつかりとした光右衛門の叫びが轟いた。
格乃進と、助三郎の返事が聞こえる。

「はい、大事ありません！」と格乃進。
「同じじもじ同様で……」と助三郎の、ややのんびりとした返事。

「若旦那……」迷惑でしじょうが、あつしの身体からの一いつおくんなせえ

身体の下から、イッパチの弱々しい声が聞こえる。世之介は慌て立ち上がった。

「ふいーつ！」と息を吐き出し、イッパチが目をパチクリさせ立ち上がった。急いで身につけている着物の衣紋を繕う。

番長星に到着する前、一同は普段の着物に着替えていた。

世之介は高等学問所の制服である筒袖に袴。
光右衛門は辛子色の着物に袖なし羽織、野袴に頭巾という装束で
あつた。

助三郎に格乃進もまた手甲脚半、振り分け荷物という旅支度を整
えている。イッパチは、いつものように手に扇子を握っている。

「何とか、皆、無事のようですね。いや旦出度い！」

一ノ一ノと笑顔になつて光右衛門が皆の無事を寿いだ。床が斜めになつてるので、足下が大いに不安定で居心地が悪い。

世之介は窓を見上げた。窓の外が燃え上がつたと思えば、一瞬の後、こうなつた。何がどうなつたのか、さっぱりだ。いや、理由は判つてゐる。客室の最後の保護装置が働いたのである。

フリーズ・タイム
凍結時間装置である。

客室の外部が、乗客の生命に危険と判断されると自動的に働く装置で、時を停止させる被膜を作り出す。この被膜の内側では、どのような変化も起きない。つまり、外部のどのような変化も受け付けないので。凍結時間が働くと、超新星爆発の真つ只中でも、一原子も傷つくこともない。

客室が大気圏に突入し、そのまま、まっしづらに落下して、装置が働いたのだ。怖ろしいほどの衝撃と、熱が見舞つたはずだが、それは凍結時間に守られ、遮られた。

格乃進の説明に、世之介は理屈では判つていても、いざ体験するとなると、足が震えたものである。だが、それも済んだ。もう安心だ。

いや、そういうのか？

ぐーつ、と密室が反対側に傾いている。わつ、わつと一同は反対側に傾いた床を滑つていく。

じびり、と密室は転がり、さらじびり、じびりと何度も転がつていぐ。転がつていく球体の密室の中で、世之介たちは絹毛鼠のよううに、ころころと転がつた。

「なつ、何で転がつているんだい！」

世之介が叫ぶと、格乃進は叫んだ。
「黙つていなさい！ 舌を噛むぞ！」

どーん、と大きな音を立て、密室の転がりはようやく止まった。濛々と細かな土埃が室内で舞い踊つている。

けほけほと咳き込みながら、世之介はよろよろと立ち上がつた。下を見ると、イッパチが情け無さそうな顔で仰向けに引っくり返り、世之介の顔を見上げている。目が回つているらしく、大きな目玉がぐるぐると際限なく回転していた。

「怪我はありませんか！」

心配そうな光右衛門の声に、全員「いいえ」と返事をする。密室は完全に上下逆さまに転倒していた。

「（）隠居様、外へ出ましょ！」

助三郎が叫んで光右衛門が頷くのを待ち、上下逆さまの扉を開け

る。さつと外光が差し込み、世之介は助三郎の後ろから出口に顔を突き出し、外を窺つた。

巨大な擂鉢のような地形が目に飛び込む。客室は擂鉢状の真ん中に鎮座していた。擂鉢の表面は焼け爛れ、あちこちから焦げ臭い匂いと煙が立ち上がっていた。世之介の背後から外を眺めた格乃進は、呆れたように呟いた。

「なんと！ これは、客室が墜落したときに穿った大穴に違いない。つまり隕石孔というわけだ」

「本当に、この客室がこんな大穴を開けたと申されるのですか？」

信じられません」

世之介が問い合わせると、格乃進はゆっくりと外へ一步足を踏み入れ、地面を触る。

「まだ暖かい……。衝突の熱が、残っているのだ。相當に大きな音が響いたことだろうな」

格乃進の後から外へ飛び出した世之介は、顔を仰のかせ、空を見上げた。

董色の空。雲は微かに薄桃色がかつて見える。確かに宇宙から眺めた番長星の大気の色と同じである。擂鉢の縁あたりに太陽が顔を出し、辺りに董色の光を投げかけている。

空を素早く、^{オーロラ}極光が横切る。真昼間から、しかも、極地でもないのに、はつきりと見える。

用心深く光右衛門が、続いて光右衛門を守る体勢で助三郎が外へ出てくる。最後にイツパチが怖々と外へ出てきた。

「おおおおん……と、遠くから騒音が近づいてくる。

はつ、と見上げた一同は、擂鉢の縁にきらきらと何か、金属質の反射光を認めていた。

「人です！ 何か乗り物に乗っています！」

助三郎が指さし、叫んだ。世之介も真剣に目を凝らす。

だが、細部まで見ることはできない。さすがに賽博格の視力は大したものだ。

一斉に縁から雪崩落ちるように、乗り物はこちらに近づいてくる。うおおおん……と辺りにけたたましい騒音が満ちた。じつごつとした岩がちの地面を、跳ねるように近づく乗り物の細部が見分けられ、世之介はあんぐりと口を開け、叫んだ。

「あれは……一つの車輪で走っている。どうして転ばないんだろう？」

前後に一つの車輪を持つ乗り物の中心に座席があり、そこに人が跨り、操縦するための把手ハンドルを握っている。たつた一つの車輪だけで走行しているのに関わらず、ちゃんと走っているのを見るのは、不思議な眺めであった。

一輪車

光右衛門が大きく頷いた。

「あれは、一輪車オートバイというものです。大昔の乗り物で、今では誰も使つてはいません。わしも、初めて見ました」

一輪車は数十台を数えていた。次々と縁から出現すると、見るからに危なっかしく地面を跳ねるように走行し、客室を中心に、渦を巻くようにぐるぐると回っている。

ほとんどが一人乗りであつたが、一人が前後に乗り込んでいる一輪車もあつた。一人乗りの後部座席に乗つている乗客は、なぜか旗を手に持ち、こちらを威嚇するかのように睨みつけてくる。

旗は日章旗だつたり、文字を大書きしたものやら、とりどりである。文字は「御意見無用」とか「世呂死苦」とか「撫血霧ぶつあきり」など一目だけでは、何を書いているのか判らない漢字があつた。

その頃になつて、世之介は一輪車を操縦しているのが、総て女性であることに気付いていた。

しかし、相當に奇妙な格好をしている。

まず、着ているのが、着物ではない。上下が繫がつた、作業衣のよつなものである。白が多かつたが、真つ赤なの、青いの、あるいは黄色と様々な色の作業衣を纏つっていた。

髪の毛も、赤、黄色、茶色、中には緑とか、紫色など見ているだけで目がクラクラしてくるような派手な色に染めていた。

一輪車の群れは、かなりの時間、密室を中心じぐるぐる回っていた。

だが、やつと動きが止まり、一台の一輪車が全速力で近づくと、やがて横滑りするよつに停車した。

少女

「あんたら、いつたい何者だい！」

甲高い、まだ少女と思われる声が響く。髪の毛は真っ赤に染め、前髪を垂らし、後頭部でぎゅっと縛つて纏めている。後になつて、世之介はその髪型が「ボニー・テール」と呼ぶのだと教えられた。

少女の顔を見て世之介は思わず「あっ」と叫んでいた。超空間歪曲場で垣間見た、少女の顔であった。

少女は、きりつとした眼差しで世之介を睨んだ。ポカンと口を開けてまじまじと見つめる世之介を、少女は訝しげに見つめ返す。

「なんだい……」

ぴくりと眉が持ち上がる。
「ガンつけようつてのかい？」

さつと一輪車の支柱ペタハンドを立て、降りると大股で世之介に近づいた。両手を腰に当て、ぐつと下から見上げるよつに睨み付ける。

「文句つけようつてのか？ 面白い、やつたろつじやないか！ タイマンはできるんだろ？ ね？」

世之介には少女の言葉が、一言半句も理解できない。一応は日本語であろうが、まるで外国語である。

その場の状況を見て取り、さつと格乃進と助三郎が前へ出た。格

乃進が落ち着いた口調で話しかけた。

「まてまて、我らは宇宙から墜落したばかりで、こここの状況は、さつぱり判らぬ。知らぬ間に失礼をばしたら、許されよ」

「へえ？」

少女は虚をつかれたように田んぼを見開いた。ぐるりと背後の仲間を振り向くと、叫んだ。

「お前たち、こいつら、何を言つてゐるのか判るけえ？ 何だか、妙だよ」

ざわざわとその場に立ち止まつてゐる一輪車の仲間たちは顔を見合せ、首を捻つてゐる。皆、格乃進の言葉を理解できていない。

一人乗り

「まずは、自己紹介と行こうではないか」

杖を握り、光右衛門が口を開いた。

「最初に、わしから紹介させて貰おう。わしは、越後の呉服問屋の隠居で、光右衛門と申す爺いじやよ。諸国遊楽の漫遊に出たのじやが、妙なことで、番長星に墜落する仕儀にあいなつた。できれば、この星のこと、教えてもらえれば有り難いのじやが」

少女は困惑しているようだつた。視線がきょときょと落ち着きなく動く。唇を舐め、何か考え込んでいる。

「ふーん。あんたらの言つことは、さっぱり判んないけど、敵じゃないみたいだね。それに、妙な格好をしているし、ここいらの人間じやなさそうだ。困つてゐるみたいだし、あたいらのヤサに連れて行つてあげよう!」

前後の口ぶりからヤサと云うのは住處、という意味らしい、と世之介は推測した。

「あんたら、あたいらのバイクの後ろに乗りな! だけど、助平な根性で厭らしい真似をしたら、すぐ振り落とすからね!」

後ろに乗る? つまり、女性の後ろに乗つて……!
世之介の頬が熱く火照つた。少女は世之介の顔色を見て「ちつ」と舌打ちした。

「なに、赤くなつてんだい! まったく、男つてのは……!」

わざと自分の一輪車に跨ると、顎を上げ、叫んだ。
「乗りなつたらー。愚図愚図してゐんじやないよつー。」

把手を握りしめる。一輪車から猛然と、音が響き渡つた。わざと世之介は少女の背後の座席に跨る。

「行くよつー。」

少女は宣言して、右手をべこつと捻つた。

途端に、弾かれたように一輪車は前方に飛び出した。

「ひえつー。」と悲鳴を上げ、世之介は思わず運転してくる少女の腰にしがみついていた。

けたたましい騒音を立て、世之介たちを乗せた一輪車の群れは、巨大な擂鉢の穴から一斉に飛び出した。

飛び出したところは、どこまでも広がる畠である。

【滄海】の客室は、農地に墜落したのだ。

世之介は人家に墜落してなくて、幸いだつたと改めて思った。

畠の真ん中を、一輪車は突っ切つていく。

風に揺れる穂先の間に、ずんぐりとした形の傀儡人ロボットが、黙々と農作業を続けていた。

傀儡人たちは、騒音を立てて一輪車が通過しても、ちらりとも視線を動かさない。ひたすら、日の前の作業に従事している。

型式から推測して、三世紀は前の型である。

最低限の自己判断と行動指針しか組み込まれておらず、好奇心のような余分なものは一切、備えられていないのだろう。

数台の農作業傀儡人たちは、地面に穿たれた隕石孔に集まつてくると、土を運び、元通りに修復するための作業を、早くも始めていた。

一輪車は畠を突っ切ると、舗装された道路へ駆け上がり、路面に車輪が乗ると、さすがにそれまで酷かつた上下の震動はぴたりと止まり、快調に一輪車の速度は上がつていく。

世之介が振り返ると、隕石孔の上空に、仄かに埃が棚引いているのが確認できる。まだ巻き上がった埃が風に吹き払われていなかつたのだ。衝突の物凄さが、これ一つではつきりと見てとれる。

光右衛門、格乃進、助三郎の三人は、各々一輪車の後席に泰然と席を取り、落ち着いた物腰で跨つてゐる。しかし、イッパチは顔を俯かせ、死に物狂いで、操縦する女性の腰にしがみついていた。

便利店舗

道路はどこまでも真っ直ぐに伸びている。

舗装面はきわめて平坦で、まるで出来立てのように見えた。道路の左右は広大な農地で、豊かな実りが一面に続いている。地面は平坦で、遠めに微かな隆起が続き、時々ふつと単調さを破る森や丘が盛り上がるだけで、人家は一つも見当たらない。

いや、道路脇に平屋建ての店舗が見えてくる。
店舗には広々とした駐車場が設置され、数台の一輪車が停車していた。

【紺美尼樓尊】^{（ハニビリローリン）}と大書された店舗の看板は、二十四時間営業を謳っていた。

「便利店舗か！」と世之介は感心した。

こんな惑星にも、便利店舗は進出しているのだ。

停車していた一輪車の持ち主は、今度は若い男性であった。女性たちと同じような格好で、頭髪は金髪や茶髪に染めているのは同じだが、髪型は違っている。

ぐつと盛り上がった前髪部に、蟀谷あたりを青々と剃り上げている。後で知ったことだが、それは「リーゼント」という髪型だそうだ。髪の毛はちりちりに縮まる「電髪」^{（パーク）}にしている。

男性たちは近づいてくる女性たちの一輪車の群れに気付くと、慌てて自分たちの一輪車に跨り、動力を入れた。

わんわんと野良犬の遠吠えのよつて騒音を蹴立て、一輪車は女たちの一輪車に追いすがる。

「茜！ あかね どうした、そこからな？ ビード拾つた？」

男たちが併走して矢継ぎ早に質問を投げかけてくる。

声を掛けたのは、頭をつるつるに剃り上げた、十代の終わっころと思われる歳格好の男性である。

男は、やや上田遣いに、少女の後ろにしがみついていた世之介を睨んでいる。視線には険悪な雰囲気が漂っていた。

「茜」と呼びかけられたのは、世之介が跨つてこむ一輪車を操縦している少女であった。

「火の玉が煙に落ちたのを見ただろう？ あれで見つけたんだ。困っているようだから、助けてあげようって訳だ！」

「へえーっ！」と話し掛けた男は、馬鹿にしたように叫び声を上げる。ぐつと一輪車の速度を上げ、前に飛び出した。

尻を振るように後輪を滑りせ、見るからに危なそつな運転を始める。茜は叫んだ。

「何すんだい！ 危ないじゃないか！」

茜の叫びを男は完全に無視して、酔っ払いのような運転を続けている。明らかに嫌がらせとしか、思えない。

「おおん！」と爆音を蹴立て、男たちの一輪車が女性たちの一輪車の行く手を塞ぐように前へ飛び出し、回じように蛇行運転を始めた。ちらちらと後ろを振り返り、「あやほほほほー」と奇声を上げていた。

道路を進むと【瀬文偉礼文】^{セブンイレブン}だの【紗渥瑠惠燦楠】^{サーウル・ケイ・サンクス}だの、同じような便利店舗が次々と見えてくる。

店舗前の駐車場には決まって十数台の一輪車が屯していて、茜た

ちの一輪車に気付くと飛び出してくる。そんなことを一度、三度ほど繰りかえすと、走行している一輪車の群れは忽ち百台近い数になつた。

世之介はそれらの一輪車をじつくりと観察した。

どれもこれも、世之介には理解できない改造を施されており、把手のひん曲がったの、やたら大きな車輪を嵌めたの、あるいは、どうやつて跨るのか想像もつかない奇妙な座席をくつつけたのやら、色々であつた。どの一輪車も、目に突き刺さるような原色の塗装で、おのれの存在を誇示している。

また、操縦している男女も、世之介には絶対に理解しがたい扮装をしていた。髪型もそうだが、身につけている服装も、ひらひらする布切れや、でかでかと書かれた文字、何の象徴かも判らない様々な紋章。

文字は漢字で書かれているのが多いが、たまにアルファベットで書かれているものもあつた。地球上で日本語以外の言語が死語に近くなつて長く、世之介にはそれらのアルファベットが何を主張しているのか、まるで判読できない。

実を言つと、それらのアルファベットは、どれ一つとして意味のある綴りを示してはいない。長い年月、代々住民によつて伝えられた間に、間違いが積み重なり、単にアルファベットが出鱈目に繋がつてゐるだけになつてゐる。しかし誰も元の英語を理解していないから、気にはしない。

わの頭をつむつむに剃り上げた男が一輪車を寄せてきて、茜に話しかけた。

声は奇妙な嗄れ声で、がらがらなのに甲高いといつ親不孝な声であつた。

「おー、茜ー、そいつは、ビーハすんだよ？ 教えひよー。」

男の口調は粘つこく、しつこかつた。

じりじりと世之介を見る視線には、はつきりと悪意が見てとれる。

「煩いねえ！ 健史、あなたの知つたことじやないだらうへ。」

茜はうそせりしたような口調になつた。茜の返答を耳にして、健史と呼びかけられた男の田付きがわらに険悪さを増した。

健史は跨つている一輪車を急加速させ距離を取り、道路の真ん中に後輪を滑らせ、急制動をかける。

わわー、と歯が浮くような音が響き、健史の一輪車は道路を占拠する格好になつて止まつた。それを見て、健史と一緒に飛び出した他の一輪車の乗り手も同じように道路を塞いだ。

茜たちは道路を塞がれ、一輪車を次々と停車させる。

がちやり、と支柱を下げ、茜は素早く一輪車から地面に降つると猛然と喚いた。

「健史！ 何を考えてんだ！ 死にたいのかい？」

一輪車に跨つたまま、健史は顎を襟にしつめるよひに引いて、じ
ろつと後席に跨つたままの世之介を睨みつけた。

「気に食わねえな！ 茜、いつか俺は、お前に言ったよなあ……。一人で一輪車に乗つて旅でもしないかつて！ あんときや、考えておくつて返事で、そのままだつたが、いつの間にか、こんな訳の判らないオカマ野郎を後ろに乗つけやがつて！ そいつの、どこがいいんだよ？」「……」

茜は溜息を吐いて肩を竦める。

「馬鹿じゃないの？ 何であたしが、あんたとそんな頓狂な約束しなければなんないの？ 本当に、あんたつて馬鹿ねえ……」

呆れた、という様子で、首をゆっくりと左右に振る。

健史の顔が見る間に真赤に染まつた。世之介はまるで茹蛸だ、と思つた。

黙つたまま一輪車の支柱を立てると、ゆっくりと地面に降り立ち、身体を揺するような独特的の歩き方で、よたりながら世之介に近づく。

「おこー。」

押し殺した声を掛けてくる。田は陰険に光つている。

近づいた健史の口から、ふん、と薄荷ハッカのきつい匂いが漂つた。口の中に何かくちゅくちゅ噛んでいて、それが薄荷の匂いを漂わせているのだ。健史は顔を擦り付けるよつて近々と寄せてきた。

世之介は思わず身を引くと、健史はさつと手を伸ばしてきて、世

世之介の襟首を掴んだ。

「お前……勝負しろ！」

「健史！ あんた、何、馬鹿なこと……」

茜が叫ぶと、健史はさつと顔をねじ向かへて喚いた。

「うぬせえつ！ お前は黙つていろ！ これは男と男の話し合いだ！」

? 男と男？ といつ言葉にて、茜はぞくつと押し黙つた。この言葉は、番長星では絶対の価値を持つ。この言葉の前では、どんな論理も太刀打ちできない。

健史は無理矢理ぐいぐい世之介の身体を引き摺り、一輪車から降ろした。世之介の両膝は全く力が入らず、健史の思つままになつている。

「俺か、お前か、どつちが茜と一緒に一輪車に乗るのが相応しいか、勝負だ！ タイマンだぞ！」

世之介は震える唇から、必死に言葉を押し出す。

「しょ、勝負って、どうこうですか？ なぜ、あたしがそんな
こと……！」

世之介の言葉を耳にして、健史の表情が変わった。
ふつ、と口の中で息を詰め、全身が細かく震え出す。

「だあーっ、はつはつはつはつ！」

身を折り、爆笑した。ひとしきり笑った後、健史は周りの人間に
向け、大声で宣言した。

「聞いたか！ ここのオカマ野郎、あたしだってよ！ こいつあ、本
当のオカマ野郎だぜ！ こんなオカマ野郎を、茜の後ろに乗せる訳
には金輪際いかねえなあ！ ぶつとばしてやる！」

どん、と思い切り健史は世之介の胸を突いた。ようよろつと世之
介は踏鞴を踏み、背後に倒れ掛かる。

地面にしたたかに倒れこもつとした世之介の背後を支えた手があ
つた。

はつと世之介が振り向くと、格乃進の頬もしい顔があつた。

「しつかりしなさい！ 泣えるのはよくない
「へえ？」

格乃進は真っ直ぐ世之介を立たせると、さつと後ろに引き下がる。ぽかんと口を馬鹿のように開けた世之介に、格乃進は言葉を区切るように話し掛けた。

「この星では、腕力で総てを解決する習慣のようだ。降りかかった火の粉は、避けるだけでは解決しないぞ！」

「で、でも……格乃進さん。助けては下さらないので？」

「わたしは、サイボーグ賽博格だ。人間と本気で争うことはできない。そんなことをしたら、相手に大怪我をさせてしまつ。君がやるんだ！」

世之介は首を振った。

「無理です！ あたしは今まで、唯の一度たりとも、喧嘩なんかしたことないんです！」

格乃進は、にやつと笑いかけた。

「高等学問所で剣道の授業はしたはずだな？」

世之介は頷いた。剣道の修行は、中等、高等の学問所で必須の修行である。

格乃進は言葉を続けた。

「だったら、大丈夫だ。学問所で習つた、剣道の授業を思い出せー！」

一本！

世之介はおずおずと健史の方向を振り向いた。

健史は、馬鹿にしたような笑いを浮かべ、獲物を前にした獣のような気配を漂わせていた。やや俯かせた顔には、ニタニタ笑いが浮かび、今にも涎がタラタラ糸を引きそうである。

剣道の修行を思い出せ！

そんなことを言つたが、格乃進は竹刀を持つていなし。それに、今では、学問所の剣道修行の時間は、遠い昔の夢物語に思える。

「やんのか？ オカマ野郎！」

「そのオカマ野郎とは、なんのこととで御座います？」

こんな状況でも、世之介の言葉遣いは相変わらず丁寧である。どんなに頑張つても、乱暴な口調は金輪際、どうにも使うことができないのだ。

「お前のようなナヨナヨした奴のことだよつーー ああ、気持ちが悪いー！」

べつべと健史は唾を吐き散らした。

世之介の胸に、勃然と怒りが湧いてきた。自然と両手が上がり、竹刀を握る構えを取る。

「おつー！」と小さく健史は身構え、再びよたりながら近づく。ぐいっと身を沈め、下から世之介の顔を見上げる。

「やんのか、」「ひー。」

「お面　　ひー。」

世之介は叫ぶと、両手を閉じ、両手を竹刀を握り締めた形のまま突き出した。無我夢中の世之介の右手に、何か手応えを感じていた。

「ぐわやつー！」

悲鳴に、世之介は「はつ」と手を見開いた。

見ると、健史が地面にぺしゃりと大の字に寝転がり、二つの丼玉を虚ろに見開き、口をあんぐりと開いて世之介を見上げている。顔色は真っ青で、鼻つ柱だけが真っ赤である。

世之介の夢中で突き出した右手の拳が、健史の鼻つ柱を打ったのだ！

健史の見開かれた丼玉に、見る見る涙が浮かんでくる。

「ぐええええ……ー！」

世之介は呆れた。

なんと、健史は泣き始めたのだ。

「うおおおおお、うおおおおお……」

あたり構わず、健史の泣き声は響き渡つてゐる。両手から滂沱と涙を噴き出せ、身を揺るみつて泣き喚いていた。その様子はまるで幼い子供のようであった。

「痛えよおー！」つが、俺をぶつたあ！ ひどいよおー。なんでぶつんだあー！」

健史はこやこやをすのよひこ、激しく首を振る。困った世之介は、宥めるよひこに両手を上げ、健史に近づいた。

「あの…… ゆうとこ相済みませぬ。つこ……」

近づいた世之介に、健史はびくつと身を震わせ、尻をぺたりと地面につけたまま、両手を使って後じさつた。

「来るな！ 獣だあ！ 痛いよおー！」

世之介は助けを求める視線を茜に向けた。しかし茜も、世之介をまるで怪物を見るかのような視線で見つめているだけである。

田に恐怖の色を一杯に浮かべた健史の仲間たちは、ぎくしゃくとした動きで健史の周りに集まつてみると、手を伸ばして助け起こし、一輪車にそそくまと戻つていぐ。

無言で動力を入れると、振り返りもせず、一輪車に乗つたまま去

つていいく。爆音は心なしか控えめで、あつといつ間に見えなくなつてしまつた。

称号

静寂のみが支配していた。

世之介は一步、茜に近づいた。説明を求めたのである。

「どうしてこのとなのでしょ？ わたくしは、まだ、わざわざ……」

茜の唇はからからに乾いていた。茜は唇を舐め、田を一杯に見開

いたまま、呟いた。

「本当に殴ったなんて……！ 信じられない」

イッパチが首を捻つた。

「でも、喧嘩を仕掛けたのは、あの健史つてお人なんでしょう？ だったら偶然でも、殴られることは覚悟していたはずじゃあ？」

「違う！」と茜は首を振つた。

「喧嘩で、本当の殴り合になる」となんて、今まで一度もないわ

ー

「ええー。」

今度は世之介は本当に驚いた。

「だつて、だつて、あの人たち見るからに本当の不良で、あたしに喧嘩を売つてきたときだつて、本気だと……」

「ほんぢで喧嘩といひのと、口喧嘩のことよ。お互ひ、相手を凹ませるために色々と言ひ合つけど、手を出すことは絶対しない。そんなことになつたら、怪我するでしょう？」

茜の説明に、世之介はがっくりと両手を下ろした。茜の両手に、元田に、尊敬の色が浮かぶ。

「もし、本気で殴りあう覚悟ができる人がいれば、その人は【バンチョウ】って呼ばれるでしょうね。ここでは、そんな【バンチョウ】の称号を持っている人間は、数えるしかいない……」

茜は、につこつと笑みを浮かべる。

「あなたは【バンチョウ】よ！ 今日から【バンチョウ】って名乗つても良いんだわ！ 憂いじゃないの！」

世之介は周りを見回した。

茜以下、二輪車に乗った女性たちは賛嘆の表情を浮かべている。

世之介は呆然と、いつまでも立ち竦んでいた。

茜は一步やっと引き下がると、腰を沈め、両足をがばっと蟹股に広げた。左手を後ろに構え、右手を前に突き出す。

「お控えなせえつー！」

ぐつと下から世之介の顔を見詰め、叫ぶ。

世之介は訳が判らず、ただ、ほんやり呆然と、茜のきりつとした顔を見返しているだけである。

もう一度、茜は叫んだ。

「どうぞ、お控えなせえつー！」

叫んだ後、世之介を見上げたまま待っている。何を待っているのか？

「若田那……」

イッパチが話し掛けてくる。世之介はイッパチに向かい、囁いた。

「イッパチ、あの茜つて娘のしていること、判るのかえ？」

「へい！ あつしは、あのお嬢さん、若田那に向けて仁義を切つているんだと、考えておりやす」

「仁義？ なんだい、そりや？」

「挨拶でござんすよ。若田那も真似されたらいかがで？ 茜さん、困つておられるようでげすよ」

「言われて世之介は、茜の仕草を真似しないながらも、真似をすることに決めた。腰を沈め、右手を覚束なく突き出す。

せつと茜の頬が紅潮した。

「早速のお控え、有難うござんす！ 手前、生国と発しますは、番長星にござります！ 番長星、と言つても、ふつござんす。北番長星は常陸の国、大宮村に生を受け、那珂川にて産湯を使い、姓は勝又名前は茜と申す、不束者でござんす！ 此度は奇遇なことに、あんさん……」

茜の言葉が途切れ、困惑の表情になる。

「あの……、名前を教えてくれない？ 仁義を切る前に、名前を教えて貰つてなかつたこと『氣がつかなかつたの』

蚊の鳴くよくなが細い声になる。顔は恥ずかしさに、真つ赤になつてゐる。頷き、世之介は顔を近づけ、小声で答えてやつた。

「但馬世之介だよ、茜さん」

わざと茜は元の位置に戻つて仁義を続けた。

「……但馬世之介様の知己を有り難くとも頂き、ただただ、恐悦至極にござんす。今年、十と八歳になる若輩者でござんすが、どうぞ皆々様のお乞き回し、ご鞭撻、よろしうお願いいたしやす……」

ぱりぱりと周りから女たちの拍手が湧いた。茜は、明らかにほつとした表情になつて立ち上がつた。

「ああ、よかつた！ ちゃんと仁義が切れたわ！ 何しろ世之介さんは本物の【バンチヨウ】だもんね！ こつちも正式の仁義を切らないと、失礼だもん」

「さて」と光右衛門が口火を切つた。

「少し寄り道したようですが、これから茜さんは、わしらをどこへ連れて行つてくれる、お積りなのでしょう？」

光右衛門の言葉を耳にして茜は「あつ」と口を押さえる。ぽかり、と自分の頭を打ち、舌をぺろりと出した。

「こつけない！ 肝心なこと忘れてた！ あのね、お爺ちゃん…

…」

光右衛門は、こじやかに答えた。

「越後屋の隠居、光右衛門で御座います」

茜は頷いた。

「ああ、そう、光右衛門さん。それに……」

問い合わせるよつこ、助三郎と格乃進、イッパチに田を向けた。

「格乃進で御座います。格さん、とお呼びくだされば結構！」

格乃進は、それでも堅苦しく、真つ直ぐ茜を見詰めて口を開く。

「助三郎で御座います。助さんでよろしいですよ」

助三郎は、にっこりと柔らかな笑みを浮かべている。

同意

助三郎の背後から、イッパチがひょこりと顔を出し、喋り出した。扇子をぱちりと鳴らし、軽く襟元を調べる。

「イッパチです！ 軽くイッパチ、と呼び捨てになつておくんなせえ。間違えてもイッパチさん、なんて？さん？付けは、『ご勘弁を……。色っぽい声音で『イッパチさん』なんてえ呼ばれた日には、あたしゃもう……』

イッパチは一人で照れている。

茜は呆れて見ていたが、それでも頭をふるつと振つて立ち直ると、改めて口を開いた。

「【集会所】に案内しようと思つてたの！ 【集会所】には、あたしの両親もいるし、ここにいるみんなの家族も揃つていいから、大丈夫。ね、是非とも寄つてくれない？ 本物の【バンチョウ】を連れてきた、つてことになれば、あたしは鼻が高いわ！」

茜の両目はきらきらと輝いていた。

「わうわー、絶対に【集会所】に来て貰わなきゃー。」「一輪車の女性たちが一斉に賛意を表した。

世之介は意見を求めるよひ、光右衛門を見た。

光右衛門は頷く。

「よろしいではありますか！ わしらも、少しさこに星のこと、勉強になるはずです。まずは、自分たちの今いる場所のことを知る

「じが肝心でしょ？」

【集会所】に近づくにつれ、道路の両側に様々な施設がぽつぽつと増えてきた。一番はつきり田立つのは、給油所である。

とはいっても、本物の燃料油脂を補給するわけではない。

番長星で使用されている一輪車などの動力源に使用されているのは、超強力な弾み車である。シューヴアルツシルト半径一ミリ以下のブラック・ホール黒穴に回転を与える、磁場が回転して電力を発生する。給油所では黒穴に新たな回転力を与えるための偏向重力場を掛けるのだ。

他に田立つのは、四輪車や一輪車の整備工場、車輪や装飾品を売つてている専門店、日用品や食料品を取り揃えている大規模店、家族ミレス食堂。

どれもこれも赤、青、黄色、桃色などの原色で彩られている。

道路には、一輪車以外四輪の車も走っていた。

世之介は地面をこのような動力車が走っているのを見たことがなく、物珍しかった。世之介の育った大江戸では、乗り物といえば公共のものも、個人の所有のものも全て空中を飛行するものばかりだった。

空を見上げた世之介は、飛行する乗り物を見ないことに気が付く。番長星では飛行する乗り物は存在しないか、ほとんど使用されていないらしい。

そもそも一輪車の後席に座つた尻が痛み始めたころ、やつと目的の、茜たちの【集会所】が見えてくる。

【集会所】は幾つかの建物が組み合わされた複合施設であった。

中心にあるのは量販店で、一階部分は家族食堂、その食堂の向かい側には遊戯施設ゲーム・センターが付属している。

住居は中心の施設を取り巻くように建てられ、広々とした駐車場があつて、そこには一輪車や、四輪の車がずらりと駐車されていた。住居同士は渡り廊下や、通路で繋がれ、まるで一つの巨大な建物のようだつた。住居同士を繋げている廊下や階段は後から無理矢理くつつけたかのようで、様式や素材は統一されておらず、全体に継ぎ接ぎ組工のようである。

驚くのは建物と建物の間にほつたからしになつていてる塵ゴミの山だ。うず高く積まれた塵には、遺棄された電化製品とか、食糧の容器、雑誌がごちゃごちゃと固まり、間からは食糧を養分に植物が根を張り、枝を伸ばしている。

番長星を支配しているのは、混乱そのものであった！

駐車場に一輪車が次々と停車すると、建物の扉が開き、中から人々が顔を出してくる。

現れたのは家族連れで、老若男女様々な年齢層で、多くは幼い子供の手を引いていた。中には腰の曲がった老人もいる。

ただし老人とはいえ、身につけているのは派手な色合いの上着や、作業服、学生服で、薄い頭髪を整髪料で固めてリーゼントにしているのがご愛嬌だ。

「お帰り。早かったね」

茜に中年の、やや太った女性が声を掛けってきた。

太つていることを除けば、茜に似た顔立ちをしている。何か台所仕事をしていたのか、女性はしきりと手を厚手のタオルで拭つていた。女性は茜の一輪車の後席に跨つている世之介を見て、尋ねかけるような表情になる。

「その人たちは？」

茜は一つ頷くと、説明を始めた。

「畑の真ん中に火の玉が落ちたって話は聞いてるよね？ 空から落ちてきた玉の中に、この人たちがいたんだよ。困っているようだから、連れてきた」

「ふうん」と相槌を打つた女性は、世之介を見て愛想笑いを浮かべた。

「それはまあ、大変でしたねえ」

父親

茜は苛々した顔つきになつた。

「父ちゃん！ 話はそれくらいにして、食事の用意しなきやー！ この世之介さんは【バンチョウ】なんだよー。凄いだろー。」

茜の【バンチョウ】といつ嘔葉に、女性は驚きの表情を浮かべた。やはり茜の母親だったかと、世之介は一人うんづんと頷く。

「あらまあ、大変！」

母親は口をポカンと開け、ぱっと両手を挙げると、懶散咲で家中へ駆け込んだ。家の中から母親の叫び声が聞こえる。

「父ちゃん！ 父ちゃん！ 茜が【バンチョウ】さんを連れて帰つてきたよー。挨拶しなー！」

じたばたと足音が近づき、さつきの茜の母親が父親と思われる同じ年頃の男性の手を引いて表れた。父親は対照的にひどく痩せて、度の強い眼鏡を掛けている。

「【バンチョウ】だつて？」

眼鏡の奥からまじまじと世之介を見つめてきた。世之介は眼鏡を掛けた人間を見るのは初めてで、ひどく驚いた。この番長屋では視力矯正は一般的でないのだろうか？

母親は顔を顰める。

「父ちゃん、そんな眼鏡を掛けていたら【バンチョウ】さんをよく見るにじができないだろー。外しなよ！」

「ああ」と頷き、父親は眼鏡を外した。眼鏡のレンズ面に、何かの番組が映し出されている。

これは、テレビなのだ。眼鏡を外し、父親は目を皿のよじにして世之介を観察する。

「初めてまして。但馬世之介で御座います。茜さんにお世話を頑張り、恐縮しております」

世之介は一寧に頭を下げ、挨拶する。父親は吃驚した表情になつた。

食堂

「ああ、あのう……ええと……」

「すべくへと口は動くが、虚しく葉は出でない。茜はいつも父親の手を元気なんだ。

「それより、食事、食事……皆、腹を空かせているんだから、何か食べよ。」

「ぱつぱつと世之介を振り向き、輝くような笑顔になる。

「世之介とも、お腹は空いているよな?」

言われて世之介の腹部から「わゅうーっ」とこつ音がしてくる。

そつだ、あれから何も口にしていないんだ!

世之介の腹の音を耳にして、茜はうるさいと転がるような笑い声を上げた。

「じゃ、決まりね!」

どこ、と勢い良く、世之介の背中を呂いた。

手を伸ばし、今度は世之介の手を引いた。

行き先は家の中ではなく、中心部の建物の家族食堂である。いつあつ世之介は家の中で食事するのだと思つていて、戸惑つた。

茜はその場にいた全員に叫んだ。

「飯だよ……皿、おこで……!」

「飯だ」「飯だ」と全員が叫び交わし、それからと集まつてくる。

ゞやゞやと騒がしく、家族食堂へと歩いていく。

食堂に入ると、杏葡萄紹偉童の女給^{アンデロイド・カトヤトレス}が出迎えた。大江戸で使用されている杏葡萄紹偉童に比べると、大幅に旧型の形式で、人造皮膚がはつきりと見てとれた。

杏葡萄紹偉童は歌うような口調で「いらっしゃいませ～！」と頭を下げると、手馴れた様子で全員を席へ案内する。

大きな卓に案内された世之介の隣に茜が座り、年長の光右衛門が奥まつた席へと座る。助三郎、格乃進は光右衛門の両隣で、世之介の両隣には茜とイッパチが陣取った。

席につくなり、全員は口々に注文を叫ぶ。杏葡萄紹偉童の女給はてきぱきと受け答えをして、注文を受けていく。

女給が下がるなり、すぐに食事が運ばれてきた。出来合いの料理を温めるだけのものらしく、全員は皿の前に運ばれた料理を飢えた狼の群れのように、がつがつと食べ始めた。

予感

茜は興奮した様子で、世之介と健史の対決の場を大袈裟な誇張を交え、話し出した。時々「ほひ」とか「ああー」とか聞き手の間から感嘆の声が上がった。

茜の描寫を聞くつか、世之介は自分が仕出かした顛末が、まるで英雄物語の一場面で、自分のこととは、とても思えなくなつた。

「それでねえ……世之介さんがびしづと健史の鼻つ柱を打つと、奴はびゅーんつ、といーんなに吹つ飛んで……血が、いーんなに……」

頬を真つ赤に紅潮せている茜に、世之介は肘を掴んで口を挟んだ。

「あのひ、茜さん。ちょっと大袈裟なんじゃないでしょうか？　あたしは、そんな力持ちじや御座いませんよ」

茜は「はつ」と息を吐き出した。

「いいじやない！　あたし、本物の喧嘩を見たの、初めてなんだもんー！」

「えらいつ！　さすが本物の【バンチョウ】だつ！　自分の手柄を誇らないなんて、実に見上げたもんだ！」

ぱしつ、と自分の膝を叩き、茜の父親が叫んだ。隣で母親も「うんうん」と相槌を打つている。

世之介は全員の顔を見渡した。

眞、憧憬の眼差しで世之介の顔を熱っぽく見詰めている。たかが喧嘩をしただけで、これほどの尊敬を受けるとは、思いがけないとである。

「これは腕つ節がものを言つ世界なんだ。

世之介としては、一刻も早くこんな世界から逃げ出し、もとの大江戸へ戻りたくなっていた。

偶然とはいえ、喧嘩に勝利したことを、世之介は全く誇るべきことだとは思えなかつたのである。逆にこれから、ひどい厄介」とが持ち上がりそうな予感を覚えていた。

食事が終わり、支払いは済みたのだからといって、茜はまるで頬着せず、堂々と外へ出て行った。

「あの、茜さん。支払いは？ もしかして、ツケですか？」

意外なことを聞く、といった表情で茜は世之介の顔を見詰めた。

「支払いって何？」

茜は大真面目で尋ねている。世之介はイッパチと顔を見合せた。

「そのう、お金の」とですよ。「こんなに飲み食いしてタダとは思えませんが」

茜は首を捻っていた。世之介の言葉が、一言も理解できていないらしく。

「お金？ 支払い？ だって、この食堂は、つちのものなのよ。そんなの、したこと一度もないわ！」

世之介は驚いた。

「や、それじゃ、あなたがたの乗り物は？ 着る物は、どうなんですか？ それに、住むところの家賃は？」

茜はゆっくり首を振った。

「知らない。欲しい物があれば取りにいくし、新しい一輪車が欲しければ、言えばくれるもん！ お金って、何のこと？」

「うーむ……」

唸り声に振り向くと、光右衛門が眉を寄せ、難しい顔つきになつ

てこる。

「もし西さんの話のことが本当なら、これは由々しき事態ですね！この星では、まともな経済活動が行われていない、ということになります。総てが無料だとすると、その代償は、はて、何なのでしょつか？」

光右衛門は、じつと西を見詰めていた。

兄

食事が終わり、茜は一同を【集会所】の空き部屋へ案内した。時刻は夕方近く。太陽は地平線に傾き、夕日が差し込んでくる。

番長星の夕日は、地球と違い、琥珀色をしていた。空は珈琲色に霞み、黄土色の雲が掛かっている。

「こじは兄ちゃんの部屋だつたんだけど、今は留守なの。もう、半年くらい家を出て、行方不明もいいところだから、あんたら勝手に使つてもいいわよ」

部屋を見回した世之介は、床が板張りで、畳ではないことに気付いた。壁は漆喰で、和風ではない。全体に殺風景で、ベッド家具は洋式寝台と、あちこち放り出されている鉄亜鈴、芭^{バーベル}亜鈴、^{ヒキスパンダー}発条鍛錬器、^ル室^{ーム・ランナ}内走行器などが部屋の持ち主の性格を現している。

「お兄さんが、いたんですね？」

世之介の質問に、茜は頷き、壁にベタベタと貼られている写真を指さした。

「そ、あれが兄ちゃんの、一番新しい写真なんだ」

指さされた写真をしげしげと覗きこんだ世之介は、それが奥行きのない、完全な一次元の映像であることに気付いた。しかも静止画である。

今どき、こんな古めかしい画像は珍しい。番長星では、立体動画記録は一般的ではないのだろうか？

写真には、茜と肩を並べ……いや、男のほうが遙かに背が高く、茜より頭一つ分は飛びぬけている。身長はおおじく、六尺……いや、六尺五寸はあるだらう。古めかしい学生服で、ぼろぼろの帽子を被つている。

顔には満面の笑みを浮かべているが、あらゆる箇所に古い傷跡が走っている。顎が張り出し、首はひどく太く、身体つきは格乃進と比べても遜色ないほど逞しい。隣に全身を写したものがあつて、足下は歯の高い下駄を履いている。写真の男が、茜の兄である。

「お兄さんの名前は？」

「勝又勝^{かわゆ}」

答えて、茜は「ふう」と吹き出した。

「おかしな名前でしょ。かつまたかつ、って読めるから、兄貴はひどく氣に入っているの。俺は誰にも負けない最強の【バンチョウ】になるつて宣言して、家を飛び出したの。今頃、どこで何しているか。まあ、兄貴のことだから、滅多なことじや、くたばるタマじやないけどね」

茜は一息に喋り終わると「じゃあね、後で皆の分の布団を持つてくれるが、ひー」と手を振って、部屋を出て行った。

あとに残された世之介たちは、無言でお互いの顔を見合せた。

「やれやれ、少し疲れましたな」

光右衛門が呟き、部屋の窓際に置かれた巨大な寝台に腰を掛けた

「格さん。ちょっと尋ねますが」

ぱつり、と光右衛門が呟く。格乃進はさっと前へ出ると、光右衛門の前に膝まづいた。

「何でしよう、ご隠居様」

「うむ」と一声上げ、光右衛門は何か考え込んでいるらしく、腕組みをしている。やがて眉を上げ、きらりと目を光らせた。

「格さん。あの船室で番長星を探したとき、記録に何か別の資料なり、追記なりを見ませんでしたかな。単に番長星の、位置だけが記録されておったのですか？」

格乃進は、肩に担いだ振り分け荷物を解き始めた。

「実は、船室の記録ですが、万一件を考えて、複写複写を取つておきました」

格乃進の答えを耳にして、光右衛門は嬉しそうに破顔した。

「でかした！ それでこそ格さんです！」

格乃進は荷物から、携帯型の立体映像投影装置を取り出す。手の平に収まるほど小型であるが、機能は充分で、格乃進が操作すると部屋の中央に立体的な星図が投影される。

「」これが番長星の主星です。主系列のK型に属し、表面温度は四千度。地球に比べ、やや小型で……」

滔々と並べ立てる格乃進を、光右衛門は慌てて制止した。

「格さん。講義は後にじて、まずは番長星のことを教えてくれませんかな」

格乃進は「はっ」と顔を赤らめた。「賽博格でも、顔が赤くなるんだ」と世之介は妙なところに感心した。

「申し訳ありません。それでは、これが番長星で御座います。星図には概略のみしか記載されておりませぬが、一つ妙な追記が……」

番長星を示す印に、光右衛門は身を乗り出した。

「これは……銀河遺産を示す印です！ 成る程、これで得心しましてぞ！」

「銀河胃酸？ そりや、どんな胃の薬でげす？」

イッパチが頓珍漢な質問をする。

光右衛門は「むつ」となつて答える。

「胃酸の薬ではありません！ 銀河の遺産なのです！ 何です、不真面目な……」

光右衛門の怒りに触れ、イッパチは「うへつ」と首を竦める。光右衛門は息を整えると、再び説明を始めた。

「初期の殖民星の中には、奇妙な風習、文化を保持した星があつて、幕府はそれらの特殊な殖民星の文化を守るため、銀河遺産を制定しました。独特的の文化を保持するため、観光客などの立ち入りを禁止しました。この番長星が銀河遺産なら、我らの救難信号に答えなかつたのも理解できます。銀河遺産に指定された殖民星には、正式な代官所、奉行所は設立されておりませんからな」

世之介は、沈み込むよつた絶望感を味わつた。

「そ、それでは、わたしたちは、一生この番長星に囚われたまま、地球に戻ることは叶わないのでしょうか？」

世之介の必死の訴えに、光右衛門は首を振つた。

「諦めてはいけません！ 確かに幕府の手が及んでいないことは認めます。それでも、保護されていることは確かです。恐らく、無人の監視所か、地球への非常通信手段は確保されていると思っても良

いでしょう。だが、それがビームあるか……」

光右衛門の言葉が途切れると、扉を叩く音がした。光右衛門が「お入りなさい」と返事をすると、扉が勢い良く開き、茜の顔が覗いた。

「お布団、持つてきたわよ。狭いけど、今夜はこの部屋に泊まって頂戴。明日になれば、皆の部屋を用意するから」

茜の背後から、布団を抱えた両親がにこにこした人の良い笑顔を見せて いる。

光右衛門は深々と頭を下げ、口を開いた。

「それは丁寧に痛み入ります。それはそれとして、茜さん。一寸、あなたに尋ねたいことがあるのですが、宜しいかな？」

茜は「へえ？」と呴くと、部屋に入ってきて光右衛門の前に立つかりと座り込んだ。正座ではなく、胡坐である。

世之介は、もしにこじが地球だつたら、茜のよつた仕草をする女の子は、とつぐに説教されている場面だなと思った。

光右衛門の隣に膝をついて控えていた助三郎が何か言いたげに微かに口を動かしたが、それでも我慢して、ぐつと堪えている。

「何が聞きたいの？ 光右衛門さん」

光右衛門は穏やかに茜に尋ねた。

「地球のことを知つておりますか？」
「地球……？」

呴き、茜は首を捻つた。茜の表情は、光右衛門の口にした「地球」という言葉に何の反応もないものだった。茜は「分かんない」と呴くと、首を振る。

その時、布団を運び入れた茜の両親が、もじもじして立つてゐるのに世之介は気付いた。

「あのウ……」と父親が口を開く。

光右衛門の視線が茜の父親に向けられた。

「何か、ご存知なのですか？」

茜の父親はぺこりと頭を下げた。

「はい。昔々のこととで、何でも番長星にやつてきた最初の人たちは、地球から運ばれたそうです。何百年も前の話だそうですが、それ以来、我々は地球と連絡が途切れ、今では昔話になってしまいました。若い者の中には、地球という言葉すら知らない連中もあります。中には、地球といふのは、ただの伝説だと主張する者もいるくらいで……」

光右衛門は高らかに笑い声を上げた。

「はつはつはつはつ……。伝説ではありますよ。わしらは、その地球からやつて来たのですから」

「ほおーっ！」と茜の両親は感嘆の声を上げ、床に仲良く座り込んだ。光右衛門は、誰にともなく、話し掛ける。

「番長星にやつて来たのは、不時着したからです。ですから、何とかして、わしらは地球へと戻りたい。それには、地球と連絡の取れる場所に行きたいのです。何か、あなたがたで、それについてのお知恵があれば、拝借したいのですが」

茜と両親は顔を見合せた。両親はしきりに首を捻つてい。茜は何かを思い出しきつとするよつて、視線を天井にさ迷わせた。

「ウラバン……」

西さんと、姉妹。西の妹めい、西親はめいへつと身体を強張りせた。

憧れ

「茜！ それは……」

父親が言いかけ、口を噤む。

光右衛門は目を鋭くさせた。

「ウラバンと仰いましたな。それは何のことです？」

両親は黙り込み、顔を俯かせる。光右衛門は茜に向き直った。

「茜さん、聞かせて貰えんでしょうか？」

茜は一つ、頷いた。目が真剣である。

「ウラバンってのは、この番長星にいる総ての【バンチヨウ】を取り仕切つているの。でも、誰も姿を見たことはなくて、裏から支配するから…ウラバン？って、言つようになつたの。ウラバンは、番長星の？暴走半島？のド真ん中にある、【シッパリ・ランド】にいるって噂よ。その【シッパリ・ランド】には、時々空から光るもののが降りてくるって話なの。それが地球からの連絡なのか、どうなかは、知らないけど」

光右衛門は大きく頷いた。

「空から降りてくるものがある、とは聞き捨てなりませんな！ どう思います、助さん、格さん？」

供の一人に向けて尋ねると、助三郎、格乃進ともに頷いた。

「（）隠居様、これは一つの手懸りですぞ！ 是非とも、茜さんの仰る【シッパリ・ランド】に出掛けるべきです…」

格乃進が力強く答える。

「拙者……こえ、わたくしも、そつ思ひます」
助三郎も同意した。

世之介は助三郎がうつかり「拙者」と言いかけ、慌てて言い直したのを奇妙に思った。

しかしすぐ、地球への帰還に希望が出てきたことに、不審の思いは忘れてしまった。

「【ツッパリ・ランド】って、どんな場所なんですか？」

世之介の質問に、茜はにっこりと笑った。

「ツッパリだつたら、一度は【ツッパリ・ランド】の門を潜りたいと思つてゐるよ！ 何しろ、そこには根性の入つたツッパリたちがウソウソこゝりつて話だよー。」

茜の瞳はキラキラと輝いている。

ツッパリたちの憧れの場所……。

世之介は茜の言つよつて、素晴らしい場所だとは、とてもじやないが、思えなかつた。

夕焼けの中、世之介が立っている。周囲には誰もおりず、世之介は一本の棒を持ち、素振りを繰り返していた。

ぶんつ！

木の棒が唸りを上げ、空を切る。世之介は両手でしっかりと握りしめ、渾身の力を込めて振り下ろす。

ただ振り下ろすだけでは駄目だ。振り下ろした棒を、ぴたりと静止できなければ、修行とは言えない。

中等、高等学問所の六年間、世之介は剣術の修行を続けていた。真夏の暑い日盛りも、真冬の厳寒の日々も、修行は一日も欠かさなかつた。

番長星では腕つ節がものを言つことをつくづく思い知らされ、世之介は学問所を卒業してから怠つていた修行を、再開する決意を固めたのである。

振り下ろすうち、「世之介の全身に汗が噴き出し、蟻谷から滴つた汗は顎からぽたぽたと垂れている。

「お見事！」の声に振り向くと、助三郎が立っていた。

軽く腕を組み、面白そうな表情を浮かべている。

「いい素振りだな。よくよく修行を重ねたと見える。良い心がけだ」
誉められ、世之介は頭を搔いた。

「いや……お恥ずかしい限りです

助三郎は一步前へ出、傍らの茂みから小枝を一本抜きと面を立て、折り取った。

「一、「手合わせをして進むよつか?」

「助三郎さん?」

世之介の驚きの声に、助三郎は一つ頷いた。手に持った小枝を片手で構える。

「まあ、どうからでも懸かってきなさい

「ヤーヤ笑いを浮かべて。手に持っているのは、ちっぽけな小枝一本。箸ほど細さで、長さもそれくらいだ。

世之介は少し腹を立てた。助三郎はからかっているに違いない。あんな、小枝一本で、勝負になると思っているのだろうか?

ようし、それなら……。

世之介は棒を正眼に構えた。気合が高まるのを待つ。

「いやーつー

高く叫ぶと、世之介は棒を握りしめ、真っ向微塵に振り下ろした。

と、助三郎の姿が世之介の視界から消えた。

はつ、と世之介の動きが止まる。

いつの間にか、助三郎は世之介の握った木の棒の先端に、さつきの小枝を押し当てている。

ただ、それだけなのに、世之介は自分の木の棒を持ち上げられなかつた。軽く小枝が押し当てられているだけなのに、びくとも動かない。

世之介は、さつと棒の先端を下げた。つい、と助三郎の小枝も従いてくる。横に払うと、助三郎の小枝はぴつたりと寄り添い、どうにも振り払うことができない。

焦りに、世之介の息が荒くなる。

助三郎がさつと棒から小枝を離すと、先端を世之介の首元に押し当てる。

「真剣なら、勝負あつた、だな」

世之介はせいぜいと喘ぎ、恨みがましい声を上げた。

「ずるい……ですよ。助さんは、サイボーグ賛博格じやないか！ 人間のあたしが、敵うはずない！」

「そうかな」

助三郎はぽい、と小枝を投げ棄てた。

「確かに、俺は賽博格さ。人間にはできない、色々な能力があることは否定しない。だが、剣術の基本は同じだ。要は、体捌きつてやつて。無駄な動きをなくし、相手との間合いを常に把握する。これが大事なんだ。お前さんだつて、六年間、必死に修行したんだ。それは、きっと身に染み付いていると思う。それを思い出せ！」

助三郎の言葉は胸に落ちた。

その時、背後から茜の声が掛かる。

「風呂に行くよ！ 汗を流しな！」

世之介は振り返った。夕日の中に、茜とイッパチが立っている。茜はにやつ、と笑いかけた。

世之介は茜の言葉を鸚鵡返した。

「風呂？」

風呂だつて？

番長星の風呂とは、いったい……？

番長星で風呂といえば、それは銭湯だつた。

【集会所】の近くに、銭湯の建物はあつた。どつしりとした瓦屋根、高々と空を突き刺す煙突。【集会所】からは、住人が各自洗面器と入浴道具を携え、続々と集まつてくる。

助三郎と格乃進の姿はなかつた。茜と連れ立つてやつてきた光右衛門の話によると、賽博格は入浴の必要がないのだそうだ。

それに、賽博格の身体を他人に見せるのは、かなり厄介な事態を引き起こすとかで、二人は遠慮したのであつた。

イッパチは相変わらず扇子を一本握り、ペчинと自分の額を叩く。

「そんなもんですかねえ？ あつしゃ アンドロイド杏葡萄組偉童でげすが、別に、裸を他人に見せるのは恥ずかしくは「ハ」やんせんよ」

イッパチの言葉に、茜は眉間に皺を寄せる。

「あたしだつて、別に見たかないよ！」

「へつ、これはじ挨拶……」

イッパチは、ギョロツと目を剥き出した。

番台で世之介はイッパチ、光右衛門とともに男湯に入る。男湯には【集会所】からの客が一斉に湯口に向かって、身体を洗つていた。

世之介は銭湯は初めてで、どつにも決まりが悪い。早々に身体を洗うと、湯船に浸かることにした。イッパチは嬉々として三助の役目を買って出て、湯口に向かっている男たちの背中を威勢良く流し

ている。

湯船に浸かり、じつと皿を開じていると、イッパチが入ってきて横に並んだ。

「若旦那、ちょっとお話を……」「なんだい？」

世之介は用心して皿を開けた。イッパチの顔はいやに深刻で、こんなとおり、とんでもないことを言い出す傾向がある。

「番長星に来るとおり、確か格さんは通常空間を亜光速で航行した、と仰いましたね？」

「うん」

世之介は湯の中で、ぐるりとイッパチに向き直った。

イッパチの口調は、いつものふざけたものではなかつた。何を言い出そうとしているのか。

「確か半年を亜光速で航行した、と言つてこましたから、あれからあつしらは、半年も経つてしまつて、どうでござすな？」

「ああ、そうなるな」

「よいよイッパチの顔つきは真剣である。

「お忘れですか？ 大旦那は、一年以内に童貞を捨てると仰つたんで。もう、半年が過ぎております。あと半年しか余裕はないんですねー。」

「ああひー。」

世之介は小さく声を上げた。そつだ、イッパチの言葉はもつともだ。イッパチは湯の中で顔を怖いほど真剣にさせ、言葉を重ねた。

「どうすんですよ、若田那。こんな星で懸図懸図してこちや、大旦那の仰つた廃嫡、勘当が、本当の話になつてしまひこまわあー。尼孫星に行けなくなつた今、なんとか番長星の女の子と、ナニしないと……」

「ナニしないとつて、何のことだい？」

世之介の頭に血が昇つた。心臓がどくん、どくん鼓動を早め、血管に血流がぐわん、ぐわんと流れるのを感じる。

イッパチは世之介の耳に口を近づけた。

「とほけぢやいけませんー。若田那だつて一切、承知でげしょ？あの茜さんつて娘は、どうなんでげす？ 若田那が【バンチヨウ】つてことになつて、茜さんびつやら若田那にホの字らしこでげすよ」

ぶくぶくと世之介は湯の中に顔を沈めた。今の顔色を、誰にも見られたくない！ 今の世之介の顔色は、多分、真っ赤を通り越して猩々緋か、あるいは、どす黒く鬱血になつているだろう。

イッパチは、おつかぶせる。

「若田那！ 男になるんですー。あつしは一肌、脱ぎますぜー。」

「お前が？ どうやって？」

世之介は「ふはっ！」と息を吐き出し、顔を湯から上げる。イッパチは心得顔になつて一人頷き、にやつと笑つた。

「任せておくんなせえ！ もうと、若田那が茜をさとナードめるよにしますから！」

ぽん、と胸を叩くと、イッパチはその場を離れていった。

茜とナードする？
ナード、つまり……。

「世之介さん……」

わあん、と反響した茜の声が、女湯から聞こえてくる。

「あらそろ上がるわよおー！」

向こうに茜がいる……。女湯にいる、といつゝとま、つまり何も着ていないとこいつことだ！ 要するに裸だといつゝことだ。

茜が裸で……！

「世之介さん、茜さんの仰るとおり、そらそろ上がるがつましょうか？ あんまり長いと、湯当たりしますぞ」

光右衛門がわいぱりした顔つきになつて、声を掛けてくる。

世之介は湯から上がれなくなつてしまつた自分に気が付いていた。

騒音

わんわんと耳を劈く騒音に、世之介はぱちりと目を開いた。

がば！ と寝床から起き上がり、窓の外を眺める。窓からは番長星の主星が投げかける董色の朝の光が眩しく室内に差し込んでいた。

「なんですかな……まるで野犬の吠えるかの」とき、騒音ですが

光右衛門が不機嫌そうな顔つきで寝台から起き上がる。供の助三郎と格乃進は、すでに起きていて、窓の側に油断なく身構えている。

「……？」

世之介は記憶の混乱に、一瞬はつと困惑。

「あ～あ……、朝飯は、まだなんですかい？」

隣でイッパチが呑氣そうな声を上げた。イッパチの顔を見て、世之介は「ああそうか、茜の兄の、勝の部屋だ」と自分のいる場所を確認する。

あれから世之介は湯船で逆上せ、引っくり返り、素つ裸のままイッパチに抱き上げられて部屋へと戻つたのだった。

その時の情景を思い出し、世之介は一人で顔を火照らせた。当然、目を回しているから、完全に裸で、その裸を茜に目撃されている。

「朝飯どじりではありませんぞつ！」

光右衛門は鋭い声を上げた。窓の外を眺めていた格乃進は緊張した表情を浮かべる。

「「」隠居様、無数の一輪車が見えます。その他に四輪の車も数台ほど混ざっています。どうやら、周りを取り囲んでいる様子です」

世之介は立ち上がり、格乃進の側へ近寄った。一同がいる部屋は一階にあり、道路に面している。その道路を、無数の一輪車、四輪車が埋め尽していった。

一輪車、四輪車は壮んに動力機関を全開にして、辺り構わぬ騒音エノシノを撒き散らしている。

時々「ぱぱぱ・ぱぱぱぱぱ・ぱぱ・ぱぱぱ・」と聞こえる、奇妙な音階の音が混じる。後で聞いたところによると「名付親愛情曲《「シド・ファー・ザ・愛のテーマ》」といふ、シッパリにはお馴染みの音楽だそうだ。

一輪車の操縦者の一人に、世之介は見覚えがあつた。

つるつるに剃り上げた、鬼灯のよくな頭。すこぶる陰険な目付き。そうだ、あれは最初に世之介に喧嘩を吹っかけた、健史である。健史は一輪車を止めると、例の甲高いガラガラ声を張り上げた。聞いていると、苛々していく耳障りな聲音である。

「オカマ野郎！ 出てきやがれ！ こりあ、卑怯者……」

世之介はイッパチに尋ねた。

「オカマ野郎つて、何だろ？ 昨日も、あいつは同じ言葉を言つていたけど」

イッパチは頷いた。

「もしかして、陰間のことじやねえですかねえ……」

世之介はイッパチの推測を耳にして、「ははあ」と感心した。

しかしすぐ、じわじわと怒りが込み上る。自分をあんな、ナヨナヨした連中と一緒にされてたまるか！

「どんどん！ と扉が外から叩かれ、一同はきよつと硬直した。

「世之介さん！ 大変……健史が！」

扉から聞こえたのは、茜の叫び声だった。

ほつとなつて、世之介は大股で扉に近づき、開けようとすると、扉は固く閉じられ、びくとも動かない。

「いけない！ 」の扉は大江戸とは違い、？片観音開き？で、蝶番で開くんだった……。つい、慌てて横に滑らそうとしていた。

取つ手を掴み、開くと、茜の青ざめた顔が目に飛び込んでくる。

「見た？ 健史が乗り込んで来たわ！」

前置き抜きでいきなり喋り出す。世之介は頷いた。

「ああ、今度はだいぶ、お仲間を連れてきたようだね」

茜は両目をまん丸に見開き、世之介の顔を見上げている。恐怖に、

茜の瞳孔は、ぽっかりと開いていた。

「どうすんの？」

無言で、世之介は履物を突っかけると、外へ出た。そろそろトイッパチ、光右衛門、助三郎、格乃進らが従いてくる。【集会所】を回つて、表の道路へと向かう。

「おつー！」

姿を表した世之介を見て、健史が身構え、やや怯んだ表情になつた。が、すぐに自信たっぷりな態度に豹変する。

「出てきやがつたな、オカマ野郎！」

「そのオカマ野郎はやめませんか？ わたくしは、そのよつな趣味はありませんから」

世之介は穏やかに話し掛けた。だが、怒りが語尾を僅かに震わせる。

「けつ！」

健史は毒々しく舌打ちすると、背後を振り返った。

「風祭さん！ 出できやがりましたぜ！ あいつが偽者の【バンチヨウ】ですか！」

健史の背後には、真っ黒な塗装の、四輪車が停車していた。がちやりと扉が開かれ、むくむくと内部から一人の人物が姿を表した。

出てきた人物を一目見て、世之介は驚きに口をあんぐりと開いて見上げる。

大きい。

いつたい、あの四輪車のどこにびひつやつて納まっていたのかと思われるほどの、途方もない巨躯が白田の下に曝されている。身長は六尺……いや七尺はある。体重も五十貫はありそうだ。薄汚れた学生服に、学帽を田深に被り、のつそりと立っている。

「おめえが【バンチョウ】だと？」

洞窟の奥から轟くような、低い、軋るような声が零れ出る。ぐい、と学帽の底を撥ね上げ、下から覗く瞳を光らせた。

男の視線を田の当たりにして、世之介はなぜか怖れを感じていた。なんと言つか、非人間的な冷酷さを内包した田の光である。

「おめえが【バンチョウ】なんかじゃ、あるもんかえ！」の驅り野郎！」

健史が憎々しく喚く。さつと田人を振り返り叫んだ。

「風祭さん！　この野郎に、本当の【バンチョウ】の恐ろしさを、たっぷり教えてやつてくださいよ！」

風祭と呼ばれた男は、重々しく頷いた。『んぐんとした声を上げ、ゆづくつと喋る。

「【バンチョウ】の称号は、ウラバン様だけが『えるものである！お前は勝手に【バンチョウ】と名乗っている。その罪は万死に値する！』

風祭の言葉は、単調で、何か背後からセリフをつけられているかのようだった。声には全く、感情というのが感じられない。ずしり、と風祭の足が一步、前に踏み出した。ぐっと腰を下りし、両手を蟹のように広げ、戦いの態勢をとる。

「世之介さん！ これ！」

ぱたぱたと慌しく茜が駆け寄り、一本の木刀を世之介に押しつけた。世之介は木刀を握りしめ、剣道の構えを取る。

一タリ……と、風祭が獲物を前にした狼の「」とく歯を剥き出して笑つた。ぎりり、と朝日に風祭の前歯が光る。

世之介は呆れた。

なんと、風祭の上下の歯は、総て白銀色に輝く義歯であった。鋼鉄製と思われる義歯に、ずらりと金剛石ダイヤモンドが輝いている。あの歯で噛みつくつもりか？

かちかちかち……。

細かな音が世之介の耳に聞こえている。

気がつくと、世之介は恐怖に震え、奥歯をかちかち噛み鳴らしていたのだった。全身に恐怖が走り、手にした木刀の先端が揺れていった。じつとりと背中に汗が滴るのを感じる。

「行くぞ！」

宣言して、風祭は猛然と世之介を目がけ、突進してくる。まるで闘牛の突撃だ！ 風祭の動きは、巨躯に似合わぬ素早いものだった。世之介は無我夢中で木刀を握りしめ、横に薙ぎ払った。

「がつん！」

異様な衝撃が世之介の手の平に伝わった。確かに風祭の胴を払ったはずなのに、まるで固い岩を殴ったような手応えを感じる。ぶわっ、と風祭の右手が世之介の肩に当たる。ただ一振りで、世

世之介の身体は宙に浮き、したたかに地面に叩きつけられていた。

たったそれだけで、世之介はじーん、と頭に霧が掛かつたようになり、視界が揺れる。一瞬、気絶していたのかもしれない。

「待て！」

その時、世之介の前に、助三郎と格乃進が立ちはだかつた。

「どいでいなわい。世之介さん。どうやらこいつは、あんたに手の負える相手ではなさそうだ」

助三郎が油断なく身構え、叫んだ。

「どうじうことですか？」

世之介の質問に、格乃進が咳く。

「あいつは人間じゃない！ 我らと同じ、サイボーグ 賽博格。 それも、戦闘用の殺人兵器だ！」

「 賽博格！ 風祭が賽博格だつて？」

世之介はよつやく、さきほどからの疑問が氷解するのを感じていた。さつきの木刀での手応えは、賽博格体ゆえのものだつたのか。風祭は、ぐりぐりと肩の関節を動かし、立ちはだかつた助三郎と格乃進を舐めるように睨みつけた。

「 そう言つ、お前らも賽博格らしいな……」

ぐつと腰を沈め、風祭は目を光らせる。実際、風祭の両目は、不気味な青白い光を放つていた。

「 ぶーん……。」

風祭の全身から、奇妙な甲高い機械音が聞こえてくる。ぶるぶるぶるつ、と風祭の全身が細かく震え出した。

世之介は木刀を杖にして立ち上がつた。

いつたい、何事が起ころうとしているのか。

助三郎と格乃進は顔を見合わせ、頷き合つた。その瞬間、二人の姿は世之介の眼前から一瞬にして焼き消えていた。

「 あつ！」

世之介は驚きに目を見開いた。

何と対峙しているはずの、風祭の姿も突然、消滅していた。

「 しゅつ！ しゅつ！」

空中を、何か切り裂くような音が聞こえてくる。

「何事ですか！」

側にいた光右衛門に尋ねる。光右衛門は、今の出来事を承知しているような表情を浮かべていた。

「助さん、格さんの一人が、加速状態に入ったのです。常人の、数倍から数十倍、恐らく数百倍の速度で動き回り、音速を超えた戦っているのです。そのため、わしらには、三人の姿を見ることは叶わないのでしょうか？」

音速の戦い

ごんつ！

音に顔を向けると、建物の角が爆発したように飛び散った所だつた。

ささつゝ、と立ち木の枝が揺れ、めきめきと音を立て幹が折れ曲がる。

「あんっ！」 という爆発音に似た音が響く。

多分音速を越えて動き回っているための衝撃波だ

響かせるのである。

ベージー、と四輪車の外板が凹み、ばあんっと一瞬にして窓硝子に

世之介の全身に、冷たい汗が流れる。こんな相手と、自分は戦おうとしていたのか！ 知らないこととはいえ、何て無茶だったのだ ろう。

三の前を 黒い影が何度も一瞬で通じすぎる。多分 どれかか助
三郎で、格乃進、風祭の三人なのだ。あまりに素早すぎ、網膜に像
を結ぶ暇がない。

「ぐわあああつ！」

魂消るような叫び声、いや、咆哮とも言える雄叫びが世之介の耳
朶を打つた。道路の真ん中を、巨大な何かが、路面をがつがつと音

を立て抉り取り、濛々とした土煙を立てる。

土埃が收まると、風祭の巨躯が、長々と大の字に寝そべっているのを認めた。その両側に、助三郎と格乃進の二人が立っている。

三人の身に纏っていた着物は、完全にぼろぼろに千切れ、僅かな布切れだけが纏いついている。超高速の動きに、ぼろぼろに千切れてしまったのだ。

さらに三人の身体からは、ぶすぶすと燐る白煙が立ち上っていた。音速を超える動きで、空気との摩擦熱が発火点を越えたのだ。

助三郎と格乃進の身体を見て、世之介は一人が風呂に入りたがらなかつた訳を、ようやく納得した。

顔と腕など、露出した部分はかるうじて、人間らしい人造皮膚で覆われているが、その他の部分はまさに戦闘用といっていい、ごつごつとした表面の、昆虫の甲羅のような素材で覆われている。恐らく、防弾、防熱素材でできているのだ。

その姿は、傀儡人ロボットといつても間違ひではない。

「ぐううううう！」

横たわる風祭は、必死になつて起き上がろうと藻掻いている。手の平を地面に支え、上体を起こそうとする。だが、そのたびにガクリ、ガクリと寝そべつてしまつ。

「無理に起き上がろうとしてはいけない。お前の制御装置を破壊した。新たな装置を入れ替えなければ、動けないぞ」

助三郎が横たわる風祭を見下ろし、痛ましげな表情になつて声を掛けた。見上げる風祭は、視線で助三郎を殺してしまいたいというような、物凄い形相になる。

「なぜだ……。なぜ、俺が負けた？　俺は最強の【バンチョウ】に生まれ変わったはずなのに！」

風祭が呻く。ぐいっ、と顔だけをネジ向けて叫ぶ。

「お前ら、何者だ？　ただの賽博格じゃないだろ？！」

「いいや」と格乃進が首を振つた。

「お前と同じ、賽博格だが、俺たちはこの身体になつてから長い。加速状態になつてからの戦い方も、慣れている。加速状態になつてからは、人間の脳は超高速の反応に対応でききれない。そのため、予備電子脳に交替させ、身体を制御するのだ。だが、充分な期間、行動を慣熟させていないと、その能力を発揮できない。お前は賽博格体になつてから、そう長くはないのだろ？！」

「ふつ」と風祭は苦く笑つた。頷く。

「そつぞ、ウラバン様にこの身体にして頂いたのだ……。【ツツパ
リ・ランド】でな。そこにいる健史が……」

ギヨロリと立ち竦んでいる健史を睨む。健史は風祭の視線に「ひ
つー」と小さく悲鳴を発し、飛び上がった。

「ここで新たな【バンチョウ】が出現した、と報告してきてな。そ
れで、ウラバン様が俺に調査するよう命じた。ウラバン様の任命さ
れない【バンチョウ】など、存在を許すわけにはいかん！」

世之介は、ぐっと風祭に近づき、声を掛ける。

「そのウラバンとは、何者です？ どうして、わたくしが【バンチヨウ】だといけないのです？」

風祭は嘲るような笑いを浮かべた。

「それが知りたければ【ツッパリ・ランド】に行くことだ！ ウラバン様とは、そこで会える。ウラバン様がお前を前にしたら、どうするか……。楽しみだ！」

光右衛門が厳しい顔つきになつて、その場にいた、健史の仲間に命令する。

「あなたがた！ さあ、何をしているのです。あなたがたのお仲間の風祭とか申す男が難儀しているのです。助けるのが人情ではありますか？ さつさと連れ帰りなさい！」

光右衛門の命令は威厳があり、咄嗟には逆らうことのできないほどの重みがあつた。

健史が連れてきた仲間たちは青ざめた顔を見合わせた。

ぎくしゃくした動きで恐る恐る風祭の周りに集まり、手に手を取つて、巨大な身体を持ち上げようとする。

が、風祭の身体は賽博格であるためか、よほど重く、びくともしない。助三郎と格乃進は歩み寄ると、風祭の脇に手を入れ、ひょいと持ち上げた。そのままずるずると引き摺つて、風祭が乗り込んでいた黒い車に運んでいく。

呆然と見送っていた健史は、世之介の視線に顔を真っ白にさせた。赤くなったり、白くなったり、忙しい男である。

世之介は怒りに燃えていた。

たかが喧嘩に強くなりたいだけの馬鹿な欲望で、自分の身体を賽博格にさせる、この番長星の人間の思慮のなさに、腹を立てていたのである。

かくかくと全身を震わせ、健史はよたよたと後ろに下がった。ぽたぽたと股間から黄色い液体が洩れている。

失禁しているのだ。

「お……お助けっ！」

悲鳴を上げると、転げるよつに自分の一輪車に跨った。じたばたと、みつともなく動力を入れ、後を見ることなく一散に逃げていく。

逃げ散つていく連中を前に、世之介は静かに【ツッパリ・ランド】を目指す覚悟を固めていた。

番長星の現状

朝食の席で、世之介は【ツツカリ・ラング】を口指すことを宣言した。

世之介の言葉に、一回ぎょっとした顔を上げ、まじまじと見つめてくる。イッパチは世之介の隣で、首を振つた。

「若旦那……。【ツツカリ・ラング】ってのは、あの風祭つてえ賽博格野郎が言つていたウラバンとやらがいる場所なんでげすよ。そんなどろくノコノコ自分から行くなんて、どうかしてらあ！ 飛んで火に入る夏の蟬蠅つてな仕儀になりやすぜ！」

光右衛門は用心深げな口調になり、話し掛けた。

「本気なのですか、世之介さん。どうやら【ツツカリ・ラング】とは相当に危ない場所のようですね。」

「本気です！」

世之介はキッパリと頷いた。茜を見て言葉を続けた。

「茜さんの話では【ツツカリ・ラング】に行けば、地球への連絡が叶いそうではありますか。わたくしは、何としても地球へ帰りたい！ 併せて、この番長星の現状を、地球の幕府へと訴えたいのです。このような無法が罷り通るのは、我慢できません」

「成る程……。判りました」

光右衛門は、世之介の決意に感心したように何度も頷いていた。

「わしも同じ考え方ですぞ。いくら銀河遺産とはいえ、この星の人間が哀れです」

光右衛門の言葉に、茜はポカンとした顔になつて尋ねてくる。

「何が哀れなの？　あたしたちが、どうして光右衛門さんに同情されるの？」

光右衛門は何度も首を振つた。

「それ、その言葉です。あなたがたは、自分たちがどんなに酷い状態にあるか、自覚すらしておらぬ……。茜さん、あなたは学問所へ通つた経験が御座いますかな？」

「学問所……」

茜はポツリと光右衛門の言葉を口の中で反芻していた。明らかに、てんで理解していない。

勉強

「昔は学校、と呼んでおりましたな。つまり、勉強をする場所です。どうです？ 茜さんは、今まで何かを学びましたか？」

「勿論よー。」

茜の頬が紅潮した。

「仁義の切り方や、舐められないようなガンの飛ばし方とか、二輪車の乗り方とか……。先輩に教えてもらつたわ！」

「やれやれ……」

光右衛門は嘆息した。

「やはり、そうでしたか。案じておつた通りです。人間として必要な学問は、この番長星では一切、学んではいなければ。『女大学』すら知らないのでしょうか？ あれは一人前の女性になる必読の書ですぞ！」

「だつて、そんなの知らなくても、構わないもん！」

茜は、かなり気分を害している様子だつた。腕を組み、眉を寄せ怒りの表情を浮かべている。

そんな茜を見て、世之介は光右衛門の『女大学』はともかく、番長星の人間が、もつとマトモな状態になるべきだと思っていた。少なくとも、喧嘩だけが価値の総てであるという現状は、断固として正さなければならぬと感じていた。

茜もきっと判つてくれる……。世之介は茜のためにも、銀河幕府にこの星の現状を通報しなければと思っていた。

「それで、どうせいつて【シッパリ・ラン】とやらへ出かねるので
しうつ?」

格乃進が口を挟んだ。

茜は機嫌を直し、ニンマリと笑みを浮かべた。

「それには、乗り物が必要ね。」

「乗り物?」

世々介たちは顔を見合わせた。茜は強く頷く。

「そうよ、まさか、テクテク歩いて行くつもりなんかじゃないでし
ょ? あんたたちの日指す【シッパリ・ラン】は、とーつても、
遠いんだから!」

店主

茜の案内したのは、新品の一輪車がずらりと並ぶ、店だった。

「一ノ口で気に入った一輪車があれば、すぐ使えるようにしてくれるわ！ どう、乗ってみたいのは、あります？」

快活に喋る茜に、世之介は正直かなり戸惑っていた。

助三郎と格乃進は、興味深そうに並べられた一輪車の細部を仔細に眺めている。一人の着衣は風祭との戦闘ですっかりボロボロになってしまい、今は番長星の人間の着衣を身につけている。イッパチはあまり興味がなさそうで、しきりと鼻糞をほじつて指で弾いて飛ばしたり、空を見上げたりしていた。

先程から、店の奥から「ぐわん！ ぐわん！ ぐわん！」と、何かを叩き付けるような、騒音が響いている。突然、騒音が「がきん！」と、金属製のものが折れるような音に変化した。同時に「ちやりーんっ！」と地面に転がる音がした。

「ちえっ！ やっちまつた……。おいつ！ 後で、直しておけよ！」と命令する声。声は中年の男のものだ。男の命令に「へえーー」と返事が聞こえる。

果然と世之介が店先でうわづらしていると、奥から中年の太った男が、胡散臭そうな目付きで現れる。三分、店主だ。店主の後に、古臭いデザインの傀儡人が従いてくる。これが、さつきの会話の主だろう。

が、店主は茜の顔を見て、嬉しそうな表情に変わった。

「いよひー、茜じやねえか！ どうしたい、また新しいのが欲しくなったのけ？」

「叔父さん。今日は、あたしじやなくて、この人たちがお密な。初めて一輪車に乗るのよー。だから、良いの選んであげて！」

「ほほお……」

店主は皿を丸くして、ഴ子しげと由之介たちの顔を見詰めた。

「あんたら、見たことない顔だなあ。どうから来たんだ？」

由之介は一寧にお辞儀をすると、口を開いた。

「わたくし、地球からまこりました、但馬世之介と申す者で御座います。今日は茜さんの紹介で、一輪車を求める」とになりましたので、どうぞ宜しくお願ひいたします」

店主はパクリと口を開け、仰け反るような姿勢になつた。

「ひやあー、よつともスラスラと、くつちやべるもんだつペー、おりや、一つ言も判んねえだべつちやー！」

なぜか店主は、茜とはガラリと口調を変えて話しあつた。まるでわざと田舎臭い口調を意識しているようだつた。

しきりと「だつペー」だとか「だつちやー」などを連発する。破裂音の多い言葉は聞き取りにくく、店主の顔には「どうだ、判らないだら」など「ひひ」とでも言いたそうな表情が浮かんでいる。

茜とそつき喋つていたときは、銀河標準語である現代日本語に近い言葉つきだつたのだが、世之介が話しあつた瞬間、がらりと豹変したのだ。

店主は、世之介の言葉は充分に理解できるし、喋れるのだが、それが何だか自分の恥であると固く思い込んでいふと見える。

茜は肩を竦めた。

「叔父さんー、この世之介さんは【バンチョウ】なのよー、そんな喋り方じや、失礼じやない？」

「【バンチョウ】ー」

店主は、さらに頗狂な声を上げた。

さつと赤らんだ顔が青ざめ、ぶるぶると全身が震えだす。

べたりと地面に座り込み、世え介の顔を見上げ身を揺るよつて声を上げた。

「す、すみません！ 知らないことはいえ、申し訳ねえ！ どうぞ、『」勘弁を！』

世え介は往生した。まつたくこの星の人間は、どうなつているのだ！ 店主は両手をべつたりと地面につけ、土下座の態勢である。「お手をお上げ下さい。わたくし、妙な成り行きで【バンチョウ】などと言われておりますが、ともかく一輪車を求めていただけの話ですから！」

「へえ？」

店主の顔色がもとに戻った。ひょい、と顔を上げると、わざと立ち上がる。あつという間の変わり身に、世え介は少々呆れた。

店主は生き生きとした顔色に戻り、一輪車を次々と揃えし、喋り出した。

「うちでは、あらゆる形式の一輪車が揃っていますよー。うちほ
オフロード・タイプ
荒地走行用で、あちに並んでいるのが、長距離走行シニア・タイプ用で、
どんな目的でお使いになられるん?」

店主の口調は、すっかり滑らかになっている。言葉は標準日本語に近く、やはうまい田舎ほほ口喋り方は、わざとだつたのだ。

茜が店主の質問に答えた。

「【シッパリ・ラン】に出かけるの」
店主は「さくつ」と身を強張らせる。
「まさか、本当にえ?」

茜が頷くと、店主は気味悪そつに世間の顔を見詰めた。

「あんた、だけかい?」
格乃進が一步、ずい、と前へ出で、一同を代表して答える。
「わたしたち、全員だ。だから、良いのを探してくれ」

「ふうん」と店主は顎を上げ、片手で胸元をこつこつと搔いた。それを先に立ち、先ほど長距離用と説明した一輪車の列に立つ。

「【シッパリ・タウン】は、途轍もなく遠いぜ。だから、この型の
一輪車にしなくちゃなー。といひで……」

不思議そつに光右衛門といッパチを見詰めた。

「そちらの一人も、運転するのかね？」

光右衛門は首を振つた。

「いえ、わしは、見ての通りの老いぼれ。ですから、助さんか、格さん後の後に乗らせて貰おうと思つております」

イッパチはぺちん、と額を扇子で叩いた。

「あつしゃ、フライヤー浮揚機の運転はでけますが、こんな地べたを走る車は、生憎と不調法でござんして、やつぱり若旦那の後に乗らせて貰いてえ！」

店主は首を振つた。

「二人乗りより、もつといいのがあるぜ。サイド・カー側車つてのがあるー！」

「成る程！ 店主の言葉は嘘ではありませんでしたな！ これは気持ちのいいものです」

光右衛門は上機嫌になつて、格乃進の運転する一輪車の横に装着された側車^{サイドカー}に乗り込み、風に髪を靡かせ、目を細めていた。助三郎の一輪車にも同じ側車が繋がれ、こつちはイツパチが陣取り、物珍しそうに地面すれすれの景観を楽しんでいる。

世之介は一人で一輪車の把手^{ハンドル}を握りしめ、目を一杯に見開いて、前方を見詰めている。全身に緊張が溢れ、今にも転ぶのではないかと、いう恐怖に慄いている。

世之介の隣の車線では、茜が自分の一輪車を運転して従つている。茜の一輪車は荒地走行用で、全体に軽快な形をしていた。

茜の提案で、まず【集会所】に戻り、旅支度を整えることにしていた。【集会所】に戻る前に、その辺をぐるりと散策し、一輪車の運転に慣れる目的で、わざと遠回りをしている。

今にも転ぶのではないか、という恐怖に、世之介は口の中がからからに乾き、関節が鳴るほど全身の筋肉を強張らせてくる。

だが、世之介は知らないが、転ぶ事態など絶対ありえないのだ。

世之介の乗つている一輪車は、見かけは一十世紀の旧式だが、中身は最新である。電子頭脳^{セクウェイ・システム}が制御する、自立走行機構が組み込まれた一輪車は、操縦者がどんな素人であろうが、無茶な運転をしようと、常に安定した走行を約束する。周囲の状況を把握し、事故が起

きをつになると寸前で回避し、的確な運転を保証する。

したがって、操縦者が眠つていてさえ、手が把手を握りしめる限り、道路上を安全に走行するのだ。把手から操縦者の手が離ると、自然と停止し、支柱が勝手に出て、路上で静止する。完全無欠の安全車なのである。

番長星の住民は、誰一人この絶対安全機構についての知識は持ち合わせていない。一度も一輪車や四輪車で事故を起こした経験がないので、全員「自分は運転が上手い」と錯覚しているのだ。

しかも、この星の一輪車は故障というのが、絶対にないのだ。機械の調子が悪くなると、一輪車に装備されている人工知能が自動的に修理を行うし、所々に設けられているサービス・ステーションでも傀儡人ロボットが整備をしてくれる。

手に入れた一輪車店でも、修理、改造などはすべて傀儡人がしてくれる。人間が必要とされる場面は、本当は何もない。

世之介が立ち寄った店で、何かの修理をしていたような音は、店主がハンマーでただ、ぶつ叩いていただけだ。

番長星に伝えられていた地球からの映像資料に、よく一輪車店が登場し、店主が一輪車の修理や改造をしている演技がある。それを見て、番長星の人間は、とにかく大きな音を立てて、ハンマーやバーチをぶつ叩けば良いのだと思いついたのだ。

当然、そんな真似をすれば一輪車はぶつ壊れるが、文句も何も言わぬ傀儡人たちが、黙々と修理してくれるのでやつていける。

本当の修理を学ぶのは、じっくりと根気の要る仕事だが、番長星ではとにかく、がさつで、粗雑、大雑把、粗暴が尊ばれる傾向にあり、壊れるほどぶつ叩くのが格好いいということになつているのだ。

それはともかく、ようやく【集会所】に到着した。

世之介は一輪車を停止させ、強張った指を無理矢理どうにか把手から引き剥がした。関節が白くなるほど握りしめていたので、まるで接着剤で貼り付けたように、手を開くことすら苦痛だった。

助三郎、格乃進は軽やかな動きで一輪車から地面に降り立つ。世之介は一人を羨ましく眺めた。一人とも、宇宙軍兵士としての経験があるため、どんな乗り物でも即座に乗りこなせるのだ。

「？美湯灰善？」^{ミヨンヒハウゼン}だつたら、旅支度が全部、何でも揃つよ！ さ、行こう！

茜が朗らかに声を掛けてくる。茜の目の色に、初めて一輪車に乗つて、ヘトヘトになつている初心者への軽い同情が浮かんでいるのを見て、世之介はむつり押し黙つたまま頷いた。

何だか知らないが、不機嫌である。

？美湯灰善？は【集会所】の真ん中に聳えている大規模量販店の名称である。丸い砲弾に跨つた西洋の貴族らしき男性が、にっこり笑い掛けている看板が掛かっている。

「ちょっと、世之介さん！ 何を怒つてんの？」

黙つたまま歩き出した世之介を、茜は慌てて追いかけてくる。イッパチが袂を指先で掴み、少し前屈みになつて、世之介の隣に並んだ。

「若田那！ セツシンケンしなくても……。初めて一輪車に乗つて怖かつたのは判りますがね。西さん、躰を曲げてまわあー。」

小声に囁くイッパチを、世之介はぐいと顔を上げ、睨みつけてやつた。

「怖くなんかないよつー。一回と書つなー。」

「くえ……」

世之介の叱責に、イッパチはひょいと首を竦めた。世之介は、とつと歩いて、量販店を手指す。

とにかく早急に旅支度を整えなくてはならないのだ。

? 美湯灰善? の店内は迷路のよつだつた。『タタタとあらゆる商品が堆く積まれて壁を作り、客を案内するはずの案内板は、むしろ迷わせるためにあるかのように思えた。しかも、意味不明の文句が、読みづらいう書体で書かれている。

「ねえ、世之介さん」

茜が慎重な口ぶりで話しかけてくる。世之介が振り返ると、ちょっと言い方を考えているのか、目を落ち着かなく彷徨わせた。

「着ているもの、変えるつもりは全然ないの?」

「これを、かい?」

世之介は自分の着物を揃んだ。茜は頷く。

「ええ。世之介さんは【バンチョウ】なんだから、それらしい格好をしたほうがいいと思うんだけどな」

「【バンチョウ】らしい格好?」

「そう」と頷くと、茜は店内の一角を指差した。

「例えば、あんなの……」

指差された方向には、様々な学生服の見本が展示されている。

大江戸にも、学生服を制服に定め、身につける学問所はあるから、世之介はそれ自体には戸惑いはなかった。だが、あまりにも番長星の学生服は、今まで見知ったものとは違っていた。

ひどく裾の長いのや、短くなっているもの（長ラン、短ランといふのだそうだ）、太いズボン（ドカン）、裾がぎゅっと絞られているもの（ボンタン）などの奇妙な形の学生服が飾られている。また、学生服の上着の裏地には、様々な刺繡が施され、思い切り派手な色合いのものもあった。

「いらっしゃい……」

掠れた女の声が聞こえた。声の方向を見ると、年齢二十代半ばと思われる、毒々しい化粧をした店員が乱雑に積み上がった商品の間をすり抜けるように近づいてくる。髪の毛は金色に染め、指先の爪は緑色に塗られていた。

「何か、お探しでしようか……」

店員の声は囁くようで、よく聞き取れなかつた。
イッパチがニタニタ笑いを浮かべ、大声で尋ねかける。

「火炎太鼓、なんてえのは、『ざんせんかい』？」

店員はそつけなく首を振つて答える。

「御座いません。他に……？」

茜は頷いた。

「うん！ この人に【バンチョウ】らしい格好をさせたいんだけど

茜の言葉に、女店員の唇の両端がきゅっと持ち上がり、微笑を作つた。しかし、目は笑つておらず、逆に爛々と光つてゐる。

「【バンチョウ】……この人が？」

ちよろりと唇の間から舌が覗き、舌舐めずりをする。

さつと世之介の全身を、上から下までじろじろと眺めている。頸に手をやり、何か考へてゐるのは世之介の寸法を目見当で測つているのだらう。

やがて大きく頷くと、片腕を挙げ、指先を招くように、くいきいと動かした。

「いらっしゃって下さ……」

相変わらず女店員の声は溜息が漏れるような、力が抜けた口調である。

世之介は女店員の声に誘われたよう、ふらふらと歩き出した。ちらりと背後を振り返ると、助三郎と格乃進、光右衛門たちは商品を熱心に見ているところで、世之介の動きには気付いていない。

どうしようか……と世之介は迷つたが、結局は声を掛けることもなく、女店員に誘われるまま歩き出す。

「?伝説のバンチョウ?について、何かお聞きになつていますか?」

店員は世之介の目の前の通路を、積み上がった商品の間にすり抜けながら歩いていく。

世之介、茜、イッパチの順で迷路のよつた店内をぞろぞろと連れ立つて歩いた。店員は何度か角を曲がったところで、前述の台詞を口にしたのだった。

「?伝説のバンチョウ?」

世之介が呟くと、茜が勢い込んで口を開いた。

「あたし、知つている!」の番長屋で最初に【バンチョウ】の称号を得た人よ!」

「そうです」と店員は、ちらりと世之介を振り返ると、一瞬、意味ありげな笑いを浮かべた。

「?伝説のバンチョウ?は番長屋を統合したあと、ある言葉を残しました……」

「それって……」

店員の言葉に、茜の声が高くなる。

世之介は段々、不安が高まつた。いったい、この店員は何を言わんとしているのか?

世之介を時折ちらちら振り返る女店員の面田は、やれやれと輝き、唇を舐め回す舌先の動きが激しくなつてくる。

とうとう女店員はくるりと振り向き、後ろ足になりながら、両手を高く差し上げる。

「？伝説のバンチョウ？は、こう言い残しました。『いつか、天空から番長星を救いに、真の【バンチョウ】がやつてくれる。』と」

ぴたり、と女店員の足取りが止まる。差し上げた両手を今度は世之介に向けた。手の指が内側に曲がり、猛禽類の爪のように何かを掴むようにしている。

「いま？伝説のバンチョウ？が予言した人が現れたのです！ そう！ あなたです！」

世之介の額にじつとじつと汗が噴き出る。店内は充分ぎんぎんに空調が効いていて、暑くなどないはずなのだ。なのに、なぜか、むつとくるような熱気を感じていた。

女店員は世之介に近々と顔を寄せ、大きく見開いた両目で世之介の両目を見詰める。女店員の黒々とした瞳に、世之介の怯えた表情が映っていた。

さつと女店員は、店内の一角を指差した。

「わたくしはここで、？伝説のバンチョウ？が予言したあなたを待っていたのです。？美湯灰善？の店長は、代々言い伝えを守り、待ち続けました。今、あなたが現れたのです！　さあ、あそこの扉を御覧なさい！」

いつの間にか世之介は、森閑とした店内の、どこか倉庫のようなところに連れ込まれている自分に気付いた。積み上がっていいる荷物は梱包が解かれる前の、段ボールのままで、静けさとともに、少し黴臭い匂いが混じっている。

荷物の隙間に、一枚の扉があった。相当に古びていて、取っ手の辺りには、赤茶色の錆がべつとり浮き出ている。

女店員は震える両手で、ガチャガチャと煩く鍵束を持ち出した。その中から、もつとも大きく、もつとも古びた一本の鍵を取り出した。店員はぐつと唾を飲み込み、鍵の先を扉の鍵穴にこじ入れる。ぐりつ、と女店員は力一杯、鍵を回した。

ガチャツ……と、鍵が開く音がする。

店員は両手を使って取つ手を引つ張り、扉を開く。ギイイイ、と軋み音とともに、扉が開かれた。開くと女店員は誇らしげに世之介を振り返る。

「これを御覧なさい！」

世之介は好奇心に駆られ、女店員の指示した扉の内部に顔を突き出した。

ガクラン

扉の内部はごく狭い部屋になつていて、こちらも外と同様、色んな荷物が梱包されたまま積み上がつてゐる。その真ん中に、一組のガクランが衣紋掛けに吊るされていた。

じきり……と、世之介の鼓動が跳ね上がる。

思わず世之介は目を見開き、我知らず目の前に吊るされてゐるガクランに近づいた。

ガクランの裾は長く、膝ほども達している。いわゆる「長ラン」と呼ばれる形式だ。襟は高く、肩はぐつと張り出している。もし身に着ければ、堂々とした姿になるであろうと思われる。

それより世之介の目を引いたのは、ガクランの布地の色だった。真つ赤である。

すなわち血潮の色。見ているだけで何か、胸の鼓動が高鳴りそうな、燃えるような赤。

世之介は目を離すことすらできなかつた。ただ、魅入られたように、じつと目の前のガクランを見詰めている。

背後から、女店員が囁いた。

「その者、赤き衣を纏いて、金色の野に降り立つべし……！」

「へえ！ それも、伝説でげすか？」

イッパチがまぜつかえすと、女店員は首を振つた。

「いいえ、今思いついたんです」

イッパチはズッコケた。

世之介は、女店員の囁きを無視して、そつと手を伸ばし、ガクランの布地に指を触れさせる。

その瞬間、突き刺されるようなある？意思？が、指先を通じ、世之介の脳裏に天啓のように閃いた。

「 我を纏え！

「 我は、そなたと共にある！

囁きは、まるで命令のようだった。ガクランの命令に、世之介は必死に抗つた。自制心を振り絞り、世之介は全身の力を込めて腕を引く。指先が離れ、先ほどの強烈なガクランの？意思？は去つた。はあはあと世之介は息を荒げていた。

「 これは、いつたい……」

言いかけたその時、イッパチが呆然と部屋の中を覗き込んでいる茜の背中を思い切り「どん！」と押し込んだ。

茜は「きやつ！」と叫んで、勢い良く世之介の胸に飛び込んでくる。

イッパチはそれを見て、扉を力一杯、閉めてしまった。

ガチャーン！ 虚ろな扉の閉まる音が部屋の中に響く。

そして 。

ガチャリ！ と外側から鍵が閉められる音が響いていた！

「 イッパチ！」

世之介は叫ぶと扉に取り付いた。ぐつと押すが、びくとも動かない。その時、世之介は扉の鍵は外側しか掛けられないことを思い出していた。

世々介と茜は、閉じ込められたのだ。

「イッパチ！ 何を考えているんだ？ 開けろ！ 今すぐ、『』を開けてくれ！」

世之介は鉄の扉を遮る「無」ガングン叩き、隙間に口を押し当てるよつとして喚いた。耳をぴつたり押し当て、外の気配を探る。

「若旦那……」

扉の向こうからイッパチの声が微かに聞こえてくる。分厚い鉄の板に遮られているため、はつきりとは聞こえない。世之介は唇を噛みしめ、苛立った気持ちを抑えて耳を澄ませる。

「若旦那……。西さんとそ」でナ」を……」

聞こえてきたイッパチの言葉に、つぐづぐ世之介は呆れ果てた。「イッパチ！ 何、馬鹿なことを考えているんだ。そんなこと、で起きる訳ないだろ？」

「くくく……、とイッパチの含み笑いが聞こえてくる。

「大丈夫……。イッパチ、全て心得てござんすよ……。西さんだつて、若旦那にはホの字だつてこたあ、承知してますあ……」

女店員の声が聞こえてきた。相変わらず掠れ、囁くよつなので、耳を澄ませないと聞こえない。

「いたい、どうした訳なんですか？」一人を閉じ込めたのは、なぜ？」

イッパチが何か答えている気配だが、恐らく耳の近くでコソコソ

囁いてこねりしご。口から出す声は、みんなきつ、聞こえない。

「ふふふふふ……」

女店員の笑い声が聞こえてくる。

「成る程、判りました。お一人のお邪魔は、野暮ですねえ……」

「さようでげす！ それじゃ、あっしらは当分 一時間ばかり、ここから離れて……」

「そうですね……。少し、一人きりにさせてあげますわ……」

「うふふふ……」「けけけけ……」と、イッパチと女店員の笑い交わす声が遠ざかる。

「馬鹿野郎！」

ぐわんっ！ と世之介は力一杯、扉を拳で叩きつけた。じーん、と手の平が痺れる。

「ね、どうなつちやつたの？ イッパチさん、何であたしたちを閉じ込めたの？」

茜の声に、世之介は振り向いた。茜は不安そうではあるが、割合と冷静な態度を保っている。

世之介は大きく息を吐き出す。

どうすべきか？

茜に、全部ぶちまけてしまおつか？
世之介は唇を湿し、茜に向き直った。

「実は、これには訳があるのです」

世之介は、そもそもの始まりから話し始めた。

言い訳

「信じられない。」

世々介の舌吐い、茜は開口一番、吐き捨てるよつて叫んだ。

「世々介さんとあたしが出会ったのは、一田前のことよ。それで、もつあたしたちが恋人同士？ 馬鹿じゃない？ そんなこと、本気で考えてるの？」

頬は赤らみ、田は一杯に見開き、怒りを抑えかねるかのよつて小部屋を歩き回る。

「あー。」と茜は鋭く世々介を睨みつけた。

「で、あんたは、じつなのよつ？」

今までの呼びかけの「世々介さん」が「あんた」に戻つている。世々介は、びくりと飛び上がった。

「あ、あたしですか……。あたしは、その、つまつ……」

かーつ、と頭に血が昇つて、くどいじと上井へ答へられない。」くつと唾を呑みこみ、言い訳を開始する。

「イッパチつて奴は、別名『早飲み込みのイッパチ』と呼ばれるほどで、自分でこうだと想い込むと、他人の意見なんかお構いなしなんです……。今回も同じことで……。まことに茜さんにはじ迷惑をお掛けして、汗顏のいたりです」

深々と頭を下げる。茜は「せひ」と息を吐き、じすんと勢い良く床に座り込んだ。頭を片手で支え、眉間に皺寄せる。ちらり、と世之介を見上げた。

「それで、世之介さん、どうなの？」

茜はぼそり、と呟くように声を掛けってきた。

「どう……とは、何がで御座いますか？」

「知らないつ！」

ふいっ、と横を向く。

なぜか世之介の顔に汗がダラダラと噴出した。異常に気まずい沈黙が流れる。

おのおのと部屋の中を見回す世之介の視線が、衣紋掛けに呑みされた？伝説のガクラン？に釘付けになった。

一旦、視線が留まると、もう動かせない。

世之介の視界一杯に、真っ赤なガクランが広がっている。じりじりと世之介は、一步、また一步とガクランに近づいていく。

そろそろと腕が上がり、指先がガクランに吸い寄せられた。

駄目だ！ 触つたりしたら、またあの？意思？に取り込まれる。必死に自分に言い聞かせるのだが、指先は磁力のようなガクランの吸引力に捉われ、何としても引き戻せない。

背後で茜が顔を擧げ、世之介の背中を見詰めている気配を感じている。

「世之介さん……」

茜も立ち上がった。

遂に世之介の指先がガクランの布地に触れた！

ガクランの意思

「我を纏え！ 我と共に戦いに臨め！」

強烈なガクランの？ 意思？ が世之介の脳裏に流れ込んでくる。ぐいっ、と世之介はガクランの布地を掴み、引き寄せた。ぐるり、とガクランが回転して、背中側が顕わになる。

世之介の両目を、目映い金色の光が覆つた。

小さく悲鳴を上げ、世之介は手を離す。

ガクランの背中には「男」の一文字が、燐然と輝く金色の刺繡で縫い取られていた。

「これは……何ですか？」

呆然と呟く世之介の背後から、茜がガクランを見詰めて答えた。

「これこそ？伝説のガクラン？！ 背中の『男』の縫い取りが証拠だわ！ 本当にあつたんだ……！」

振り返ると、茜の両目は感動のあまり、キラキラと輝いていた。もう、先ほどの一件など、完全に忘れ果てている。

茜の顔が、世之介の顔に触れそうになるほど近づいている。この接近遭遇に、世之介の心臓は爆発しそうに「ドッキドッキ」と早鐘のように打つていた。

ところが、茜のほうは、まるで無頓着といつてよく、目はガクランに吸い寄せられていた。

「ね、世之介さん。着てみてよ」

思わず世之介は茜の顔を見詰めた。

「わたくしが、ですか？」の学生服……いや、ガクランを身に着けると？」

茜は世之介を横目で見ると、強く頷いた。

「そうよ！ 世之介さんが本物の【バンチョウ】なら、着るべきだわ！ もう、誰にも、【バンチョウ】じゃないなんて、言わせることがなくなるわ！」

世之介は健史の「オカマ野郎」という悪罵を思い出した。他人から言われるには構わないが、茜もそう思つていいのではないかと考えるだけで、顔から火が出そうになる。

大きく息を吸い込むと、世之介はガクランの布地を強く握りしめる。

茜が慌てて声を掛ける。

「着替えるなら、あたし、後ろ向いているからね！」

もう、茜の言葉すら耳に入っこない。ぼんやりと意識はしているが、世之介の関心は、ただ田の前の？伝説のガクラン？だけに集中していた。

変身

袴を脱ぎ、ガクランのズボンに足を入れる。上着はそのままに、袖を通した。

無意識に上着の鉛を嵌めようと手が動いたが、ぴたりと止まった。何だか、このガクランで、鉛をせちゃんと留めるのは似合わないという判断が働いたのだ。

暫く、じっとしている。

轟きのように、ガクランの意思が世之介の脳裏に染み渡つてくる感覺に耐えた。

ガクランは世之介の潜在意識、体力、反応速度などあらゆる側面を調査している様子だった。そろそろとガクランの見えない触手が世之介の全てを探り回り、やがて何らかの結論に達したようであった。

「一」

いきなりの衝撃が世之介の全身を貫いた。まるで電流のよう、世之介は自分が変化していることを悟っていた。

今、自分は別の何かに造りかえられている！

恐怖はあったが、それは同時に甘美な感覺でもあった。世之介は叫んでいた。

筋肉が、骨格が、血管が変化していた。世之介の神経細胞が、あらたな配置に繋ぎ直されている。

之介の叫びは、赤ん坊の産声のようであつた。

「世之介さん！ どうしたのー！」
茜が叫んでいる。

ぐいっ、と世之介は茜を見詰めた。世之介の表情を見て、茜は身を強張らせた。

戦闘能力平均以下、脅威ではない。

世之介は一皿ちらつと見ただけで、茜の敵としての評価を下していた。世之介にとって、全てが自分に対しての脅威か、そうでないかという価値基準だけであった。今の世之介は、戦士の判断だけで全てを理解していた。

世之介は自分と、閉じ込めている鉄の扉に皿をやつた。

出し抜けに世之介の胸に、激しい怒りが湧き上がってくる。

自分は、自由である！

閉じ込められるのは我慢できない！

世之介の足が上がり、全身の力を込めて、扉に向けて蹴りを入れる。

ぐわんっ！

怖ろしい音を立て、鉄の扉の蝶番が吹き飛んだ。ばあん、と激しい音とともに、鉄の扉は前方に倒れ込む。

「何だ、今の音は？」

叫び声が聞こえる。

あれは助三郎の声だ。

積み上がった商品を搔き分け、助三郎が走り寄った。顔を上げた助三郎は、仰天した表情を浮かべる。

「世之介さん！ あんた……」

戦闘能力、平均以上。サイボーグ 賽博格と認められる。戦いには、非常手段が必要。

一瞬にして世之介は助三郎が強敵であると結論付けていた。

世之介はぐつと腰を沈め、戦いに身構えた。助三郎が自分に戦いを挑むかどうかは関係がない。ただ相手が強敵になるかどうかが肝心で、常に備えている。

今世之介は、戦いを欲していた。それは、ガクランの意思でもあつた。

世之介は全身の筋肉を引き絞るよう力を溜めると、一瞬にして放出させた。だつと足の裏が床を踏みしめ、世之介は頭を先に、一本の槍のように助三郎へと向けて飛び掛かる。

助三郎はポカンとした顔のまま、世之介の攻撃を受け止めていた。どんづ、と世之介の頭突きが、助三郎の胸に炸裂した。

だだだつ！ と助三郎の身体が後方に吹っ飛び、積み上げられた商品の山に突っ込んだ。雪崩のように商品が崩れ落ち、助三郎の全身体が埋まる。

がらがらと音を立て、助三郎は商品の山の中から這い出す。

驚きに、助三郎は呆然としていた。

「どうしたんだ、世之介さん？」

世之介は応えず、雄叫びを上げていた。

全身の細胞が、戦いの予感に喜悦を上げている。

戦いだ！

喧嘩だ！

これこそ、俺の生き甲斐！

世之介は宙に飛び上がり、更なる攻撃を助三郎に加えていた。

世之介の前蹴りが、助三郎の胸元で炸裂する。助三郎の身体は、世之介の前蹴りを受け止め、宙に浮いて、再び商品の山へと突っ込んだ。

商品の山を搔き分け這い出す助三郎の顔には、苦痛の色は欠片も見当たらない。 サイボーグ 賽博格の助三郎にとって、世之介の前蹴りなど何ほどでもなかつた。

しかし、重い、賽博格体の助三郎を、ただ一度の蹴りで吹き飛ばす威力は、只事ではない。助三郎の顔には、疑惑と同時に、信じられないものを見た驚愕に歪んでいた。

世之介は無言で素早く近づくと、肘を、手刀を、更には回し蹴りを、続けざまに叩き込む。

どれも必殺の気合が込められた、怖ろしいほどの威力を持つている。もしも助三郎が、ただの人間なら、ほとんど即死に近い攻撃であった。

ところが、助三郎には効果がない。助三郎は黙つて、世之介の攻撃を受け止めているだけである。

世之介はさつと一步、後ろに下がると、ふーつと大きく息を吐き出した。助三郎に加えた攻撃が、まるきり効いていない事実を確かめ、戦法を変えることにした。

さつと両手を横に広げる。

ガクランの袖が伸び、世之介の手首から先を包み込む。生地が見る見る変化し、世之介の手にぴったりと合つた手袋の形になる。

両足の足首から下が同じように包まれ、靴の形に変形する。

襟が広がり、世之介の顔を覆う。

ガクランの裏地から無数の纖維が伸びて、世之介の上半身を包み込む。

一瞬にして、ガクランは世之介の全身を纏つ鎧になっていた。これこそ、？伝説のガクラン？の秘密であった。

世之介は再び攻撃を開始した。

ぐわんっ！ と音を立て、世之介の拳が助三郎の顎を捉える。助三郎の顔は衝撃に横を向き、踏鞴を踏んだ。

ぶるつと助三郎は頭を振り、まるで眩暈に耐えているかのように、腰を沈ませ、踵に力を入れる。

世之介の拳が助三郎の顎を捉えた瞬間、物凄い衝撃が賽博格体の電子回路に、僅かではあるが、ダメージ打撃を与えたのだ。

助三郎の脣が引き締まった。

先ほどまでの、呆然とした、間抜け顔は拭い去ったように消え去り、代わりに現れたのは、熟練の戦士の厳しい表情であった。ようやく、世之介が侮りがたい強敵であったことを悟つたらしい。

「どうした、助三郎。物凄い音が聞こえたが。何かあつたのか？」

助三郎の背後から格乃進が現れる。

格乃進は、助三郎と対峙する世之介を認め、立ち竦んだ。

「あんた、世之介さん……どうづな？」

ガクランの襟が世之介の顔を半ば覆っているため、一瞬、誰か判らなかつたのだろう。助三郎は世之介を見詰めたまま、答えた。

「ああ、間違いなく世之介さんだ。だが、氣をつけろ！ 今の世之介さんは、普通じゃない！」

「何？」

尋ねかける格乃進に、世之介は猛然と突進した。一跳びで、格乃進に体当たりを食らわす。

爆発音に似た衝撃音が響き渡り、格乃進の身体は十間近く吹つ飛んだ。背後の壁にぶち当たると、格乃進の身体は壁に大きな罅割れを作つてめり込む。

格乃進は、ばらばらと壁の破片を飛び散らかせながら立ち上がる。格乃進の顔には呆然とした驚きが浮かんでいた。

助三郎は、さつと身構えた。

格乃進！ 加速しろつ！

助三郎は圧縮言語で格乃進に話し掛ける。賽博格同士が戦闘の間に使用する、高速言語である。

数分の一秒という一瞬の間に、言葉を圧縮して会話する。当然、超音波で、普通の人間には聞き取れない賽博格専用の会話方法である。

が、世之介には、はつきりと聞き取れていた。

なぜだ、助三郎？ 加速状態になる理由は？

格乃進が高速の会話で尋ねかける。

さつきの体当たりを受け止めたろう？ あんなの、普通の人間にできることか？

助三郎は、すでに加速状態に入っていた。その助三郎に対し、世之介は攻撃を加えている。

完全装甲された世之介の拳は、ほとんど砲弾の威力を秘めていた。固く握りしめられた拳が助三郎の身体にめり込んで、助三郎は衝撃に耐え切れず、後方に引っくり返った。

助三郎、大事無いか？

格乃進が心配そうな声を上げる。

心配するな。多少、応えるが、機能には異常はない。が、自分の賽博格体をあまり過信するな！

助三郎は立ち上がり、油断なく身構える。
格乃進は頷いた。

ああ、さつきの正拳突きは只事じやないな！ しかし、あれほどの打撃を与えて、世之介さんの身体には何もないのか？

判らん。世之介さんの着ている学生服が変化して、今こうして見ている鎧のような形になつた。多分、戦闘用の形態だろ？。

格乃進の口調に、憂慮が滲んだ。

どうする、助三郎。このまま世之介さんを好き勝手にさせておくのか？ 何があつたか知らないが、これは異常だ！

助三郎は頷く。

ああ、危険だ！ 僕たちだけじゃなく、世之介さんにとっても危険だと言える。何しろ、僕たち賽博格と互角に渡り合えるほどだからな。しかし、このままでは埒があかない。少し、お相手をしてみようじゃないか！

格乃進も賛同した。

そうだな。だが、あまり調子に乗るなよ。何しろ世之介さんは生身の人間だ。それを忘れるな！

判つている……！ だが、この店内では狭すぎる。何とか外へ誘い出そう！

よし！ 僕が出口を開ける！

格乃進は叫ぶと、一番外に近い壁に向かつて、まっしぐらに突き進んだ。格乃進は両手を水車のように回転させ、壁に向かつて機関銃のごとく拳を叩き込む。

一瞬にして壁の真ん中に無数の窪みが出現した。格乃進は足を上げ、賽博格の力を最大に解放して壁に大穴を開ける。

加速状態にあるため、壁が破壊される音は聞こえない。破片が空

中にゅうくりと漂つ中を、格乃進は外へと身体を投げ出す。それを見て、助三郎は世之介を誘い込むように後じかる。

助三郎の顔に、驚きが弾けた。

素早く格乃進を振り返り、声を掛ける。

格乃進、氣をつけろ！ 世之介さんは俺たち賽博格の速度に従いついているぞ！

何だとつ！

対応

助三郎と格乃進が、店の壁に穿たれた大穴から飛び出すと、世之介も追いかけ、跳躍する。

穴は、店の一階部分に空けられた。一人の賽博格は空中に飛び出すと、回転して足先から着地する。

世之介は壁を蹴つて加速し、前転して【集会所】前の駐車場に降り立つた。

賽博格たちは目配せしあつた。

格乃進がずい、と前に出ると、世之介の動きを止めるために両腕を横に広げた。

つつ、と助三郎が世之介の背後に回りこむ。無論、二人とも通常の人間の数倍から、数百倍もの速度で動き回る、加速状態にあつた。

普通の相手なら、充分に対応できる。が、世之介は助三郎の動きを目で追い、格乃進にも気を配つて身構えている。

格乃進の眉が顰められた。

どういうことだ？ 世之介さんが俺たちと同じ賽博格であるはずがない！ なのに、俺の動きを見切つているぞ。

あの真っ赤な学生服が、鍵を握つていてるに違いない！ 世之介さんの身体の熱分布を見ると、以前と違つた模様が現れている。

格乃進の口調に、決意がこもつた。

ひと並んで、してみよ！……。危険ではあるが、しかたない！

格乃進の言葉に、世之介は身構えた。明らかに自分たちの高速言語が世之介によって聞き取られていることを知り、格乃進の顔に真剣な表情が浮かんでいた。

軽く跳躍した格乃進は、空中で素早く前蹴りを繰り出し、世之介に殺到した。

世之介は僅かに仰け反り、格乃進の第一撃をすれすれで躊躇す。

しかし、格乃進のほうが加速状態での戦いには熟練している。空中で浮かび上がったまま、格乃進は前蹴りによつて慣性がついた身体をくるりと回転させた。

頭を下にした逆さまの態勢で拳を突き出し、世之介の胸に叩き込む。

普通なら世之介の全身の骨といつ骨は一本残らずへし折れ、内臓破裂の衝撃で即死しているはずであった。

格乃進の突きを受け止めた世之介は、手足を大きく広げた態勢で後方に吹き飛んだ。地面に横転して、「ぐぐぐ」と転がっていく。

格乃進は素じ顔をしている。自分の攻撃が、強すぎたかと懸念しているのだろう。

世之介は身体の回転が止まると、むくりと起き上がった。素早く体勢を整え、身構える。

歓喜に、世之介は吠えるように笑い声を上げる。格乃進の攻撃など、微塵も感じない！

格乃進は、あんぐりと口を開け、叫んだ。

信じられぬ！あれほどの衝撃を受け止め、しかも平氣の平左とは！

助三郎が声を掛ける。

先ほどの攻撃を解析したところだ。驚くべきことに、あの学

生服の生地は、お前の攻撃が当たつた瞬間、硬化したぞ！ おそらく、世之介さんのあの爆発的な力は、学生服が筋力を倍化させてい るに違いない。まさしく硬化装甲戦闘服と呼ぶべきだ。

格乃進は唇を噛みしめた。

う一む、どれほど打撃を加えれば良いのだ？俺たちの力を全力で攻撃するわけにはいかぬであろうが……。

助三郎は頭を振った。

格乃進！躊躇っている場合ではないぞ！どう考えても、世之介さんの今の状態は普通じゃない。戦いが長引けば、世之介さんの身体にどんな悪い影響が出るか、さっぱり判らん。早めに決着をつけるべきだ！

世之介の胸に、賽博格たちに対する軽蔑の念が湧き上がる。

奴ら、戦士としての適性は欠片も持ち合わせていない！戦いに必要なのは、躊躇いのない決意だというのに、奴らときたら、相手を傷つけてしまうかもしれない思いに、充分に戦うことすらできないのだ。

だが、自分は違う。

世之介は猛然と賽博格に向けて駆け出す。

が、つるりと地面で滑ってしまう。

なぜだ？何が自分の身に起きた？

世之介はガクランによつて加速状態にある。普段とは違つ、猛速度で動くことが可能な状態である。

が、その加速状態は通常とは違い、摩擦係数がひどく少なくなつ

ている。摩擦に必要な時間を経過させないためだ。充分、地面を把握しないと、まるで氷の上に立っているかのように、ツルツル滑ってしまうのだ。

助三郎と格乃進は、地面に身体を投げ出すようにすれすれに傾け、爪先を蹴り出して空中に飛び出す。これが加速状態での、最も効果的な動き方である。

助三郎と格乃進は、動けなくなっている世之介の周囲を、素早く旋回し始めた。

世之介は油断なく身構え、二人の変化を見守っている。

二人の賽博格は世之介を中心として、円を描くように動いている。その速度が徐々に速まつっていく。円を描く半径が縮まつっていく。

行くぞ、格乃進！

おう！

一人が素早く高速言語で叫び合ひ、急速に世之介に接近してくる。

ガクランで加速状態にあるとはい、世之介は生身の人間である。賽博格である助三郎と格乃進の加速状態との速度の差は、如何ともしがたい。

助三郎と格乃進は必殺の気合を込め、世之介の急所を攻撃し始めた。

世之介は一人の攻撃を、的確な動作で受け止める。一撃されれば、骨が折れ、筋肉が弾け飛ぶような打撃も、ガクランによつて防護される。

それでも、完全に防護されるわけではない。助三郎と格乃進の狙いは、単純な打撃だけにあるのではなかつた。狙いは世之介が生身の人間である、という前提にある。

世之介は、不意に自分が危地に陥つてゐることを悟つた。すでに自分は、賽博格たちの罠に陥つてゐるのだ！

怒りに駆られ、世之介は賽博格らの囮みを脱出するため、遮一無

一、突進を懸ける。

しかし、遅かった！

ぱくぱくと世之介は呼吸困難に口を開き、酸素を取り込もうと大きく呼吸する。

空気が足りない！

二人の賽博格が高速で動いたため、気流が突然の竜巻を作り出していたのである。竜巻の中心は気圧が下がり、酸素が少なくなっている。世之介はその中心にいたのだ。

世之介はがくり、と膝を地面についた。

ゆっくりと上体が倒れ掛かる。

気が遠くなり、世之介の加速状態が無くなり、通常の感覚が戻つてくる。

遠くで、爆発音に似た破壊の音が聞こえてくる。やつと格乃進がぶち壊した量販店の壁の破壊音が到達したのだ。

世之介は目を閉じた。

「世之介さんは、どうですか？ どこにも怪我は、ありませんか？」

皺枯れた、老人の声が聞こえてくる。光右衛門の声だ。光右衛門の質問に、格乃進の応える声が聞こえてくる。

「ええ。幸いなことに、多少の擦り傷はあるようですが、それ以上の怪我はないようです。まあ、無事でなによりです」

光右衛門の溜息が聞こえた。

「いつたい、何事があつたのですかな？ 突然、怖ろしいほどの音が聞こえたと思ったたら、格さん助さんの一人が消えてしまつて、壁には大穴が空いて、外の駐車場に世之介さんが倒れていた、というわけです。実際、肝を冷やしましたぞ」

助三郎の声が聞こえた。

「世之介さんが突然、人が変わつたようになつて、わたしどもに攻撃してきたのです。しかも、サイボーグ賽博格のわたしどもと同じくらいの攻撃力で……。止むを得ないことはいえ、加速状態になつて戦う羽目になつてしましました。あの場合、そうでもしなければ、世之介さんを止めることは全然できなかつたでしょ」

光右衛門の口調に、疑念が滲む。

「信じられませんな。世之介さんは、ただの人間でしょう。なぜ、

あなたがた賽博格と互角に戦えるのです。やはり、あの学生服に原因があるのですかな？」

世之介は起き上がつた。

イッパチの叫び声が聞こえる。

「若旦那が！ お田覚めでござりますー。」

ぱちぱちと瞬きして、世之介は辺りを見回した。どうやら茜の兄の、勝の部屋らしい。

勝の寝具に、世之介は寝かされていた。起き上がつた世之介に、イッパチが心配そうな顔を近づける。

「若旦那、大丈夫ですか？ どこか痛みますかね？」

世之介はぶるん、と顔を振った。無言であちこち、自分の身体を触つてみる。大丈夫、どこも痛まない。自分の身体を確かめるとき、世之介は？伝説のガクランがそのまま着せられていることに気付いた。

「ああ、どこも痛まねえよ！」

世之介の返事に、イッパチは「ぎくり」と身を強張らせた。イッパチの背後に光右衛門、助三郎、格乃進が座っている。茜は部屋の隅に両膝を抱えて座つていたが、世之介の返事を耳にして吃驚したように顔を上げた。

「なんでえ……。皆、知らない相手を見たような顔しゃがつて……。俺の顔に、何かついているのか？」

「い、いえ……」

イッパチは田を逸らした。

茜は立ち上がりた。

「世之介さん、本当に何ともないの？」

「当たり前だ！ ピンシャンしてるぜー。前より調子がいいくらいだ。本当にお前ら、どうかしてるぞ！ どうしたってんだ？」

光右衛門が目を光らせた。

「自分の変化に気がつかないのですな。世之介さん、あなたは、す

っかり変わってしまった……」

「俺が？」

世之介は指を挙げ、自分の顔を指差した。

茜がゆっくりと頷く。

ポケットから小さな手鏡を取り出し、世之介に押しつける。

「自分の顔を見てみなさいよ。あんた、本当に別人だわ！」

世之介は茜から手鏡を受け取り、開いた。
鏡面に自分の顔を映してみる。

「な、なんでえ、こりや！ 誰だ、こんな悪戯しやがったのは？」

大声で叫んだ。顔は元のままだが、頭髪がまるつきり変わっていた。

黒々とした頭髪は、なぜか金髪に変わり、底が張り出したリーゼント・スタイルになつていて。念入りにパー・マを当てた髪形は、番長星の住人とまったく同じであった。

「誰がやつたんだ……」

世之介の呟きに、全員が首を振った。茜が腕組みをして口を開いた。

「誰もやっていないわ。あんたがガクランを身につけた時、なぜか、

髪が勝手に金色に染まり、自然にその髪型になつたのよ」

世之介は手を上げ、自分の髪の毛に指を突っ込んだ。くしゃくしゃと猛然と髪の毛を乱す。

ところが、暫くすると、じわじわと髪の毛は元に戻つて、リーゼントになつてしまつ。

「どうなつてんだ……」と頭を抱えると、ぽん、とイッパチが膝を叩いた。

「そのガクランでさ！ 若旦那がガクランを着たらそいつなつた、つてんでしょう？ だから脱げば、元通りになるんじゃ……」

皆まで聞かず、世之介はガクランを脱いだ。が、どうしても手が動かない。うろいろと両手がガクランを探り回るが、脱ぐ気配はなかつた。

「脱げない！」

世之介は苦渋の声を振り絞る。イッパチが唇を舐め、世之介の背後に回った。

「あつしが手伝いまさあー。」

ぐい！ とガクランの生地に手を掛ける。が、ガクランはまるで世之介の身体に密着しているかのようで、どんなにイッパチが渾身の力を込めようが、張り付いて動かない。

どたり、とイッパチは尻餅をつき、ぜいぜいはあはあと息を荒げた。

「信じられねえ！ あつしの杏菊紹偉童アーチュロ・イエズの力でも剥がせねえなんて……！」

助三郎がじつと皿を光らせ、世之介のガクランを舐めるような視線で見つめている。

「世之介さんの学生服の纖維を拡大して観察しています。どうやら、ただの纖維ではなさそうで、極小部品が組み合わさって纖維状になつております。それが世之介さんにがつちり絡みつき、剥がせないのでしょう。無理に脱がそうとすれば、世之介さんに怪我が及びますぞ！」

世之介は、がっくり首を振った。

「どうすりやいいんだ……」

光右衛門が声を掛けた。

「多分、世之介さんが本気で、学生服を脱ぐ決意を固める必要があるのでしょう。世之介さん。何が何でも、脱ぎたいとお思いでしょうか？」

世之介は首を捻り、自分の胸に尋ねてみる。顔を上げ、真っ直ぐ光右衛門を見詰める。

「それが、そうでもないんで……。妙なことだけど、何だかこれを着ているのが当たり前だつて気がしているんだ」

光右衛門は頷いた。

「成る程。無理に脱ぐと思わず、時間を掛けるべきでしょくな」

暫し沈黙が支配した。イッパチがおずおずと世之介に話しかける。

「それで若旦那、他には何も異常はござんせんか？」
世之介はもう一度、首を捻つた。

「そういえば……」

イッパチが急き込む。

「何でげす？」

「腹が減つたな！」

ぐきゅうううううーーと、世之介の下腹部から腹の虫が盛大に空腹を訴えていた。

一同は家族食堂に移動して、世之介の食欲を満たすため、料理を大量に注文した。

がつがつと、手掴みで世之介は出される料理を、次から次へと口へ運び、無心に咀嚼して飲み込んでいた。

いくら食べても食べても、空腹が収まる気配がない。際限のない世之介の食欲に、全員呆気に取られ、ぼんやりと見守っていた。

「糞！ 面倒だ！」

がらがらと皿の前に積み上げられた料理の皿や器を難ぎ倒し、世之介は立ち上がった。せかせかと料理場に足早に近づいていく。イッパチが仰天した表情になつて従つてきた。

「若旦那、どうなさるつもりでげす？」「煩いつ！」

苛々と世之介は怒鳴ると、調理場に入り込み、皿の前に並んでいた瓶を取り上げた。

中には、オリーブ・オイルが詰まつてゐる。ぽん、と蓋を弾くと、瓶の口を逆さにして、どぼどぼと食用油を垂らしじゃね。

ぐび、ぐび、ぐびと喉を鳴らして油を飲み干し「ひーーーー」と呻いて口元を拭つた。

一本を空にするとい、次の瓶を驚掴みにして、これもあつとこつ間に空にしてしまう。数本分の食用油を飲み干し、よつやく空腹が収まつた。食用油はカロリーの固まりである。

足音高く自分の席に戻ると、ふと息を吐き出した。

ぽけつと世之介の所業を見守つている仲間たちに向け、唇を捻じ曲げ皮肉な笑みを浮かべて見せた。

「なんだよ、お前ら。文句あるのか？」

「いや……別に」

よつやく助三郎が答える。格乃進が首を振った。

「大変な食欲だな。多分、着ている学生服が、世之介さんの代謝を変えているのだ。爆発的な体力をとる代わり、大量の食糧を必要とさせるのだろう」

「ふん！」と世之介は卓にどかんと両足を投げ出した。

「それが、どうした！　俺は、俺だよ」

「世之介さん……」

光右衛門が用心深げに、声を掛ける。世之介はぐい、と光右衛門に首をねじ向けた。

「なんでえ、爺さん！」

「こり！　何てことを…」

助三郎が目を丸くして身を乗り出す。顔には怒りが差し上つている。光右衛門は助三郎を抑えて、言葉を続けた。

「まあまあ……。世之介さん、それより【ツッパリ・ランド】を田指す、という当初の目的は、どうなりました？　まだ、同じお気持ちですか？」

「当たり前だ！　こんなチンケな星に、いつまでもいられるかつ！　何とかして地球へ戻つて、今度こそ尼孫星アマゾンを田指すぜ。あそこじや、俺を待つてる女たちがウジャウジャいるつて話じゃないか！」

吠え立てた世之介は、天を仰いで「けけけけ！」と笑い声を上げる。

呆然と、一同は世之介を見詰めた。

「成る程」と光右衛門は頷いた。

「まあ、世之介さんの目的はともかく、わたしも【ツッパリ・ラン】については、気になることがあるのです。あの、風祭と申す、
賽博格……」

「はっ」と格乃進が顔を上げた。
「やはり、『隠居様も同じことをお考えでしたか？』

光右衛門は重々しく頷いた。

「はい、あの風祭と申した賽博格は、明らかに戦闘用の改造を受け
ておりました。事故などで、やむを得ず賽博格手術を受ける人間は
おりますが、戦闘用の加速装置の装着は、幕府によって禁じられて
おります。いつたい、どこからあの賽博格は、加速装置を手に入れ
たのでしょうか？」

格乃進も同意した。

「まったく、その通りです。戦闘用の加速装置をなぜ、風祭が装備
しているのか、不思議です。加速装置は御禁制の品のまゝ」

光右衛門は厳しい目付きになつた。

「？抜け荷？の疑いがありますな。何か、よからぬ企みが匂います
な」

目的

それまで黙つていた茜が、顔を上げた。
「あの……」と躊躇いがちに声を上げる。

光右衛門は素早く茜の躊躇いを見てとり、優しく声を掛けた。

「何ですかな、茜さん」

茜は大きく息を吸い込んだ。

「あたしも、【ツッパリ・ランド】に行きたい！」

「茜さん！」

助三郎と、格乃進が同時に声を上げた。

茜は決意を秘めた表情をしている。

「風祭つて人は、最強のバンチョウを田指して賽博格になつたつて
言つてた。あたしのお兄ちゃん まさる 勝又勝 も、やつぱり最強の
バンチョウを田指すつて言つて、家を出て行つた。もし、お兄ちゃんが【ツッパリ・ランド】を田指していたら……」

助三郎は「わが意を得たり」とばかりに大きく頷く。

「茜さんの言つとおりです。わたしども助三郎と格乃進は、戦闘で
身体の半分以上を失い、やむを得ずこのような身体になりましたが、
失つてみて初めて、生身の身体が貴重なものか悟りました。この星
の人間は、ただ強くなりたいという単純な理由で、遊び半分で賽博
格手術を受けるなど、許せません！ 茜さんのお兄さんのためにも、

【シッパリ・ランディ】を畠端あべあじょい「

世之介は立ち上がった。

不意の世之介の動きに、全員が注目する。

「それじゃいつまでも、ソリソリボケッとしていねえで、かわいとい
輪車に乗り込もうぜー。ああ、出発だー。」

さつと茜に近づくと、手を伸ばし、茜の顔に手をやつた。世之介
の仕草に、茜は目を丸くした。

「茜ー、俺がお前を【シッパリ・ランディ】に連れて行ってやるぜー。」

ニタリと笑い掛け。茜の顔は、見る見る真っ赤に染まった。

さつさと外へ出て、世之介は空気を吸い込み「うーん」と大きく
伸びをした。

なんだか、やたら気分が良かつた。

何でもできそうな、そんな自信が津波のように押し寄せる。

【シッパリ・ランディ】か……。

世之介は、ひどく楽しみだと感じていた。

一輪車に跨り、世之介は一杯に棍棒^{アクセル}を握りしめ、^{エンジン}動力機關を全開にした。

ばるるるるん！

けたたましい騒音^{マハラー}が、突き出した排氣管から響き渡る。

本来、番長屋で使用されている一輪車も、四輪車も、燃料を燃焼させる形式ではないから、排氣音が出るわけがない。だが、まるで音がしないといつのは気分が出ないとかで、無理矢理うるさい人工的な音を立てる装置を内蔵している。

世之介は辺りを圧する音に、「つゝとりとなつていた。なんだか、自分が一段偉くなつた気分である。

背後の仲間の一輪車を振り返つて「行くぜー」と叫ぶ。一輪車に跨る助三郎と、格乃進は無言で頷いた。

蹴飛ばされるよつて世之介の一輪車は【集会所】の駐車場から舗装路へと飛び出した。

茜の説明によると、田地の【ツツパリ・ランド】は田の前の道路を真つ直ぐ、どこまでも進むと、辺り着くらしい。茜は世之介の隣の車線に自分の一輪車を並んで併走してきた。

ぴつたり横に近づくと、茜は世之介にさかんに何か話し掛ける。

「スイッチを……して……が……できる……」

茜の言葉は風切り音のため、途切れ途切れである。把手の部品をしきりに指さしている。

世之介は自分の二輪車の把手を見詰めた。

中央の田立つといふに、スイッチらしきものが一つ、ある。どうやら、茜の指をしていたのは、これらしい。世之介は片手を把手から離し、スイッチを押した。

「ああ、良かつた！ やつとひやんと話せるようになったわね！」

途端に、今までぎゅうぎゅう音を立てていた風きり音がぴたりと止まり、隣の車線で一輪車を走らせてくる茜の言葉が、はつきりと聞こえてきた。

世之介は最初に番長屋に到着して、茜の一輪車の後ろに乗せてもらったとき、やはり同じように風きり音が全然、聞こえていなかつたことを思い出した。

「なんで騒音が止まつたんだ？」

世之介の背後から、格乃進が声を掛けってきた。

「一輪車の周りを、超音波の障壁^{シールド}が取り巻いている。同時に、われわれの声も、自動的に無線機で交信できるようになつていてる。だから、お互いの声が、はつきりと聞き取れるのだ」

成る程、と世之介は感心した。

と、前方から、工事作業車がゆっくりとした速度でやってくるのに気付く。運転しているのは総て傀儡人である。

作業車は世之介の目の前を通り過ぎた。世之介は側鏡で作業車が【集会所】に向かっているのを認めた。

「ありや、なんだい？」

茜に叫ぶと、すぐ答が返つてくる。

「あんたらが空けた壁の穴を、修理に来たのよ。珍しくもないわ」

茜は無関心であった。世之介は密かに頷いた。そうか、番長星ではあらゆる修理や、修繕は、傀儡人が担つているのだ。うつ。

辺りを注意深く眺め渡すと、あちこちに傀儡人の姿が散見される。畠の真ん中で農作業している傀儡人。道の両側に並んでいる様々な店先で、人間の店員に混じつて立ち働いている傀儡人……。舗装路を修復している傀儡人もいた。道路が、常に新品同様になつているのも、傀儡人が倦まず弛まず、修復作業を続けていたせいだ。

番長星は傀儡人によつて成り立つてゐる……。

世之介はふと、奇妙な考えを弄ぶ自分に気付いていた。

Born to be wild!

「ここまで真っ直ぐ伸びる道路を、せん介たちの一輪車が快調に飛ばしている。しかし、単調な景色が続く旅に、せん介はやや飽き飽きしてきた。

せんやつしてこと、つとりと聞くべくなつてく。

出で抜けに音楽が鳴り響き、せん介は驚いて回りを見回す。

Get your motor running!
Head a u t o n t h e h i g h way!

歌詞は英語だった。少なくとも、そう聞こえる。内容はさっぱり判らないが、ひどく音量が大きく、怖ろしく粗っぽい歌い方であった。

「な、なんだつー。」「目が覚めた?」

隣の茜が、含み笑いをして話しつけてきた。

「一輪車で遠征シーリングするとされ、今いつやつて聞こえてこる音楽を鳴らすのが決まりなんだー。」

一輪車には、音楽を鳴らす装置が組み込まれているらしい。

世之介の聞いているのは『ステッペン・ウルフ』の『ワイルドに行こう! (Born to be wild)』であった。

だが、この曲が使用された『イージー・ライダー』という一九七〇年の映画など、見たこともない世之介には、初めて聞く音楽である。

格乃進の側車サイド・カーで座つている光右衛門は顔を顰めていた。

「何だか、荒々しく、好ましくない楽曲ですね！　歌なら小唄や、端唄の類はないのですかな？」

「知らない、そんなの！」

茜は光右衛門のぼやきに呆れて叫び返した。

イッパチが調子に乗る。

「「」隠居様！　一つ、あつしが小粋なところを披露いたしましょうか？　何、こう見えて、あつしは寄席で前座を務めていたこともござんして、都々逸くらいならお手のものでさあ！」

「イッパチ、やめておけ！」

世之介はイッパチを制止した。世之介の言葉に、イッパチは「へえ」と首を竦めて見せる。

世之介も荒々しさは感じていたが、それほど好ましくないとは思わない。むしろ、今の世之介の気分にぴったりだと思った。？伝説のガクラン？を身につける以前なら、光右衛門に同意したろうが、今の世之介は、これくらい粗っぽい調子の歌のほうが、好ましかつた。

我知らず、世之介は茜の流している音楽に合わせ、全身で拍子リズムを取っている自分に気付く。

道路の右に、今まで見たことの無い建物が近づいてくる。番長星

で見た建物は、毒々しい原色に塗られ、派手派手しい看板が掲げられた自己の存在を思い切り主張しているのが普通だったが、近づいてくる建物は無愛想な立方体で、やや灰色に近い白に塗られ、看板の類は何一つ見当たらない。

「なんだい、ありや？」

世之介が指先を上げて示すと、茜は首をかしげた。

「あれは？工場？よ」

「工場？ 何を作っているんだ」「知らない」

茜の答は素つ氣ない。まるきつ関心がなさそうだった。

しかし、一人の遣り取りに、光右衛門はひどく興味を持つたらしく、身を乗り出して話し掛けってきた。

「茜さん、後学のため、見学などできませんじょつか？」

意外な光右衛門の言葉に、茜は首をねじ向け、唇を丸く窄めて見せた。

「そりや、まあ……。別に構わないけど」

世之介は一輪車の向きを、前方の「工場？」へと変えた。さて、何が光右衛門の興味を引いたのだろうか。

見学

工場の正門に近づいていくと、傀儡人の守衛が一同を出迎える。ひょろりとした姿の傀儡人は、ぶかぶかした保護帽ヘルメットを被り、両手をゆっくりと動かして、入口へと誘導した。

「ようこそ、いらっしゃいませー。何か、御用でしょうか?」

傀儡人はざらざらした声で話しかけてくる。あまり優秀な発語回路が組み込まれていないと見える。口調はぎこちなく、途切れがちであった。

光右衛門が側車から顔を突き出し、声を掛けた。

「我々は旅の者ですが、後学のため見学をしたいのです。どなたか、責任者のお方に、通告いたして貰えませんかな?」「見学……」

傀儡人は、明らかに面食らった態度をとった。両目のレンズがぴかぴかと瞬き、頭部がぐるりと三百六十度、一回転する。

そのまま、ぴたりと静止した。傀儡人の内部で「ジー、ジー」という微かな音がしている。多分、体内の無線装置を働かせているのだ。

静止したのは一瞬で、ぎくしゃくと傀儡人は頷いた。

「失礼致しました。ただ今、工場の?支配頭脳?と連絡を取りましたところ、皆様方を案内するよつ、指示がありました。では、一輪

車をお降りになり、こちらへどうぞ」「

「？支配頭脳？？なんですか、それは」

よつこりしょと側車から外へ出て、光右衛門が質問する。傀儡人は考え考え、ゆっくりと答える。

「」の工場の総てを監督する、頭脳です。工場の最も奥深くに位置し、自分では動けませんが、私ども総てを監督します。私どもは支配頭脳を？バンチョウ？と呼びます」

傀儡人の言葉に、一同は仰天した。

「バンチョウ？ それは、人間のことでしょう？ ここに人間がいるの？」

茜が叫ぶと、傀儡人は否定するかのように首を振る。

「ここには人間は、一人もいません。すべて私どものような、被創^{クリー}造物が作業を行つております」

格乃進が呟いた。

「おそらく、規模の大きな電子頭脳なのでしょう。工場の生産を監督するため、自分で動く必要がないのでは？ しかし、なぜバンチョウなのでしょう？」

格乃進の説明に、光右衛門は頷き返す。

「その疑問は、後にして、実に静かですな。工場といつのに、稼動していないのでしょうか？」

格乃進の背後から助三郎が目を奇妙に光らせ、口を開いた。助三郎は、両目の分析装置を働かせているらしい。

「あの工場の換気口などを観察しておりますが、人間の呼氣に含まれる一酸化炭素の排出を全く感知しません。多分、工場は無人なのでしょう。しかし中性微子放射^{ヒートリノ}は壮んです。間違いなく、稼動しております」

「成る程」と光右衛門は一人の説明に頷き、世之介を見上げ、口を開いた。

「あなたは、どう致します？　わしは、一緒に案内して貰いますが」

世之介は一輪車から降り立ち、返事をする。

「俺も行くさ、爺さん！」

世之介の返事に、格乃進と助三郎の、人工皮膚が真っ赤に染まつた。眉が上がり、目尻が吊り上がつた。助三郎は、怒りに、声が軋る。

「せめて我らと同じように、『隱居様』と呼び掛けられないのか！　何だ、爺さんとは！」

光右衛門は一人の賽博格を宥めるように両手を上げた。

「格さんも、助さんもそう、怒るべきではありますぞ！　わしは、旅の爺い。世之介さんが爺さん呼ばわりしたところで、その事実は変わりありませんからな！」

にこにこと話し掛ける光右衛門に、格乃進と助三郎は肩の力を抜き、懇懃に頷いた。

光右衛門は守衛の傀儡人に顔を向けた。

「それでは、案内して貰いましょう」

傀儡人は頷き、かくかくと手足を動かして、工場の建物に向かった。

世之介は、工場というものは、様々な機械が轟き、絶え間ない騒音の只中にあるものと想像していた。

ところが、まったく違っていた。工場内は完全に無音であった。

さらに、真つ暗でもあった。

光は背後の入口からの外光だけで、いきなり内部に踏み込んだ一同は、瞳孔が暗闇に慣れておらず、戸惑っていた。

しかし二人の賽博格と、杏萄組偉童のイッパチは平氣な様子で、物珍しげにあちこちを見渡している。

世之介たちがうろうろ狼狽しているのに気付き、守衛傀儡人は済まなそうに声を掛けてきた。

「ああ、うつかりしていました。工場内は人間の視覚に合わせた照明をしていなかつたので、暗く感じているのですね。今、明かりを点けます！」

言葉が終わると、出し抜けに工場内が、白い光に由映く照らし出される。

「う、これが、工場？」

世之介は思わず叫び声を上げていた。

茜はポカンとした顔で、世之介の驚きに反応してはいない。おそらく、工場が何をするといろんなか、そもそも言葉の意味すら判つていないのである。

「プールみたいね」

茜の感想に、世之介は同意する。

まさしく、プールである。だだつ広い、巨大な水槽が、建物のほとんじを占めている。

しかし、プールに満々と湛えられたのは水ではなく、別の何かであつた。どりりとした真つ黒な液体が、盛んな波紋を湧き立させている。

色からすればコール・タールのよう見える。黒光りして、とろとろとした光沢を放つていた。

プールの上には、幾つかのタンクが並んでいる。タンクの下方には注ぎ口があつて、そこからドボドボと、大量の液体がプールに注がれていた。

「これは、何ですかな？」

静かに、光右衛門が質問を投げかけた。
傀儡人は腕を挙げ、水面を指し示す。

「現在、この工場では、一輪車と四輪車の生産を行っております。
月産、千台もの一輪車と四輪車が生産されています。プールの中身
は、生産品のための原材料です」

言葉が終わると、『じぼりと水面が泡立ち、一台の四輪車が浮上し
てきた。』派手なピンクの塗装の、オブンカ無蓋車である。奇妙なことに、
プールに湛えられている真っ黒な液体は、一滴もついていない。

水面に浮かび上がった四輪車は、プールの縁に設けられた車廻し
に車輪を載せ、するすると無音で、搬入口らしき方向へと進んでい
く。

『じぼりとまた水面が泡立ち、今度は一輪車が姿を表した。』一輪車
もまた、誰も操縦していないのにも関わらず、自走して搬入口へと
進んでいく。

すべて無音で作業は行われている。

訳の判らないといふ顔つきで光右衛門は助三郎と格乃進を見やる。
二人の賛博格は両目を光らせ、しきりに大きく頷いていた。
助三郎が口を開く。

「（一）隠居様。この工場は、ナノ・マシーン微小機械工場なのです」

格乃進が後を続けた。

「そうなのです。あのプールに湛えられたのは、液体ではありますまい。

目に見えないほど小さな、無数の微小機械が、一杯に舞ひこすいてあります。

タンクから注がれた原材料は、金属、レア・メタル希少金属、各種有機重合材料プラスチックなどが混ぜられた液体でして、プールの微小機械は原材料を分子や原子の大きさで選別し、組み立てます。

ですから、タダの一人も作業員を必要としないのです。何しろ直径一万分の一匁以下という、おそらく細かな微小機械が、一齊に分子や原子をそのまま組み立てるのですから、いきなり完成品が出現してしまうのでしょうか？」

ストレス

工場内を見詰める光右衛門の表情は、険しかつた。瘦せた顔には、ふつふつと大量の汗が噴き出している。

光右衛門は何度も頷いた。

「成る程、よく判りました！」

そのまま髪の下の唇を噛みしめ、何か考え込んでいた。

顔を上げ、傀儡人に向き直った。

「それで？支配頭脳？とやうには……あなたがたの言い方では？バンチョウ？ですか？面会は、できませんかな？」

守衛傀儡人は驚いたように、身体をぎくしゃくと動かせた。

「バンチョウに？そ、それは……！」

「できませんか？」

言葉を重ねる光右衛門に、ロボットの動きがぴたりととまる。再び体内から「じー、じー」という作動音が聞こえてくる。多分、連絡しているのだろう。

傀儡人は再び動き出した。

かくかくと細かく震えながら、喋り出す。

「？支配頭脳？は、皆さんとお会いになるそうです。わたしが案内します……」

どこか故障したような動きで、先に立つた。傀儡人の人工頭脳に

は、酷い圧力が掛かっているかのようであった。^{ストレス}

守衛の傀儡人は、ふらふらと頼りない足取りで、工場の通路を歩いていく。床はぴかぴかに磨き上げられ、塵一つ落ちていない清潔さであった。

世之介は番長星に来て以降、こんな清潔な環境は初めてだと感心していた。なにしろ今まで田にした番長星の建物といえば、あちこち乱雑なゴミが堆積し、壁は落書きで埋まっているのが普通であった。

隣を歩く茜は、緊張してこらめつた。田をきよときよとと落ち着きなく彷徨わせ、一步一歩ビロカに落とし穴があるかのよつて、慎重に歩を進めている。

「なんでえ、茜。怖いのか？」

世之介は、わざと大声を上げて声を掛ける。茜はびくつと飛び上がった。

「な、なによ、……。脅かさないでよ。こ、怖くなんかないもんねー。」

無理矢理どうにか引き攣つた笑顔を作るが、脣は強張り、強がつていることは一目瞭然だ。

前方を歩く光右衛門の背中を見詰め、世之介は首を捻った。

「あの爺さん、いったい何を気にしているんだろうな？」

茜は、しげしげと世之介を見上げる。世之介は茜の視線を感じて「何だよ?」と問い掛ける。

茜は、ふつと視線を逸らし、首を振った。

「あんたって、本当に変わったわね。口調も変わったし、性格も別人だわ。最初に会ったときの、あんたとは思えない」

茜に向かい、世之介はぐいっと眉を持ち上げて見せた。

「俺が? 変わった? 俺はちっとも、変わったなんて思っちゃいないが」

茜は大きく頷いた。

「それよ! 自分の変化に全然、気付いていないんだわ! やっぱり? 伝説のガクラン? のせいだわ……」

「ふむ」と生返事して、世之介は自分の着ている学生服を見下ろした。燃えるような真っ赤な生地は手触りも良く、着ているだけで自信が盛り上がる気分がする。

確かに、自分は変わったようである。

世之介はガクランを身につける以前の自分の気持ちを、思い出そうとしていた。しかしガクランを身につける以前の記憶は模糊として、まるで自分とは思えない。懸命に思い出そうとするが、逆に非常な不安を伴い、苦痛すら感じる。

世之介は、ぶるっと頭を振った。

いいじゃないか! 俺は、俺だ! 別人になつたとしても、良い

方向に変わったのだから、これでいいんだ……。

前を歩く守衛傀儡人が立ち止まつた。

「ひづらです」

通路の行き止まりに、一枚の扉があつた。全員が立ち止まると、傀儡人は扉の取っ手に手をかけ、ゆっくりと押し開いた。

?支配頭脳?

?支配頭脳?が扉の向こうから全貌を現す。

「なんでえ、お前ら……。工場見学だなんて、物好きもいといとこりだぜ！」

口調は不良じみていたが、声は甲高く、子供が精一杯ぐんと背伸びしてこるような印象がある。

茜は「さやつ！」と喜びの声を上げた。

「可愛い！」

茜の歓声を耳にして?支配頭脳?は顔を顰めた。

「やめろよ、そんな言い方……。^{一ヤ}舐めんなよ！」

茜は益々きらきら目を輝かせた。?支配頭脳?が苦りきればするほど、反対に可愛さが際立つ。

?支配頭脳?は、猫をつくりだつた。しかも生後一、二ヶ月ほどのは子猫である。

その子猫が、額に鉢巻を締め、ガクランを着込み、なにやらチカラ、ピカピカ無数のパイロット・ランプが瞬く機械のコンソールに向かって、一心に作業をしている。

「そうだ、俺たちや、この工場が完全に稼動できるよう見張つていのところだ。おめえらのよつたん素人に邪魔されたかねえや！」

?支配頭脳?は一匹……というのだろうか、やはり、どう見ても子猫そつくりに見える……だけではなく、数匹いた。

数匹の子猫が、人間のガクランや、セーラー服を身に着けている。すつと一本足で立つて、分別臭く歩き回り、子猫の背丈に合わせた監視装置らしきコンソールの表示を覗き込み、あるいは幾つかのスイッチを操作して、忙しく作業していた。

「申し訳も御座いません。わしら、旅の者で御座いまして、番長星の色々なことを学びたく思い、「迷惑と思いましたが、押しかけました。何卒、ご教授願えましたら幸いです」

光右衛門はニコニコと満面の笑みを浮かべて愛想良く話しかける。光右衛門の馬鹿丁寧な口調に、最初に話しかけてきた？支配頭脳？は明らかに狼狽した様子で、口元の髭がピクピクと震えている。白と黒の斑模様で、顔の半分が黒く、両目は金色に輝いていた。

「うん……まあ、そつ下手に出るなら、おいらも考えを変えていいぞ。おこりたちに聞きたいことって、何だ！」

光右衛門は腰を屈め、尋ねる。

「あなたがたは、その「ハ……猫そつくりに見えますが」

子猫は即座に、そつくり返った。

「へつ！ そつ言ひ思つたぜ！ そりや、俺たちや、猫そつくりに見えるのは判つてう。しかし、俺たちや、猫じやねえぞ。こいつ見えても、最優秀の猫型傀儡人なんだ！」

猫型傀儡人……。

世之介は内心、どこかで聞いたような文句だと思った。まさか、あの猫型傀儡人じやあるまい。それが証拠に、腹の辺りには、ポケットが見当たらない……。

光右衛門は質問を続ける。

「わしら、この工場を拝見致しまして、大変、感服いたしました。素晴らしい生産設備で御座いますな。この工場を監督なさる、あなたがたは非常に重要なお仕事をなさつておられるのでしょ？」

？支配頭脳？は、ひどく氣分を良くしたようだつた。口元の髭が、ピンと威勢良くおつ立つ。

「うん、ま、まあな！ なんしろ、番長屋の人間どもは浪費家だ。いくら一輪車や四輪車を供給しても、すぐ飽きて、次から次へ新車を欲しがる。だから、俺たちは、シャカリキになつて、どんどん生産しなきゃならねえ……」

ジロリと、その場に立つてゐる茜と世之介を睨む。

「セーの一人！ いくらタダだからって、ホイホイ新車を欲しがるんじゃねえぞ！」

「うふっ……」

茜はまつたく応える様子がない。逆に嬉しがつてゐる。小走りに？支配頭脳？に近づくと、いきなり膝をつか、手を伸ばして、喉元を撫で上げた。

「ガロガロ、ガロ……。

猫そつくりの？支配頭脳？は、うつと皿を開じ、喉を鳴らした。

隣のセーラー服を身につけた、もう一匹の？支配頭脳？が、ぴしやつと喉を鳴らしている仲間を叩く。

「あんた、この女に舐められてるわっ……」

喉を鳴らした子猫は、びくつと身を震わせ、皿をかつと見開いた。

ふーつ、と猫そつくりに威嚇すると、喉を撫でる茜の手に猫パンチを繰り出し、払いのける。

「舐めんなよ……！」

茜は「ふつ」と噴き出して、それでも謝った。

「御免……。でも、あたし、猫を飼いたいとずつと思つてたから……つ」

「だ～か～ら～！ おいらたちは、猫じゃねえって言つてんだろう！」

？支配頭脳？は苛々と、地団太を踏んだ。

？支配頭脳？に面会が叶い、光右衛門は次々と質問を投げかけ、工場を後に一同は再び一輪車の旅を続けた。

すっかり時刻は夕刻に近づき、空は緑色に染まっている。緑色の夕空など、世之介は想像もしたこともなかつた。

光右衛門は格乃進の操縦する一輪車の側車に收まり、ずっと押し黙つたまま、何事か真剣に考え込んでいた。

世之介は光右衛門の側に一輪車を近づけ、声を掛けた。

「なあ、爺さん……じゃねえ、光右衛門さん。そもそも教えてくれてもいいだろ。何、深刻になつてんだよ？」

光右衛門は「はつ」と顔を挙げ、目を瞬かせた。

「いや、すまん。つい、ほんやりしておつたよつじや。あの工場がなぜ、気になるのか、教えて進ぜる」

咳払いして、光右衛門は説明を始めた。

「工場では微小機械による生産が行われていることは、目にのしておるな。実は、微小機械を用いた生産技術は、地球でも以前に実施されたことがあつたのじやが、今は使用されておらぬ。地球では、とつぶに禁じられている技術なのじやよ」

話を聞いていた助三郎が、驚いたような声を上げる。

「それは、初耳です。わたしは工場で初めて目にしたものですから、地球でも行われたとは知りませんでした。しかし、なぜ禁じられておるのですか？」

光右衛門は頷き、目を細めた。

「微小機械は数万分の一匁以下という、分子の小ささの機械です。一つ一つの部品は単純な動作だけするのですが、数億、いや数兆という単位で集まり、あらゆる作業を実現するのです。しかし、重大な欠点がある！ 微小機械を制御する命令は、単位が原子に近づくと、不確定性原理による誤命令^{バグ}が不可避なのです。もしも微小機械^{スタンピート}に新たな生産命令を与え、それが誤命令を引き起こした場合、爆轟^{スタンピート}が起きる懸念がある」

「スタンピード？ そりや、何だい？」

世之介は問い合わせ返した。

「微小機械の、際限ない増殖です！ 周りのありとあらゆる物質を食いつくし、おのれを増殖させ、あつという間に覆いつくす。実際、微小機械の爆轟で、一つの惑星が丸ごと廃墟になつた実例すらあります。番長星で使用されている微小機械は、ずっと同じ製品しか生産していないため、奇跡的に爆轟は免れてくれました。が、もしも、新たな製品を微小機械に生産させようと企む者がいたなら、爆轟の危険は倍増します！」

格乃進は、険しい顔つきになつた。

「新たな製品？ それは、もしかして」

光右衛門は大きく頷いた。

「そうです！ あの風祭なる賽博格！ この番長星で、最高度の技術が必要とされる賽博格がなぜ実現したのか不思議でしたが、微小機械が存在するなら、頷けます。微小機械どもに、賽博格処理を行うよう命令を組んだ者がいるのでしょうか。戦闘賽博格が存在するなら、もっと進んだ技術の武器を微小機械に生産させようとするかもしれません。わしはこの番長星に、幕府転覆を企む悪人が密かに潜入しているのではと、疑つております」

それまで黙つて光右衛門の長口舌を聞いていたイッパチが呴いた。

「そりや、大事でござんす！ まるで由比正雪の乱じやねえですか

！ それとも、天草の乱でげしょうか？」

光右衛門は暗い顔になつた。

「【シッパリ・ランデ】に早く到着しないと……。手遅れにならなければ良いが！」

世之介は前方を見た。

真っ直ぐに続く道路の真ん中に、横断幕が掛かっている。横断幕には「ijiより暴走半島」とあつた。

「これより暴走半島」と記された横断幕を通過して程なく、地平線にあつという間に太陽は沈み、深々とした藍色の夜空が広がった。

助三郎の説明によると、番長星の大気は分厚く、大気の成分は光の散乱が大きいため、真夜中になつても完全に暗くはならない。それに、番長星の夜空には月が昇つっていた。

「月が見えらあ！」

世之介が思わず歓声を上げると、格乃進が含み笑いをして解説した。

「あれは、月ではない。番長星に到着した、最初の殖民船の光帆だ」
「光帆？」

世之介が尋ねると、格乃進は頷いた。

「そうだ、直径二百五十里（約一千キロ）もある、円形の帆なのだ。番長星に最初に到着した殖民星は、超空間航法を採用する以前の型で、地球からレーザー光を受けて、光の圧力で推進する。その時、残りが、番長星の衛星軌道を周回して、夜を照らし出している訳だ。地球の月に比べれば、三分の一ほどの直径しかないが、反射能は一に近く、物凄く明るい。本来は昼間の太陽と同じくらい輝くはずだが、月と同じくらいの光量に抑えるため、表面をわざと汚して暗くしているのだ」

世之介は、格乃進の説明に納得した。

横断幕を通過してからは、家一軒、便利店舗すら道路の両側には見えてこない。そろそろ今夜の宿を決めなくてはならない時刻だが、助三郎と格乃進の二人は、二輪車を同じ速度で走らせている。

世之介は、ちら、と隣を併走する茜を見やつた。

茜は、明らかに疲労困憊した様子で、眠いのか、時折うとうと把手を握んだまま座席で舟を漕いでいる。

助三郎の側車に乗っているイッパチは、すでに白河夜船で、かく
りと顔を仰向け、大口を開けて、ごうごうと高鼾を搔いている。

一輪車の前照灯のみが、道路を白々と切り裂いていた。
ヘッドライト

不思議と世之介は眠くならない。田は、ぱつちつと見開き、緊張感は一切、鈍っていない。

やはり？伝説のガクラン？のせいだろうか。ガクランは、世之介の生理すら支配するのだろうか？

ふと、側鏡に田をやつた世之介は、背後から数個の前照燈の光が
瞬いでいるのに気付いた。前照燈は一ひらへ向かつて、ずんずん近
づいてくる。

ぱりぱりぱり…… ぐああああんん……！

けたたましい騒音を撒き散らし、数台の一輪車、四輪車が集団となつて、猛烈な速度で接近していく。

びくつ、と併走していた茜は田を見開き、慌てて背後を見やる。茜の表情は、瞬間的に恐怖の色を浮かべる。

「大変！ 狂送団だわ！」
「何だ、そりや？」

世之介は、茜の只ならぬ気配に、尋ねかけた。茜は唇を噛みしめ、早口に説明する。

「暴走半島のツッパリ・グループなの！ あいつら、あたしたちと違つて、撃だとか、規律なんか一切合切、平気で無視する危険な奴らよ！ 繩張りを通る総ての一輪車や、四輪車に敵意を持っているの！ 追いつかれたら、何されるか判らない！」

世之介は茜の説明を聞いて、なぜだか、ひどく胸が高鳴るのを感じていた。

「そう来なくつけやー

「面白え……！」

世之介の呟きに、茜は呆れたよつと、あんぐりと口を開けた。世之介の呟きに苛ついたのであつたが、表情が真剣になつた。

「面白いなんて、言つてられないわ！　あいつら、危険よ！　超危険だわ！」

ぐわああああん！

怖ろしいほど大音量の騒音が、夜の路面に響き渡つてゐる。助三郎と格乃進は、二輪車の把手を握りしめ、表情は厳しく引き締まつた。側車の光右衛門も、怖れの表情は欠片も見せず、眉を険しくさせるだけである。

光右衛門の様子を目にし、改めて世之介は「この老人は何者なのだろう？」と思つた。

ただの旅好きの隠居にしては、度胸が据わつてゐるし、明らかに危険が接近してゐるにも関わらず、糞落ち着きに落ち着き払つてゐる。

たとえ一人の賽博格による護衛があるとしても、考えられないほどの泰然とした様子である。

第一、賽博格を護衛にするなど、普通の老人では絶対に不可能だ……。

いつたい光右衛門とは、ビコの何者だ？

背後からの前照燈の光が、闇を切り裂き、世之介の顔を眩しく照らし出す。世之介は、それまでのまどろっこしい自問を忘れた。

狂送団が、ついに追いついてきたのだ。

狂送団は、それまで世之介が番長屋で田にした集団とはまるつきり、別の集団に属していた。

明らかに服装からも、違いは判る。

それまで番長屋で田にした一輪車、四輪車の集団は、改造した学生服や、ツナギの作業服に派手な旗や幟を閃かせた連中ばかりだった。ところが、狂送団が身に着けているのは、鎧のよう見える防護板や、肩当、脛まで達する長靴であった。

全員が明らかの武器を身につけている。

棍棒に弓矢、どうやら剣らしきもの、槍などである。弓矢の中に
は弩ボウ・ガノらしき武器も見受けられる。極めて戦闘的だった。

防護帽ヘルメットを被つている者もいた。防護帽は顔の辺りまで覆つもので、小さな覗き穴があつて、そこからジロリと剣呑な眼差しが、こちらを睨んでいる。

突き刺すような、あからさまな敵意が、世之介にはひしひしと感じられた。

ちいい ん……！

一人の男が、手にした金属製の得物の先端を、路面に擦り付ける。路面に接触した刀と思しき武器の先端が、微かに接触すると、甲高い音を発して、閃々とした火花を散らした。

ちい
ちい
ん...!
ん...!

真似して、他の連中も同じように先端を路面に接触させる。身を危険なほど乗り出しているので、ほんの少しでも均衡バランスを崩せば、あつという間に転落してしまっただろう。

が、威嚇する男たちは、世之介に自分たちの度胸を見せ付ける狙いがあつてか、壮んに示威行動を止める気配は些無である。

すべて無言のままに行われている。

雄叫び

世之介には意外であった。今までの前例から、示威行動を取るま
えに、何らかの挑発的な言動があると思つていたのである。

「オカマ野郎!」とか「アッカンベー」とか、そんな子供っぽい悪
罵を浴びせるのかと思つていた。

だが、狂送団はそんな手間を掛けるほど呑氣ではないのだらう。

「きああああ!」

先頭の、全身に羽飾りをつけた、がつしりとした体格の男が、猿
のよつや絶叫を長々と上げた。

「きこいいい!」

「かああああ!」

最初の雄叫びに呼応して、次々と狂送団の男たちから吠え声が上
がる。

今ようやく気付いたのだが、狂送団には女は全然いない。すべて
男ばかりだ。

ざつと見たところ、年齢は高めで、十代と思われる年頃の人間は
いない。皆、逞しい身体つきを誇つている。

ざあつ、と狂送団の全員が武器を振り上げた。猿のような雄叫び
を上げ、乗り物をぐんと接近させながら、武器を振り回す。

「格乃進！ 気をつけろっ！」
「おうつ！ 助三郎もなつ！」

助三郎と格乃進が、声を掛け合つ。

光右衛門の頭上に一本の鉄棒が振り下ろされる。
が、格乃進は片腕を上げて、光右衛門を庇つ。

がつき！ と格乃進の賽博格の腕が、振り下ろされた鉄棒を受け止める。

振り下ろしたのは、顔を真っ赤な塗料で染め上げた、半裸の男である。格乃進が鉄棒を腕で受け止め、平気な顔でいるのに、驚いた様子だ。顔にちらりと不審が浮かぶ。

格乃進はぐつと鉄棒を握りしめると、いきなり手前に引き寄せた。

鉄棒を振り下ろした男は「わっ！」とばかりに均衡を崩し、二輪車からずつてんどうと大袈裟に転げ落ちる。

ぐるぐると路面を回転しながら、後方へ小さくなつていいく。男の操縦していた二輪車は、誰も乗つていないま、ふらふらと彷徨うように速度を落とし、がちゃんと大袈裟な音を立て、すつ転んだ。

蹴り

「ぶつん、と音を立て、世之介に棍棒が殺到する。世之介は、ひょい、と首を竦めると、棍棒をやり過ごした。

「ばああああっ！」

棍棒を握っているのは、滑稽なほど太った大男で、乗っているのは危なっかしいほど小型の一輪車であった。大男の体重の、半分ほどしかないだろ？ 小さな車輪を支えるサスペンションは、大男の体重を受け止め、ぎりぎりまで縮んでいる。

大男は振り回した棍棒を、もう一度さつと構えなおし、ぐいっと把手を回して一輪車を急速に接近させてきた。どうあっても、世之介を叩き落とさねば気が済まないらしい。

待ち構えた世之介は、狙いを定めて足を擧げた。大男の小山のような土手つ腹に、渾身の力を込め、蹴りを入れる！

賽博格の格乃進を一撃で蹴り飛ばすほどの勢いが込められた世之介の必殺の蹴りは、大男の腹に、まともに命中していた。

「ずしんっ！」 と世之介の足首まで、大男の柔らかな脂肪に埋まる。

「ぐへえっ！」

奇妙な呻き声を上げ、大男の口から汚い涎が飛沫となつて噴き上がる。

大男は乗っている一輪車もろとも、道路の外へ吹つ飛ばされてい

く。すでに蹴りが命中した瞬間から、意識は飛んでいる。白田を剥き出したまま、風船のように小さくなつた。

ばちやーんっ、と道路の横に広がっている田圃に、泥の飛沫が上がる。全速力で走っているため、あつという間に見えなくなつた。

茜が背後を振り返つて叫んだ。

「せえへさんつー、後ろつー！」

茜の声に、世之介は振り向く。

巨大な輸送車トランクが接近してくる。横幅は、一車線の道路をほぼ占領するほど巨大で、見上げる運転席は、まるで建物の三階ほどに相当している。

ぐああああんっ！

地響きとともに、巨大輸送車は圧し掛かるように世之介の背後に接近する。夜田にも、輸送車のあちこちから鋭い鉄槍、剣山のよつな棘が突き出しているのが判る。

輸送車の前面には、巨大な丸い前照燈が威嚇するかのように光を投げかけていた。輸送車の屋根にも、何か動く影がある。

世之介は目を細めた。

と、ぐうーんっと注目する一角が、世之介の視界に拡大されて見えてくる。まるで双眼鏡を押し当てるかのようだ。多分、ガクランによつて、世之介の視覚が一時的に望遠に切り替わっているのかもしない。

屋根の上に上っているのは、全身に黒い羽根飾りをつけた、頭目らしき男である。身につけている甲冑は贅沢な造りだ。他の連中が薄汚れているのに対し、ピカピカに磨き上げられ、傷一つない。

男の右目に眼帯があつた。残つた左目で、男は薄笑いを浮かべて、辺りを傲然と見下ろしている。

世之介は一瞬にして、決意を固めていた。

「うなつたら、あいつを仕留める！」

ぐつと把手の梶棒^{アクセル}を緩めると、世之介はまっしぐらに巨大輸送車へと近づいていく。輸送車は前輪一対、後輪三対という、なんと前後合わせて十輪の車輪が轟々と路面を噛みしめている。

巨大な輸送車に併走した世之介は、一輪車から立ち上がった。

茜が悲鳴を上げる。

「世之介さん、何をするつもりなの？」

世之介は茜を見やり、「ぐつ」と笑いかけた。全身の筋肉に力を込め、輸送車を見上げた。

やつ、とばかりに跳躍し、世之介は輸送車の側面に飛び上がる。側面には幾つかの突起が突き出し、手懸りとなる。腕の力のみで、世之介は素早く攀じ登つていった。

屋根に登つた世之介は、猛烈な風に身体を斜めにして立ち上がった。

気配に、狂送団の頭田らしき男が振り返る。

「誰だ、てめえは？」

世之介はニヤリと笑いかけ、答えてやつた。

「但馬世之介！ お前が狂送団の頭^{ヘッド}らしいな……。勝負してやるよ！」

頭田は驚きに、左目を剥き出した。

舌刀

輸送車の屋根は、簡単な舞台のような構造になつてゐる。木組みの床が延べられ、中央にどつしりとした椅子が床に直に据えられていた。

形からして、玉座だらう。床にはあちこち、食べ残しの容器やら、食いかけの果物、肉片、それに雑誌類が散乱し、とても玉座に似合うものとは思えない。番長星のいたるところで見られる、だらしなさが横溢していた。

頭目らしき男は、屋根の手摺に身をもたせかけていたが、世之介の声にギロリと残つた左目を光らせた。ぐいっ、と唇がへの字に曲がり、肩を怒らせる。

「勝負、だと？　おめえ、正氣か？」

頭目は、黒板を爪先で引搔くような軋み声の持ち主であった。聞いているだけで苛々してくる、悪声である。

年齢は世之介の見たところ、四十に手が届くくらい。がつちりとした身体つきに、皮膚には無数の傷跡が残つていた。真っ黒な鎧に、腰には太い腰帶ベルトをし、青竜刀のような武器をぶら下げている。

全身に纏う真っ黒な羽飾りが、猛烈な風にばたばたと音を立て踊つていた。

世之介は、わざと朗らかな声を上げて答えた。

「ああ、正氣やー。それとも、怖氣づいたかな？」

世之介の舌刀に、頭田の顔色が夜目にも見る見る真っ赤に染まるのが判る。番長星では「怖気づいた」とか、「怖い」という台詞は絶対的な禁句であることを、世之介は悟っていた。

案の定、頭目は冷静さを失った。さつと腰の刀を引き抜く。青白い刀身の光が、冴え冴えと世之介の目を射た。

一声「野郎！」と喚くと、頭目はだんつ、と床を蹴つて宙に飛び上がる。両手で構えた刀を、拵み斬りに世之介に向け、振りかぶる。世之介は頭目の刀を、寸前で躱した。床に身を投げ、ごろごろと転がる。さつと立ち上るとこりに、再び頭目の刃が殺到する。

しまつた、武器を持つていないと……。

何とか寸前で逃れたが、後先の考え無しに行動する自分の迂闊さに、世之介は内心むかつと臍を噛む思いであった。

ガクランを身につける以前の世之介は、石橋を叩いても渡らないほどの慎重さで、愚図愚図とした煮え切らない性格であった。ところが、今の世之介は、完全に衝動的に行動する性格に変化している。頭目は中々の使い手であった。動きは素早く、間合いも正確である。世之介が何も得物を持つていなくて氣付いたのだろう。左目に勝利の確信が浮かぶ。

なぜガクランは、助三郎と格乃進の二人の賽博格と戦ったときのように、世之介を加速状態にさせないのか？あの状態になれば、こんな攻撃を躱すのは、百歳の老人や、赤ん坊を相手にする以上に、簡単なのに。

そうだ！それが理由だ！世之介は卒然と悟っていた。

ガクランは相手が賽博格サイボーグなど、人間の力以上の敵の場合、世之介

に爆発的な体力と、加速状態を与える。多分、互角の立場で戦わせようとするのだろう。

だから逆に、明らかに人間相手の場合には、超人的な力を与えようとはしないのだ。奇妙な倫理観が、ガクランには備わっているようだった。

よし……！ 世之介は覚悟を決めた。

体捌きが肝心なのだ……。

助三郎の忠告が蘇る。

世之介は息を詰め、全身の神経を頭目が握る刃に集中させた。 そ
うだ、学問所で習った、剣道の奥義を思い出すのだ……！

頭目は大きく振りかぶると、真っ向微塵に世之介に刀を振り下ろ
した。全身の力が込められた、必殺の気合であった。

世之介は動いた！

真剣白刃取り

「つおつー。」

頭目は驚きに身を仰け反らせる。

「ま、まさかつー！」

振り下ろした刃を引こうとするが、びくとも動かない。世之介を睨みつける頭目の左目に、焦りが浮かぶ。

世之介の両手の掌がぴたりと合わせり、頭目の刃を受け止めていた。

真剣白刃取りである！

学問所の剣道の授業で、一度だけ高名な師範代が披露してくれたことがあった。世之介はそれを思い出していた。

まさか、やれるとは思つていなかつたが、他に方法はなかつた。渾身の力を込め、頭目が握る刀の刀身を掌に押しつけている。それだけでなく、頭目が刀を奪い返そうと、押したり引いたりする動きを素早く察知し、力を逸らす必要がある。

どうすればいいんだ……。

白刃取りには成功したが、この後の処置に困る。もし刀に押しつけている掌の片一方だけに力が抜けたり、強く押しつけすぎたら、忽ちにして世之介の手は血だらけになり、あつという間に逆襲を食うだろつ。

びゅうびゅうと吹きさらしの屋根に吹き付ける風が、世之介の耳朵を打つ。まさに千日手といつていい状況だ。

はあはあと頭田の息が荒い。武器を奪い返そつと、無理な力を使つてしまつた結果だ。

世之介は声を絞り出し、話し掛けた。

「諦めろ……。その手を離せ！」

ひくひくと頭田の唇が動いた。歯を剥き出し、敵意を顕わにする。「だ、誰がてめえなんかに……！ それよつか、おめえのほうが危ねえぜ！ 今に、手下たちがここに来て、おめえを一寸刻みに切り刻んでやらあ！」

「それは、無理な話だな！ お前の手下は、全部われらが始末した！」

思わず声に、頭田はギクリと顔を上げた。

始末

世之介は背後から聞こえてきた声が、助三郎のものであることを認めていた。

「助三郎つ！」

助三郎の声には、驚きが感じられた。
「世之介さん。あなたのしているのは、白刃取りかね？ よくもそんな芸当が、やれたものだ。俺だって、やろうと思つてもできない技だよ」

「へへへー。」

頭田はぱっと刀から手を離し、さっと身を翻す。だだつ、と屋根の先頭あたりに駆け寄ると、そのまま蹲つた。
素早い動きで床の一部を持ち上げる。

撥ね上げ戸になっていたのだ！

頭田はするりと跳ね上げ戸に身を滑り込ませると、ぱたりと戸を閉めてしまった。

がくりと膝を突き、世之介は後ろを振り返る。助三郎の顔と、格乃進の顔が覗いていた。

格乃進は、ニヤリと笑いかけた。

「ちょっと手間取ったが、狂送団の連中は全員じつにか始末した。

今頃、畠や田圃の中で伸びていることだらう」

世之介は「あつ」と気がつく。

「連中を始末したのはいいが、茜と光右衛門の爺さん、それにイッパチはどうなつたんだ？ 爺さんといッパチは、あんたらの一輪車の側車に乗つていたんだろう？」

「心配ない。あれを見ろ」

格乃進は道路を指差す。指された方向を見ると、茜の一輪車の前照燈が輝いていて、その後ろに三台の一輪車が誰も操縦していないのに、勝手に走つていた。

助三郎が説明した。

「番長星の一輪車には、^{スライフ}追従機構が備わつていて。茜さんの一輪車に、残りの一輪車を追従させておいたから、茜さんが運転している限り、ああして従つてくる。結構、便利だろ？ 世之介さんの一輪車も追従させておいたから、取りに引返すことも無い」

「わづか」

世之介は短く答えると、頭巾の武器をがらりと床に放り投げる。気がつくと、全身から滝のよつて汗が流れ落ちていた。

「そいつは良かつた……。後は、あいつ……狂送団の頭目のは始末だな」

鈍い疲労による苦痛が、世之介の頭の天辺から、足の爪先まで漫つていて。しかし、世之介の闘志は、一枚片も鈍つてはいない。格乃進が心配そうな表情になつた。

「大丈夫かね？ 相当に疲れているようだが。頭目は、我らに任せればいいぞ」

世之介は「厭だ！」と叫んで立ち上がる。

闘志が再び世之介の力を奮い立たせた。一曰は認めた敵を、あつさり見逃すなど、考えられなかつた。

頭目が消えた床に膝まづくと、指先を手懸りに引っ掛け、持ち上げようとする。

固い！

びくとも動かない。恐らく、鍵を内部から掛けているのだ。

「じきなさい。俺がやろう」

助三郎が呟くと、世之介をどかせ、天板の僅かな隙間に、両手の爪先を引っ掛けた。

一声「むん！」と唸ると、天板の蝶番がメキメキと音を立てる。もう一度、助三郎が力を入れると、バキンと乾いた音を立て、弾けとんだ。

ぐわらりと、助三郎は天板を放り投げる。

深々とした闇を世之介と、二人の賽博格が覗き込む。

「誰から行くかね？」

助三郎の言葉に、世之介は勇んで答える。

「俺だ！」

世之介は穴に飛び込んだ！

穴の内部は狭い通路になつていて。

真つ暗で、何も見えない。手探りで両側の通路の壁を伝いながら、世之介は遙「無」、前進した。

ふと、指先が扉の取つ手のようなものを掴んでいた。世之介はぐいと捻じると、脱兎のごとく、内部に飛び込んでいた。

「さやあつ！」

何か柔らかいものに世之介は躊躇っていた。同時に上がる、鋭い悲鳴。

な、なんだ？

世之介はうろたえていた。鼻先に、きつい香水の香りが漂う。ぱちり、と音がして、さつと辺りに薄桃色がかつた光が満ちた。照明が点つたのだ。

「何よ、あんた！」

「うわっ！」

驚きに世之介は飛びのいていた。

目の前に、数人の女たちが群がつていて。全員、肌も艶かな衣装を纏い、柔らかそうな敷布や、布団に寝そべっている。

全員が眠そうな表情を浮かべていた。が、目の前に現れた世之介の存在を認め、怒りに変わる。

「誰よ、この唐変木！ ターちゃんの留守番、押し入れひつたつて、
許さないからね！」

「タ、タ、ターちゃん？」

世之介は背中を壁に押し付けた。
頭目の輸送車の内部に女がいる！

それも沢山！

女たち

一人の女が立ち上がった。背が高く、金髪を高々と結い上げ、僅かな布きれの衣装を纏っている。胸元は大きく開き、盛り上がった乳房が零れ落ちそうだ。

「そうよ、拓郎ちゃんは、あたしたちの田^{シタ}那様、それに狂送団^{マッシュ・マッシュ}の頭目^{シタ}だもん！」

もう一人の、口^ヒちは小柄で、ビニをとつても丸っこい身体つきの女が叫んだ。

「あんた、新顔ね。ターちゃんが留守だからって、忍び込んだんだろ？けど、あたしたちは絶対、他の男には身体を任せせるような軽い女なんかじゃないからね！ も、とつとつ出て行くんだ！」

やや年増の、長い髪をひとつめにした女が低い声を押し出す。全員の凝視に、世之介の反発心が、むらむらと湧き上がる。

「俺は狂送団なんかじゃない！ おめえらの頭目と勝負しに来たんだ！ 野郎、俺に敵わないと怖氣づいて、わざとトーンズラしやがったから、追いかけてきたんだ！」

「ターちゃんが……あんたから、逃げた？」

ぱつり、と最初に叫び声を上げた女が呟く。世之介は苛々と答えた。

「ああ、あの野郎、とんだ卑怯者だ。俺に武器を取り上げられて、スタコラ逃げ出しあがつた……」

そこまで答えて、世之介は言葉を途切れさせた。女たちが奇妙な表情を浮かべ、じりじりと近づいてくる。

「な、何だよ、おめえら……」

「あんた、ターサーちゃんに勝つたんだね……。で、ことは、あんたが新しい狂送団の頭目つて順番だわ」

年嵩の女が、皿をキラキラさせて近寄つてくる。両手が伸ばされ、世之介の顎にひとりと触れた。

「わっ！ 寄るなー！」

世之介は焦つていた。何だか、酷くトーンテモないことが起きそうな予感がする。

旦那様！

「うふん……。あんたって、可愛い！」

まるまつちい身体つきの、肉感的な女が、身体を世之介に押しつけてくる。あちこちから手が伸ばされ、世之介の全身をまさぐる。

「今夜から、あんたがあたいらの、旦那様よつ……！」

世之介は仰天した。

「何で、そんな馬鹿な話になるんだ！」

「だつてえ」と、両手をいつもびっくりさせ見開いているような女が唇を尖らせた。

「それが？ 捉？ だもん！ 喧嘩の一番強い男が、狂送団の頭目で、あたいらの旦那様つて、撃に決まってるんだもん！」

「ねえ、あたいら、可愛がつてえ」

「きやあ！」と、今度は黄色い歓声を発し、女たちが一斉に群がつてきた。

「わあ！」と世之介は思い切り両手を突つ張らかせ、女たちの柔らかな身体を押しやつた。

「ぜいぜい、はあはあと息を荒げ、世之介は大声で喚いた。

「そんな勝手な話、俺は知らねえつ！ 兎に角、頭目の……拓郎か？ そいつは、どにいいやがんだ！ 何としても、決着をつけてやるー！」

世之介の反応が意外だったのだろう。女たちは吃驚したかのよう
に、ポカンと口を開け、まじまじと世之介の顔を見上げている。

「拓郎ちゃんだったら、多分、運転席じゃない？」一人になりたい
ときは、いつもあそこで過ごすから

詰まらなそうに、大柄な女が答えた。

世之介は頷いた。

「運転席か。どう行けばいいんだ？」

「あっち」と、瘦せた女が、長い指先を通路の奥へ指し示す。世之
介は通路を覗き込んだ。部屋の明かりに、僅かに通路の先が見えて
いる。

扉があつた。その先が運転席なのだろう。

世之介が部屋を飛び出そうとするとい、女たちのリーダー格らしき
年長の女が袖を掴んで引き止める。

「ねえ、行っちゃうの？ あたいたちを、どうすんのよ？」
「知るかっ！」

女の手を振り払い、世之介は突進した。

啜り泣き

足音を忍ばせ、世之介は通路をじりじりと進んでいく。田の前にあるのは、運転席に続く扉である。背後に、女たちの部屋からの光が零れ、何とか形を見分けることは可能だ。

ちらり、と振り返ると、扉を開けて、女たちが首を突き出して、こちらを覗き込んでいる。

世之介と視線が合つと、ビックリしたが、一いつ瞬と笑顔になつて、壮んに手を振つてゐる。一人の娘が、口だけで「ガンバレ!」と声援を送つていた。

そこへ、助三郎と格乃進が音も立てず、するりと天井の入口から降りてくる。

女たちは、一人の闖入に、ぎくしゃくなつた。慌てて世之介は唇に指を押し当て、静かにするよつと図する。

助三郎は「承知した」といふと、元通り無言で頷いた。

するすると二人が近づき、助三郎が顔を近寄せ、小声で「ビックリのだ?」と囁いてきた。世之介は扉を指し示した。

「ここに頭目の奴が隠れてるらしい」

「そうか!」と、助三郎は小声で囁き返す。

世之介は耳を扉に押し当てる。一人も、世之介と同じように、扉に耳を押し当てる。

何か聞こえる。啜り泣きだ!

「ママ……ママ……！ 僕ちゃん、とっても怖い男に虐められたんだ……！ 悔しそよお……！」

すると何か宥めるような、低い声が応じる。「ちひは、よく聞こえない。」

世之介と、二人の賽博格は顔を見合せた。助三郎と格乃進は、口をへの字に曲げ、妙な表情で首を捻つている。

「おい、まさか……？」

格乃進が酸っぱいものを、口一杯に嚙ばつたような顔つきになつて呟いた。助三郎は頷いた。

「間違いない！あの頭目の声だ。声紋が一致している！」

世之介は扉に覗き窓があることに気付いた。蓋があり、滑らせるようになつていて。指先で覗き蓋をするりと押し開けると、四角い小さな窓から黄色い光が零れてくる。

世之介は窓に手を押し当てた。

運転席は仄々としている。

大きな窓に、運転席と様々な計器が並ぶダッシュ・ボード。運転は無人で行っていると見え、席には誰も座っていない。

運転席の後ろに、数人が掛けられるほどの大な長椅子があつて、そこは小さな居間ほどはあつた。

天井からは、きらきらと輝くシャンデリアが垂れ下がり、車の震動に微かに左右に揺れている。

長椅子には、頭目がいた。頭目を優しく抱きかかえるように、母親らしき女が背中を見せて座っている。

頭目は母親の膝に顔を押し付けている。母親は頭目の数倍ほどの巨躯で、真っ黒な衣装を纏っている。まるで、打ち上げられた鯨である。

頭目は啜り泣きながら、母親に訴えている。

「僕ね、とっても良い子にしてたんだよ！ 女たちも、全員平等に愛してたし、手下にだつて舐められないよう、メンチを切つていたし……なのに、なんで、あいつは僕を虐めるの？ 悔しいよ！……！」

「おえつー」と佐々介の口中に、苦いものが込み上げてきそうになる。

明らかに四十代後半と見える頭目が、まるで小さな子供のようである。母親に甘えているのを見るのは、ぞつとする眺めである。

母親は頷きながら、頭田に話しかける。

「 そうなの。悪い奴だねえ。そいつは、どんな男だったんだい？」
「 若い奴さー。ひょろひょろの、優男でさ。ところが、とっても強
いんだよ！ 真っ赤なガクランを着ていて、背中に？男？つて刺繡
がしていたよ！」

頭田の説明に、母親はギクッと身を強張らせた。

「 何だつて？ ？男？の刺繡がしてあつた、真っ赤なガクランって
言つたね？」
「 そうや、じうじたのママっ！」

頭田は母親の態度の急変に、上体を持ち上げ顔を上げた。

世之介は驚いた。

頭目の、右目の眼帯がない！
しかも、右目はパツチリと見開いている。

片目ではなかつたのだ！

つまり、片目に見せかけ、歴戦の勇士に見せかけていたのだろう。
母親はぐつと顔を上げ、何か考え込んでいる様子だ。角度が変わ
り、世之介はハツキリと、頭目の母親の横顔を見ることができた。

ぐつと張り出した獅子つ鼻。真つ黒な眉毛は太く、ぴんと急角度
に持ち上がっている。

分厚い唇に、巨大な顎の持ち主で、食い縛つた歯は碁石のよう
に大きい。岩だらうが鉄だらうが、平氣で噛み砕いてしまいそうだ。

それに、ドギツイ化粧！

まるで、ありつたけの化粧品を顔中に塗りたくつたかのようであ
る。

「それは？伝説のガクラン？つてやつさ！ そのガクランを身につ
けると、信じられないような力を得ることができるつて噂だ。あく
まで噂だと思っていたけど、本当に存在したんだねえ……」

母親は立ち上がる。が、巨大な身体つきのため、完全に立ち上
ることはできず、中腰の体勢だ。その中腰のまま、運転席へと身体
を捻じ込むように移動して座り込んだ。

運転席で、何か操作している。

マイクを握っている。ところどころ、どこかへ送信するのか？
母親は、ぐいっとマイクを握りしめ、話し掛けた。

「ひびき？ ピッグ・バッド・ママ？。緊急の要件あり！ ？ウラバ
ン？ 応答願います！」

？ウラバン？！

世之介は、二人の賽博格^{サイボーグ}と顔を見合わせた。
助三郎と格乃進は、真剣な表情になっている。

「ひびき？ ピッグ・バッド・ママ？ 何だね、緊急の要件とは？」

スピーカー
拡声器から、ざわざわした返答が聞こえてくる。受信状態があまり良くなく、声の調子はよく判らない。母親は噛み付くようにマイクに話し掛けた。

「？伝説のガクラン？が出現しました！ うちの拓郎ちゃんが、そ
いつに襲われ、瀕死の重傷を負つてます！ 仇を討つてくださいま
すか？」

瀕死の重傷だつて？

世之介は、あまりに大袈裟な母親の表現に、真底あきれ果てた。

よつし、それなら本当に瀕死の重傷にしてやるひじやないか！

世之介はドアの取つ手を握りしめた。

思い切り扉を押し開くと、その音に頭田と母親がギョッとなつて、世之介に顔をねじ向ける。

「ママー、」いつだー、」いつが、僕ちゃんを虐めたんだ！」

頭田が口を一杯に開き、田をまん丸に見開いて喚いた。顔には恐怖の表情が貼りつき、血の氣は引いて、真っ青になつてゐる。運転席から身体を捩り、母親は憤怒の表情を顕し、世之介を睨みつけた。母親の怒りの表情のほつが、頭田より数十倍も迫力があった。

「お前かい？　あたしの可愛い拓郎ちゃんを虐めたのは！　許さないよ！」

驚くほど身軽に、母親は一挙動で運転席から飛び出してきた。ぱつと居間に飛び降り、がばっと両足を開き、身構える。

「そっちから仕掛けたんだりつー、売られた喧嘩は、買うのが筋つてもんだ！」

世之介の返答に、母親は益々かつかと熾き火のように顔色を燃え上がらせた。

化粧をたつぱり塗りたくなっているのに関わらず、どす黒く鬱血した顔は、まるで「王」である。いや、むしろ歌舞伎の隈取のよつで、凄い迫力だ！

頭田は、すでに運転席へ避難して、ぶるぶるガタガタ震えて隠れ

ている。

真っ黒な衣装を身に纏う母親の姿は、まるで大猩々そつくりである。母親は大猩々そのもののように大口を開け、一声がおーと吠えると、両腕を伸ばして世之介に掴みかかってきた。

母親の両手がぎりぎりと世之介の首根っこを掴み、猛烈な速さで振り回す。だだだつ、と両足が動いて、世之介の背中を、運転席の壁に叩き付けた。

衝撃に、世之介は息が詰まつた。

「死ねえ……！」

ぐいぐいと母親は両手を使って、世之介の首を締め付ける。世之介の両足の爪先が、床から浮き上がった。頸動脈が圧迫され、どかんどかんと血流が頭の内部で反響している。

必死の努力で、世之介は足を持ち上げ、ぐっと力を込める、蹴り上げた。

「うわあっ！」

母親の巨大な身体は、一蹴りで反対側の壁へと叩きつけられる。どすん、と大きな音が響き、天井のシャンデリアがチリチリと音を立て、派手に揺れた。

そこへ、二人の賽博格が飛び込んでくる。

「待て、それまで！ こんな狭い所で暴れるのは危ないぞ！」

助三郎が大きく両手を広げ、制止する。

母親は、ぐいっと一人に顔をねじ向かた。

「なんだい、また新手かい？」

格乃進は穏やかに話し掛ける。

「われわれは、旅の者だ。走っていたところ、いきなり襲われ、やむなく反撃した。だが、それは本意ではない。われらは【ツツ・パリ・ランド】の?ウラバン?とやらに非常に興味を持っている。そなたが?ウラバン?と懇意なら、教えて欲しい。いつたい?ウラバン?とは、何者なのだ？」

ひくひくと母親の唇が痙攣した。

「?ウラバン?の正体を知りたかつたら、【ツツ・パリ・ランド】へ行くこつた！ しかし、生きて帰れると思うなよ！ ?ウラバン?は、あたしらの味方さ！ あたしが連絡したから、あんたちは?ウ

「ラバン？ にやつつけられた手箸になつてゐるんだ！ いい氣味だ」

運転席から頭田が叫ぶ。

「ママー、その一人は、もつと手強いやー、きつと賽博格なんだー！」
「何つー！」

母親は驚きの表情を浮かべ、頭田に尋ね返した。

「本当かい？ その一人が賽博格つてのは、

頭田は震えながら答えた。

「そうさー、隆志つて？ ラバン？ の手下が、そいつらのことを報告しているんだ。賽博格相手じや、いくらいママだつて敵わない。ねえ、逃げよつよー！」

「へへへー！」

母親は、ぐつと睨み返すと、さつと運転席に立ち戻る。

一聲、「おやらばだよー！」と叫ぶと、ぐいっと手元の棍棒を力一杯、引いた。

がくん、と衝撃が走り、田の前の運転席が出し抜けに離れていく。輸送車の前部分の接続を切断したのだ。

見る見る先頭部分が後部と離れ、前方へと小さくなつていった。世之介の立つている後部には動力源がなく、従つて、どう対処することもできない。

三人は呆然と遠ざかる先頭部分を見送っていた。

前部の、牽引する部分が離れた。

世之介の立つている後部車両は、惰性でいくらか進んでいたが、やがて当然の「」とく停止した。

茜が全員の一輪車を引き連れ、止まつた巨大な輸送車の後部に近づいてくる。茜が一輪車を停車させると、他の三台の一輪車も同じように静かに停まつた。

格乃進の一輪車に接続されている側車から、光右衛門がゆつたりと杖を片手に立ち上がつた。

光右衛門は世之介の顔を見上げ、眉を顰め、心配そうな表情を浮かべた。茜は世之介に向かつて、声を張り上げる。

「ねえ、何があつたの？」

世之介は手を口に当て、叫び返した。

「頭目がいたんだが、逃げられちまつた！ ちょっと待つてる……」

地面に飛び降りる。世之介の一輪車は、大人しく待つてくれた。素早く跨る世之介に、茜は呆れたように声を掛けた。

「ちょっと、どこ行くつもり？」

世之介は怒鳴る。

「あいつを追いかけろ！ 逃がしちゃ おけねえ！」

茜は一輪車から飛び降りて、把手を握る世之介の腕を上から押された。

「待ちなさいよー。あんた、ひどく疲れた顔をしているわ。少し休憩しなくちゃ」

さつと助三郎と格乃進が輸送車から飛び降りてくる。助三郎は茜の言葉に全面的に同意した。

「さよー。世之介さんは、自分では気付かないだろうが、ひどい疲労をしてこる。無理をすると、身体に悪い」

世之介は茜の言葉に、側鏡を覗き込んだ。鏡の向こうから、田の下に黒々とパンダ隈を作っている自分の顔が映つている。成る程、確かに疲れているようだ。

だが、関係ない！ 世之介は意地になつていた。

「煩せえつ！ 僕は何があつても、奴を追いつめてやるんだ！ 犯められて堪るか！」

叫ぶ世之介だが、不意に視界がぐらつと揺れるのを感じる。側の茜の顔が、近づいたり、遠ざかる。

茜の背後から世之介の顔を覗き込む光右衛門の表情が、さらに厳しさを加え、憂慮を浮かべた。

なんだ、何がどうしたんだ？

世之介は狼狽した。

ぐおおおおお！ と、軒が聞こえてきた。

見ると、助三郎の一輪車の側車で、イッパチがこの騒ぎの中、全く田を覚まさず、お氣楽な顔を仰向け、爆睡しているところだった。

「いつめ……。

世之介は呆れてイッパチの軒に聞き入っていた。

ぐおおおおお！

ぐおおおお！

イッパチの軒は、小さくなったり、大きくなったりしている。聞いていると、何だか世之介まで眠くなる。ぶるつ、と世之介は首を振った。

寝ていられるかつ！

が、まるで眠りの妖精による棍棒の一撃のように、世之介に睡魔が襲い掛かる。一輪車の棍棒を握りしめる手から力が抜け、ぐらりと上体が泳ぐ。

「世之介さん！」

茜の悲鳴が、遙か遠くから聞こえた……ようだつた。光右衛門が

叫ぶ。

「いかん！ 気を失いそうじゃ……！」

足元の地面が、なぜかぐいぐいと世之介の視界に近づいてくる。世之介には、近づく路面が、とても愛しいものに思えていた。

暗闇が、世之介を優しく抱きとめた。

眩しい光に、世之介は目を瞬かせた。

がばり、と起き上がるといッパチの呑氣^{のぶき}そうな顔が近々と覗き込んでいる。

イッパチの杏^{アンコ}葡萄^{ローライ}組^{ルーム}偉童^{ヒドウ}の顔が綻んだ。

「よかつた、若旦那がお目覚めで、」ぞんすよー。」

「おお」と応えがあり、助三郎が上から覗き込んでくる。助三郎の背後には格乃進の顔も見えた。

助三郎は世之介の顔を確認して、「つむ」と頷いた。

「血色が良くなっている。一晩、ぐっすり眠つたのが良かつたのだ」

格乃進も口を開いた。

「さよう、世之介さんのか伝説のガクラン^{ガクラン}は、確かに爆発的な体力を与えるものだが、同時に疲労も凄まじく蓄積する。あのまま無理をしていたら大変な事態になつていたな」

「一晩……？」

世之介は呴くと、周りをきょろきょろ見回した。天井があり、壁が周囲を取り囲んでいる。

つまりは、部屋だ。上体を起こすと、自分が柔らかな寝具に寝かされていたことに気付く。

壁には小さな窓があり、朝の光が差し込んでいた。壁一面には、べたべたと女性の写真が飾られている。ほとんどが水着で、中には水着すら身につけていない……つまりはヌードの写真すらあった。部屋の隅には、刀剣や、棍棒、弩などが乱雑に置かれ、何着もの

服が、乱雑に脱ぎ散らかされている。床には一面、食べ物の容器が散乱している。見るからに薄汚いこの部屋で、一晩も過ごしたかと思ひ、やりきれない。

世之介の顔色を見て、イッパチはすまなそつ表情になつた。

「どうも、こんなところに若旦那を寝かせるなんて、気が進まなかつたんだ」「やんすが、他に空いている部屋がなかつたんでやんす。」「こは狂送団の、頭目が使つていた部屋なんで」「やんすよ」

さうか、狂送団の頭目のお部屋だつたのか。世之介は腑に落ちた。

「世之介さんが田を覚ましたの？」

黄色い女の歓声が、部屋を満たした。
なんだろうと、そちらを見ると、部屋の扉が開け放たれ、そこから頭目のおたちが、興奮した様子で覗き込んできた。

世之介の目と合ひ、全員きやつときやと手を振つて、満面の笑みを見せてくる。何と、世之介に向かつて投げキスを送つている娘もいた。

「ヨノちゃんー？」

「な、何だあ？」

「世之介は叫んでいた。イッパチは一タ一タと下卑た笑いを浮かべている。

「狂送団の頭田の奥さんたちでげすよ。しかし頭田を世之介の若田那が懲らしめたので、今は若田那が『主人つて』とにかく……。ハハハ！　若田那……おモテになりますねえ」

「ば……馬鹿つー！」

世之介の顔に、かつと血が昇る。

しかし女たちは、まるで世之介の困惑にお構いなしで、どうやら騒がしく部屋に踏み込んで、あつとこう間に周りを取り囲んだ。日々に騒がしく話し掛ける。

「あんた、世之介さんつて、名前なのねー！」

「世之介さんじゅ、堅苦しいわ。これからヨーハンつて呼ぼうかしら」

「あつー、ヨノちゃんつて、可愛いつー！　絶対、ヨノちゃんでしょーうー！」

「ねえ、ヨノちゃん、これからどうするの？　あたいたちと、ベッドに一緒にいる？」

「わやああつー！　今の大胆！　でも、ワクワクだわ……」

世之介は苛々してきた。

「うるさい　こつ！　少しほ静かにしたらどうだつー！」

力一杯、声を張り上げる。

女たちは毒氣を抜かれ、目をパチクリさせている。

「説明してくれ……。いつたい、何が、どうなつているっていうんだ？」

世之介の質問に、年長の女が、当然とばかりに捲し立てた。

「だつて昨夜、あんたが前の頭目の拓郎をやつつけたんでしょう？つまりは、タイマン勝負に勝つた、ってことよね。だから、あたしたち、あんたを新しい、狂送団の頭目として迎えるって訳。当然、あたしたちは、新しい頭目のスケつて訳だから……」

といひどいろ、理解できない単語が挟まれているが、それでもじわじわと、世之介の脳裏に女たちの言葉の真意が沁み込んできた。

頭目のスケ

説明をした茜は、言葉を切ると、実に色っぽい表情を浮かべる。

「あたいいら、全員、あんたのスケなんだからね……。平等に處してくれるって約束しないと承知しないから！」

すりつゝ、ヒセノ介は寝具の上で後じたる。

「おい……。まさか、そんなこと……？
「何がそんなことよつてー？」

怒りを込めた声は、茜のものだつた。
ぎくりとそちらを見ると、茜が部屋の入口で腕を組み、軽蔑ありありの視線で、ヒセノ介を睨んでいる。

女たちは茜に見せ付けるようにヒセノ介の周囲に集まると、腕を回したり、身体を押し付けてきた。
目のパチチリとした、小柄な女が茜に向かって、挑みかかるよつな口調で叫んだ。

「何よ、あんた！ あたいいら今日から、ヨノちゃんの女なんだからね！ それとも、あんたも、ヨノちゃんのスケの一人に加わりたいの？」

茜は、完熟トマトのように真っ赤になつた。

ヒセノ介は女たちの腕を振り払つと、寝具から飛び降りた。指を上げ、取り囲んでいた女たちに命令する。

「いいか、良く聞け！俺はそんな与太話、金輪際、御免だからな！『冗談じゃねえ……お前らの面倒なんか見られるかっ！』

「ヨノちゃん……」

一人の女が呼びかける。世之介は、ぶんぶんと何度も首を振った。
「そのヨノちゃんってのも止めろー。俺には但馬世之介って名前があるんだ！」

怒りに任せ、世之介はどすんどすんと呪文を立て、部屋を飛び出した。

「お早う御座いますっ！」

部屋を飛び出し、輸送車の後部の階段から外へ踏み出すと、出し抜けに大勢の男の声に出迎えられる。

眩しい朝の光の中、昨夜の狂送団の団員メンバーがぎらりと勢ぞろいし、世之介を待ち受けていた。

世之介は、思わず戦いの構えになる。

「なんだ、てめえら、やるのか？」

拳を握りしめる世之介に、昨夜蹴り飛ばした海象のよう^{セイウチ}に太った男が、慌てて手を振つて話し掛けた。

「ちっ、違いますって！ あっしら、新しい頭田に、朝のご挨拶をしにきただけで……」

意外な海象男の言葉に、世之介はポカンと全身が弛緩した。ダラリと口も開けっぱなしになる。

よつやく、言葉を振り絞つて訊き返す。

「新しい頭田？」

「そうです。あんたが、新しい頭田つてことになりましたんで」

「俺がつ？」

世之介は驚きに仰け反つた。

「何で、そんな無茶苦茶な話になるんだ！ 俺は絶対、断固として、何が何でも、金輪際、そんな面倒臭いことは御免だからなー！」

海象男は揉み手をして、話し掛けた。満面に作り笑いを浮かべ、必死に愛想を振りまいていた。

「だって、世之介さんは昨夜、拓郎さんをやつつけたじゃないですか！だから、世之介さんが、今では狂送団の新しい頭目になつたんですよ！ねえ、うんと仰つて下さい。このままじゃ、あっしゃ、どうしていいか、判らないんで……」

世之介は、ブスリと唇をひん曲げ、肩を竦めた。

「お前、今まで狂送団つてのり、道行く連中を襲つていたんだろう？ だったら、それを続けるなり、厭なら解散するなり、勝手にやればいいだろ。俺は知らねえ！ 第一、俺は【ツツ・パリ・ラン】を指すつて目的があるんだ。お前らなんかの、頭目など、やつてられつか！」

「【ツツツパリ・ランド】…」

海象男以下、狂送団の全員が、目を輝かせた。

「頭田がそこを手指すつてことなら、あつしらも、ご一緒にいたしま
すぜ！ そうかあ……頭田が【ツツツパリ・ランド】をねえ……」

「三ノちゃん【ツツツパリ・ランド】に行くの？」

背後から声が振ってきて、振り返ると、わつきの女たちが顔を揃
えて、出口近くの階段に舞いていた。

「わあ！ あたいらも一度、行つて見たいと思つてたんだ！ 素敵、
素敵！」

きやあきやあと騒がしく階段を駆け下り、世之介の周りで飛び跳
ねた。

助三郎、格乃進、茜、イッパチの順で輸送車から外へ出てきた。
その顔ぶれを見て、世之介は首をかしげた。

助三郎に向け、尋ねかける。

「あの爺さんの姿が、見えねえようだが

助三郎は「爺さん」といつ言葉に、一瞬むかつと眉を顰めたが、
それでも精一杯の忍耐力を示して頷いた。

「ご隠居なら、朝早くからあそいで……」と、指を挙げ、道路の彼
方を指し示す。

輸送車からかなり離れた道路の真ん中で、光右衛門がぽつりと立

つていた。腕を上げ、何か顔に小さな筒を押し当てる。

世之介は大股に歩いて近づき、光右衛門に向け、話し掛けた。

「朝から、何やつてるんだい？ 爺さん」

光右衛門は世之介の言葉に振り向き、にっこりと笑顔になった。手に持っていた筒を世之介に向ける。筒の先端は、レンズになっていた。

「これで、向こうを見ていたところです」

答えながら、筒を世之介に手渡す。

光右衛門の持っていたのは、電子走査望遠鏡らしい。祖先の光学望遠鏡とは、機能は同じでも、算盤とコンピューターほどにも性能に開きがある。

世之介は、光右衛門の見ていた方向に望遠鏡を向けた。

地平線近くに、何か「ゴチャゴチャ」とした建物の群れが見えている。距離が開きすぎているため、空気の揺らめきで、細部はよく判らない。世之介は調節輪を手探りし、映像に補正を加えた。

不意に画面がクリアと確定した。内部のコンピューターが、レンズに捉えた映像に補正を施し、空気の揺らめきを取り去ったのだ。

色とりどりの建物が立ち並び、背後に大きな岩山が聳えている。手前には何か門のようなものがあり、そこに下手糞な字で、何か書いてあつた。

望遠鏡を田から引き離すと、世之介は光右衛門を見詰めた。

「あれが……？」

光右衛門は大きく頷いた。

「そうです。あれが【ツッパリ・ランド】なのです！」

世之介は一輪車に跨り、ビニールでも真っ直ぐ伸びる道路を、ひた走りに走っている。

いよいよ彼方に大きく【ツツバリ・ランド】が見えてきた！

今まで単なる名前だけに過ぎなかつたのだが、やつと田の前に現れることにより、世之介は何か重苦しい気持ちから解放されたような気分であった。

しかし……。

一輪車の側鏡を覗き込んで、世之介は内心、苦りきつっていた。結局、狂送団の全員と、以前の頭目 拓郎の女たちが世之介の後を従いてくる展開になってしまったのである。

輸送車の住居部分には動力源がないため、狂送団の全員が一輪車に引き綱^{ロープ}をつけ、牽引している。その様子はまるで西部劇の幌馬車^{ヒック・トレ}隊である。

女たちは住居部分に集まり、あちこちの窓から顔を突き出し、風に吹かれて呑気^{ヒカセ}そうな表情を浮かべている。中には引き綱を繋いでいる狂送団の仲間と、楽しげに談笑している女もいた。

世之介の隣には、いつものように茜が自分の一輪車を運転している。

が、茜は何が面白くないのか、朝から一切、世之介とは口を利こうとはしない。むすつ、と押し黙り、世之介が話しかけても、プライドを向いて知らん顔を決め込んでいる。

まつたく、女つてのは判らない……。

茜のそんな様子に、世之介は苛々していた。しかし、改まって仲直りなど、今の世之介には無理な相談だ。

そんな雜念をチラとでも考へると、すぐに「男の面目おもてが立たねえ！」と反射的に思つ精神構造になつてゐる。知らぬ間に、世之介は番長星を支配する論理に、がんじがらめになつていた。

助三郎と格乃進の一輪車も道路を並走している。一人の一輪車の側車にはイッパチと、光右衛門が各自納まつてゐる。右左にくつついている側車同士、イッパチは道路を挟んで光右衛門と、のんびり話し込んでゐる。

「へい、あつしは元々が、寄席で前座や、切符のもざりなんぞをやつております、（ハナシ）帮間杏菊紺偉童（エイクク）でござんす。本当はちゃんとした料亭なんぞで、旦那衆のお相手なんかを務めたいとこ（ココ）でげすが、生憎あつしの芸能腑（エイノウフ）呂愚羅無（ロウガラム）が寄席向（ムカシ）きだつてことで、前座などを務めさせて貰つてたんでげす」

「ふむふむ」と機嫌よく相槌を打ちながら、光右衛門が尋ね返す。

「それで、どうして寄席のお務めを辞めて、世之介さんとのこ（ココ）で働く経緯になつたんですかな？」

イッパチは渋い表情になつた。

「へえ、それが、失敗を仕出かしましてね。前座で面白おかしく客を沸かせたのは良かつたんでげすが、その時やつてたネタつてのが、お上をやんわり批判するものだったのが、運のつきでさあ。『杏菊紺偉童』（エイクク）ときが、お上を批判するとは怪しからぬ！」と、そりやあもう、きつこお叱りで。そのままだと、あつしは解体所送りになる

ところだつたのが、世之介若旦那のお父つつあんが同情して、身元引受人になつてくれましたんで、一命を取りとめた と、こういふ訳でげす。だから、あつしは、大旦那には足を向けて寝られねえ、つて訳でして

「成る程、成る程」と光右衛門は一口一口と柔和な笑みを浮かべて聞き役に徹している。

ちえ、呑氣な奴らだ……。

世之介は前方を見詰めた。

いつの間にか目指す【ツッパリ・ランド】が、前方に大きく見えできている。

正門

巨大な正門に【ツッパリ・ランド】の文字がでかと貼り付けられている。文字は怖ろしく下手糞な字体で、なんとか判別できるほどである。

呆れたことに、近づいてみると、文字は膠合板ペーリヤに油漆ペイントを塗りつけただけの、素人仕事であることが一目瞭然である。

正門自体も、素人のやつつけ仕事であることが良く判る。長さも太さもまちまちな材木を、釘や綱で大雑把に組み合わせ、そこに大慌てで色とりどりの布や、ボール紙を貼り合わせてある。ちょっと強めの風が吹けば、あつという間もなく倒れてしまいそうだ。

近づいてみると、わんわんと騒音が聞こえてくる。

いや、騒音ではない。音楽だ。ただし、スピーカー拡声器の限界近くまで音量を上げ、さらに無数の違った音楽を同時に流しているので、騒音にしか聞こえない。

正門近くには駐車スペースがあり、そこには無数の一輪車、四輪車が停車し、多数の男女が音楽に合わせ、手足を無心に動かして踊っている。よほど激しく踊っていたのか、全員、男も女も顔や手足にびっしりと汗を浮かべている。

男女の年齢はまちまちだ。下はほとんど小学生くらいにしか見えない幼い男女から、上は杖の厄介にならないと歩けないくらいの老人まで、がんがんと音量を最大にした音楽に合わせて、踊り狂っていた。

食べ物の匂いに、世之介の食欲が刺激される。【ツッパリ・ラン

ド【に到着する前、世之介はすでに朝食を済ませていたが?・伝説のガクラン?は通常の数倍の食糧を必要とするよう、すでに空腹を憶えていた。

食べ物の匂いは、駐車場のあちこちに張られている天幕テントから漂っている。天幕には様々な屋台が出店し、そこでは焼き蕎麦だの、鳥餃子だの、たこ焼きだの、お好み焼きだの、様々な食べ物が旨そうな匂いを発散させている。醤油の焦げる匂いに、世之介の胃は「ぎゅう～～」と盛んに空腹を訴えている。

正門を通過すると、その場にいた全員が顔を挙げ、新来者に目顔で挨拶を送つてくる。

いや、茜の言い方に従えば「ガンを飛ばす」といったほうが正確である。

口々に

「何だ、この野郎……」

「やんのか、オウ！」

「かかってきな！」

ヒ、わざとダミ声を作り、壯々に睨みつけ、挑発している。もつとも大半の連中は、ただ叫んでいるだけで、一歩も近づいては来ない。

つまりは番長星の、通常の挨拶というやつで、もし世之介が本気で殴りかかったら、相手は吃驚仰天して、最初に出会った隆志のように泣き出してしまうだろう。その辺が世之介には段々、判つてきた。狂送団のような連中は、あくまで例外なのだ。

正門を潜り抜け、世之介は【ツッパリ・ランド】が遠くからゴチャゴチャとした幾つかの建物の集合に見えていたが、近づいて初めて

て、一つの建物であることに気づいていた。

建物の壁が、様々な色に塗られているため、遠目からは幾つもの建物の集合に見えていたのだ。

真ん中に巨大な時計塔が聳え、その両側に翼を広げるよつに建物が左右に伸びている。階数は多い。数えてみて、世之介は建物の階数を三十以上と見積もつた。

しかし、建物の形を見て、世之介は何かに似ていると感じていた。

ああ……！

世之介は合点が行つた。

大きさはこぢらの建物が遙かに大きいが、建物の形としては、学校の校舎である。やや離れたところにある大屋根の建物は、体育馆か、講堂であろう。

とすると、この駐車場は本来は校庭なのだ。正門は校門とこつことになる。

その校門を狂送団の一輪車が通過すると、それまで壮んに示威行動を繰り返していた周りの連中が、ぴたりと鳴りを潜める。

全員の顔に恐怖の色が浮かんでいる。いそいそとお互い囁き合ひ、「狂送団だ！」と言ひ合つてゐる。

狂送団の男たちは、ジロリと周りを睨みつけ、歯を剥き出し、唸り声を上げた。まるで野犬の群れである。何人かは武器を抜き放ち、世之介が最初見たときのように、地面をカリカリと削つてドキドキするような刃を見せびらかせてゐる。

茜は黙つたまま、真剣に周りの群衆に目をやり、何か探しているようである。

「茜、兄さんを探しているのか？」

世之介が言葉を掛けると、茜はびくつと身を震わせて目を向けてきた。今までの反抗的な態度は潜められ、どこか頼りない子供のよ

うな顔になつてゐる。

茜は一つ「うん」と頷いていた。

「【シッパリ・ランド】に来れば、見つかるんじゃないかと思つてたけど……」「

後は言葉を濁した。

茜の兄は、確か「まさむし勝」とこつ名前のはずだ。「勝又勝」とは、何だか語呂合わせのようで、世之介には強い印象があった。

適当な空き場所を見つけ、世之介は一輪車を停車させた。校舎を見上げる。

校舎の背後に、岩山が压し掛かるように聳えている。高さは五百メートル以上はあるだろうか。草木一本さえも生えていない灰色の岩山が、無愛想に居座つている。

奇妙な形をしている。とても自然の造型とは思えない。なだらかに立ち上がった裾野から、いきなり上部は別の形になつていて、

世之介は、そこにいた学生服の若い男につつかと近づくと「ちよつと聞きたことがある」と前置き抜きで話し掛けた。

話しかけられた若い男は、ポカンと口を開き、目を虚ろにさせた。

年齢は世之介より一~二才ほど年上か。これといって特徴のない、平凡な顔つきをしている。

特徴といえば、男の頬に一面に汚いニキビがとこり構わず噴き出しているのが、特徴となっている。男はビクビクとした態度で、それでも精一杯の虚勢を示してぐつと背中を聳やかせた。

「な、なんでえ!」

「こりは【ツッパリ・ランド】だらう」

「へつ!」と男は嘯いた。

「当たり前だあ! 他のどこと間違えて、ウロチヨロ口しやがったんだ?」

世之介はちよつと腕を伸ばし、男の喉下に手をやつて締め上げた。

「舐めんなよ…… 聞かれたことだけに答へればいいんだ!」

世之介の押し殺した声に、男は見る見る顔を青くさせた。忽ち態度が、塩を振った青菜のよつて、萎びて従順になる。

「な、な、なにを…… お尋ねで……?」

「勝又勝つて奴を知らないか? 背は六尺くらいあって、ひどく身體のでかい野郎だ」

世之介は胸ポケットから一枚の写真を取り出した。茜の兄の部屋に貼られたものを、一枚だけ拝借してきたのである。写真を見て、男の顔に変化が起きた。

「知っているのか？」

「あ、ああ……！」

男はガクガクと機械仕掛けの人形のように頷く。一人の遣り取りを耳にして、茜が素早く近寄ってきた。

「知っているの？ お兄ちゃんは、無事？」

男は盛んに唇を舐めていた。どう答えようか、計算しているようである。

ちらり、と男の視線が、校舎の背後に聳える岩山に向かう。

「その男なら【ウラバン】に会いに行つたぜ」

世之介は、男の視線を追つた。

「あの岩山か？ 【ウラバン】は、あの岩山にいるのか？」

「そうや」と男は頷いた。怯えきつた表情で言葉を続けた。

「【ウラバン】は、あの【ローゼント山】にいる！」

【リーゼント山】！

男の教えた若山の名前として、これ以上に相応しいズバリとした名称は、考えられないかも知れない。

ぐつと持ち上がった巨大な山塊は、砂岩でできている様子で、侵食で縦に深い溝が刻まれ、それが頭髪のように見えてくる。やや上部が平坦になつていて、ぐつと張り出した前半分と、ほぼ直角に立ち上がった後頭部は、まるでリーゼントの頭そのものである。

これが自然に出来上がった地形が、或いは意図的に作られたものか、世之介には判断できなかつた。オーストラリアの「エアーズ・ロック」と似たような形成原因があるのかも知れなかつた。

「若山の、どこに【ウラバン】は、いるんだ？」

世之介の質問に、男は微かに冷笑を浮かべて、答えた。

「知らねえよ……」

世之介は「きつ！」と男を睨みつけた。世之介が浮かべた表情に、男は再び真っ青になつて、慌てて答える。

「本當だ！」【ウラバン】は【リーゼント山】にいるって話だ。でも、実際に会えるのは【ウラバン】が認めた？・バンチョウ？・か？・スケバン？・だけと決まつてゐるんだ

「それには、どうすればいい？　何が【ウラバン】に会つてもいいと認めさせることができる？」

世之介の矢継ぎ早の質問に、男はたじたじとなつた。唇が細かく震えている。あまり深い事情まで、知つてはいのだろう。

ゆつぐつと首を振ると、じつじつと後じさりを始めた。

「知らねえ……知らねえよつー。」

甲高い声で叫ぶと、ぐるりと背を向け、転げるよつに駆け出す。世之介は追いかけようかと一瞬ちうつと思つた。でも結局、そのまま見逃した。

他にも、ここには沢山の人間がいる。もつと事情を知つている人間が、どこかにいるかもしれない。

茜が鞆のよつな息を大きく、吐き出した。見ると、顔が興奮のために、真赤になつてゐる。世之介の会話を、息を詰めて聞き耳を立てていたのだ。

「やつぱり、お兄ちやんは【シッパリ・ランド】に來ていたんだね……」

呴くと、茜は世之介の顔を見詰め、一ヶ口と微笑んだ。

「ありがと、世之介……。これでお兄ちやんを探す当たができたわー！」

世之介は何とはなしに、肩を竦めた。

茜の呼びかけが「世之介さん」から「世之介」と呼び捨てになつてゐる。

それが何だか、くすぐつたい。

ぐうぐうへつ、と世之介の腹が、空腹で不平を訴えている。

手当たり次第に、世之介は【ツツパリ・ランド】の屋台を渉猟した。とにかく、目に入る食べ物を次から次へとひつ攫い、口に一旦一杯むしゃむしゃ詰め込む行為に専念した。

一抱えもありそうな大きな碗を見つけ、世之介はその中に食べ物を手当たり次第ぽんぽん放り込む。屋台で食べ物を提供しているのは、捻じり鉢巻の傀儡人や、杏菊紹偉童たちだ。

山盛りにした碗を「よつこらしょ」と持ち上げ、世之介は空き地を見つけて、座り込んだ。

巨大な碗を抱え込んで食べ始める。食べ物だけではなく、飲み物も同じくらい手にしている。

ガツガツと食らい始める世之介を、茜は感に堪えないといった表情で見詰めた。

「よく食べるわねえ
「腹が減ってるんだ！」

世之介は短く叫ぶと、すぐ食事の続きをに取りかかる。今は一瞬でも、食べる時間が惜しい。

世之介の胃は、際限ない食欲で、消化すべき食物を要求している。たちまち、碗が空っぽになる。

「次だ！」

立ち上ると世之介は【ツツパリ・ランド】を駆け回り、再び碗

に食物を山盛りにして戻つてくる。

助三郎は感心して見ていた。

「まつたくもつて、羨ましい……。我々は賽博格の身体になつてからは、人間らしい食欲を、とんと覚えなくなつて久しい。いや、世之介さんの健啖は、見ていて気持ちが良いですね」

同じことを、この場にいた他の人間も思つたようだつた。世之介が次から次へと食べ物を飲み込んでいくのを見て、次第に見物人が増えてくる。

あつといつ間に碗を空にする世之介に、狂送団の団員、女たちが氣を利かして食糧を手渡しで運んでくる。世之介は座り込んだまま、運ばれる食事をぺろりと平らげた。

よつやく空腹が満たされたころには、世之介の周りには、空の食器が山のよつてにす高く積まれていた。

げふつ、と息を吐き出し、世之介は立ち上がった。充分に食事を詰め込み、もうこれで矢でも鉄砲でも、槍でも刀でも、蒟蒻問答でも酢豆腐でも、それに饅頭と熱いお茶でも怖くないといふ気分である。

見物人から賛嘆の声と、拍手が沸き上がった。

「凄えやー、二十人……いや、三十人分は胃の中に収めたぜー。」

番長星では大食いもまた、尊敬の的となる。その場に集まつた男女の瞳には、憧憬すら浮かんでいた。

世之介は何の気なしに、集まつた連中の顔ぶれに目をやつた。と、その視線がある一点に急速に集中した。

あいつはー

物も言わず、世之介は群衆を搔き分け、早足で見覚えのある顔に向かつて突進した。相手は、ギクリと身を強張らせる。

「お前ー。」

叫んで世之介は駆け足になつた。相手は世之介の物凄い勢いに驚き、逃げ腰になる。キヨトキヨトと落ち着きなく視線が彷徨い、どうしようか思案しているようである。

しかし番長星特有の論理に支配され、ぐつと背を反らせると、世

之介を待ち受けける。

「なつ、何でえ……！」

声が掠れている。聞いているだけで、こちらが窒息しそうな、耳障りな聲音。ツルツルに剃り上げた、まん丸な頭。

隆志であった。

世之介の顔をまじまじと、穴の空くほど見詰める隆志の表情に、

ふと疑念が湧く。世之介は鋭く質問する。

「お前、隆志とかいったな？」

世之介の言葉に、隆志はうろたえた。

「何で、俺の名前を知っている？」

ははあ、と世之介は頓悟した。

隆志は世之介をまるつきり、見知らぬ相手と誤解している。無理もない、今の世之介は隆志が見知っている当時の世之介ではない。隆志が連れてきた風祭とかいう賽博格バンチョウを、助三郎と格乃進がやつつけたときは、世之介は？伝説のガクラン？を身に着けていなかつた。

あの後、？伝説のガクラン？を身に着けた世之介は、頭髪が金髪に染まり、リーゼントの髪形になつて、人相ががらりと変貌している。

隆志の表情に、微かに理解の色が浮かぶ。ゆつくりと首を振つた。

「そんな、まさか……。おめえが、あいつな訳、あるもんか！」
「ところが、お前の言ひ、あいつなんだ。俺は、但馬世之介。思い出したか？」

世之介は一步、ぐつと隆志に近づいた。ゆつくりと声を押し出し、両手にあらん限りの力を込めて睨みつける。視線の力で、隆志の両足を地面に縫い付ける気迫である。

世之介の凝視を浴び、隆志の両足が、カクカクと震え出す。

「風祭つてやつは、ビうした？ 一緒にやないのか？」

ペリリ、と隆志は分厚い唇を舐めた。顔一面に、大量の汗がぶあつ、と吹き出す。

「し、知らねえ……。あの後、風祭さんは、【ウラバン】に身体を元通りにしてもう一つために、別れたんだ」

隆志の視線が、ちらりと動く。視線の先を追つた世之介は、頷いた。

「【リーゼント山】か？ 風祭は、あそこへ行つたんだな？」

「そ、そうだ……。おい、お前、いつたいあの後、何があつたんだ？」

「あの時のお前とは、まるつきり別人じゃないか？」

世之介はニヤリと笑いかけると、ぐいっと背中を廻して、金の刺繡を見せ付けた。

「こいつが何か、知つているか？」

隆志は、驚きに仰け反つた。

「？伝説のガクラン？！ ま、まさか、おめえが、そいつを手に入れたとは！」

隆志の叫びに、その場にいた全員が凝固した。

「？伝説のガクラン？！」

その場の全員が、同じ言葉を呟いた。

世之介は隆志の胸倉を掴んだ。

「教える！ 【ウラバン】には、どうやって会えるんだ？」

「それなら、俺が教えてやる！」

背後からの声に、世之介は隆志の胸倉から手を離し、さつと振り向いた。

「【ウラバン】に会いたいのか？」

石臼の挽き音のよくな、ゴロゴロとした低音が、その場を支配する。ぺたりと地面に腰を抜かした隆志は、声の主に喜色を浮かべた。

「風祭さんー！」

その通りだつた。
ずっとしりとした樽のような身体つき。まるで人間の形をした戦車
がその場に立つてゐるかのような、異様な巨体である。

風祭は両拳を腰に当て、七尺あまりの高みから、世之介を冷ややかな表情で見下ろしてゐた。世之介は負けじと睨み返す。

「そうだ！ 【ウラバン】とかいへ、こそこを隠れるのが好きな、卑怯者に会いたいのを」

風祭の顔に、僅かに怒りの色が浮かぶ。もともと風祭の顔は賭博格の人工皮膚で、感情を表すことが苦手であった。

「何だとー！ もう一遍、言つて見ろー！」
世之介は、せせら笑つた。

「卑怯者と言つたんだ！ そうじやないか！ 【ウラバン】だか、裏磐梯山か知らないが、誰も直接には会えない謎の存在らしいな、そいつは……。きっと、俺たちに直に会うのが怖くて、コソコソ震えながら隠れているんじゃないのか？」

ପ୍ରକାଶକାରୀ

風祭は低く唸つた。『じつじつとした岩を刻んだような顔面に、精一杯の怒りが浮かぶ。

世之介は、さらに嘲笑を浴びせかけた。

「悔しかつたら、やつせと自分から、俺たちの前に出てこいつてんだ！【リーゼントE】に隠れているんだろ？ はっはあ！ まるで相撲取りのような名前だなあ。ひつがしい～【リーゼントE】……。につしへ～……隠れんば川なんてのは、どうだい？」

風祭はくわつ、と大口を開け、怒りの咆哮を解き放つた。それは、まさに轟音といってよく、まるでジェット戦闘機の爆音であつた。

わあっ！ とその場にいた全員が、ばたばたと見つともなく逃げ散っていく。びりびりと背後の校舎のガラス窓が一枚残らず、風祭の叫びに震動していた。

隆志は風祭の怒りの喧嘩にあともに向かって、地面をじりじりと、ピンポン球のように転がっていく。

世之介は風祭の咆哮に真正面から立ち向かった。一歩も引かず、地面にしつかりと両足で踏ん張っている。が、風圧に、ずりずりと何寸かは動いたようだ。

風祭は、ほつと溜息を吐いた。田を細める。

「本当に【ウラバン】に会いたいのか？」

世之介は無言で頷いた。

巨人は、くるりと背を向いた。

「従じて」！ そんなに会いたいのない、^{アスター} 驗しをしてもやる
「験し？」

風祭は首だけねじ向け、一ヶタリと笑いを浮かべる。

「やつや、^{チキン・ラン} 脣病試練つて、ここでは呼んでいるがね」

風祭は先にたち、校舎へと歩いていく。のしのしとゆつたりとした歩を進めるが、見かけによらず、世之介が早足にならないと、追いつけない。身長が高く、歩幅も並みではないからだ。

背後から足音が聞こえ、世之介が振り向くと、茜、助三郎、格乃進、イッパチ、光右衛門という順番である。さらに加えて、ぞろぞろと狂送団の全員、物見高い野次馬たちが勢ぞろいをしている。

風祭はちょっと顔を捻じ向け、助三郎と格乃進に気付き、僅かに顔の表情を変えた。自分を打ちのめした賽博格を覚えていたのだ。しかし何も言わず、黙々と歩みを止めない。

世之介は校舎を見上げる。

中央の時計台には、巨大な文字盤の時計が設置されている。両翼の建物には、様々な塗料が塗りたくられ、下の階数にはふんだんに下手糞な文字が踊っている。

世之介は首を傾げた。

「なんのために字を書くんだ？」

隣でイッパチが、低い声で壁に書かれた落書きを読み上げる。

「？御意見無用？？仏恥義理？？愛羅武勇？？夜露死苦？？。はあ、随分と面白い書き方でやんすね。？奇瑠呂衣參上！？。奇瑠呂衣つて、誰のこつてす？」

「ふうむ、なんだか動物行動学で言つ、匂い付け《マーキング》に

似てありますな

髪をしげきながら、光右衛門が呟いた。

世之介は光右衛門の呑氣な物言いに、内心ズッコケた。

「爺さん、何だ、そりや？」

光右衛門は悠然と言葉を続けた。

「野犬など、縄張りを主張するために、小便を引っ掛けで『ここは、俺の縄張りだ！』と主張しますな。番長星で見られる、こういった落書きを見ていると、あれを思い出します。ほれ、落書きは色のついていない壁には、やたらとありますが、色のついている範囲には、何も書かれておりません。多分、あの色がついている範囲は、何かの集団^{グループ}が仕切っているのではないですか？ それで落書きがないのです。野犬は、自分より強い相手が匂い付けをした場所には、自分の匂いをつけません。それと同じことです」

風祭はニヤリと笑いを浮かべ、返事をする。

「そこの爺さん、中々、穿つてるぜ！ 壁の色についたら、当たりだ。【ツツパリ・ランド】には、何人ものバンチョウや、スケバンが集まっているからな。各々縄張りを主張して、いつしか壁の色を塗りあつて、ああなつた。色の付いている壁は、バンチョウ、スケバンの縄張りってわけさ」

そんな会話を続けているつか、入口に達していた。数段の段差があり、巨大な玄関をくぐると、広々とした吹き抜けになる。

煌々とした天井からの明かりに、出し抜けに巨大な立像が全員を出迎えた。

真っ赤なガクランに、厳つい顔つきの、高さ五丈（約十五メートル）はあらうかと思われる、巨大な男の姿である。イッパチは立像を見上げ、素つ頓狂な声を上げた。

「なんですかい、こりや？ 誰の像なんで？」

「この番長星で最初のバンチョウになつた、伝説のバンチョウの姿だ。見る、あのガクランを。お前のガクランと同じだろ？」

風祭の指摘に、世之介は内心「確かにその通りだ」と強く頷く。

しかし伝説のバンチョウのガクランを、なぜ自分が身に纏ついたに なったのか？ 新たな疑問が浮かぶ。

偶然とは思えない。あの場所、あの時間に自分は？ 伝説のガクラン？ に出会いつべく、何らかの意思が働いていたのではないだろうか？

吹き抜けの壁には、ところどころ壁龕が設けられている。内部には何か、雑誌のようなものが展示されていた。

好奇心に駆られ、誌名を読んでいく。

「チャンプ・ロード」「カミオン」「レディス・ロード」等々、表

紙には一輪車や四輪車があしらわれ、番長星で見かけるガクランや、作業服を着た男女が、カメラを睨みつけ、精一杯に凄んでいる。

「これは？」

世之介の質問に、茜は目を輝かせて雑誌の表紙を見詰め、答えた。

「教科書よ！ 格好良い一輪車や、四輪車の改造の方法や、ガクランやツナギの着方を教えてくれるの。勿論、正しいツッパリの方法もね！」

一階部分の他の場所には、茜の言つ「正しいツツパリ」のためのガクランや、ツナギが所狭しと展示されていた。気がつくと、何人の男女が、熱心に展示に見入っている。

他には受像機があり、二十世紀らしき古い時代の映像が映し出されている。夜中の道路を疾走する改造一輪車の群れ、様々なツツパリたちが、何か争っている場面。

超指向性の音波で、受像機の一定の範囲内に近づかないと、音は一切聞こえてこない仕組みである。

近づくと「ぐわんぐわん」「うおんうおん」と喧しい騒音を撒き散らしながら、二輪車や四輪車が何かに駆り立てられたかのように、夜道を爆走している場面だった。

遠くから警告音^{サイン}を鳴らし、警察車両が追いすがる。拡声器^{スピーカー}から暴走をやめるよう勧告する声が響くが、二輪車や四輪車の運転手は、全く聞く耳を持たない。却つて勧告の声は、暴走に拍車を掛けるものだった。

世々介は風祭に向き直った。

「それじゃ臆病試練とやらをやろうか。ビリでやるんだ?」「あれだ!」

風祭は、ぐつと天井を指差す。吹き抜けの中央辺り、空中に巨大な球が浮かんでいた。直径は優に六七間（約十二メートル）はある。

材質は金属製だが、網で編んだような作りで、内部が籠ごしに透けて見えていた。球体自体は、吹き抜けの壁から繋がれた鋼網で固定され、球に入り込むための入口があり、板が差し渡されている。

「あんなところで、何をするんだ？」

風祭は嘲笑するかのよつた、表情を浮かべた。

「怖いのか？」

世之介の全身に怒りの血流が流れる。ぐっと足を踏ん張ると、風祭を見上げる。

「馬鹿を言え！ ひとつと試練とやらを始めろ！」

「本当にやるの？」

茜が心配そうな表情を浮かべ、世之介に話しかける。世之介は無言で頷いた。

もう引っ込みはつかない。

世之介は球体に繋がる板の端に来ていた。板の先は球体の入口に繋がっている。板の幅は一尺あまり。当然、手摺などない。もし足を滑らせたら、空中にまっ逆さまに転落し、吹き抜けの床に落下して、命を失うのは明らかだ。

向こう側の板には、風祭が立っている。表情にはからかうような笑みを浮かべている。

風祭の横には、一台の軽快そうな形状をした一輪車があった。世之介の隣にも、同じような一輪車が控えてある。

これから一人は一輪車に跨り、板を突つ切り球体の内部へ飛び込む。内部に飛び込むと入口は塞がれ、完全な密室となる。球体の内側の壁を全力で疾走し、一輪車同士で決闘をするのだ！一寸でも棍棒アクセルを緩めると、一輪車の勢いは失われ、もし球体の天井近くを走つていた場合、直ちに落

下して運が悪ければ、いや確實に一輪車の下敷きになり、大怪我、ひょつとして落命すらありえる。

命懸けの勝負である！

世之介はさつと一輪車の鞍^{サドル}に跨る。事前の説明では、この一輪車^{セグウェイ}は純粹に競技用に設計され、番長星の一輪車^{セグウェイ}に装備されている自立^{セグウェイ}機構は組み込まれていない。従つて、もし均衡^{バランス}を一瞬でも失うと、すぐさま転倒する。

棍棒を握りしめ、世之介は一輪車の動力を一杯に噴かした。

「一輪車の動力部分からは微かに「ウイーン」という動力音が聞こえてくるが、番長星で見かけた通常の一輪車のよつな「ぐわわわーん！」という喧しい騒音は一切聞こえない。まさに競技用。余計な機能は、唯の一つも装備されていないのだ。

制動^{ブレーキ}装置を指から離し、世之介は一輪車を全速力で飛び出させた。

反対側で風祭も同じ

よつに飛び出す。車輪の下は、細い板一枚のみ。

ほんの少しでも車輪を踏み外せば、命はない！

一台の一輪車は球体の入口に飛び込んだ。さつと入口が塞がれ、内部は完全な球になる。

たん、と軽く音を立て、世之介の一輪車は球体内部の床に着地した。ぎしづ、と一瞬、空中から落下した一輪車の衝撃吸收発条サスペンションが落下の衝撃を受け止め、軋んだ。

ゆつくりと一台は、円を描きながら球体の内部を回り始めた。加速度が充分ではないので、球体の下の部分を回っている。

風祭は大声で叫んでいた。

「この試練で、俺は何人の臆病者をやつづけてやつた！ 板を渡れない奴もいた。板を渡つて、この中に入れた奴も、ついには臆病風に吹かれて、棍棒を戻しやがつて、床に叩きつけられ、病院送りになつた奴が大勢いる。お前はどうかな？」

「余計なお喋りは無駄だぜ！ お前こそ、ブルつてるんじゃないのか？」

世之介が叫び返すと、風祭は口を真つ直ぐに引き結び、真剣な表情になつた。

「その言葉、後悔させてやるー。」

ぐつと肩を張ると、風祭は一輪車を全速力で走らせる。怖ろしいほどの加速がついた一輪車は、球体の内側の壁を駆け上がり、あつという間に天井近くに達する。その加速のまま、風祭は世之介の一輪車に猛然と突つ込んでくる。

世之介は寸前に一輪車を加速させ、風祭の突進を避ける。世之介の一輪車も、球体の内側を駆け上がり、ほぼ地面と直角になつて、ぐるぐると回転を続けた。

球体は壁に鋼鉄の綱で固定されているので、一輪車が加速すると、ぐらぐらと揺れる。

さうに一輪車は一台で思い思いの方向に回転しているから、揺れは複雑な踊りのようだ。思いもかけない方向に揺れるのだ。

球体の内部を駆け上がり、駆け下りる走行を何度も繰り返す。その度に天井の明かりがちらちらと瞬き、球体の籠から洩れる光が奇妙な光と影を作り出す。

世之介は歯を食い縛つた！

一台の一輪車は、ぐるぐると球体の内側の壁を全速力で走り抜け、お互いほんの少しの隙を見つけて相手を叩き付けようとしていた。決闘の光景は、まるで優雅な舞を踊っているようだった。

だが、一瞬でも油断すれば、忽ち最後であるといつことは、世之介には厭になるほど、判りきっていた。

一輪車の動力音が、低く、高回転の唸りを上げるだけで、車輪が内側の壁を噛む、微かな雜音だけが聞こえる。あとは物凄い速度で走り抜けるための風切り音だけが、世之介の聞こえる総てであつた。いきなり風祭が一輪車の向きを変え、真っ直ぐに世之介に向かつてくる。世之介はぎりぎりで躊躇つつもりであった。

が、風祭はぐつと片足を上げ、何と蹴りを入れてきた！

どすん！ と風祭の蹴り上げた足が、世之介の一輪車の車体を横に揺らす。ざざつと後輪が滑る。

世之介は危なく横倒しになるところを、全身の力で押さえつける。

ちつ、と風祭が残念そうな表情を浮かべる。

世之介の顔に、汗が噴き出す。危ないところだった！ もし一輪車が、天井近くを走行していたら、そのまま落下して、世之介は下敷きになつていた。

くそつ！ それじゃ、いつからだ！

世之介は棍棒を一杯に廻すと、わざと明後日の方向を指し、一輪車を発進させる。風祭は予想外の世之介の動きに戸惑いを隠せない

い。

世之介の一輪車が、球体の内側の壁を駆け登る。天井近くまで達し、世之介は唐突に棍棒を緩めた。

すとん、と一輪車の駆動音が静まる。世之介は力一杯ぐいっと、把手を手前に引く。くるりと一輪車は半回転し、二つの車輪を下にして、そのまま勢い良く落下した。

落下したその位置には、風祭の一輪車がある。風祭はポカーンと顎を開け、落下する世之介の一輪車を見上げている。両目が、節穴になっていた。

ぐわんっ！

世之介の一輪車の車体が、まともに風祭を下敷きにする。

やつたか？

一瞬、勝利を確信した世之介であったが、風祭は戦闘用賽博格である。

「うぬぬっ！」と叫び声を上げた。

風祭は、なんと世之介の一輪車を両肩に担ぎ上げ、そのまま放り投げる。

がちやん！

と世之介の一輪車は球体の内側に激突して、横倒しになる。

が、すでに世之介は一輪車を空中で蹴り飛ばし、その勢いのまま飛び上がっていた。

両膝を抱え、全身を鞠のよしにして世之介はぐるりと回転すると、足を下にして着地した。

ちら、と世之介は自分の一輪車を見た。放り投げられ、内側の壁に激突した衝撃で、どこかが破損したのか、薄く煙が漂っていた。

風祭の一輪車も同じようにお釈迦になつていた。世之介の一輪車の落下で、完全にペシャンコになつていた。

球体の床で、世之介と風祭は睨みあつた。

「どうするんだ。一輪車は、駄目になつちまつたぜ」

世之介の問い掛けに、風祭はひくひくと歯の端を震わせるだけだった。学帽の底の下の両目が、青白い炎のよつた憎悪の光を放つている。

ぶーん……。

風祭の全身が細かく震え出した。はつ、と世之介は身構えた。

あれは……！ 風祭は加速状態に入ろうとしている！

しゅんっ！ と微かな空気を切り裂く音がして、風祭の全身が世之介の視界から消え去った。

瞬間、世之介のガクランも対応を開始している。世之介の感覚が引き伸ばされ、全身の神経が加速される。筋肉が新たな相に変化し、世之介の人格は一変した。

世之介は加速された時間の中で、風祭の姿を目にしていた。

風祭はすでに空中に飛び上がり、天井近くの壁にまで達していた。壁に接触する寸前、くるりと身体を回転させ、両足を壁に逆さに押し付ける。そのまま両膝をぐっと踏ん張り、自分の身体を弾き飛ばす。

速度は音速を超えているだろ？

それが証拠に、風祭の頭部に、衝撃波による圧縮された空気の揺らぎが見えている。

風祭はまっしぐらに世之介を田掛け、自分の身体を送り込むつもりらしい。まともにぶつかれば、酷いことになるのは確実だ。

世之介は両足を踏ん張り、身体をほぼ横倒しにして飛び出した。ガクランはすでに加速状態に入った世之介の生身の身体を保護するため、装甲形状をとつていてる。

爪先を球体の籠の目につ掛け、ぐいぐいと内側を登つていった。

風祭は頭から世之介のいた位置に突っ込んでいた。
物凄い衝撃に、球体の金属の網の目がぐにゃりと拉げる。
巨大な砲弾が、まともにめり込んだようなものだろう。球体がずしん、と揺れ、大きく上下左右に揺すぶられる。

風祭は、ぐいっとめり込んだ網の目から頭を引き抜くと、呆気に取られた表情で、内側の天井近くによじ登つている世之介を見上げた。

「てめえも賽博格なのかつ？」

風祭の声は、超高速に圧縮され、やや甲高く聞こえた。世之介は、かぶりを振った。

「違う！ ここのガクランのせいだ。このガクランは、俺をお前たち賽博格と対等に戦えるよう、変えてくれるんだ」

風祭の両手が考え込むかのように細くなつた。

「成る程な……。それで？ 伝説のガクラン？ か！ しかし、俺は本物の賽博格だ！」

叫ぶと、再びぐつと両膝に力を込め、床を蹴つて飛び上がる。

世之介もぶら下がつた体勢から、ぐつと懸垂の要領で身体を引き上げた。球体の天井を蹴つて飛び出す。

超音速での衝撃に堪えられるのだろうか……。ちらりと、そんな考えが頭を掠めた。だが、すでに世之介の身体は、空中にあつた。ガクランの襟がするすると伸び、世之介の頭部全体を包み込む。両耳のところに内側に投影窓^{ディスプレイ}が開き、世之介の全身は完全に保護される態勢となつた。

窓に映し出された風祭の顔が、ぐーっと接近してくる。世之介は歯を食い縛つた。

ぐわんつ！

物凄い衝撃が、頭の天辺から足の爪先まで貫く。ガクランは世之介の身体を守るため、金剛石^{ダイヤモンド}よりも硬く強張り、激突の衝撃を受け止めた。

しかし、加速度は風祭のほうが上回り、体重も世之介の二倍はあつた。空中で世之介は風祭に弾き飛ばされた。内側の壁に叩き付けられる。世之介はくらくらとなつて、ぼうつと意識が霞むのを感じていた。

世之介は顔を上げた。やらり、と風祭が立ち上がり、のしのじと大股で近づいてくるのを認めた。

風祭の顔に、勝利の喜びが浮かんでいた。

試練終了！

世之介は立ち上がり、手足に力を込めた。が、動けない。なぜか全身が痺れ、ぴくりとも動けなかつた。

一ツタリと、風祭が嗜虐的な笑みを浮かべていた。ぐいっと長い腕を伸ばし、世之介の胸倉を掴み上げる。

「待て！ それまでだ！」

不意に聞こえた声に、風祭はギクリと身体を強張らせた。世之介も、声の方向に目をやつた。

球体の内側の入口が抉じ開けられ、助三郎と格乃進が入つてくるところだつた。

「貴様ら……」

風祭は歯噛みをする。表情が激烈な憎悪に歪んでいた。格乃進は冷静な口調で、風祭に話し掛ける。

「すでに両者の一輪車は大破している。この時点での臆病試練は終了しているのでないかな？ これ以上の戦いは私闘ということになる。【ウラバン】はそれを許しているのか？」

助三郎も一歩ずつと前へ出た。腕を上げ、指弾するように指先を伸ばす。

「そうだ。それに、風祭。お前は生身の人間の世之介さんに対し、賽博格の加速状態を使って打撃を与えるよとした。世之介さんが加速状態に対応できるとは考えていなかつたようだから、それは卑怯

な振る舞いとなる。そんなことで【バンチョウ】と名乗ることができるのか？」

助三郎の言葉は、痛烈に風祭の誇りを傷つけたようだった。「くくくく！」と唸り声を上げると、風祭はぐいっと世之介の身体を片腕一本で持ち上げ、無言のまま、物凄い勢いで助三郎に投げつけた。

「おつとー！」

助三郎は空中で世之介の身体を受け止め、床に下ろした。ようやく、世之介の全身に感覚が戻り、ふらつきながらも立ち上がることができた。世之介の頭部を覆っていたガクランの襟が元に戻り、顔が顕わになる。すでに加速状態は解かれていた。

風祭は両手を開いたり、握り拳を作ったりしている。大きく何度か呼吸を繰り返し、激情を静めようと務めていた。

表情が水を打ったように静まり返る。世之介は風祭の表情を見て、怒りに駆られた先ほどより、今のほうが数倍危険だと感じていた。

すでに風祭はジロジロと、無遠慮な視線を助三郎と格乃進に当て、舐めるような、試すような目つきになっている。再度の戦いに備え、弱点を探っているようだった。

「いいだろ。【ウラバン】に会わせてやるー。こっちだ……」

風祭はブイと顔を背け、出口に向かって球体の内側の網の目を掴んで登り始める。

世之介は助三郎と格乃進を従え、後を追いかけた。

板を歩いて元の場所に戻ると、茜が心配そうな表情で出迎えた。茜の背後からイッパチがヒヨイと顔を出し、世之介の姿を確認して喜色を浮かべた。

「若旦那！」「無事で！ よかつたですねえ、茜さん」

話し掛けられ、茜は見る見る顔を茹蛸のよつに真つ赤にさせ慌てた。

「な、なにがよかつたのよー！」

イッパチの眉がぐいと持ち上がる。

「おや、さっきまで、若田那が殺されるんじゃないかと気が気がでなかつたのは、どこのどなたさんで？ 助さん、格さんが現れなすつたのも、茜さんが必死で搔き口説いたからじゃござんせんか？」
茜は、ぐるりと背を向けて叫ぶ。

「知らないつー。」

助三郎と格乃進はニヤニヤ笑いを浮かべて、世之介の顔を見詰めてきた。

世之介の顔が火照つてきた。

ぴりぴりとした緊張がその場を支配している。

先頭に立った風祭は、明らかに背後に続く助三郎と、格乃進を気にしている。また、一人の賽博格も、風祭がいつ暴れ出すか、油断なく様子を窺つているようだつた。

そんな緊張を感じとっているのか、イッパチは田玉をグリグリと動かし、時々「ぐつと唾を飲み込む仕草を見せる。

堪らなくなつたのだろう、イッパチは甲高い声で風祭に声を掛け る。

「あのう、風祭の田那！ いつてえ、【カラバン】は、ビニンこら つしゃるんで？」

「【コーベント】だ！」

風祭は背中を見せたまま、短く答える。

イッパチは首を捻つた。

「へえ……。それにしちゃ、あたしたち、校舎の階段を登つていま すねえ。【コーベント】に行くのなら、一回は外へ出なきゃなら ないんじや、ねえですか？」

「いいんだ、これで！」

怒ったように風祭は答え、イッパチは「へえ」と首を竦めた。

世之介も、疑問に感じていた。

確かに風祭は、一同を案内して、おそらく屋上へ通ずるであろう内階段を登っている。目の前の壁に、階数を表示する案内板が次々と表れ、下へと消えていく。すでに階数は、十回分は登っていた。

杏萄組偉童のイッパチや、助三郎、格乃進の賽博格。これくらいの階数を登つてもなんともないが、老齢の光右衛門が息も切らさず従いてくるのは、驚きだった。手には杖を持っているだけだが、軽い足取りで階段を登つている。

実を言ひ、狂送団の団員、それに野次馬の連中も従いてこようとしていたのだった。

が、黙々と一同が階段を登るにつれ、一人減り、一人脱落し、ついにはこの顔ぶれしか残つていない。たつた数階分だけ登つただけで連中は息が切れ、へたり込んでしまった。身につけている衣服に「根性」と刺繡されているにも関わらず、完全に根性なしである。

茜もまた息を切らし、途中で座り込んでしまった。だが、それでも、ぐつと立ち上がると、必死になつて従いてくる。多分【ウラバ

ン】に会つて、兄の勝の消息を尋ねたい一心なのだ。

ふと、せえ介は風祭に質問した。

「なあ、どうしてこれだけの建物に、昇降階段エスカレーターくらい、無いんだ?」

「そんな物、ねえ! そんな物に頼るなんて、恥知らずもいいところだ」

風祭は妙な所で力む。昇降階段を設置しないのも、番長星特有の論理なのだろう。

そのまま一同は、黙り込んで階段を登つていく。ようやく田の前に、屋上を示す階数表示が現れた。

がちやり、と扉を開き、風祭は屋上へと足を踏み出した。風祭の、樽のような身体つきの隙間から、番長星の董色の空が見える。

田の前には【リーゼント山】が聳えていた。

屋上には強い風が吹いていた。風が、世之介のリーゼントの髪を靡かせる。長い髪が踊り、茜は慌てて髪の毛を押さえていた。

屋上の端に歩み寄り、風祭は無言で山を見上げている。何かを待つている様子である。視線の先には【リーゼント山】の頂上があつた。

黙つて世之介も風祭の横に立ち、【リーゼント山】を見上げる。

山の頂上に、何かが日差しを受けキラリと輝いた。輝きは、すいと浮かび上がり、空中で方向を変え、こちらへ近づいてくる。

世之介は、田を見開いた。

あれは……！
フライヤー
浮揚機だ！

江戸で見るような、一般的な重力制御機構を備えた、浮揚機である！

茜を見ると、顔にはまるで驚きといつものが浮かんでいない。世之介は話し掛けた。

「あんなもの、見たことあるのか？」

茜は「ううん」と、かぶりを振った。

「見たことないわ。何なの、あれ？」

つまり、知らないものを初めて目にし、驚くという感情が浮かばなかつたのだ。世之介が番長星で見た初めての空中浮揚機に驚いたのは、今まで見た番長星の科学技術に、重力制御を使用した形跡が全く見られなかつたからである。重力制御は、一度でも使用されると、隠し切れない影響を与えるものだ。

例えば、建物の形狀である。重力制御技術を使えば、地上数百階、数千階だろうが、どんな奇抜な外見だろうが、思いのままに設計できる。江戸の建物には、總て重力制御機構が組み込まれ、通常なら建設することすら不可能なほど重心が偏つた建物でも、建築可能にさせなのだ。

番長星には、重力制御を使用した形跡は一切、存在していないことは、確かである。しかし、こちらに近づいてくるのは、明らかに重力制御を使用した浮揚機だ。

「……」

世之介は腕を組み、待ち受けた。

浮揚機は無人であつた。

無音で屋上にふわりと着地すると、世之介たちを出迎えるように両側の羽根扉^{ガル・ワイン}がぱくりと開く。座席は人數分、ある。

光右衛門が最初に口を開いた。

「それでは、参りますかな?【ウラバン】殿のお招きとあれば、

軽快に慣れた様子で扉を潜り、内部の座席に腰を落ち着かせた。急いで助三郎、格乃進も潜り込む。

茜、イッパチと乗り組み、残るは風祭と世之介になつた。

世之介は風祭を見た。

風祭は乗り込む様子を見せず、ただ突つ立つたまま、ニヤニヤ笑いを浮かべている。目顔で尋ねる世之介に、風祭は肩を竦めて見せた。

「俺は行かねえ。お前たちだけで【ウラバン】に会えれば良い」

「そうか」と短く答え、世之介は最後に乗り込んだ。何を考えているのか知らないが、一緒に従いてこられるほうが剣呑そうだ。

世之介が席に腰を下ろすと同時に、扉が静かに閉まり、浮揚機は再び空中に浮かび上がった。茜は初めての経験らしく、目をきょときょと落ち着かなく彷徨わせ、窓に鼻をくつづけるようにして、外を覗き込んでいる。

世之介は窓から屋上を見下ろす。風祭が顔を挙げ、一いちらを見上げている。浮揚機が向きを変えると、風祭はくるりと踵を返し、床つていった。

浮揚機は静かに【リーゼント山】に近づくと、山頂に向かって進路を取った。日差しは夕暮れに近づき、ほぼ真横から差している。金色の光を浴びた【リーゼント山】は、金髪に染め上げられたりーゼントの頭髪そのものであった。完全に左右対称で、念入りに電^バ髪を当てられた髪形である。

イッパチは興味深そうに、浮揚機の操縦装置を覗き込んだ。

「若田那、こいつは大江戸で評判の、最新型の浮揚機でござりますよ。いつたいなんで、こんな代物が、番長星にあるんでしょうね？」

「それも【カラバン】とやらぬでござれば、判ると思いますな」

光右衛門が静かに呟いた。世之介は身を乗り出し、田を細める。

「爺さん、あんた、もしかしたら、俺と同じことを考えているんじやないのか？」

光右衛門は無言で世之介を見詰め、微かに頷いて見せた。茜は首を傾げる。

「何なの、同じ考え方って？」

「こや……」と世之介は答を濁した。今は言葉に出したくはない。

浮揚機は【リーゼント山】の山頂に差し掛かり、空中で静止した。

静々と降下して行くと、山頂にぽかりと格納庫が開く。内部は掘り抜かれ、空洞になつている様子だ。

格納庫は驚くほど広かつた。浮揚機を収容するには大きすぎる。宇宙船一つ、そつくり収容できるほどだ。

浮揚機が着地すると、格納庫の天井が閉まつていいく。羽根扉が開いて、世之介たちは格納庫の床に降り立つた。

がらんとした格納庫には、あちこち梱包された荷が散在していた。格納庫の片隅に锐励部威咤エレベーターがあり、扉が大きく開かれている。

「その锐励部威咤に乗りなさい」

出し抜けに拡声器から声が響き、世之介は、ぎょっとなつて立ち止まつた。

「誰だ！ お前が【ウラバン】か？」

叫ぶが、応えは無い。格納庫はしん、と静まり返り、先ほどの声が嘘のようだ。

世之介は下唇を噛みしめた。

「よつし、乗つてやるつじやないか！」

率先して锐励部威咤に向かう。そろそろと世之介を先頭に、全員が乗り組んだ。

途端に、扉が閉まつた。階数表示はない。銳励部威咤が降下しているのは、微かな感覚でしか判らない。

イッパチはしきりに唇を舐め、緊張している表情である。茜もまた、両拳をぎゅっと握りしめ、身を硬くしている。

光右衛門、助三郎、格乃進の三人はまったく態度を変えない。泰然として、落ち着き払っている。

やがて降下は止まつた。溜息のような音がして、扉が開かれる。

薄暗い室内に、ぽつりと天井から弱々しい明かりが灯り、その真下に背の高い椅子が置かれている。誰か座つている気配だが、背中を向けて置かれているため、姿は見えない。

世之介が近づくと、ぐるりと椅子が回転して、座つていた人物が、こちらを向いた。

世之介は立ち竦んだ。椅子に座り、世之介を出迎えたのは、世之介のよく見知つてゐる人物であった。

「あんただつたのか……」

世之介の言葉に、椅子に座つた相手は、軽く肩を竦めた。

「あまり、驚かれていないようですね。世之介坊っちゃん！」

世之介は深く頷いた。【リーゼント】で最新型の浮揚機を田にした瞬間、今までの疑問が、一挙にある一点に集約したかのような閃きを、世之介に与えていた。

「どうやら様ですか？　お一人はお知り合いなのですか？」

光右衛門が口を開く。世之介は相手を睨みつけたまま、答えた。

「そう……。知り合いも知り合い。俺を、この番長星に送り込んだ張本人、但馬屋の大番頭の、木村省吾だ！」

世之介の隣で、イッパチが全身を棒のようにはり立させていた。下顎だけがカクカクと、小刻みに震えていた。よつやく、声を振り絞つた。

「大……番頭……さん！　こりやまた、いつてえ、どうじて……？」

ジロリと木村省吾はイッパチを見た。省吾の凝視に、イッパチは電流が全身に流れたかのよう、びくつと飛び上がる。

「お前は少し黙つていなさい！」

鋭い叱声を上げたかと思うと、すぐ柔軟な目付きに戻り、世之介の背後の光右衛門、助三郎、格乃進、最後に茜に目をやった。

「よろしく。そちらの四人様は、初めて御目文字しますね」

但馬屋大番頭の木村省吾は、凄みのある笑みを浮かべ、椅子から立ち上がる。

渋い柿色の着流しに、但馬屋の屋号が染め抜かれている印半纏と、前掛けをして、腰には大福帳を下げている姿は、どう見ても実直な商人にしか見えない。

「但馬屋の……大番頭」

さすがに光右衛門は省吾の正体を知つて、驚きの表情を浮かべている。

茜が疑問を投げかけた。

「ねえ、あんた【ウラバン】なの？」

茜の言葉に、省吾は片頬に笑みを浮かべ、ゆつくりと頷いた。

「左様、わたくしが、番長屋の【ウラバン】なんです。勝又茜さん、と仰いましたかね」

茜は目を一杯に見開いた。

「あたしのこと、知つているの？」

「はい。よおく、知つてありますよ。確か、お兄さんの消息をお尋ねになりたいのでしょうか？」

「お兄ちゃんがいるの？」

茜は前のめりになつて云ふ。今にも省吾の脣に駆け出しそうになつた。いや、実際に駆け出していた。

が、数歩進んだところで、じすんと茜の身体が何かに遮られる。省吾は優しく声を掛けた。

「気をつけてー。ここには重力障壁^{バリア}が張りされているから、強引に押し通ることはできませんよ。まあ、当座の用心してやつだくな」

茜の身体は、何か弾力性のあるものに押し返されたように、あつわつ跳ね返された。顔を真つ赤にむか、皿には涙を溜めていた。

「教えてよー。お兄ちやんは？」

省吾は宥めるように手を上げた。

「後です！ 今はまず、世之介坊ちやんと少しのお話があるのです。坊つちやん、少し見ない間に、見違えましたなあ！」

世之介はふーっ、と大きく息を吐き出した。

「ああ、俺は変わった。あんたのおかげでね。この～伝説のガクラン？が、俺を変えた。教えてくれ。ここつを俺が手に入れるよう細工したのは、あんただらう？」

省吾は「くへへ」と小さく笑った。

「うなづく。坊つちやんが、番長星に不時着したら手に入れよう」と、手配しました

「えりやつて、そんな芸当ができたんだ。いや、そもそも、俺を番

長屋に招いた仕掛けは、なんだ?「

省吾の田付きが深くなる。

「もう推察はついていると思いますが?」

世之介は顎を上げた。

「あなたの口から聞きたい!」

「よろしく!」

省吾は再び椅子に腰掛けた。ちょっと空中に手をやり、ひらひらと手の平を閃かせる。すると全員の背後に、床から椅子が迫り出してきた。

「話は長くなりますが、楽にして頂きたい。どうぞ、お座りなさい!」

光右衛門が、まず座った。茜も、すとんと身体の力が抜けたように腰掛ける。イッパチは、へたり込むように尻を乗せた。

立つたままのは、世之介と助三郎、格乃進の三人である。省吾は眉を顰める。

「お座り下さい、と申し上げたのですが」

世之介は腕を背中に回し、胸を張った。

「俺は、これでいい!」

一人の賭博格も無言で頷く。

省吾は軽く頷いた。両手の指先を合わせ、金子塔の形にして、頸を弓き寛ぎの姿勢をとつた。

行動予定

「それでは、お話をしましようか。まずは、どうぞ坊っちゃんを番長星へ招き入れることができたのか？ 鍵は、そこそここのイップチですか？」

省吾の指摘に、イップチは椅子の上で飛び上がった。

「あ、あっしが？」

省吾は世介に視線を向けて、ゆっくりと首を傾げて見せた。

「坊っちゃんは、それも判つておられたようですね」

世介は高々と顎を上げたまま答える。

「俺は、尼孫星^{アマゾン}に出かけるために【滄海】という船に乗り込んだ。その時に、見慣れない小型の宇宙船を見かけたが、あれはお前だつたんだな。まあ、続けれろ！」

「は」 と領き省吾は言葉を続けた。

「イップチをお供にするよう、申し上げたのは、わたくしです。

イップチには密かに行動予定^{プログラム}を組み込み、坊っちゃんの乗り組んだ【滄海】が超空間に入つて、ある時点でイップチに非常脱出装置を動かすよう、指示を下しておきました。イップチには自覚はなく、非常脱出装置をきつりと手順どおりに操作したのです。

「くらイップチがお調子者で、偶然に手が触れたとしても、ち

やんとした手順を踏まなければ、脱出装置は動きませんからね。

その結果、坊っちゃんの乗り組んだ【滄海】の船室は、番長星の近傍に予定通り、出現させることができたのです

世之介は静かに尋ねた。

「では？伝説のガクラン？は？俺が番長星に漂着することを予想できたとしても、あの場所でガクランを手に入れることは、予想できなかつたはずだ」

省吾は肩を竦めた。

「簡単なことです。番長星の大規模量販店、美湯灰善^{ミヨンヒハツゼン}は、どこにでも存在する連鎖店^{チヨーン}です。

いざれ坊っちゃんは、この番長星を脱出するために【ツッパリ・ランド】を目指すでしょうことは、予想できます。そのためには、必ず美湯灰善を利用する。総ての店の店員に、これこれこういう風体の客が来たら、ガクランを勧めるよう指示をしておいて、総ての店舗に、同じガクランを用意させたのです。

番長星では極小^{ナノ・マジン}機械による無限の生産能力により、同じ？伝説のガクラン？を何着でも用意できるのですからね」

世之介は自分のガクランの裾を、ちょっと摘んで呟いた。

「一着だけじゃなかつたのか……」

省吾は指を一本ひょいと立てて見せた。

「今は、一着だけです！ 坊っちゃんが手に入れた瞬間、他の店に

あるガクランは總て自己崩壊するよう、指示をしておきました。今では倉庫の中で、一山の埃に成り果てております」

省吾は、得意そつであつた。

世之介は唇を舐めた。いよいよ肝心の疑問を尋ねる時がきたのだ！

「それで、どうして、俺を番長星におびき寄せたんだ？ 何が目的だ？」

省吾の顔が真一文字にニイイーッと、微笑の形に引き伸ばされる。

「坊っちゃんに？ 伝説のガクラン？ を身に着けて貰ったからです！」

世之介は再び自分のガクランを見た。

「俺に？」

「はい。それで、そろそろ、わたくしにガクランをお返し頂きたいと思いまして。もう、よろしいでしょう？ それは、わたくしの物です」

省吾は座つたまま両手を差し出す。世之介は怒りの声を上げた。

「返せ、だと？ 今更、何だ！ なぜ、俺に着せる必要があった？」

「坊っちゃんでしか、できなかつたからです。そのガクランは、見かけは唯のガクランでも、中身は一種のまあ、知性体とでも言えるかもしませんな。ガクランと着用者は一体となつて、あらゆる事態に対応します。坊っちゃんが経験なすつたことは、ガクランは着実に学び、成長するのです。もう、すでにガクランは、完全になりました！」

世之介は軽く頭を振った。

「だから、なぜ、俺なんだ？」

「坊っちゃんは正直者……それも、馬鹿と超が付くほど正直者です。しかも、真っ正直で、正義感もお強い。わたしは坊っちゃんが、こんな赤ん坊のころから見守つておりますから、よつく知つてあります。ですから、ガクランの着用者として理想的だったのです」

狂戦士計画

その時、光右衛門がなぜか一步、前へ歩み寄った。

「そのガクランは、バーサーカ狂戦士計画の残存物ですか？」

光右衛門の言葉に、省吾はさつと顔色を変えた。青白くなり、眉間がきつく狭まった。

「なぜ、それを知っている？ 狂戦士計画のことは、幕府の極秘事項のはず！ お前の正体は、何だつ？」

光右衛門は含み笑いをして答える。

「何、わたくしは、越後の呉服問屋の隠居で、光右衛門と申す者。ただ、ちょっと昔、小耳に挟んだことがござつてまして」

省吾は立ち上がり、きつと指を突きつけた。

「嘘だつ！ たかが呉服問屋の隠居が知りえる情報ではないつ！ 但馬屋のように、幕府と直取り引きできるおおだな大店の大番頭であるわたしでないと、知ることは不可能だ！」

先ほどまでの冷静な態度は吹き飛ぶように搔き消え、省吾の顔には不審と焦りが複雑に織り成していた。光右衛門は澄ましたまま、言葉を続ける。

「狂戦士計画は、理想的な兵士のための強化服を作り出すための研究でしたな。

着用者の肉体、精神に直接交感し、どんな恐怖にも負けない意
思と、賽博格戦士並みの体力を保証する。

しかし狂戦士とは、まさに的確な名称でした。

この計画で生み出された戦士は、一人残らず発狂して、手当た
り次第に破壊を撒き散らす狂人となってしましました。以来、幕府
はこの計画の存在を、ひた隠しにして口を拭つていたのです「

光右衛門の暴露に、省吾はぜいぜいと大袈裟に喘いでいたが、や
がて手を顔にやり、ぶるんと拭つと、一瞬にして冷静を取り戻し
た。

「そうだ……。

俺は狂戦士計画を古い記録で知り、何としても完成させるべく、密かにこの番長星に持ち込んだ。伝説の【バンチョウ】の存在が、計画の骨子である強化服をガクランに仕立て直すきっかけになつた。

お前が言つたように、初期の計画実施で強化服を着用した被験者は、一人残らず狂的な戦士に変貌し、手に負えなくなつてしまつた。

俺は原因を探り出した。力行使する理想的な人格が、強化服には欠けていた。理想的な人格を付与するため、俺は世之介に目をつけた……

省吾の「坊っちゃん」という呼びかけが、いつの間にか「世之介」という呼び捨てに変化している。さらには「わたくし」というのも「俺」になつていた。

今や省吾は、但馬屋の、有能な大番頭の仮面を脱ぎ捨てていた。

「世之介は文字通りの、坊っちゃん育ちだ。乳母日傘で育つて、一切の悪意というものから遮られ、他人を疑うことを知らず、また世之介自身も、他人を陥れるなどの悪徳から免れている。それを強化服に学ばせれば、理想的な戦闘服になると計算したのだ。ガクランは必要な経験を吸収し、今や、俺の待ち望んだ状態になつた！ さあ、返して貰おうか……」

世之介は叫んだ。

「何の目的で、そんなことをする？ お前は謀反を企んでいるのか？」

？

「謀反？」

省吾はニヤリと笑った。くつくつと込み上げる笑いを堪えていたが、やがて爆笑した。

「成る程、謀反ね！ そんな阿呆らしいことをするために、わざわざそんな七面倒臭い計画を立てたわけではない！ 俺は、番長星を改革するために実行したのだ！」

光右衛門は眉を上げた。

「改革？ そんなことを仰るあなたは、いつたい、何者なのです？」

省吾は胸を張った。

「俺は元々、番長星の人間だ！」

衝撃が何度も繰くと、徐々に馬鹿らしさを加えるものだ。世之介は省吾との言葉が、何だか夢の中の会話に聞こえていた。

「番長星の人間は、傀儡人や杏萄紹偉童に傳かれ、怠惰になる一方だ。自分では何もできず、ただただ、格好をつけることしか考えていない。

俺は若い頃、番長星にやってきた幕府の宇宙船に密航して、地球に向かったのだ。地球では、あまりに番長星と違っていて、人は皆、自分の能力で生活している。

俺は衝撃を受けた。但馬屋に奉公するようになつてからも、いつも番長星の現状を思い返していた。それでいつか、番長星に帰つて、自分の手で改革する日を待ちわびた」

省吾は肩を竦めた。

「俺は、番長星では落ちこぼれだ。

喧嘩など金輪際したくもなかつたし、無用な粹がりなど馬鹿馬鹿しいと思っていた。内心、番長星の連中を憎んでいたのかもしないな。だから?伝説のガクラン?を普及させ、番長星の総ての男たちに着用させることを思いついた。

ガクランは着用者を変化させる。世之介の心を、番長星に広めることを願つて……

茜は眉を寄せ、怒りの表情を浮かべる。

「それじゃ、番長星の女は埒外だつての? 番長星に住んでいるのは、男ばかりじゃないのよ!」

省吾は軽く頭を下げる。

「勿論、女性たちのことも考えておりますよ、お嬢さん。世之介の計画がうまく行つた暁には？伝説のセーラー服？計画も着々と進めております」

「まあ」と茜は微かに肩を下げた。両腕がだらりと垂れ、顔には心底、呆れ返ったと言わんばかりの表情が浮かんでいる。

世之介は背中を反らせ、軽く笑つた。

「それで、どうやって俺から？伝説のガクラン？を奪うつもりだい？俺は脱ぐつもりは一切ないからな！」

省吾は物柔らかな物腰を取り戻した、すっかり自信満々な様子になつてゐる。

「そんな、無理矢理などいたしませんとも。ガクランはすでに役目を果たし、すべての記憶資料メモリ・データを、この部屋にある計算卓コンピューターに送信しております。世之介坊っちゃん、わたくしが話を続けていた間にね

！」

五人衆

さつと片手を上げると、今まで薄暗い照明しかなかつた室内が、いきなり眩しい照明に照らし出されていた。

すると、今まで隠れていた省吾の背後の空間が顯わになつた。

そこには直径十間はあるうかと思われる、円形の水槽があつた。水槽には、真つ黒などどりとした液体が縁近くまで、なみなみと張られている。

と、液体の表面が、どぶりと波立つた。

一方の壁の一部に扉らしき隙間ができ、数人の男女が姿を表した。皆、生真面目そうな表情の、どちらかといふと無個性な感じの若者だつた。

省吾は勝ち誇つた。

「さあ！ 新生？伝説のガクラン？による、真の伝説の始まりだ！ 今、あなた方の目の前にいる男女は、番長星に新たな秩序をもたらすため、わたくしが長年に亘つて訓練してきた人間である」

がばり、がばりと水槽の表面が波立ち、水面が持ち上がつた。ざわざわと無数の触手らしきものが蠢き、何かを形作つているようだつた。

光右衛門は、憂慮の表情を浮かべる。

「微小機械ナノ・マジックですな。何かを作つとしているようですが……」

液体の表面から姿を表したのは、数着の衣服であった。

しかし、ガクランには見えない。色は原色で、赤、青、黄色、緑、
桃色の五色それぞれの色をした、五着の衣服である。

衣服には、同じ色の、防護帽ヘルメットが付属していた。手袋、長靴が付属
していて、全身をぴったり覆う形になっている。

現れた五人の男女は、各自着用する衣服が決まっている様子で、
迷うことなく各自の色の衣服を身に纏つ。

真っ赤な色を身に着けた男が、前へ一歩さつと進むと、高々と叫
んだ。

「われら五人の勇者！ 番長星にはびこる無気力、無関心、怠惰を
一掃するため、ここに集まつたのである！」

青の制服を身に着けた男が後を続ける。

「われわれは、番長星を改革する、いわば生徒会である。その名も

【セイント・カイン】五人衆！」

五人は自己紹介に移った。

「セイント・レッド！」
「セイント・ブルー！」
「セイント・グリーン！」
「セイント・イエロー！」

イエローと名乗った男は、やたら太っていた。五人の中で唯一人の女性は、当然のことながら「セイント・ピンク！」と叫んでいた。

五人は声を合わせ、見得を決めた。

「五人揃って【セイント・カイン】！」

省吾は勝ち誇った笑いを上げていた。

「どうだ！ この五人が番長星に革命を起こすのだ！ 番長星に新たな正義が生まれる……俺の待ち望んだ希望が……！」

突然、水槽の液体に漣が走る。省吾はぐるっと水槽に振り返り、驚きの声を上げた。

「何だ？ 計画は終了したはずだ！ なぜ活動をやめない？」「伝説のガクラン？ を寄せせ！」

大声が轟いた。五人が出現した隙間に、もう一人の男が姿を表す。逆光で顔は見えないが、樽のような胴体に、逞しい身体つきの巨躯

が立っていた。

風祭である。

「俺は、戦闘用賽博格として、最強となつた。だが、まだ充分じゃねえ！ 俺の身体に？伝説のガクラン？が加われば、俺は無敵になるだろ？……」

省吾は顔色を変えた。

「よせ！ 馬鹿な真似をするんじゃない！」
「？伝説のガクラン？を頂くぜ……」

一歩さつと前へ出た風祭は一タリと笑いを浮かべると、素早く空中に身を躍らせ、水槽に向かつて飛び込んだ！

風祭の田体が、水槽に頭から飛び込んでも、飛沫はまったく上がらなかつた。

「すばり」と埋まつた風祭の全身は、波一つ立てず、あつさりと微ナ小機械マシーンが蠢く水槽に、一瞬にして消えてくる。

微小機械は水のように見えて、実は目に見えないほどの粒子の集まりである。だから飛沫など上がるわけがない。

水槽は、べたりと鏡のような表面のまま、静まり返つてゐる。縁にじりじりと近寄つた省吾は、はあはあと荒い息を吐きながら、恐る恐る覗き込んだ。

「馬鹿な……！ 馬鹿な……！」

同じことを何度も繰り返しながら、両手を戦慄かせた。

五人の原色の制服を着用した【セイント・カイン】は、ぼーっとして馬鹿のように突つ立つてゐる。

「セイント・レッド」と名乗つた、真つ赤な制服を着た男が、省吾に話しかける。

「あのー、僕ら何かお役に立てますか？」

「「うるさい」とでも言つよつて、省吾は田を水面に釘付けにしたまま、腕を苛立たしく、ぶんぶん振り回す。

レッドは所在無げに、頭を搔いた。

世之介は光右衛門に話しかけた。

「どうなつちまつんだ？ 風祭の野郎、あん中に飛びこじまつた

「ふむ……。あの男の狙いは、微小機械に組み込まれた？伝説のガクラン？の作成記録を使って、自分の能力を高めるための改造ですな。恐らく、木村省吾が世之介さんのガクランの記録を微小機械に送り込む時点で、密かに自分がだけの行動予定を組んでいたのでしょうか？」

光右衛門の答に、世之介は首を傾げた。

「あいつはもう、賽博格に改造されちまつているぜ！ それなのに、まだ改造したいのか？ そんなことして、大丈夫なのか？」

突然、水槽の表面がガバガバゴボゴボと音を立て、泡立ち始めた。瀝青の^{タル}ような、真っ黒な液体に似た微小機械が、一斉に活動を再開したのだ。

ボコン、と大きく音を立て、直径三尺はあろうかと思われる巨大な泡が弾け、どふんどふんと大きく表面が波立つた。

省吾は「ひつ！」と小さく悲鳴を上げ、水槽から飛び退き、へたへたと腰を抜かしていた。

杖

状況を見て取った光右衛門は、表情を険しくさせ、手に持った杖をながば掲げるよつこじて歩き出す。

世之介は声を掛けた。

「爺さん！ そこには障壁が……」

光右衛門は手にした杖を掲げ、わざと横に薙ぎ払つ。そのままスタートと歩いていく。

障壁の存在した辺りを、何らの障害もなく、あっさりと通過した。ちよつと振り向き、口を開く。

「もつ障壁は存在しません」

世之介は呆れて、あんぐりと口を開いた。助三郎に向かつて尋ね掛ける。

「どうなつちまつたんだ？ あの爺さん、何をした？」

「爺さんは……」

言いかけ、助三郎は慌てて自分の口を押された。いつの間にか世之介の口調が移つてしまつたのだ。顔を真つ赤にさせ、息を整えてから、答える。

「（）隠居の手にした杖には、あらゆる障壁を中和する装置が仕掛けられている。重力障壁を作る重力子格子は、（）隠居の杖で消去されたのだ」

助三郎の説明に、世之介は驚きのあまり叫んでいた。

「そんなことができる爺いが、ただの隠居なんかじゃあるもんか！
いったい、爺いの正体は、なんだ！」

助三郎は謎めいた目つきになつた。

「いずれ、判る……いずれな……」

省吾の側へ近寄つた光右衛門は、静かに話し掛ける。

「大番頭さん。ここにいつまでもいっては危ない。早々に退散すべき
ではないですか？」

「はあ？」

省吾は馬鹿のように口を開け、光右衛門を見上げた。顔には一杯
に汗が噴き出し、てりてりと光つて見えていた。

威厳

光右衛門は、そつと省吾の脇に手を入れる。

「さあ、立つのです！ 愚図愚図はしていられませんぞ！」

省吾は光右衛門の促しに、ギクシャクと出来の悪い傀儡人のように立ち上がる。光右衛門は助三郎と格乃進に鋭く声を掛けた。

「助さん！ 格さん！ さあ、このお人を避難させなさい！」「はっ！」

光右衛門の命令に、一人は素早く動いた。大股に省吾に近づくと、肩を貸してやる。省吾は一人に運ばれながらも、水槽を未練がましく見詰めていた。

光右衛門は水槽の周りに立ち竦んでいた【セイント・カイン】の五人に声を掛けた。

「あなた方も逃げなさい！」

威厳のある光右衛門の命令に、五人の身体に同時に電流が流れたかのようだった。五人はビクンと飛び上がるよう動き出すと、あたふたと水槽から離れていく。

やつてきた壁の出入口を手指し、部屋から姿を消した。

「さあ、助さん、逃げますぞ！」

光右衛門は【セイント・カイン】の向かつた先を目指しながら、大声で叫んでいた。世之介は、茜とイッパチを従え、光右衛門の後を追つた。出入口に足を踏み込む直前、ちらりと水槽を振り向く。

真つ黒な微小機械の群れが、水槽の真ん中から一本の蚊柱のよう

に立ち上がつている。

無数の黒光りする触手が蠢き、中心に何か、人間の形のようなものが垣間見える。風祭なのかどうか、世之介には見分けがつかない。

出入口の扉が閉まり、あとは判らなくなつた。

対策

通路を早足で歩きながら、世之介は呟いた。

「何が起きたんだ？」

光右衛門が口早に答える。

「怖っていたことが起きました。スタンピード爆嘯が始まったのです！」

「爆嘯？ ああ、微小機械の際限ない増殖つて、あれか？」

光右衛門は強く頷く。

「左様です。爆発的な増殖と、際限ない資源の濫費が、同時に進行します。何とか食い止めないと、番長星は忽ちのうちに、荒れ野原と化すでしょう」

「食い止める方法は？」

「微小機械を制御する制御室コントロールルームが、どこかにあるはずですが、そこで制御する暗号を入力すれば……」

世之介は助三郎の肩を借り、ようやく、ようばい歩いている省吾に注意を向けた。

省吾の顔は真っ青で、目は虚ろである。素早く近づくと、省吾の胸倉をむんずと掴み上げる。

「おひつー！ 省吾ー！」

「んあ……？」

呆けたような顔つきで、省吾の一つの目玉が世之介の顔に向かう。が、瞳は何も見ておらず、焦点はところと合っていない。

「聞いたろう？ 微小機械を制御する場所は、どこだ？」

世之介は省吾の胸倉を掴み、ぐいぐいと揺すぶつた。揺すぶられ、省吾の頭は前後にがくがくと振られる。

茜が割り込む。

「ねえっー、お兄ちゃんは、どー?」

省吾の視線が茜に向かつ。唇が微かに動き、言葉を押し出す。

「勝又勝《まるる》のことか……?」

茜は勢いづいた。

「わうよーー、あたしのお兄ちゃん、勝又勝の行方! どーにいるの?」

茜の顔が青ざめた。

「まさか……お兄ちゃんも賽博格^{サイボーグ}に?」

省吾の唇が笑いの形に歪んだ。

「いいや……。あいつは賽博格になることを拒否した。賽博格の力を借りるなど、男らしくないと、ほざいてな……」

茜は明らかに、安堵の溜息を吐いた。

「お兄ちゃんらしくわ……。それで、お兄ちゃんは、どー?」

突然、省吾はしゃつきひとつ回復した。猛烈な速度で、思考が回転しているかのようだ。

「制御室へ連れて行つてくれ! すぐそこだ! ほら、この先の曲がり角を右に……突き当たつたところに、扉がある……!」

腕を上げ、震える指先を当て所なく前方に彷徨わせる。助三郎はひょい、と省吾の身体を抱え上げ、急ぎ足になつた。

省吾の言葉通り、曲がり角の先に扉があつた。
格乃進が扉の取つ手を握りしめる。

「鍵が……！」

格乃進の顔が真剣になる。ぐつと全身に力が込められた。服の下から、賽博格の逞しい筋骨がぐつと盛り上がった。

べきんっ！ と音がして、扉の取っ手が弾け飛んだ。格乃進がどすんと肩を押し当てるが、蝶番¹と扉が倒れこむ。

内部には、みつしりと、様々な装置が積み上げられていた。装置にはそれぞれ、幾つもの表示装置が接続され、様々な数値や図表が映し出されている。

省吾は倒れこむように中央の操作卓に取り付くと、素早い動作で次々と把桿を操作する。

中央の表示装置に、水槽のある部屋が映し出される。

水槽からは真っ黒な微小機械が溢れ、部屋全体がてらてらとした黒光りする液体に覆われていた。勿論、液体に見えるのは見掛けだけであるが。

水槽の辺りでは、先ほどちらりと見た無数の触手による柱が立ち上がり、柱を中心に、ぐるぐると竜巻状に渦を描いている。

省吾は猛然と把桿を操作する。次々と打鍵を弾き、猛烈な勢いで命令を入力した。

画面を見詰めた省吾は、がっくりと肩を落とした。

「駄目だ……手遅れだ……！ 動作中止の命令を出したが、受け付けない」

同時に、表示装置の部屋の眺めが一変した。床に溢れかえった微小機械がぐうつ、と盛り上がり、中央の柱が四方に弾けた。中央には、一人の男が立っていた。

風祭か？

しかし、まるで別人のように、変貌している。全身が黒光りする鎧に覆われ、顔はまったく見えない。あたかも戦国の鎧武者が、大魔神だ。

ゆづくつと片足を上げ、鎧武者は一歩を踏み出した。波立つ微小機械の水面を、ののののとした動きで歩いていく。

べぢやり、と足底が踏みしめ、一歩を踏み出すと、びりりと黒光りする微小機械が糸を引き、ねぢやりとした粘度を示している。

「ぐぐぐぐぐ……」

鎧武者は喉の奥から、「ぐぐぐ」とした呻き声を上げた。よひり、と上体が泳ぎ、何かに必死に耐えている。

と、不意に顔を挙げ、吠え声を上げた。

「ぐわあああああ！」

風祭の声に反応したかのように、周りの微小機械の群れの動きが激しくなる。びゅんびゅんと大小無数の固まりが四方八方に飛び跳ね、画面は埋め尽くされる。

表示が途切れる。何も映し出してはいない。

「カメラ撮像機の接続が切れた……」

省吾は、ぼんやりと呟いた。絶望感が、ありありと表情に浮かんでいる。

茜は苛々と足踏みする。

「それで、お兄ちゃんはどこのなつー。いい加減、答えてつー。」

のりのりと省吾は茜に顔を捻じ向かた。ふつと苦こ笑みが浮かんだ。

「いいだらう。教えてやるよ……」

省吾の指先が一つの把桿を弾く。

制御室の内部に「ぐおおおお」とこの猛烈な鼾が響き渡った。ポカソとしている茜に向かい、省吾は顔を顰めた。

「あいつめ……一寸でも田を離すと、これだ！　おい、^{まさる}勝！　聞こえるか？」

省吾の指先が、手早く把桿を弾く。
幾つもある表示装置の一つが明るくなり、中心に一人の男が映つた。

男は寝椅子のような物に凭れ、田を閉じて軒を搔いていた。男が寝入っているのは、かなり狭苦しい空間のよつで、ほとんど身動きの余地すらなぞりである。

「お兄ちゃん！」

茜が大声を上げた。

びくつと画面の男は身動きをして、薄田を開いた。向いの側の表示装置に田をやり、田を大きく見開き、叫んだ。

「茜！　お前か……！」

「お兄ちゃん……」

茜は田に一杯の涙を溜めた。

「茜、おめえかあ！」

画面の向こうの勝又勝は、最初驚きの反応を見せ、次いで思い切り顔を顰め、苦つきった表情になつた。唇をへの字に曲げ、眉を寄せ、首を何度も振つている。

「何でわざわざ、やつてきたんだ？ その様子じゃ、【ウラバン】と一緒にらしないな」

怒鳴り声に近い。茜は気分を害した様子で、ぐいっと画面に顔を近づけた。

「何を言つてんのよー。お兄ちゃんが勝手に家を飛び出して、父ちゃんや、母ちゃんがどんなに心配しているのか、判つてんの？ まつたくわー……男つたらー！」

画面の中で、勝は「助けてくれー！」とばかりに天を仰ぎ、手の平をぱつと開いた。

省吾は口早に、勝に向け話し掛ける。

「勝！ 今、大変な状況になつていて。風祭という男を知つていてだろ？？」

勝の眉が下げられ、ちょっとと考え込む表情になる。

「風祭？ ああ、賽博格志願の奴だな。あんたが、あいつを賽博格に仕立てた、ってのは知つていて。奴が、どうした？」

省吾は手短に、現状を説明した。有能な大番頭らしく、少ない言葉数で、しかし的確な説明だった。聞いている勝は「ふむふむ」と相槌を打っていた。

ところが、微小機械の爆轟に話が及ぶと、口をポカンと開けた。

「つまり、ビリビリヒツた？」

要するに理解できていない。焦りに、省吾の顔から汗がポタポタと滴る。

「番長星の危機なんだ！ 風祭は微小機械に取り込まれ、自分の意思を失っている。だけではない！ 賽博格の身体に？ 伝説のガクラン？ の要素を取り込んだ結果、怖ろしい怪物に変貌している！」

「怪物？」

勝は省吾の最後の言葉に反応した。爆轟などの複雑な話題にはついていけないが、本能的に戦いの話題となると理解できるらしい。省吾は勢いづいた。

「そうだ！ 怪物だ！ あれと戦えるのは、お前だけだ！」

「戦い？ 嘘嘩か？」

勝の目が、ぱっと輝く。血色が良くなり、態度も生き生きしきった。

世之介は口を差し挟んだ。

「おい、省吾。 いったい、何を話しているんだ？」

省吾は世之介に振り向き、口を開いた。顔付きは、以前の忠実な

但馬屋の大番頭に戻つてゐる。

「坊っちゃん。あれと戦えるのは、ここにいる勝又勝だけなのです。
なぜなら……」

省吾が言いかけた時、制御室全体がぐらぐらと揺さぶられる。微
かな物音に世之介は入口を振り返る。

なんと… 入口から、ヌラヌラした黒光りする流動体が迫ってき
た！ 水槽から溢れた微小機械が遂に迫つて来たのだ。

「あれを見ろ…」

世之介の叫びこ、全員ギクリと身を強張らせる。茜は立ち上がり、
顔色を青ざめさせた。

画面の中から、勝が声を張り上げる。

「おい！ 今のは何だ？ 何が起きた…」

省吾は悲鳴を上げた。

「あれが… ここまでやつて來た！ 逃げないと呑み込まれる…」

光右衛門が鋭い声を上げる。

「他に出口は、ないのですか？」

省吾は、おろおろ狼狽しているだけで、完全に虚うつが來ている状態
になつていた。光右衛門は微かに顔を顰めると、助三郎と格乃進に
命令する。

「助さん、格さん。あなた方の力で、何とか脱出できませぬか？」

二人は力強く頷いた。格乃進が答える。

「やつて見ましょう！ おい、助さん。あんたは、こゝ隠居と、こゝの

大番頭を抱えてくれ。俺は、イッパチと茜さんを抱える「世之介の顔を見て言葉を続けた。

「悪いが、世之介さんまで面倒を見ることはできない。しかし、あんたなら、自分で何とかできるはずだな？」

「当たり前だ！」

世之介は素早く頷いた。格乃進はニヤリと笑い返し、助三郎に命令する。

「よし、微小機械に捕まらぬよう、全力で脱出する。しかし、加速状態にはなるな！ 超高速で動くと、生身の人間は衝撃で、生きていられないからな」

助三郎は立ち上がり、答える。

「判つていてる。では、『隠居、まいりますぞ！』

助三郎が両腕に光右衛門と木村省吾を、格乃進が茜とイッパチを抱え上げた。

「では、行くぞ！」

助三郎が宣言し、出口へ猛然と跳躍を試みる。微小機械に触れぬよう、壁を蹴り、宙に飛び上がる。格乃進も同じように、両腕に二人を抱えたまま、床を蹴った。

加速状態に入つていないとはいえ、さすが賽博格の動きである。壁を蹴り、空中を飛翔する二人は、まるで無重力の中にいるかのようだ。忽ち二人は出口から外へ飛び出、姿を消した。

世之介は、ぐっと全身に力を込め、目の前に迫つてくる真っ黒な微小機械に立ち向かった。

だつと床を蹴り、飛び上がる。が、すぐに世之介は、痺れるような恐怖を味わっていた。

力が抜けている！

充分飛び上ることができない。世之介は床に叩き付けられるよう横たわった。

やたら身体が重い……。まるでガクランが鉛のように思えた。全身がねばねばした疲労に包まれている。

糞つ！

世之介は歯噛みした。体力の喪失の原因を悟ったのである。

風祭との臆病試練で、力を使い果たしていたのだ！

だん、だあん！

遠くから、二人の賽博格が壁を蹴り、空中を飛翔して遠ざかっていく音が聞こえている。音は、たまりに遠ざかり、遂には聞こえなくなつた。

世之介は、がくりと首を垂れた。

全身が鉛のように重くなつてゐる。腹這いになり、びしゃびしゃと音を立て迫つてくる微小機械の群れを、凍りついたように見詰めているだけだ。

「おひつー、びつした、そりこりの奴！ 何とか返事しろー。」

世之介は、のろのろと首を擧げ、制御室の画面を見上げた。画面には勝又勝の厳つい顔が大写しになつてゐる。

「微小機械が……」

世之介は絶望感に、小声で呟いた。勝は画面に顔をさりげなくする。もはや画面から、はみ出そうだ。

鼻の穴があつ広げられ、鼻毛が一本一本、見分けられるのを、世之介はぼんやりと見詰めていた。

「茜はどうしたつ！ センにいないのか？」

「あいつなら、逃げたよ……」

勝は世之介の要領の得ない答えに、苛立つ表情を見せ、唸り声を

上げた。

「もう我慢できねえっ！ 今から俺が、そっちへ行くぞ！ 【リーゼントヨ】にいるんだる？」「

世之介は答える気力を喪失していた。
勝は不意に穏やかな口調になった。
下手に出る作戦になつたらしい。

「なあ、お前……。茜とは、どういう関係か知らん。だが、俺は、
あいつの兄だ。なんとか助けたいんだ。だから、お前に頼む。制御
卓の前に来てくれ！」

脱力感に苛まれつつ、世之介は最後の気力を振り絞り、さっきまで省吾が座っていた制御卓へと近づいた。一歩、一歩が果てしなく遠く感じる。

卓の椅子に座り込む世之介を、勝が心配そうに見守っていた。

「どうした、酷い顔色だぞ？」

世之介は疲れ切つた声で返事する。

「疲れているんだ……俺は、もう動けない……眠い……」

ぐらぐらと頭が揺れる。実際、眠りの衝動が、すぐそこまで近づいているのを感じる。勝は苛立たしげに叫んだ。

「眠るんじゃねえっ！ いいか、お前が協力してくれないと、俺は動けねえ。頼む、お前の前にある赤い把桿を入れてくれ」

揺れる視界の中で、勝の指示した赤い把桿を探す。

あつた。世之介の真ん前にある。把桿には透明な覆い『カバー』があり「バンチョウ・ロボ射出把桿」と説明文があつた。

「これを、どうするんだ?」

世之介の質問に、勝は簡潔に答えた。

「押せば良い!」

ゆつくりと手を伸ばし、指先で世之介は覆いを撥ね上げる。把桿は世之介がぐいっと押した瞬間、内部の燈火ランプが点灯し、赤く輝いた。

びいいいいーっ！

制御室内部に、けたたましい警告音が鳴り響いた。怖ろしいほど
の音量に、世之介の睡魔は吹っ飛んでしまう。はつ、と顔を上げ、
他の表示装置に目をやる。

ぱつ、ぱつと幾つかの表示装置の映像が切り替わり、校舎を外か
ら撮影する摄像機の眺めになつた。

校舎の中央にある時計台が、動き出している。前面の壁がぱくり
と開き、内部の吹き抜け構造が顯わになつた。画面下方では、驚き
騒ぐ人間たちが、豆粒のように見えている。

画面には、番長星の象徴である伝説のバンチョウを模した立像が
聳えていた。

真つ赤なガクランは、今にも足を擧げ、動き出しそうな躍動感に
満ちている。

いや！

立像は、実際に動き出した。

ぐい、と左足を上げ、ずしんと地面を踏みしめる。

「わははははっ！ 動いたぜー！」

勝は画面の中で哄笑していた。画面の外から、何かの表示装置ら
しき照り返しが顔を輝かせている。手許が素早く動き、機械を操作
しているようだつた。

「俺は、バンチョウ・ロボのパイロットだ！ さあ、何だか知らねえが、大変な事態が起きていると【ウラバン】の奴は、ほざいていたな！ 安心しろ！ 今すぐ助けに行くぜ！」

そうか、あの立像は、実は傀儡人だったのだ……。勝は傀儡人バンチョウ・ロボと呼ぶらしい のパイロットなんだな……。

霞む意識の中、世之介はやつとそれだけを考え、ぐらりと倒れ掛かつた。画面の中で、勝が驚きの表情になつた。

「おい！ 大丈夫か？」

横倒しになる世之介の視界に、徐々に迫つてくる微小機械の、真っ黒な光沢が近づいてきた……。

ぴちゅぴちゅと音を立て、微小機械の群れがゅつくつと、しかし、確実に、仰向けに倒れている世之介に近づいてくる。

世之介は顔を音の方向に捻じ向け、じつと待ち受けた。もう、指一本、ぴくりとも動かすだけの気力も、体力も失われている。

どうなるんだ……。

漠然とした恐怖が込み上げるが、すでに考えることも面倒だった。どうにでもなれ……。世之介は退嬰的な思考に陥っていることを、ぼんやりと自覚していた。

「おいつ！ そこの奴！ 何、ボケーッとしているんだ？ ひとつと立ち上がらねえと、呑みこまれるぜー！」

表示装置の画面からば、勝又勝が目を一杯に見開き、口角泡を飛ばして叫んでいる。

「うるさいなあ……。

世之介は大の字に寝そべって、近づいてくる微小機械の黒光りする群れを待ち受けた。

遂に微小機械の、ぬらぬらする触手が、世之介の？伝説のガクラン？に達した！

瞬間、異様な衝撃が世之介の全身を貫いていた。

微小機械と？伝説のガクラン？は、元々が同じものである。微小機械から？伝説のガクラン？は産まれたのだ。

一つの微小機械は、今お互いを認識しあっていた。ガクランを構成している無数の微小機械の先端が情報端末となつて、溢れた微小機械の本体と接触を開始している。

一瞬の間に、ガクランと微小機械の間で、大量の情報が遣り取りされていた。

水槽のあつた部屋で、木村省吾が用意した計算機^{コンピュータ}に向けて、ガクランが発信した時とは、質的に違つていた。何しろ、直接お互いの端末を接触し合い、量的にも格段の相違を持つた情報量が一気に遣り取りしあつているのである。圧倒的な違いであつた！

情報の一部は、脳細胞を通じ、世之介の中にも流れ込んでいた。

今、世之介は万華鏡^{カレイド・スコープ}のような視界を、我が物としていた。微小機械が支配する、番長星のありとあらゆる場所に設けられた、端末の情報が世之介の中にはいったのである。

世之介の意識は、否応無しに変貌を強いられていた……。

世之介の身体は微小機械に呑み込まれ、どつぶりと真つ黒な流動体に沈んだ。その一方で、世之介の意識は、新たな地平に開かれている。

ああ、あそこに助三郎と格乃進がいる。一人とも光右衛門、イッパチ、茜、省吾らを抱え、【リーゼント山】から脱出したひと、必死になつてゐる……。

ふと視線を動かすと 、いや、この言い方は正確ではない。世之介の意識の先が動くと に言い直したほうが良い。

水槽のあつた部屋に世之介の意識が向かうと、風祭が全身を微小機械に呑まれ、声なき絶叫を上げている。今、風祭は微小機械によつて、徹底的に改造を施されている真つ最中であった。

しかし、予想もしなかつた苦痛に、風祭の精神は全力で咆哮をした。純粹な苦痛、神経を直撃する強烈な衝撃が、風祭の全身を苦痛の業火で炙つていた。

風祭の仮面で覆われた顔が、天井を見上げる。二つの目玉が、憎悪を孕んで、青白く輝いていた。

風祭の両腕が差しのべられた。

「俺を、ここから、出してくれ！」

言葉ではなく、思考そのもので、風祭は叫んでいる。

風祭の差し伸べられた両腕から、真っ黒な微小機械の噴流が天井を直撃した。無数の微小機械が天井の固い岩盤を抉り取り、一直線に【リーゼント山】を貫く。

忽ち風祭の頭上に、大穴が穿たれていた！　風祭の全身を微小機械が包み、大穴へと持ち上げていく。

世之介の意識が【リーゼント山】の外部に設けられた撮像機を通して、山頂から吹き上げる微小機械の真っ黒な光沢を捉えていた。

風祭が、微小機械の中から、ゆっくりと全身を現した。

今、風祭は巨大化をしていた。風祭の身体に取り付いた微小機械が層を成し、本来の体躯を何倍も増幅させていたのである。

一人連れ

世之介の拡大した視界に、【リーゼント山】に近づいていく人影を認めていた。世之介の好奇心が、人影に注意を振り向ける。

あれは……。

人影は、二人だった。一人は男で、もう一人は女である。女のほうは、怖ろしいほど太っていて、獰猛な顔付きをぶら下げている。狂送団の元首領と、母親の「ビッグ・バッド・ママ」の二人連れであつた。

あんなところで何をしているのか？

世之介の意識に、一人の会話が聞こえてきた。

「ねえ、ママ。まだ歩くのかい？ 少し、休もうよ……」

甘つたれた、首領の声が聞こえてくる。母親は唸り声で答える。「何、おちゃらけたことを言つてるんだい！ 急ぐんだよ！ なんとしても、【ウラバン】に会う必要があるんだ！」

首領は不満げな声を上げる。

「どうしてさ……？」

ぐいっ、と母親が怖ろしい顔で首領に顔を振り向ける。母親の勢いに、首領は「ひつ！」と小さく悲鳴を上げた。

「お前、あいつのガクランを見なかつたのかえ？？伝説のガクラン？を！」

不得要領に、首領は曖昧に頷く。

「？伝説のガクラン？は【ウラバン】にしか作製できないものなんだ！ しかも、あれを身に着けると、怖ろしいほどの強さを手に入れることができる… お前、そんなガクランを、欲しくはないのかえ？」

「そりゃまあ……ね」

首領の唇が不満そうに突き出た。母親はさりに苛々と、足を踏みしめた。

「判らない子だね！ いいかえ、あのガクランを身に着けた世之介つて奴に、お前は恥を搔かされたんだよ！ 狂送団の首領を追い払われ、しかも、女の子もお前から取り上げられたんだ！ 悔しくはないのかえ？」

「女たち……俺の……」

たちまち首領の顔が醜く歪んだ。怒りに、首領の顔がどす黒く**鬱**血する。

「悔しいよ！ ああ、悔しいとも！ 畜生、世之介の奴！」

母親の顔が綻び、とつておきの甘い声を出す。

「そうだろう？ だから【ウラバン】にお願いして、もう一着の？ 伝説のガクラン？ を作つて貰うんだよ。お前がガクランを着たら、あの世之介なんてヒヨロヒヨロ優男なんか、敵じゃなくなる……。沢山の女の子も、お前に戻つてくるよ！ 狂送団の首領にだつて、返り咲くことができるんだ！」

首領の両目が欲深そうにギラギラと煌いた。大きな頭を、ガクガクと何度も頷かせる。

「うん！ 欲しいよ！ 俺、何としても？ 伝説のガクラン？ を手に入れたい！」

その時、一人の目の前の岩壁から、どすん、どすんと何度も何か叩き付けるような物音が近づいてくる。一人はギクリと立ち止まつた。

ぼこり、と岩壁が内部から崩れ、がらがらと音を立てて瓦礫が飛び散った。

瓦礫を掻き分け、姿を表したのは、助三郎と格乃進の一人だつた。相當に苦労して岩を掘りぬいたためか、一人の着衣はぼろぼろに千切れ、サイボーグ賽博格の身体が顕わになつていた。

二人の賽博格は、目の前に立ち竦んでいる首領と、母親に気がつき、目を丸くした。

「お前たちは……狂送団の……」

助三郎が声を上げる。母親は「はつ」と「王立ちになつて叫んだ。「あんたらこそ、こないだの！ 畜生、うちの拓郎ちゃんに、よくも酷いことをしたね！ 許さないからねつ！」

母親の怒りに、助三郎と格乃進は困惑していた。格乃進が、もの柔らかに尋ねる。

「お前たちこそ、このよつなどこで、何をしているのだ？」

尋ね返され、母親は口籠つた。首領はジロジロと一人の賽博格体を眺めていた。

「あんたら、賽博格なのか……？」

首領の質問に、助三郎と格乃進は顔を見合わせた。助三郎が答える。

「まあ、そうだ」

首領は母親の耳に囁きかけた。世之介の聴覚は怖ろしく拡大していて、そんな小声の囁きすら、はつきりと聞き取つていた。

「ねえ、ママ。ガクランなんかより、賽博格のほうが良いな。あつちのほうが、もっと強そうだ……」

笑い

助三郎と格乃進は賽博格の聴覚を使って、今の会話を聞き取つていたらしく、苦笑していた。

「やめたほうが良い。賽博格など、なるものではないよ

助三郎の忠告に、首領は怒りの表情を浮かべて尋ね返す。

「なぜだ！ 僕は強くなりたい！」

格乃進が首を、ゆるゆると振った。

「賽博格になつたら、人間としての喜びは總て失われる。これを見ろ！」

格乃進は腰の辺りから、一本の透明な挿入函^{カートリッジ}を取り出した。首領は挿入函を眺め、首を傾げた。

「なんでえ、そりや？」

「我々の濃縮栄養パックだ。これ一つで、我らの脳細胞を半年は生かしてくれる。何しろ、我らの生体組織は、脳細胞しかないのでね。我々は人間の食事を摂ることができなくなつてゐる」

首領の目が見開かれた。

「て、ことは……」

助三郎は頷いた。

「そうだ、それだけでないぞ。我々は、あらゆる人間の喜び、感覚を失つてしまつた。もう、春の新緑も、夏の暑さも、更には冬の厳しい寒さも、我々には何の意味もないものとなつてゐる。もはや、

取り返しもつかない！ そんな状況になつても、良いのかな？「

首領は真っ青になり、ブンブンブンと何度も首を振つた。

会話が続く中、一人の賽博格がぶち空けた穴から、光右衛門、茜、イッパチ、木村省吾たちが姿を表した。

皆、外の光に、眩しげに目を瞬かせる。

「いや、まいりましたな。助さん、格さんのお二人が通路を作ると胸を叩いたときは、どうなることかと思いましたが、何とか脱出路を確保できました」

光右衛門の言葉に、茜が心配そつた声を上げた。

「でも、世々介さんの姿が見えない！ ビーフिंഗをけつたのかしら…」

「…」

~~~~~。

世々介は、思わず、笑いを漏らしていた。  
ぎくつ、と茜が顔を上げた。

「今、何？ 誰か、笑つた？」

一同は、薄気味悪そうな顔を見合わせる。

イッパチが、杏葡萄紹偉童の人工皮膚を真っ青にさせ、視線をあちこち彷徨わせながら、呟いた。

「今の笑い声は、なんとなく若田那のお声に似ているようだ……」

もう一度、世之介は笑い声を上げた。茜は怒ったような表情になる。

「世之介なの？ 悪い冗談は止しなさい！ どこに隠れているのよ？」

言われて世之介は戸惑った。さて、自分は、どこにいるのか？  
微小機械に呑み込まれた後、どうにもさっぱり、自分の身体を認識できていない。

世之介はどうにかして、自分の姿を一同に見せたいという欲求に駆られた。微小機械は世之介の欲求に応えるべく、あらゆる接続を試した。

「わっ……」

大声を発し、イッパチがぴょんと飛び上がった。へたへたと腰を抜かし、震える両手を合わせて叫び声を上げる。

「若田那！ 迷わず成仏して下さ……」

何事かと、全員イッパチの見詰める方向を見る。

「世々介さん……」

光右衛門が驚きに目を見開いた。

助三郎が慎重に声を掛けた。

「もしや、世々介さんなのですか？」

世々介は顎を、自分の身体を見下ろした。手の平を開き、まじまじと観察する。

「妙だ……透き通っている……」

イツパチが泣き声を上げた。

「それどこりじや！」せんせん！若田那、お足が見えねえ……。こりや、てつたり成仏できずに、迷つたりしちゃるんだがしょ？」

世々介の身体は透き通り、足下はふつと薄くなつて、地面に消えてくる。とんと、幽霊である。

助三郎が目を光らせ、口を開いた。

「どうやら立体映像ホログラフィを送つてゐるようだ。しかし距離が遠く、はつまつとした映像にはなつていない」

世々介は、にやつと笑つた。それなら判るー。自分の立場がようやくハッキリし、落ち着きを取り戻した。

## 大津波

「どうも、妙な具合になつちました。実は……」と世之介は微小機械に呑まれた後の経験を、詳しく語つた。

光右衛門は大きく頷いた。

「さもあらん！ 世之介さんのガクランと、番長星の微小機械が、影響し合つたのでしよう。では、世之介さんは、『無事なんですか？』

世之介は肩を竦める。

「無事かどうか、良く判らない。なにしろ、自分が今、どうなつているのか、さっぱり判つていらないんだ……」

その時、格乃進が空を振り仰ぎ、緊張した声を上げた。

「皆、気をつけろ！」

驚きに全員が格乃進の視線を追つ。世之介は即座に、格乃進の警告を理解した。

【リーゼント山】の山頂から、どろどろとした微小機械の群れが、後から後から、まるで鍋から吹き零れる泡のよう、盛り上がりてくる。すでに山肌を伝い、全員の立っている場所へと近づいてきた。

穿つた出口に戻り、一瞬、穴の方向を見た助三郎であったが、すぐ断念した声を上げる。

「駄目だ！ いつからも溢れてくる……」

助三郎の言葉どおり、穴の奥深くから、ぬらぬらとした黒い光沢が迫ってきていた。光右衛門は叫んだ。

「逃げるのです！」

さつと助三郎と、格乃進は、各自光右衛門ら一同を抱きかかえ、微小機械から逃れるため走り出した。

しかし全速力は出せない。抱きかかえたまま高速で動くと、抱きかかえた人間が、衝撃で酷い怪我、あるいは死亡すら懸念されるからだ。

後には、狂送団の首領と、母親がぽつんと残されてしまった。首領は近づいてくる真っ黒な固まりを見詰め、ガタガタと震え出し、母親の巨体に取りすがつた。

「ママー！ ビ、ビ、ビ、ヒヒヒ……！」

ぐわつ、と大津波のように真っ黒な微小機械が襲い掛かる。母親は必死に悲鳴を堪えていた。

だが、首領は恥も外聞もあらばこそ、全身で悲鳴を上げ、喚いていた。どうと殺到する微小機械が、一人の全身を呑み込んでいく。

頭上から近づく巨大な質量を感じ、世之介の意識が山肌を見上げた。

真っ黒な雪崩のように落ちてくる微小機械の中に、風祭の変貌した巨体があつた。すでに、風祭の姿は人間とは言いがたい。全身を覆う真っ黒な鎧に、憤怒の表情が固まつたままの仮面。まるで怒りの化身そのものである。

ぐわーっ、と咆哮を上げ、風祭は山肌を疾走していた。足下は大量の微小機械が津波となり、あらゆる物質を呑み込み、同時に大量の生活必需品を生産していた。

微小機械が通りすぎた後は、無数の衣類、食糧、小物、嗜好品、装飾品などの雑多な商品が残されている。すでに生産計画など無視された、際限無しの濫費が始まつていた。

世之介の意識は、大津波のように押し寄せる微小機械に向けられていた。微小機械は、ありとあらゆるものを貪り、生産するという、圧倒的な欲求に駆られている。

世之介は何とか、微小機械の爆轟を抑えるべく、意志の力による説得を開始した。

やめろっ！　このままでは、番長屋がお前たちに総て呑み込まれてしまつ。それはお前たちの目的なのか？

微小機械は一斉に、世之介の語り掛けに応える。

呑み込め！ 取り込め！ 急げ、急げ！ 間に合わない！  
産み出せ、作り出せ、俺たちは最高の工場だ！

微小機械の意思は、目的地のない無自覚なものだった。世之介は必死になつて、微小機械を制御しようと、意志の力を振り絞る。

世之介は気付いた。微小機械の暴走を推し進めているのは、風祭の意志の力であることを。風祭の自己肥大した、強さへの憧れが、微小機械の暴走を後押ししているのだ。

世之介は風祭に近づく、もう一つの存在を感じていた。

【バンチョウ・ロボ】であった！

のしのしと歩く巨大な番長の姿をした【バンチョウ・ロボ】は、風祭の前方に立ち塞がり、待ち受ける。

ぐつと腰を低く構え、緊張をほぐすためか、こきこきと音を鳴らして首の辺りを、しきりと廻している。ひどく人間臭い仕草であった。

風祭もまた【バンチョウ・ロボ】に気付いた様子だった。疾走をやめ、慎重に相手を窺う仕草を見せる。

世之介の意識が、【バンチョウ・ロボ】の操縦席に入り込む。操縦席では、勝又勝がこれから戦いの予感に興奮し、じつい顔に滴るような笑顔を見せていた。

「面白え……面白え……！　こいつを【ウラバン】から預かつたときには、こんな面白え戦いができるとは思ってなかつたが、こりや、堪えられねえぜ！」

風祭は猫が獲物を狙うように、静かに待ち受ける。すす、と巨体が、音もなく地面を踏み、あつという間に接近してくる！　操縦席の勝の表情に緊張が走つた。ぐつと全身に力を込め、風祭と【バンチョウ・ロボ】の激突に身構えた。

ぐわしゃーんっ！　と、派手な音を立て、一体が猛烈な勢いで激突を繰り広げた。衝撃で、ばらばらと風祭の全身から、微小機械が細かな破片となつて転げ落ちる。

ぐわああーっ、ヒ【バンチョウ・ロボ】は喉の奥から絶叫し、片腕を振り上げ、ぐつと握り拳を作つて風祭の顔面に叩き込んだ。がきーん、と鉄板を殴りつけるような音がして、風祭の顔が横を向く。風祭は一瞬、くらくらとなつたようだった。

## 連射

だが、即座に立ち直り、瞬時に反撃を開始した。風祭もまた、握り拳を固め、【バンチョウ・ロボ】に殴りかかる。が、風祭のほうは両方の拳を猛烈に回転させ、連続して叩き込んだ！

まるでマシン・ガンの連射を浴びたように、【バンチョウ・ロボ】は、ぐらぐらと上体を泳がせ、後方に吹っ飛んだ。

吹っ飛んだ先は、【ツッパリ・ランド】の校舎の建物であった。

【バンチョウ・ロボ】の巨体がめり込み、建物の壁に放射状に鱗が入り、窓ガラスが四散して、建物の中から悲鳴が上がった。

世之介は意識を分散させ、避難していた助三郎たちに集中させた。立体映像を投影し、自分の姿を出現させる。

「助三郎！ 格乃進！ あの怪物は、風祭なんだ！ 風祭をなんとかしないと、微小機械の暴走は止められない！」

世之介の呼びかけに、一人の賽博格は仰天した。

「世之介さん……。どういうことだ？ 説明してくれ！」

助三郎の言葉に、世之介は強くかぶりを振った。

「今ここで説明している暇はない！ ともかく、二人の加勢がいる！」

光右衛門が一人に命令した。

「一人とも躊躇している暇はありませんぞ！ ともかく、世之介さんには従うのです！」

「はっ！」と短く答え、一人は一瞬のうちに加速状態に入っていた。そのまま超高速で、戦う一体の怪物に向かっていく。

## サイコ・ダイブ！

加速状態だけに許される引き伸ばされた時間の中での、世之介は手早く一人の賽博格に、状況を説明する。

「微小機械の暴走は、風祭のせいだ！ 風祭の際限ない強さへの欲望が、微小機械の暴走に火を点けた！」

助三郎は叫んだ。

「そうか！ 風祭を倒さなければ微小機械の暴走は止まらない、といつ理屈か！」

格乃進は疑問を投げかける。

「しかし、どうやって倒す？ あいつは賽博格の身体に、世之介さんのか？ 伝説のガクラン？ の能力も加えているぞ。俺たちだけで、何とかできるのか？」

世之介は自分の姿を立体映像で投射し、二人の動きに追随させつつ、答えた。

「俺は今、微小機械と直に交信できる状態になつていて。だから、風祭の身体を覆っている微小機械に、俺の意識を同調させてみる！ うまくいったら、あんたらが風祭を攻撃してくれ！」

助三郎は仰天したような表情になつた。

「そんなことして、大丈夫なのか？」

世之介は、かぶりを振つた。

「判らない……しかし、他に方法はないんだ！」

助三郎と格乃進は肅然とした表情になつた。格乃進が強く頷き、口を開いた。

「よし、やつてくれ！俺たちは、いつでも攻撃できるよう、待機しているぞ！」

二人に頷き返し、世之介は一体の巨大な怪物に意識を集中させた。巨大化した代償か、風祭は賽博格の加速能力を失っているようだつた。

一方、勝又勝の乗り込む【バンチョウ・ロボ】は、風祭の打撃を受け止め、校舎に叩きつけられ、今よつやく起き上がるうとしている。風祭は肘を引き、腰を落とし、第一の攻撃に移ろうとしている最中だつた。

世之介の視線が、風祭の巨体に向けられた。意識を投射し、風祭の巨体を形作る微小機械の群れに同調させる。

世之介は意識同調サイコ・ダイブを敢行した！

## 仮想現実

微小機械の無数の？声？が津波のようすに押し寄せ、世之介は一瞬、  
我を失つていた。

まるで、百万人もの人間が一斉に声を発し、勝手なことを喋つて  
いるのを、一度に耳にしているかのようだつた。

働け、働け、もつと働け！

原料が足りない！ もつと原料が欲しいよ……。

俺は、もつと作りたい！ 誰か、俺に注文してくれ！

世之介は耳を塞ぎたい気分だつた。自分の耳がどこにあるのやら、  
見当もつかない。

ともかく、何かしら世之介と意思を伝え合える存在を求め、ぐん  
ぐんと先に進む。そのうち、世之介の視界に、微小機械が作り出す  
社会が見えてきた。

しかし、あくまで仮想的なものであり、現実の存在ではないこと  
はわきまえている。

微小機械は無数に繋がつた、網の目のような構造を保持していた。  
網の目の一つ一つが無数の情報を伝え、情報は一気に微小機械一つ  
一つの単位に伝わつていく。

微小機械一つ一つには、意思はない。だが、ある程度の規模にな  
ると、人間のような意識ができるつているようであった。

世之介は、それらの意識を丹念に点検していく。だが、どれも、  
自分だけの作業に没頭している様子で、世之介の語りかけには一切、

答へよつとはしない。

世々介は焦りを感じていた。これでは、せっかく意識を投射してこのに、空回りもいいところだ。

どれか一つくらい、世々介と話しかかる意識はないのだろうか？

ぱつり、と靈む意識の中に、不意に一つだけ、くつさりとした何かが見えてくる。見えてきた意識は、ぶつぶつと何か呴いていた。世之介は耳を澄ませた。

強くなりたい！ 僕は、もつと強くなりたい！ 誰にも馬鹿にされない、恐れられる存在になりたい！

切迫した感情が、世之介の意識に突き刺さるようにながつてくる。強さへの渴望が、熱い感情の波となつて放射している。風祭の意識であった。

風祭！ お前か？

世之介の呼びかけに、ぎくっと強張る気配が伝わる。

誰だ？ 僕に呼びかけるのは？  
但馬世之介……。憶えているか？

ああ、？伝説のガクラン？を着た奴だな……。何の用だ？

風祭の返答には、酸性の毒のような、疑念が纏いついている。世之介は精一杯、真摯な感情を込め、話し掛けた。

風祭、お前のせいだ、番長星は大変なことになつていてるんだ。微小機械が止まらなくなつていてる。

風祭は憤然となつて、返答をした。

それが、どうした？ 番長星がどうなうつと、俺には関係ねえ！

世之介は（想像上の）眉を顰めた。

なぜ、そんなに強くなりたいんだ？ 強くなつて、どうする？

頑なな風祭の感情が伝わる。

お前の知つたことか！ セカイで、ここから出て行きやがれ！

世之介は風祭の意識にじわりと侵入を開始した。ふつふつと疑問が溢れてくる。なぜ、これほどまでに、風祭は強さを求めるのか。世之介が自分の意識の中に侵入しようとしているのを悟り、風祭は悲鳴を上げた。

よせー 止めろー 僕から出て行け！ 噴き回るんじやねえ  
つ！

世之介の眼前に、一枚の扉があつた。

風祭の記憶の扉であつた。世之介は、風祭の記憶を押し開いた！

## 根性なし！

「てめえら、ちゃんとメンチを切つたら、ガンを飛ばすんだ！　舐められたら、おしめえだぞ！　まあ、やつて見ろい！」

番長星によくある【集会所】の一つである。駐車場には、数人の子供が、がなりたてる一人の大人の男の周囲に集まり、真剣になって耳を傾けている。

がなりたてる男は、年齢四十代くらいで、頭をちりちりバーマに固め、がっしりとした身体つきをしていた。男は、じろりと世之介を睨む。

「やい、淳平！　なんだ、その根性の入つていないガンの飛ばし方は？　もつと腹に力を入れて、睨みつけるんだ！」

のしおじと歩いてきて、ぐつと腰を落とし、物凄い形相で睨みつける。

世之介は悟っていた。これは風祭の記憶だ。自分は今、風祭の幼い頃の記憶に入り込んでいる！　風祭淳平……これが本名なのだ。

世之介の……いや、風祭の幼い記憶に恐怖が湧き上がる。世之介は風祭の恐怖を味わっていた。

視界が不意に滲んで、辺りがぼやけた。風祭が両目に涙を溢れさせたのだ。男は呆れたような声を上げた。

「なんでえ……ちつと睨んだら、もう泣き出すなんて、なんてえ根性なしなんだ！」

あはははは……と、周囲の子供たちが大声で笑い出した。風祭は笑い声に、身を小さくしている。

## 怒り

どすん、と横から子供の一人が風祭の腰に蹴りを入れてきた。風祭はよろけ、よろよろと地面に倒れこむ。

「根性なし！」

蹴りを入れた子供は、風祭の正面に立ちはだかり、憎々しげに叫んだ。すると他の子供たちも、同調するよつに囁き立てる。

「根性なし！ 淳平の根性なし！」

ぱつ、と誰かが風祭の顔に砂を投げ掛ける。風祭はわつ、と顔を手で隠した。

しかし仲間の子供たちは容赦しない。わあーつ、と集まつてくると、手に手を伸ばし、風祭の押さえていた手を引き剥がした。

両手両足を掴んで、地面に大の字にさせる。一人が圧し掛かり、風祭の鼻を掴んで穴を塞いだ。たまらず、風祭の口が、ぱかっと開く。

即座に開いた口に、砂が押し込められる。風祭の口にじやりじやりとした砂と小石が一杯に溢れた。

べつべと砂を吐き出しが、子供たちは次々と砂利を詰め込む。圧し掛かっている相手は、容赦なく風祭の顔を殴つたり、頬の肉を捩じ上げたりして、苦痛を与えていた。

痛みと怒りに、風祭は猛烈な泣き声を上げていた。風祭は涙に滲んだ視界で、さつきの大人に救いの視線を投げかけた。

しかし、子供たちに喧嘩の仕方を教えていた男は、げらげらと笑つて、止めようとするしない。男を見上げる風祭の胸に、絶望が真っ黒に膨れ上がった。

「淳平、舐められたら、おしめえだぞ！ よーく判つたか？」

これが風祭の子供時代か！

世之介は風祭の記憶を追体験して、怒りに震えていた。

世之介の江戸にも、虐めはある。世之介自身も、虐められた記憶も、虐めた事実もあった。

が、保護者らしき大人が、虐めを目撃し、大笑いをして制止する。しないという状態は、断固有り得ない。

番長星では「男らしさ」が価値の総てで、一旦「根性なし」と評価されたら、最悪の事態を引き起します。

風祭の記憶を、世之介は次々と体験していく。子供時代、青年時代と、風祭は様々な同じ年頃の相手に、しつこい虐めを受けていた。助けを求める相手は、唯の一人も現れなかつた。目撃したとしても、虐められるほうが悪いと断罪され、救いはまるでなかつた。

虐めを受けるうち、風祭の胸に、ふつふつと復讐心が芽生えてくる。

誰にも馬鹿にされたくない！ 虐められたくないという欲望は、自身を賽博格にしてしまうほどだつた。

風祭にとって、「弱さ」は即、死を意味するものだつた。強さだけが總てであった。

世之介は風祭の記憶の扉から離れ、微小機械が形作る仮想空間に漂つた。無数の微小機械が接点を繋ぎ、じわじわとある形を取り始めた。世之介は目を見開いた。

微小機械が呈示したのは、風祭の姿であつた。最初に出会つたときの、賽博格としての風祭の姿であつた。

世之介もまた、自分の姿を仮想空間で顕していた。世之介と風祭は、何もない空間で向き合つた。お互いの視線が火花を散らす。

風祭は世之介を認め、怒りの形相を現し、吠え立てる。

覗き野郎……！ 判つたか？ 僕は絶対、この強さを手放すつもりはねえ！

世之介に対し、風祭は迸る怒りを投げかけてきた。言葉と同時に、感情すらも伝わる。

風祭、このままで良いのか？ お前は暴れ回り、破壊を広げるだけだぞ。

世之介は説得を試みた。風祭の返答は、痛烈なものだった。

破壊？ 結構じゃねえか！ 番長星が目茶目茶になれば、いい気味だ！ 誰一人、俺を助けちゃくれなかつた。俺が虐められても、黙つて見てるだけ、いや、虐めたほうに声援を送る奴すらいた。番長星全部が、目茶目茶になればスッキリすらあ！

風祭は邪悪な笑みを浮かべ、天を仰いで咲笑する。怖ろしいほどの憎悪が形となり、風祭の全身を、めらめらと炎が取り巻く。

そんなに強くなりたいのか……。

世之介はまじりやつて説得すればよいのか、途方に暮れる思いだつた。それほど風祭の強さに対する感情は、頑ななものだつた。

風祭は「はつ」と、軽蔑したような声を上げる。

当たり前じゃねえか？ 弱ければ舐められる。馬鹿にされる。俺を見ろ！ この賛博格の身体なら、絶対に舐められねえ！

世之介は助三郎と格乃進の言葉を思い出していた。

人間らしい感覚を捨て去つてもか？

風祭の表情に、微かに躊躇いが見てとれた。世之介は「こいだー」と勢いづいた。

風祭、最後に人間の食事を摂つたのは、いつのことだ？

風祭の頬が、ひくひくと痙攣する。

そんなこと、お前の知つたことじやねえ！

世之介は静かに語りかける。

風祭、好きな娘はいなかつたのか？

風祭の顔が、鬱血するかのよつに、どす黒く変色する。世之介の言葉が切つ掛けだつたのか、急激に風祭の記憶の扉が挟じ開けられた。

記憶の奔流に、風祭は周章狼狽していた。

よせ！ 見るな！ 見るな つ！

風祭の前に、一人の少女の姿が映し出される。美人とはいえないが、素朴な顔立ちの、見るものをほっとさせる何かを持っていた。少女は、哀しげに風祭を見詰めている。少女の唇が開き、語り掛ける。

淳平、どうしても、賽博格になるって言つの？ 本当に平氣なの？

どこのからか、もう一人の風祭の声が応える。

ああ、平氣だ！ 僕は絶対、誰にも馬鹿にされたくないし、舐められたくない。賽博格になれば、誰にも負けない強さが手に入るんだ！

少女の顔が哀しみに曇つた。頃垂れ、背中を見せる。

そり……。お大事に……。左様なら。

少女は、ゆっくりと歩み去つた。風祭は右手を半ば上げ、口をボカンと開いていた。少女の姿が、ふと消え去る。

風祭は、ゆるゆると首を振つた。

俺は、俺は……！

ぐつと顔を挙げ、世之介を睨みつけた。

覗き野郎！ 満足か？

世之介は首を横にした。

風祭、お前が望むなら、元の人間に戻れるんだぞ。

風祭の両目が「信じられない」と、まん丸に見開かれた。

嘘だ！

いや、嘘じやない。お前は現在、全身を微小機械に埋めている。お前を改造したのは微小機械だろう？ だつたら、元の身体に戻すことのできるのも、微小機械だけだ。

世之介の声には、搖きない確信が込められていた。世之介は、今  
の言葉が自分の中から出てきたのか、それとも、微小機械の集合意  
識から湧き出たのか、区別が判断できなかった。多分、両方なのだ  
らう。

そうだ！ 微小機械に命じれば、賽博格だって、元の人間に戻れるんだ！ 細胞の一つ一つ、染色体の一本一本が微小機械の、分子の小さな作業で実現できるのだ！

風祭の表情が絶望から、希望へと変わった。

世之介。本当にできるんだな？

世之介は強く頷く。

ああ、お前が望むなら。

風祭の背筋が伸びた。

ああ、俺は、そう望む！ 俺は、元の身体に戻りたい！

世之介は周囲に手を振つて叫んだ。

聞いたる？ 今の風祭の言葉を？

世之介の言葉に反応して、周囲の微小機械が一斉に反応を開始した。無数の微小機械が、光の流れとなって、風祭に集中する。全身

を光に浸し、風祭は絶叫した。

世之介は微小機械の仮想世界から、再び現実世界へと戻り、その場で身構えている助三郎と格乃進に叫んだ。

「今だ！ 風祭を覆つている微小機械を引き剥がせ！」  
「おおつ！」

助三郎と格乃進は「待つてました！」とばかりに威勢良く返答をすると、身を地面すれすれに倒すように、全速力で巨大化した風祭に突進する。無論、加速状態のままである。

音速を突破した二人の身体により、空気は個体に近いほど圧縮され、猛烈な衝撃波を前面に発生させる。  
風祭の身体のすれすれを通り過ぎるとき、圧縮された衝撃波は、まるで鋭利な刃物のように空気を切り裂いた！

二人の賽博格が通過した場所は、一時的な真空状態になつている。猛烈な風速が、風祭の全身を覆つている微小機械を容赦なく引き剥がす。鎌鼬の原理である。

ズバツ、ズバツと硬く密着している微小機械が、賽博格の攻撃によつて切り裂かれた。

賽博格は風祭の周囲を、ぐるぐると円を描いて回つている。世之介に対してとつた戦法と同じだ。

微小機械は、二人が作り出した気流によつて、ばらばらに切断され四方八方に飛び散つていく。

切断された微小機械は、べちゃつと真っ黒な絵の具のようになら

に飛び散つて染みを作つていぐ。

世之介は戦いの結果を見守つてゐる。

セツと手を挙げ、制止した。

「それまでー」

世之介の制止に、再度攻撃を加えようとしていた一人の賽博格は、急停止のため、両足の踵を地面に突き立てた。

怖ろしいほどの加速が加わつてゐるため、一人の踵は、ズブズブと地面にめり込み、がしがしと舗装された場所を深く抉つていぐ。

助三郎が叫んだ。

「なぜだ！ もう少しで倒せるのにー。」

世之介は風祭を指差した。

「もう、決着はついている」

二人は加速状態を解いた。

途端に、一人が巻き起こした局所的な空気の乱流が、猛烈な風となつて、辺りの空気をどよもしている。中心に風祭が、棒立ちになつていた。

二人は目を見開き、注視した。

「あれは……助さん。風祭の様子が変だ」

格乃進の言葉に、助三郎も頷く。

「つむ。風祭の身体が変化しているように見えるな」

助三郎の指摘通り、風祭は変貌していた。

全身を、微小機械が膜のようにならへて、何か盛んに活動をしている。表面に漣のような波紋が広がつていた。

「風祭の変身なんだ……」

世之介の言葉に助三郎は「何だと?」と聞き返していた。格乃進がぐい、と指をし、叫んだ。

「見ろ! 風祭が……」

ずるり、と膜のようになつていた微小機械が風祭の全身から抜け落ちた。後には、一人の人間が、虚脱した様子で立ち廻くしている。恐る恐る、助三郎が近づく。

「お前は……誰だ? 風祭なのか」

立っていたのは、年齢およそ二十歳前後と思える、若い男性であった。ひょろりとした身体つきで、青白い顔をした、とても風祭とは同一人物とは思えない男である。

男は薄田を開け、近づく賽博格を見詰める。視線が下がり、自分の身体を見下ろした。

ぎくり、と男の表情が驚きに変化した。

「俺は……！ 戻った！ 俺は、戻ったぞ！ 生身の身体に戻ったんだ！」

もう一度、助三郎は静かに尋ねる。

「お前の名前は？」

「俺の名は……風祭淳平！」

男は、キッパリと応えた。二人の賽博格は、驚きに顔を見合せた。

直後、がらがらがらとこう瓦礫のぶつかり合ひ音と、一人は顔を上げた。破壊された校舎から、今、やつとひじりで【バンチョウ・ロボ】が這い出してきた。

【バンチョウ・ロボ】は、のっしごと近づき、辺りに轟き渡るような大音声で喚く。

「そいつは誰でえ？　あの風祭は、どこへ行った？」

世之介は意識を【バンチョウ・ロボ】の操縦席に接続させ、自分の声を操縦している勝又勝に聞こえさせる。

「あれが、風祭の本当の姿だ。賽博格の身体から、元の生身の人間に戻ったんだ」

驚きに【バンチョウ・ロボ】は首を振る。

「信じられねえ！　そんなことがあるなんて、奇跡としか、思えねえ……」

世之介は笑いを含んで返事する。

「それが本当に起きたんだ。さあ、あんたも、もう【バンチョウ・ロボ】から出てきていよい。戦いは終わったんだ」

勝は不満そうな声を上げた。

「詰まらねえぞ！　俺は、まだ戦いたい！」

【バンチョウ・ロボ】の視線が、見上げている一人の賽博格に向かう。【バンチョウ・ロボ】から猫撫で声のような勝の声がする。

「なあ、そこのお二人さん。あんたら、俺と一丁、試合をする気はないかい？」

「お兄ちゃん！ いつまで馬鹿な真似をしていろつもり？ もつと出てきなさいよ！」

茜だつた。茜は【バンチョウ・ロボ】の前面に飛び出し、憤慨した様子で腰に手をやり背筋を伸ばして睨みつけている。

【バンチョウ・ロボ】は困惑した様子で、自分の頭を搔いていた。

「ちえつ！ いじとりひで、お前が出てくれるとは……」

それでも【バンチョウ・ロボ】は渋々と膝を地面に突いた。胸がぱくりと開き、操縦席が顯わになる。

内部から勝が、ひょいと軽く跳躍して外へと飛び出した。茜は胸一杯といった表情で兄の勝の顔を見詰める。

見詰められ、勝はバツが悪そうにポケットに両手を突っ込み、爪先で小石を蹴つて、顔を背けた。どう見ても、大人の仕草ではない。

茜の背後から、光右衛門、イッパチ、木村省吾が近づいてくる。イッパチは満面の笑みを浮かべ、口を開いた。

「これで田出度し、田出度しでげすね！」

光右衛門は微かに首を振る。

「ああ、それはどうでしようかな？」

全員が光右衛門の意外な言葉に「えつ」と注目をする。注目を浴び、光右衛門は何かに耳を澄ませているような仕草を見せた。

「あれは……あの音は、何でしょうか？」

光右衛門の言葉通り、不意に「ぢおおおお」 と聞こえる津波のよ  
うな音が湧き上がる。

全員が黙り込み、聞こえてくる音に神経を集中させる。  
省吾がポツリと呟いた。

「校庭の方角から聞こえますな……」

全員の視線が校舎に向かった。

## 乱痴氣騒ぎ

校舎の建物を回つて校庭 駐車場になつてゐる へ出ると、乱痴氣騒ぎが始まつてゐた。

だだつ広い校庭の真ん中には色とりどりの衣服が山積みにされ、無数の男女が夢中になつて衣服を取り、試着している。時刻はすでに夕刻近く、橙色の空を背景に、蠢く男女は黒々とした影に見えていた。駆け込んだ光右衛門を先頭に、一同は呆然と立ち尽くす。

イッパチがあんぐりと口を開け、叫んだ。

「いってえ、何がおつぱじまつたんで？」

助三郎が両目を光らせ、呟いた。

「奴らが手にしているのは、制服だ！ 学生服に、セーラー服らしいな……」

助三郎の言葉通り、山積みになつてゐるのは様々な色、デザインの学生服とセーラー服であつた。山に群がつた男女は、頬を興奮に真つ赤に染め、手に触れた服を大慌てに身につけてゐる。

木村省吾が「あつ」と叫んだ。

「あれは……わたくしが計画していた？伝説のガクラン？？伝説のセーラー服？計画の制服です！ 微小機械に生産させ、番長星の全員に行き渡らせる積りだつた……」

制服の山に取り付いてゐる男女は、手にした服を身に着けた途端、ぱっと顔を輝かせ、胸を張り、全身に自信を漲らせて大股で歩き出

す。

服を身に着けた同士、顔を合わせると、ぱちぱちと視線に火花を散らし、大声で怒鳴り合つ。

「俺は？伝説のバンチョウ？だ！」

「何を言つ！ 俺こそ？伝説のバンチョウ？だぞ！」

「なにいつ！」

お互い敵意を顕わにし、歯を剥き出し、喧嘩いがみ合つ。

男ばかりではない。セーラー服を身に着けた女同士、同じような場面が展開していた。

「あたいが？伝説のスケバン？だよつ！」

「馬鹿あ言つてんじやないよつ！ あたいこそ？伝説のスケバン？だよつ！」

あちこちで取つ組み合いが始まつていた。わあわあと喚き声と、激しい罵り合いの声が入り混じり、阿鼻叫喚の巷である。

## 破綻！

眼前の光景に、省吾はへたへたと力なく座り込んだ。  
「なんてこった……。折角の計画が、これでは何のために努力した  
のか、判らない……」

光右衛門が疑問を呈す。

「世之介さんの性格を読み込んだガクランなのに、あの大騒ぎは、  
どうしたことです？ 身に着けたなら、世之介さんの眞面目な性格  
が乗り移るのではないでしょうか？」

省吾は顔を擧げ、ぶるぶると何度も横に振った。

「違うのだ！ あの後、風祭が微小機械の水槽に飛び込んでしまつ  
たので、風祭の性格が上書きされてしまったんだ……。ああ、最悪  
の結果になってしまった……」

世之介は省吾を無感動に眺めていた。ふとあることに気付き、声  
を掛けた。

「制服の生産を止めることは、できないのか」

省吾は「え？」と顔を上げた。世之介は制服の山を指さす。

「見てみると、あの山が大きくなっている。微小機械の生産が続い  
てこらるらしい」

よよりよよりと省吾は立ち上がり、頷いた。

制服の山は、世之介の指摘通り、むくむくと膨れ上がり、群がる

男女が奪つても奪つても高さは減らない。ビショカ、更に大きくなつていく。

「まさに、その通りです……。微小機械が、あらん限りの能力を振り絞つて、全力で制服を生産しているんです！ 駄目だ、わたくしには止められない！」

言つながら、両手で顔をがばつと覆い、すすり泣いた。

その様子を厳しい目付きで見ていた光右衛門は、無言で杖を手に歩き出す。光右衛門が近づくと、制服を身に着けた男女が、敵意を顕わにして近づいてきた。

「なんだ、爺い！ あっちへ行け！」

近づいてきた一人の額を、光右衛門は発止と手にした杖で叩いた。叩かれた相手は「うわっ」と悲鳴を上げ、飛び退いた。それを見て、周りの人間が怒りに伝染したように、次々と飛び掛っていく。

光右衛門は、杖を揮つて次々と打ち払う。助三郎と格乃進もまた、光右衛門の周りを固め、素手で飛び掛つてくる相手を打ち据える。

たちまち三人の周りには、打ちのめされた相手が、呻き声を上げ横たわった。

光右衛門は助三郎と格乃進に声を掛ける。

「助さん、格さん。もう、宣いでしょ！」

「はっ！ 『隠居様！』

格乃進は力強く頷くと、すつと光右衛門の前に立ちはだかり、大音声で叫んだ。賽博格のみが出せる、人間離れした音量である。

「控えよ！ 控え、控え いつ！」

助三郎も大口を開け、大声を上げる。

「ええいっ！ 静まれ、静まらんか！」

一人の賽博格の出した大声に、その場にいた全員の動きが止まつた。皆、ポカンとした表情で、三人を見守っている。

格乃進は、ホロ・プロジェクター立体映像投影装置を取り出し、空中に映像を掲げ叫んだ。

「この紋所もんじこが目に入らぬかっ！」

立体映像投影装置が投射したのは、巨大な「三つ葉葵」の紋所であつた。

## 威光

「「この御方をどなたと心得る?  
前の中納言、銀河の副將軍、  
水戸みつ光邦公にあらせられるぞつ！」

助三郎がぞい、と前へ踏み込み叫ぶ。

「ええいっ！ 頭が高いっ！ 控えおろつ つ！」

静寂が、その場を支配していた。

全員、目を虚ろにし、じーっと光右衛門、助三郎、格乃進の三人を見詰めている。

一人のガクランを着た男が呟いた。

「あいつら、何を言つてゐるんだ？」

格乃進が投射した三つ葉葵の紋所は、空中にハツキリとした形で浮かんでいる。投射された映像を見上げ、その場にいた全員は、首を捻つっていた。

「あのお爺ちゃんが、何なの？」

茜がぼんやりと呟く。世之介は、まじまじと茜の顔を見つめた。  
茜の顔には、何の驚きも浮かんでいない。

世之介は悟つた。

番長星の人間は、將軍家の威光というのを知らない！ これが他の、幕府の支配を受ける殖民星なら、即座に三つ葉葵の紋所が意味する所を悟り、大いに恐れ入るのであろうが、番長星の人間にとつては、全く意味がないのだ。

イッパチと、木村省吾はすでに格乃進の叫んだ言葉を理解し、とつぶに土下座をしてガタガタ震えているというのに、校庭にいる全員は、何の感動もなく、ぼんやりと三人を見ている。単に、賽博格の出した驚くべき大音声に、度肝を抜かれただけだった。

周りから、へへへへ……と、野卑な笑い声が洩れてくる。一人、また一人と肩を怒らせ、番長星の人間独特の、よたりながらの歩き方で近づいてくる。笑い声を上げているが、目はまるつきり、笑つてはいない。

「爺いつ！　おめえさんが中納言だらうが、何だらうが、俺たちには関係ねえなあ……。笑つちまつぜ！　頭が高いだとよ！」

典型的な番長星の身なりの男　ごつてりと髪油を頭髪に塗りたくり、念入りに梳き上げたリーゼントを決めた、顔には無数のニキビを噴き出せた若い男が下から見上げるような姿勢で近づいてくる。

「あはははは……！」と、背を仰け反らせ、わざとらじい笑い声を高らかに上げる。

「やつちまえ！」

男の声に、その場にいた大量生産の？伝説のガクラン？？伝説のセーラー服？を身に着けた男女が、わッとばかりに飛び掛ってきた。

助三郎と格乃進は顔色を変えた。

世之介は、二人の賽博格が顔色を変えた訳に思い当たった。

？伝説のガクラン？は、着用者を賽博格戦士なみの戦闘力に引き上げる。即ち、助三郎と格乃進にとつては、同じ能力の賽博格戦士が無数に敵対する状況なのである。

世之介一人でもあれほど手こずったのに、今、校庭にいる全員が

世之介と同じ戦闘力を持つと仮定したら、[冗談]とでは済まされない！

その時。

「加勢するぞ！」

出し抜けに、頭上から声が降ってきて、世之介は校舎を見上げた。助三郎と格乃進も、背後の校舎を見上げる。一人の瞳に、希望の光が宿つた！

校舎の屋上にすつと立つ、五人の勇姿！

言つまでもなく、世之介の性格を付与された、五着の制服を身に纏つた「セイント・カイン」の五人である。

校舎の背後からは、残照<sup>オーロラ</sup>が赤々と空を照らし出し、番長星<sup>オーロラ</sup>特有の、低緯度地方でも見える極光<sup>オーロラ</sup>が、複雑な光の模様を映し出し、場面に幻想的な彩りを与えている。

「我ら五人の勇士！」「セイント・カイン！」「番長星の平和を守る使命を帶び……」「今、ここに参上！」

五人は次々と口上を述べ、一々見得<sup>ポーズ</sup>を決めている。世之介は「あんなことしないで、さつさと助太刀に来れば良いのに」と思ったが、黙つてしていることにした。多分、見得を切るのは、五人にとって必要な出陣の儀式なのだ。

ようやく儀式が終わって、五人は校庭を屋上から怖々と覗き込んだ。

お互<sup>い</sup>に「どうしよう？」と顔を見合わせている。飛び降りるのが怖いのだ！

助三郎は苛立つた声を上げた。

「何を愚図愚図しておるのか？ その制服を着ているのなら、飛び降りても平氣だぞ！」

しかし五人は、中々覚悟を決められない。屋上で、もじもじと、

飛ばつか止めようか、何度も躊躇つてゐる。

格乃進は「どうなつてゐる?」とばかりに省吾を睨みつけた。省吾は顔を赤くした。

「そのつ……あの五人には正義感を強くする教育をたっぷりと施しておりますが、蛮勇を奮つといつのは……」

後は口の中モゴモゴと口籠るだけで、下を向いてしまう。一人の賽博格は「やれやれ」と肩を竦めた。助三郎が格乃進に叫ぶ。

「格さん、ここは、俺たちだけで……」

格乃進も頷いた。

「つむ。いうなれば、遮一無」どうにか頑張るしかないと思えるなー。」

「では、参りついで……」

二人は顎を合ひ、殺到する群衆に向かつて駆け出した！

## 焦り

助三郎と格乃進は、殺到する？伝説のガクラン？？伝説のセーラー服？を身に着けた群衆に向かつて駆けていく。

群衆は皆、敵意を剥き出しにして、何か訳の判らない喚き声を上げながら一人に襲い掛かつた！

「うひしちゃ、いられねえ！」

茜の兄、勝まさるが目を剥き出し、顔には戦いへの喜びを顕あらわし、くるりと背を向け走り出した。

校舎の裏手へ駆け込むと、すぐ【バンチョウ・ロボ】がどすどすと足音を響かせ、姿を現した。勝が搭乗したのだ。

「うおーっ！」と【バンチョウ・ロボ】は勝の雄叫び声を轟かせながら、全速力で二人の賽博格の戦いの中へと飛び込んでいく。忽ち【バンチョウ・ロボ】の巨体が、群がる暴徒を蹴散らし、次々と悲鳴が上がった。

「もひ、お兄ちゃんつたら、喧嘩となると、田がないんだから……」

茜はぼやいたが、それでも興奮に頬を染めている。

世之介は焦燥感に、じりじりとなっていた。

自分も何とかしたいと思っていたが、いかんせん世之介の本体は【リーゼント山】の制御室に横たわり、立体映像を投射しているだけである。指一本たりとも、触ることはできない。

「どうすりやいいんだ……」

呟いた声を、水戸光邦  
が聞き咎めた。

いや、今までと同じ光右衛門と呼ぼう

「世之介さん、この混乱を収めるのは、あなたしかいませんぞ！」

世之介は「えつ」と光右衛門の顔を見詰めた。光右衛門の顔には、確信が溢れている。

「どうこうとでしょう」

世之介の口調は改まっていた。いくら？伝説のガクラン？によつて性格が変わつても、江戸でたつぱりと將軍家の威光を味わつてゐる世之介だけに、口調は改まらざるを得ない。

「省吾さんが制御室で微小機械の生産停止を命じたのに、爆嘯スタンピードは止まりませんでしたな」

「はい」と光右衛門の言葉に、世之介は素直に頷いた。

「それは、風祭が……」

省吾が割り込むと、光右衛門は大いに頷く。

「そうです。風祭淳平なる者の強さへの欲望が、微小機械の停止命令を受け付けなかつたのです。しかし、あの風祭は元の身体に戻り、戦いへの欲求は消えているはず。それなのに、微小機械の暴走は止まりません。どういうわけでしょうか？」

光右衛門の目には、謎掛けのような光が湛えられていた。

はて、何を言いたい……。

世之介が睨み返すと、光右衛門は真っ白な歯を見せ、笑った。

「答は一つしかありません！ 世之介さん、あなたのせいなのです！」

驚きに世之介は仰け反った。ふりつゝと自分の立体映像が揺らぐのを自覚する。

「ど、どうして、そんな結論になるんだ？ 僕は金輪際、そんな馬鹿な考えを持つことはないぞ！」

光右衛門は静かに首を振る。

「微小機械と接続しているのは、世之介さんしかおりません。微小機械に影響を及ぼすことが可能なのは世之介さん、一人だけ……。結論は、ハッキリしております！」

ぐつと腕を挙げ、指さす。

「？伝説のガクラン？によつて、あなたは今までにないほどの、外向的な性格に生まれ変わりました。何事も積極的で、自信満々。どうです、良い気分だつたのではありますか？」

世之介は不承不承、頷く。

「そ、そりや、まあ……」

「あれを御覧なさい」

光右衛門は戦つている一人の賽博格を指さす。助三郎と格乃進は、阿修羅のごとく、群がる暴徒を叩きのめし、千切つては投げ、千切つては投げという形容がぴつたりだ。

群がる男女の顔を、世之介は眺める。眞、戦いに喜びを見出し、どんなに賽博格に叩きのめされようが、弾き飛ばされようが、飽くことなく向かっていく。

「助さん、格さんの一人に向かっていく人間の顔。あれは、世之介さんが戦っているときの顔、そのものです！」

衝撃に、世之介は地の底に沈むような気分を味わっていた。あれが、俺の顔？

二人の賽博格に遮二無二、我勝ちに突撃していく人間は、一人残らず狂氣、といつていよい表情を浮かべている。

両目を思い切りひん剥き、唇は笑いの形に歪み、戦いへの期待で、頬はてらてらと輝いていた。

信じられなかつた……。

## 杖

光右衛門は回想するよつた口調になつた。

「初めて会つた頃のあなたは、何事にも自信がなく、臆病そうでした。戸惑いが、常にあなたの周りに取り巻いておりましたな。しかし？伝説のガクラン？を着たあなたは、別人に変わつた。いや、本来のあなたの性格が表に出た」と、わたくしは思つております」

光右衛門は自分の杖を掲げた。

「わたくしは老人ですから、これ、このように杖を必要とします。あなたのガクランは、ちょうどそのように精神的な杖として役立つたのでしょう。しかし、世之介さんはお若い。若いあなたが、いつまでも杖にすがるのは、どうかと思いますぞ！」

？伝説のガクラン？は、俺にとつては杖なのか……。

光右衛門の言葉に全面的に反発したい気持ちと、心のどこかで深く納得している自分に、世之介は引き裂かれていた。

世之介は、光右衛門を見詰めた。光右衛門の背後には、茜とイッパチ、省吾の三人が、息を潜めて一人の会話に耳を欹てている。

徐々に世之介の心に、ある決意が漲つた。

光右衛門に向かい、呴くよつて返事をする。

「判つたよ……光右衛門さん。いや、御老公様！」

光右衛門は「くつく」と小さく笑つた。

「いつものよつて『爺さん』で結構！」

世之介は笑い返した。

「そうだな。今更、御老公なんて言い難いや！ 爺さん、俺は決めたぜ！」

ふつと、溜息を吐くと、世之介は目を閉じた。自分の精神を、微ネット・ワーク小機械の電網に接続する。

## 不満

無数の微小機械が形作る仮想空間に、世之介は立っていた。いや、漂っていた。

周囲には微小機械が無数の結節点を作り、大量の情報データが津波のように押し寄せ、微小機械が盛んに活動していることを示していた。世之介は仮想空間で大声で叫んだ。

やめろ！ もう充分じゃないか！ お前たちの役目は終わってたんだ！

ざわざわざわ……と、無数の結節点が不満を訴えるかのようにざわめいた。

いやだ！ いやだ！ 我々は永久に活動する！ まだ終わらない！

微小機械の感情が、無数の針が突き刺されるように世之介の全身を襲う。苦痛に、世之介は身悶えた。

違う！ 番長星の人間は、お前たちを必要としていない！

怒りの感情が仮想空間に充満した。

嘘だ！ 番長星の全員は、我々の助けなしでは生きていけない。我々がいなければ、明日から先どうなる？

世之介は、必死に訴える。

自分の力で生きていく！

微小機械は、狡猾そうな感情を込めて囁いた。

お前は？伝説のガクラン？で強力になった。そうじゃないか？ ガクランを身に着けていたくはないのか？

蠢く微小機械の結節点は集合し、仮想空間にある形を作り始めた。世之介は大きく目を見開いた。

何を、俺に見せようとしている？

結節点が集まり、密度が濃くなり、ある形に纏まつていいく。世之介は愕然となつた。

微小機械は茜の姿を取り始めたのだ。

世之介さん……。

茜の瞳が、熱っぽく世之介を見詰める。唇が半ば開き、目を閉じ、頬がほんのり紅潮した。

キスして……。

世之介の全身が、かーっと熱くなる。微小機械が囁いた。

?伝説のガクラン?を身に着けている限り、世界はお前のものだ。それに、この娘も 娘が欲しくはないのか? 女という女は、お前の奴隸となるんだぞ!

微小機械は、狂送団<sup>マッド・マックス</sup>の首領の妻たちの姿を見せてきた。数人、いや数百という女たちが、世之介に向けて色っぽく身体をくねらせ、おいでおいでをしている。

目を背けるのは不可能だつた。目を閉じようとするのだが、微小機械は仮想空間での世之介の随意反応を制御し、瞼を閉じるという簡単な動きすらさせてはくれない。

対抗できるのは、意志の力のみ!

世之介は全身全靈を込めて反発した。

俺は 伝説の ガクランなど 欲しくはない！

まるで決壊した奔流を、素手で塞ごうとしているような、頼りない抵抗であった。が、世之介はありつたけの意思の力を振り絞り、微小機械の誘惑に耐えた！

僅かではあるが、世之介の腕が動き始めた。指先が、ガクランの鉗に掛かる。

指が鉗を弄つた。

あと少しじつたのに……。

微小機械が、悔しそうな溜息を漏らした。

世之介は解放された！

ぽかつと意識が戻り、世之介は制御室の床に寝そべっている自分を見出す。のろのろと起き上がり、周りを見渡した。

微小機械は 影も形もない。辺りは森閑として、静寂が支配している。

自分の身体を見下ろし、世之介は番長屋に始めて到着したときの、学問所の身なりに戻つてゐることに気付いた。

立ち上がつた世之介は、制御室の計器の硝子板に、自分の顔を映し出した。

髪の毛が元に戻つてゐる。金髪のリーゼントから、真つ黒な普通の髪型である。ようやく世之介は、ガクランから解放された実感が込み上げてきた。

ガクランは？ きょりきょりと見回すと、あつた！

なぜか壁にハンガーで吊るされている。皺一つなく、汚れもなく、新品同様である。

もう一度、着てみないか？

ガクランは世之介に向かつて、誘いかけるようであつた。ぶるつと世之介は頭を振り、キッパリとガクランの誘惑を払い除ける。それでもハンガーを手に持ち、そのまま持つて歩き出す。

廊下を歩くと、横穴が開いている。少分、助三郎と格乃進が抜け道を作るために掘り開いた通路だ。大急ぎで掘り抜いたため、足下はざつざつとして歩き難い。

外に出ると、鉄錆色の夕空が広がり、校舎の裏手に出ていた。振り返ると、【リーゼント山】が、どっしりと腰座っている。外に出た途端、世之介の爪先が何か柔らかいものを踏みつけていた。

「ふんわやつ！」

奇妙な悲鳴を上げ、踏みつけられた相手が、もぞもぞと身動きをしている。

がらがらと小石を跳ね除け、立ち上がったのは、ビッグ・バッド・ママの巨体であった。

「ふいーーー！ 酷い目に遭つた……」

咳き、顔をぶるんぶるんと何度も振つた。砂利がばらばらと全身から振り落とされる。

と、そこでビッグ・バッド・ママは、世之介に気付いた。

「なんだい、お前は

「

口がポカンと開き、両手が飛び出た。瞬間に敵意を剥き出しこする。

「あつ、お前は？ 伝説のガクラン？ を着ていた、拓郎ちゃんを苛めた奴だね！」

「ママ……」

頼りない声に、もう一人の人物がビッグ・バッド・ママの隣で身動きする。狂送団の頭目である。母親は歓声を上げた。

「拓郎ちゃん！ 生きていたのかい！」

顔一杯に喜びを溢れさせ、がばっと息子を抱きしめる。

狂送団の母親は、ジロジロと世之介の姿を見つめた。視線が、世之介の手に持っている「伝説のガクラン？」に集中した。

「お前の手に持っているのは？」

世之介は答えた。

「ああ？ 伝説のガクラン？ だ」

母親は囁くように尋ねる。

「何でお前が手に持っている。着ていないうだね？」

「ああ、俺には要らないものだ。もう、着ることはないよ」

母親の瞳が貪欲さを剥き出した。

「そうかい……要らないのかい……それなら、あたしにお寄越しつ

！」

叫ぶなり、太い両腕を伸ばし、世之介の手からガクランを引っ手繩つた。

「拓郎つー！ これが？伝説のガクラン？だよつー！ さあ、お前が着るんだー！」

「ママ？」

拓郎と呼ばれた狂送団の頭目は、ぼけつとした顔で母親を見上げた。母親は苛々と足踏みを繰り返した。

「それを着れば、お前が？伝説のバンチョウ？になれるんだー！ さあ、着るんだ、今ー！」

「俺が……？ 伝説のバンチョウ？ー！」

頭目の瞳も、欲望で煌く。いそいそとガクランに袖を通した。上着を羽織り、ズボンに足を通す。

頭目の背丈は、世之介より頭一つ低い。しかし、ガクランは、ぴつたりと頭目に丈が合っていた。きっとガクランは着用者の身体つきに自動的に適応するのだろう。身に着けた瞬間、頭目の背が急に伸びたようだつた。すつぐと背筋が伸び、両目がぱっちりと開く。頬に赤みが差し、全身に力強さが漲つた。

世之介は驚いた。これが？伝説のガクラン？を着用していたときの自分が？

まさに別人である！

母親が囁く。

「どうだい？ どんな気分だい？」

ひりと頭田は母親に田をやる。頭田の視線に、母親は、あくと身を強張らせた。

「な、なんだい、その田は？」

「お母さん……」

頭田は静かな口調で話し掛けた。母親は驚きのあまり、大声で叫んだ。

「お母さん、だつてえ！ お、お前、そんな呼び方、一度だつてしまつた……」

頭田は、ゆるゆると首を振った。

「お母さん。僕は今まで、とんでもない間違いを犯していたことに気付いたんだ。僕は今、生まれ変わった気分だよ」

頭田は喋りながら、手を挙げ、自分の髪の毛をさつと撫で上げた。今までぼつぼつうの蓬髪だったのが、いつの間にか、さつちりとした七三の横分けになつている。

「狂送団、なんて馬鹿な集団の頭田に収まつて、今までさんざん他人に迷惑の掛け通しだつたことに気付いたんだ。もつ、あんな馬鹿な真似は金輪際やめる。これから、僕は、しつかりと更生して、立派な人間になると約束するよ。お母さんにも苦労は掛けない」

「偉いっ！」

不意に聞こえてきた声に、世之介と頭田は振り向いた。

そこには変身した　いや、元の姿に戻った　風祭が立っていた。ひょろりと瘦せていて、抜けるように色白の風祭は、賽博格の身体を持っていた頃とは別人である。

風祭の頬は、興奮に真っ赤に火照っていた。

「さっきから聞いていたけど、君の言つことに、僕は全面的に賛成するぞ！　僕も今まで、馬鹿な真似ばかりしていたからね。今日から生まれ変わった気分で……いや、本当に生まれ変わったんだけど……。兎に角、僕も今日から番長星を変えるために、一生懸命、頑張るつもりだ！」

頭目と風祭は歩み寄り、がっしりと手を握り合つた。お互い、感動で両目から滂沱と涙を溢れさせている。

「何て氣分の良い言葉を聞いたんだ！　ほ、僕は物凄く感動しているぞっ！　番長星を変える！　そうとも、それ以外、僕らの目標は、ありっこないんだ！」

頭目は鼻水を啜り上げつつ、叫ぶ。風祭も、しきりに「うんうん」と大きく頷いている。

「番長星を変えるって、本当かい？」

また妙なのが出てきた……と世之介が視線をやると、現れたのは「セイント・カイン」の五人だった。

五人は校舎の裏手にある出入口からのこと出てきて、風祭と頭目の話を聞いていたのだ。リーダーと思しき、真っ赤な制服

を身に纏つたセイント・レッドが、つかつかと一人に近づく。

「我々セイント・カインの五人の使命は、番長星から暴力で総てを解決しようという風潮を無くすことにある。君らも同じ気持ちだと見える。良かつたら、協力してくれ！」

「おお、同志よ……」

「何て感動的……」

風祭と頭目は顔を真っ赤に染め、次々とセイント・カインの五人と握手を交わした。

「さあ、今日が番長星の変革の始まりだ！」

朗らかに歌い上げるような口調で、セイント・レッドが宣言する。風祭と頭目は満面に笑みを浮かべ、両手をキラキラさせ頷いた。

「ちゅうと……どうなってるんだい？」

頭目の母親、ビッグ・バッド・ママは不満に歯をへの字に曲げ、唸るのみで睨んでくる。ギロリと物凄い視線で世之介を睨みつけた。

「息子をおかしな考えにしたのは、あんただね！ あの？伝説のガクラン？ に、何か仕掛けたんだろう？」

世之介は肩を竦めた。

「さあね。俺は、ガクランを必要ないと言つた。欲しがつたのは、あんたらだ。結果については、俺の責任じやないよ」

「ぐるるるる」と、母親は凶暴な野良犬のような唸り声を上げる。両手が掴みからんばかりに、持ち上げられた。

やる気かな？ と、世之介はほんの少し、身構えて見せた。

と、ふつと母親は肩の力を抜いた。世之介を睨みつけていた視線を外し、顔を背ける。

「やめと！」。あんたには、勝てそうになーからね……

恥々しげに呟き、背中を見せ、がっくりと頃垂れる。ガクランを身に着けていない世之介の、何が母親のやる気を削いだのか？ 世之介は自分の感情を探つた。思い出してみる。ガクランを身に

着ける自分の気持ちを。

思い出せない！

いや、とこりよつ、ガクランを身につけていないに關わらず、世之介の感情はまるきり変化をしていない。さつきだつて、母親の挑発を受け止め、いつでも喧嘩ができるよつ、身構えていた……。

そうか！ 自分はもう？ 伝説のガクラン？ を本当に必要としていないんだ！ 自分の中に？ 伝説のガクラン？ は確乎として存在しているのだ！

新たな展望が開け、世之介はいつまでも呆然と立ち廻っていた。

## 焚き火

校舎の裏手から校庭へ出る。すでにとつぱりと日は暮れ、見上げると光帆ライト・セールの月が出ている。

校庭から楽しげな笑い声が聞こえ、世之介は首を傾げた。

見ると校庭の真ん中に焚き火が置かれ、その周りでは数十人の老若男女が輪になつて座り、和やかな雰囲気で談笑している。

どつと笑い声が上がり、そちらを見ると、なんとイッパチが手足を可笑しな角度に動かし、奇妙奇天烈な踊りを披露している。

ひょこひょこと腰をくねらせ、手足をあらぬ方向に突き出し、顔はポカーンと呆けたような表情である。見てるだけで、笑いが込み上げてくる。

イッパチの踊りを見物しているのは、さつきまで助三郎と格乃進に向かつて襲い掛かつてきた連中だ。見物人の一番前には、茜が陣取り、イッパチの剽軽な仕草に、腹を抱えけられると高い声を上げ、笑つていた。

校舎の近くに【バンチョウ・ロボ】が、ずんぐりとした巨体を休めている。ロボの周りには物見高い群衆が取り囲み、勝又勝が熱意を込めてロボの性能を説明していた。

集団の中に、光右衛門と助三郎、格乃進が座つているのに気付き、近寄る。三人の後ろには、木村省吾が虚ろな顔付きで、騒ぎをじつと見詰めていた。表情は虚脱していて、世之介を認めて、何の感情も浮かばない。

「おお、世之介さん。ガクランを脱いで、元の姿に戻ったのですな！」

世之介の姿を認めて、光右衛門が話し掛けてきた。世之介は頷き、尋ねる。

「「」の騒ぎは？ えらく陽気だけど」

光右衛門は肩を揺すつて笑い出した。

「突然、ガクラン、セーラー服を身に着けた人間の攻撃衝動が消え去ったのですよ！ 皆、自分が何をしていたのか、さっぱり判らないという様子でしたな。世之介さんの活躍だと推察するのですが、そうですね？」

最後に念押しするように見詰める。世之介はあやふやに頷き、微小機械の構築した仮想世界での出来事を話した。

が、茜の幻影のことは黙つていた。光右衛門は大いに納得した様子で、何度も大きく頷いていた。

「さもあらん！ 世之介さんが微小機械どもこ、もう番長星での役割は終わつたと説得した結果でしじう。番長星の微小機械の生産活動は、今夜を限りに終了したのです」

不意に省吾が顔を挙げ、叫んだ。

「それでは番長星の生活は、今後どうなります？ 一輪車、四輪車は勿論、生活必需品のほとんどは、微小機械の生産で賄つてきたのに。それが突然、なくなつてしまつたのですぞ！」

光右衛門は厳しい顔付きになつた。

「微小機械に頼りきりだつたのです！ 生活必需品が欲しければ、自分で作り出すべきです！ 地球の人間は、皆それをしております。番長星でも例外ではない。なに、幕府の援助があれば、番長星でも通常の生産活動が再開するには、そう長くは待たなくて宜しいでしょう。ほれ、その援助の先陣が、やつてまいりましたぞ！」

光右衛門が立ち上がり、杖の先を夜空に向けて突き出した。  
杖の指示した方向を見た世之介は、思わず「あつ」と呟んでいた。

夜空に浮かんでいたのは、三つ葉葵の紋所を横腹に浮かび上がらせた巨大な宇宙船であった。

宇宙船は空中に浮かんでいる。あまりに巨大すぎ、直接の地上着陸は不可能なのだ。三つ葉葵の紋所が描かれている、つまり幕府の御用船である。

宇宙船の船倉扉が開くと、内蔵されている連絡船シャトルが斥力装置を煌かせ、ゆっくりと降下する光景が見えた。

連絡船は【ツッパリ・ランド】を真つ直ぐ目標してくるようだった。

「ど、ど、どうして……？」

驚く世之介に、助三郎が笑いながら説明をした。

「御老公様が、木村省吾に命じて、超空間通信機を使わせたのだ。御三家のみが使用できる優先暗号を使用すれば、幕府の御用船を呼び寄せることが可能だ。ま、滅多に使用はしないがな。今回は特別、とこう訳だ」

「へえ……。いつでも、ね。爺さん、あんたこんな隠し玉を持っていて、一言も話しかやくれなかつたな」

光右衛門は、すつ呆けた顔付きで、あらぬ方向を見ている。しかし頬には、うずくづと笑いが込み上げているようだ。

「老中に命じて、番長星にはすぐさま、様々な援助が受けられるようになりますぞ！ 省吾さん！」

呼びかけられ、省吾は「えつ？」と顔を上げた。

「番長星の事情をよく知っているのは、あなただけです。どうです、省吾さん。あなたが番長星の明日のため、骨を折る気は？」

省吾はすつと立ち上がり、頷いた。両手には熱意があった。

「勿論です！ その仕事、身命をかけてやり遂げましょう！」  
「結構、結構！」

光右衛門は上機嫌に高笑いをした。

連絡船が着地し、扉が開き、地上に通路が接地して内部から数人の搭乗員が出てくる。搭乗員の先頭に、一人の河馬のように太った男が転げるように出でると、両足を必死に回転させ、世之介が掛けて近づいてくる。

世之介は呆れた。

駆けてくるのは、世之介の父親、七十六代目の但馬世之介であつた！

「世之介！」  
「お父つあん！ ビツヒして？」  
「御老公様の通信で、お前がここにいることを知らせて貰つたのだ。  
大慌てで、御用船に飛び乗つて、この 番長屋 まで来る」と  
ができた！ 心配したぞ！」

一息で捲し立て、父親は太った身体を折り曲げ、苦しそうにぜいぜいと荒い息を吐き出した。  
ちらりと世之介の背後に立つてゐる杖を手に持つた老人を見て、  
顔色を変えた。

「これは、御老公様！」

ぺたりと膝をつき、土下座する。光右衛門は膝を下ろし、優しく肩に手をやつた。

「但馬屋さん。お立ちなさい。わしはこの場では、ただの越後屋の  
隠居。微びの旅でござりますからな、そのような大袈裟な真似は迷惑ですぞ！」

「へえ……？」

ゆつくりと父親は顔を挙げ、立ち上がる。光右衛門は思い出した、  
といつ顔付きで話しかけた。

「そりいえば、息子さんに十八の春を迎える前に初体験を済ませなければ廃嫡、勘当を申し渡すと申し渡したそうな

光右衛門の指摘に、父親は顔を真っ赤にさせ、恥じ入った。

「そ、それは……」

「なんでも、息子さんは十七になつても尻の蒙古斑が消えず、初体験を済ませないと消えないと聞きましたが、本当ですか？」

父親は巨体を大いに縮めて見せた。

「は、それが但馬屋代々の体質でございまして……」

「見たいですね。その青痣を」

光右衛門の言葉に、世之介は仰天した。振り返ると、光右衛門は大真面目であるが、背後の助三郎、格乃進は笑いを堪えるのに必死だ。

## 大人

世之介は怒りに顔が火照るのを感じた。

「そうかい……そんなに見たいなら、見せてやるつじやないか！」

勢いで、その場で尻を向け、袴を脱ぎ去り、尻ばしょりをして見せる。ぐいっと褲を降ろし、尻を突き出す。

「さあ、これが俺の青痣だ！ とつくりと拌みやがれつ！」

しいーん、と静寂が支配する。ぽつり、と光右衛門が呟いた。

「どこにあるのです？ 青痣など、見えませんが」「えつ？」

世之介は急いで振り向く。父親の七十六代目・世之介は目を丸くしている。

「お父つつあん？」

父親は、ぶるぶると首を忙しく振った。

「無い！ お前の青痣が消えている！ お前、いつ初体験を済ませたんだ？」

父親の目が、その場で呆然と立つていていた茜に向かった。「ははあーん」と一人で納得した顔つきになる。

「そうかい、そういう次第かい……お前も、『先祖様に恥じず、手が早い……』

「ちよ、ちよっと待つてくれ！　あたしや絶対、そんなこと……」

話題の茜は田を怒らせた。ある考えが茜の脳裏に浮かんだようだつた。

「あたしも聞きたいわ！　まさか、狂送団の女たち……！」

「馬鹿を言つくな！」

世之介は絶叫した。急いで衣服を元に戻すと、両手を広げ喚ぐ。

「俺は、ずっと？伝説のガクラン？を着ていたんだ！　脱ぐこともできなかつた！　そんな真似、出来るわけない！」

光右衛門が「かつかつかつかつ！」と乾いた笑い声を上げた。

「世之介さんは、大人になつたのです！　初体験をしようが、しまいが、立派な大人に番長星で成長したので、青痣が無くなつたのでしう。但馬屋さん、世之介さんは立派な跡継ぎになりました。違いますかな？」

じわじわと理解が父親の顔に差し上つた。世之介を見詰め、話しかける。

「世之介、お前、但馬屋に帰るんだ！　お前は立派な跡継ぎとなつた……」

世之介は、即座に返答する。

「厭だ！　俺は、家には帰らない！」

父親は仰天した。

「何を戯言を……。お前、本氣かえ？　家に帰らず、何をするつもりなんだ？」

世之介の視線が、茜の視線と絡み合つ。

「俺も番長屋に留まりたい！　そして番長屋の人間が一人立ちできる手伝いをするんだ。お父つつあん。ついては頼みがある」

父親は、じくじくと唾を飲み込んだ。

「頼み？」

世之介は笑つた。

「そうさ。お上は番長屋に援助をするそつだ。しかしあ上だけでは心もとない。但馬屋の財力なら、充分な援助が可能だ。援助だけじゃない。これは新しい商売のタネになるんじゃないのか？」

とつくりと考え、父親は頷いた。表情が、商売人のものになつていた。

「そうだね……。お上のお声掛かりとなれば、出入りの商人だつて一口噛むのは当たり前だ。それに但馬屋の一番乗りが叶えば……」

につりと笑顔になつた。ぽん、と自分の胸を叩き請合つ。

「判つた！ 但馬屋、番長屋への立ち直り事業に一番乗りをするぞ！」

「田出度い、田出度い！ これで万事、万々歳と相成りました！ ついてはお手を拝借……」

イッパチが、しゃしゃり出る。全員、笑いながら一本締めの用意をした。

「よーい！」

イッパチの合図で、しゃんと一本締め。

がんがんがん！ と自棄のよつに鉄槌ハシマーが一輪車の部品を叩いている。ぐわん、と奇妙な音を立て、部品が折れ、床に転がつた。

「あーつー。また、やつちまつたー！ 馬鹿、馬鹿ー。 いつてえ何ニヤン度、しつこく言つたら判るんだ。部品を呪のぐときは、優しく呪のくんだつて言つたらひつー。」

甲高い声が作業場に響き渡る。声を上げているのは、子猫をつくりの技術者である。

子猫に叱りられているのは、不器用そつな手つきで工具をいじつている若者。頭はつるつるに剃り上げている。

隆志であった。子猫に頭くになしに叱られ、隆志は不満そつな顔付きである。

子猫は、といといと近寄ると、上田うたにして隆志を見上げる。

「ニヤンだ、その顔は？ 何か文句あるのかニヤン？」

隆志の顔が真つ青になつた。

「い、いいえ、そんな……」「舐のめんなよ……」

捨て台詞を吐くと、といといと、その場を離れていく。

世之介はその場の光景を田口たぐちして、笑いを堪えるのに必死だった。笑つてはいけない。隆志はこれでも真面目まめにやつていてる。そんな世之介の顔を見て、隆志は恨めしげな表情を浮かべていた。

番長星のあらわる場所で、同じような光景が繰り広げられていた。  
幕府の主導による、番長星住民の独立生産計画である。

微小機械ナノ・マシンの生産が消滅し、住民の生活必需品を販賣ボーティングため、傀儡人ロボットが一部だけ肩代わりをしていたが、全面的な生産拠点を整備するため、微小機械の工場を監督していた子猫の杏菊紹偉童アンコ・ローハイドが技術指導を任されたのだ。

## 一本道

「そんな田をしない！ しつかり言いつけを聞かないと、工場を任せられないぞ！」

世之介の隣に茜が顔を出し、隆志に声を掛けた。隆志は「けつ」と肩を竦めた。

茜と連れだつて、世之介は作業場の外へと歩いていく。歩きながら茜に話し掛けた。

「学問所はどうだい。楽しいか？」

茜は、ちょっと首を傾げた。

「どうかな……。楽しいといつより、吃驚するばかりね！ あたし、番長星以外の星について、全然、なーんも知らなかつたわ！」

幕府の主導で、番長星には次々と学問所が設置されていた。茜も新たに設けられた学問所に通うようになつていていたのである。

一人は両側に農地が広がつていて一本道を歩いている。時々、道路を猛速度で一輪車や四輪車が通りすぎた。

茜は世之介の前に飛び出ると、くるりと振り向き、真つ直ぐに見詰めてきた。

「あたし、番長星から外に出たいわ！」

「え？」 と世之介は茜の顔を見詰め返した。

西はキラキラとする瞳で、せん介を見詰めていた。

「世之介さんだって、番長星に来るはずじゃなくて尼孫星アヤシつてところに行くつもりだったんでしょ？ あたしだって、他の世界を見てみたいわ」

尼孫星の名前が出ると、世之介はぱざうにも腹心地の悪い気分になる。そわそわして、いたたまれなくなるのだ。

もちろん尼孫星は女だけの星で、男となればどんな男でもモテモテの天国のような星であるところが、もつぱらの噂であるが……。世之介は一度は尼孫星を手指したのが、今では夢のようだ。

「ね、あたし他の星に行つてみたい！ 世之介さんだって、いつまでも番長星に留まるつもりはないんでしょ？」

「うーん……。そりゃあ、ねえ……」

まともに尋ねられ、世之介は絶句してしまった。

茜は、今まで番長星以外の世界について、自分が何一つ知らないことを悟つたのだ。多分、他の学問所に通う人間たちも、同じ思いが湧き上がっているのではないか？

世之介は、にっこりと笑い返した。

「そりゃ、俺だつてこつまで番長星にいるわけじゃない。番長星がちゃんと自立できる日処が立つたら、別の星を巡る旅に出たいと思ってるよ。あの『元々の面』のようだ

「やつぱりねー！」

茜は手を叩いた。

世之介は空を見上げた。近づく、一番長星の空には、地球からの宇宙船が多数立ち寄るようになつてゐる。今も一隻の宇宙船が大気を切り裂き、着陸してくるところだ……。

「茜、俺と一緒に、銀河を旅しようか?」

世之介の言葉に、茜は真つ赤になつて顔を逸らす。が、すぐ顔を戻し、真剣な表情になつた。

「それ、プロポーズ?」

答へかけた世之介の言葉を、着陸してくる宇宙船の、大気を切り裂く衝撃波が搔き消した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0919s/>

---

ウラバン！～SF好色一代男～

2011年7月26日10時45分発行